デジモンアドベンチャー０２　闇と光

ロクロク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デジモンアドベンチャー０２　闇と光

【Ｎコード】
Ｎ６７７８Ｖ

【作者名】
ロクロク

【あらすじ】
　アーマゲモンとの戦いから数ヶ月。大輔達はそれぞれ学年が上がり、平和を満喫していた。しかしそれは、嵐の前の静けさだった。現れる新たな敵、何者かによって建てられたダークタワー。謎の黒コートの男。
選ばれし子供達は、謎を解明すべく、デジタルワールドを調査する。
　これは作者の初投稿小説です。
この小説は独自解釈、原作多少改変が含まれており、デジモンのキャラが大好きという人には特にお勧めしません。

ワンダースワンシリーズ、他シリーズ、漫画の設定を使っているので、
多少デジモンを知らないと、理解出来ないかもしれません。（作者もうる覚え）
それでも構わないという方のみご観覧してください。
一様知らなくても大丈夫なように書いているつもりです。
後、感想で、こうした方がいいよ。などの書き方に関するアドバイスを下さると嬉しいです。

プロローグ

「・・・またお前達と合うことができるとはな・・・」

円卓と呼ばれるこの空間は、周りを円状に壁で取り囲まれている。
そしてその部屋の中央には少年が立っており、
その少年を取り囲むように十数個の大きさの異なったった椅子があった。
椅子は高く、高さにはそれぞれ差があった。
その中で一番高い位置にある3つの椅子だけは同じ高さであった。

少年は周りを見回すことなくそう告げると、顔を俯けると、ため息を付く動作をし、再び顔を上げた。
その動作をじっと椅子から見つめていた、人型のモンスター・・・デジモン達は彼が顔を上げると少し微笑み、

「私達もこんなに早く、貴方と合うことになるとは思いませんでした」

十数体いるうちの一体・・・最も高い位置にある椅子に座っているデジモンが少年にそう告げ、
他のデジモン達も同意するような声を上げた。

「合うことは決まってたのかよ・・・」

デジモン達の言葉に少年はそう呟くと、やれやれと言わんばかりに手を上げた。

「貴方は・・・やっぱり貴方なんですね」

「ああ。俺は変わらないぜ。・・・たとえ俺の――――――――――俺は俺さ」

「「「ッ！！！」」」

少年が呟いた言葉を聞いてデジモン達は驚きの声を上げ、少年を見つめた。

「だがそんなことはどうでもいい。そんな事よりも俺を再び呼び戻した理由は何だ。
お前達が俺を頼るなど、よっぽどの事が起きない限りありえない」

少年はそう告げると辺りを見回し、ここにいる全てのデジモンの顔を見つめ、返答を待った。

「・・・やはり貴方には敵いませんね。・・・分かりました。全てを話します。
この世界・・・いや、このデジタルワールドだけではありません・・・
この世界とリアルワールドに危機が迫っています！」

彼はそう言うと、話すのを止め、少年の方をじっと見つめ、反応を伺った。

それに対して少年は一瞬気が抜けたような反応をとり、小さくため息をつき、すぐ真剣な顔に戻し、
再び彼を見つめながら、返答した。

「そういうことを知りたいんではない。
こんな時にお前達が俺を呼び出す理由などそれぐらいしか存在しない。
俺が聞きたいのは、今、世界で何が起きようとしている？」

少年の言葉を聞き、彼らは驚きの声を出したが、すぐに気持ちを切り替えて少年の目を少し見つめ、
小さく笑いの声を上げた。

「フフ。流石ですね。やはり貴方は貴方だ。・・・分かりました。
世界で起きようとしていることを説明しましょう・・・」

そう言うと、彼はこれから起きようとしていることを少年に話始めた。

「・・・つまり奴だげではなく、奴らまで動きだそうとしているのか・・・
　確かにそれはマズイな・・・お前達も今回の戦いには参加できないんだろ？」

「・・・ええ。私達はこのデジタルワールドを安定させなければいけないため、
　戦いにはほとんど手出しすることは出来ません・・・」

彼は、顔を俯け、悔しそうな表情を浮かながらそう告げた。
周りのデジモン達も悔しそうな表情を浮かべており、
中には声を大にして何もできない自分達を非難するような言葉を吐

いているデジモンもいた。

「気にするな。世界を安定させる事もとても重要な事だ。
俺にはそんな事絶対に出来ない。お前達がやってる事は、
お前達にしか出来ない事だ。だから・・・世界の安定は任せた。」

少年はそう言うと彼に背を向け、片手を空にかざした。するとその手の先に光が広がった。

すると少年に対して、先程まで話していたデジモンではないマントをつけたデジモンが
少年の名を呼ぶと、少年は歩みを止め、そのデジモンの方を向いた。

「私達と誓え！　たとえ、何があってもまたここに帰ってくると！」

そのデジモンは少年にそう告げると、周りのデジモンも同意するように声を上げた。

その反応に少年は驚くような動作を少し見せた。
だがその後少し笑い、そして顔だけではなく、体をデジモンの方に向けると、
手を肩ぐらいまで上げて拳を一瞬開いた。
すると少年の拳は一瞬白い光が広がった。
そして光が収まると、少年の拳には光る鍵が握られていた。
その鍵は、持つ所が白く囲まれて、その中心から黄色の棒がまっすぐ伸び、

その先が鍵のような形になっていた。

「わかった。俺は何があってもまたここにもう一度戻ってくると誓う。このキーブレードにかけて」

そう言うと、少年は白と黄色の鍵・・・キーブレードを拳から消すと、背後にある
光・・・光の回路の方へと歩みだし、そして光が消えると同時に姿を消した。

プロローグ（後書き）

ダメ文ですいません。

でも、主人公たちより遥かに書きやすい。

第一話　異変

心地い風が吹く中、
少年は日頃の乱暴な扱いのせいでボロボロになったランドセルを背負い、
トレードマークのゴーグルを付け、毎朝歩いている学校の通学路を歩いていた。

「大輔君　おはよう！」

少年・・・大輔は声をかけられた方を向く。
するとそこには嫌というほど見慣れた少年がこちらに向けて手を振っていた。

「おっす、おはよう」

あくびをしながら大輔はそう答えると、前を向き、歩き始めた。
それに対して少年・・・タケルはやれやれと言わんばかりに手を上げ、
大輔の隣まで小走りで接近した。

「最近は、遅刻せずに学校に着てるね」

「当たり前だろ、小６になってまで遅刻なんてしてられるか！」

そのような事を話しながら大輔とタケルは学校に着くまで雑談を交わした。

「おはよう、大輔君、タケル君」

教室に入ると大輔達に向かって少女が声をかけてきた。

「おはよう！ヒカリちゃ～ん」

「おはよう、ヒカリちゃん」

大輔達はそれぞれ挨拶を交わし、荷物を自分の席に置き、ヒカリの席に向かった。

「そういえば、昨日、光子郎さんからの、メール、見た？」

ヒカリがそう言うと、大輔とタケルはもちろんっと返答した。

「もちろん！　確か、明日の放課後、学校のパソコンルームに集合・・・だったっけ？」

「まあ、そんなかんじだね」

「でも急に集合なんて・・・」

上から大輔、タケル、ヒカリがそれぞれ話すと、それぞれ今回のメールことを考えたが、
誰も心当たりがなく、結局、ホームルームを知らせるチャイムがなると同時に考えるのをやめた。

放課後になると、大輔達はパソコンルームへ向かうため、教室を出ようとした。
すると、教室にいた大輔達のクラスの先生が呼び止め、呆れるような顔をし、
ため息をつきながら、お前は今日は掃除当番だと大輔に言った。
すると大輔は、あっと驚き、そして照れるように頭をかき、

「げ！　そういえばそうだったかも・・・」

と言い、また先生に呆れられるような表情をされ、タケルとヒカリの方を
助けを求めるような目で見つめた。

それに対しタケルとヒカリはしょうがないと言わんばかりに手を上げ、掃除を手伝うことを了承した。
それを聞くと大輔は、飛び跳ねるようにジャンプし、喜びを体で表現した。

「はあああああああああ・・・やっと終わったぜ・・・」

大輔達は三人で教室を掃除したが、思った以上に時間がかかってしまい、疲労を口にした。

「掃除が終わったなら早く行こ。あれから結構時間が経ってるわ」

ヒカリがそう言うと、大輔は黒板の上にある時計を見、驚きの声を上げ、慌てて教室を飛び出した。

ヒカリとタケルもその後に続き、教室を出た。

大輔達がパソコンルームに入るとそこにはすでに人が数人いた。
大輔達が来たことに気づくと、その中の一人が大輔達の方に歩み寄んできた。

「よぉ！　遅かったな」

「すいません太一さん。今日は掃除当番だったんで・・・」

「そうか・・・まあそれなら仕方ないな」

太一はそう言うと再びさっきまでいた場所に戻っていった。
大輔達もそれぞれ開いている場所に行くと、カタカタパソコンを打っていた少年・・・
光子郎が作業を中断しこちらを向いた。

「これで今日ここに来れるメンバーは全員集合ですね」

「ああ。今日ここに来れないヤマト、丈、ソラ、ミミちゃん以外は集まった。

だからそろそろ話せ。一体みんなを集めるほどの急用なんて・・・
何があったんだ」

太一が光子郎にそう言うと、
ここにいるメンバー・・・大輔、タケル、ヒカリ、賢、京、伊織は
それぞれ光子郎を見つめた。

それに気づくと光子郎は一瞬目をつぶり、そして覚悟を決めたような表情をし、口を開いた。

「・・・デジタルワールドに奇妙な異変が起きています」

「「「奇妙な異変？」」」

「はい。突然森が枯れだしたり、地形が変わったり、

デジモン達が暴れだしたり・・・ダークタワーが発見されたり」

「「「ッ！！」」」

光子郎の発言に太一達は驚いた。特に賢はダークタワーと言われて、
声も出ないほど混乱していた。
しかしそれも無理は無いだろう。なぜなら賢はかつてダークタワーを使い、
多くのデジモンを傷つけてしまったのだから。

太一は混乱しながらも、ひとつ不可解なことがあるのに気付いた。

「待てよ！　デジタルワールドに異変が起きてるなんて事、アグモンは言ってなかったぞ」

太一の発言に光子郎と賢を除く者たちは、はっとなった。

「そうだ！　ブイモンもそんなこと言ってなかったぞ！

俺はブイモンと毎日は合ってはいないが、それでも週に5日は必ず合うぞ！」

大輔の言葉に二人を除くみんなは頷いた。
他の子供達もデジタルワールドが平和になってから、毎日会うことはなくなったが、
それでも週に4～6日はパートナーのデジモンと話している。
それが少ないかどうかは別にして、とりあえず
デジタルワールドに奇妙なことが起きているのにそれを自分たちが知らないはずはない！
と言わんばかりの表情をみんなはしていた。

「昨日・・・て言えばどうですか」

「「「え！？」」」

「・・・昨日の夕方頃にさっき言ったことが全部発生したって言えば分かりますか・・・」

「「「ッ！！」」」

光子郎の発言に、太一達は驚きが隠せなかった。
しかし無理は無いだろう。先ほど説明されたことはどれも一日やそこらで発生するものではない。
特にダークタワーなんて、自然発生でできるものではない。
これは明らかに誰かのてによって作られたということはここにいる者たち全員理解していた。

「一体誰がそんなことを・・・」

「現在は全く情報がありません・・・」

伊織が呟いたことに光子郎は現状を返すと顔を俯けてしまった。

「・・・奴、かも・・・しれない・・・」

賢がそう呟くと、子供たちは一斉に賢に視線を向けた。

「賢！　なんか心当たりがあるのか！？」

大輔がそう言うと、賢は小さく頷いた。

「・・・疼くんだ・・・僕の体にある暗黒の種が・・・奴が誰なのかわからないけど、

とにかく・・・疼くんだ・・・」

賢がそう言うと、みんなは奴が誰なのかを考えたが、誰も考えつかなかった。

場に重い空気が漂うが、それを取り払うように、電子音があたりになり響いた。

「・・・ゲンナイさんからのメールが届きました」

「「「!!!」」」

「内容は・・・!!!マズイ!皆さん、デジタルワールドに行きましょう!」

「一体何があったんだ、光子郎」

「凶暴なデジモンたちが集団でデジモン達のすみかを襲い始めたようです!」

「ッ!!」

光子郎の発言で、周りの空気が変わった。
子供達はとりあえず考えるのをやめ、ゲンナイに直接話しを聞きに行くことにした。

第一話　異変（後書き）

主人公達書きにくい・・・

第二話　謎

「・・・よく来てくれたな。選ばれし子供達よ」

太一達が、デジタルワールドへ行と、
そこには青年・・・ゲンナイがゲートの前で待機をしていた。
子供達は辺りを見回したがそこにはいつもと変わらない、平和なデジタルワールドがあった。

「ゲンナイさん・・・デジタルワールドに異変が起きてるってホントですか？」

京がそう言うとゲンナイは京を見つめた。
京の目は嘘で有って欲しいという目をしており、ゲンナイはそんな表情を見ながらも、淡々と答えた。

「ああ・・・本当だ」

「そんな・・・でもデジタルワールドはこんなにも平和じゃないですか！」

「それは異変が起きてるのが僅かな部分だけだからだ・・・」

京の疑問にゲンナイがそう答えた。
するとゲンナイは小さく首を横に振ると、言葉を返してきた。

「いや、違うな・・・今はこれだけですんでると言うべきだな・・・」

「どういうことですか？」

「今は現地のデジモンやその近くのデジモン達が現れたデジモンを抑えてるからですよ」

京の質問に光子郎が答えると持っていたパソコンを開き、少しの間、カタカタと音をたてると、
パソコンを子供たちの方へ向けた。

「これを見てください」

光子郎がそう言うと、子供達は視線を光子郎からパソコンの画面へ変えた。
パソコンの画面には、この大陸の地図が映っていた。
しかし、子供たちは疑問の声を上げた。
その地図には赤い点のような目印が所々点滅していた。

「光子郎。その赤い点は何だ？」

「今、調査中です。でもおそらく・・・ゲートです」

「「「ッ！！」」」

太一の問に光子郎がそう答えると、子供達は驚きの声をあげた。

「どういう事だ！　なぜゲートが開いたんだ！」

「分かりません。・・・しかし一つだけ言える事があります。

そのゲートは人間界に繋がってるのではないということです」

「デジタルワールドからデジタルワールドへゲートが繋がってると言うことですか？」

「おそらくそういう事になります。タケルくん」

タケルに光子郎はそう答えると、光子郎はゲンナイの方を向き、真剣な眼差しで尋ねた。

「ゲンナイさん。とりあえずこの話は後に置いといて、今は集落を襲っているデジモンについて教えて　下さい。」

「それもそうだな・・・分かった。説明しよう」

ゲンナイはそう言うと軽く、右手を上げた。するとゲンナイの目の前に大型のモニターが出現した。モニターは、４つの画面を表示しており、
その内の３つにはモニターにはデジモン達が戦っている映像が映されており、残り１つの画面には白黒のノイズが発生しており、全くと言っていいほど見ることのできる状態ではなかった。

「これが今この大陸で起きている、デジモン達の襲撃じゃ。場所は全部で４つで、それぞれレオモン達　などのデジモン達がすでに向かっている。おかげで３つの場所の鎮圧はそろそろ完了しそうなんだ　が・・・」

「この４つめの場所の状態がわからないんですね？」

光子郎の問にゲンナイは小さく呟いた。
しかし、ゲンナイは腑に落ちないというような表情をしながらも、小さく答えた。

「ああ。わからないんだ・・・この大陸は我らホメオスタシスによって完全に管理されてるはずなん　だ。それなのに、この場所の情報が伝わってこない・・・いや、なにかに妨害されてるような感じが　するんだ・・・」

ゲンナイはそう言うと、手を顎に当てるポーズを取りながら、考えこんでしまった。
しかし、ゲンナイがそうなってしまうのは仕方がなかった。
ホメオスタシスとはデジタルワールドの安定を望む者達のことをいう。

ゲンナイはそれに仕える、自律エージェントの生き残りだ。
ホメオスタシスとは、簡単にいえばデジタルワールドのセキュリティシステムのようなものだ。
そのような存在であっても、感知できないその場所に疑問を持つことは当然のことであった。

「・・・なら俺達がそこに行けばいいんだな・・・」

大輔が呟いた言葉にゲンナイは思考の世界から戻ってくると、真剣な表情で大輔を見つめた。

「・・・この場所になにが起きているかわかっていないんだぞ・・・」

「そんな事は言ってみれば分かる！　なら、俺達選ばれし子供がそこに向かうべきでしょ！」

大輔の真っ直ぐな目でゲンナイを見つめると、ゲンナイは小さく笑い、そして答えた。

「ふっ・・・さすがは勇気と友情の紋章を受け継いだ少年だ。
・・・他の者達もそれでいいのか？」

ゲンナイの問に大輔を除く選ばれし子供達はもちろんと頷くと、ゲ

ンナイは数秒目をつぶり、
そして覚悟を決めたような表情をして、話し始めた。

「分かった。説明しよう・・・。４つ目のノイズの場所は、ここから南に行った。場所にある、洞窟　の前だ・・・。ほれ、君がブイモンと初めてあった場所といえばわかるかな？」

「わかった！　なら俺達はそこに向かいます！」

「まあ待て。話は最後まで聞くんだ。その場所にはすでにピットモンを隊長とした、天使デジモンたち　で調査に向かっている。向こうに行ったら彼らと合流し、共同で調査をするんだ！」

「わかりました！ピットモンですね？」

「ああそうだ。ちなみに一様言っておくが、ピットモンはエンジェモンの色違いのデジモンだ」

「わかりました」

「待て！　もう一つ言うことがある。現場には私のバードラモンを使って迎え！」

ゲンナイがそう言うと、子供達はなぜ！？と言わんばかりに疑問そうな顔をした。
ゲンナイはその表情に気づくと、説明を補足した。

「あの場所で何が起きているかわからないが、十中八九、ダークタワーがあるだろうだからな・・・
進化して空から向かったとしてもダークタワーの発動範囲に入って、進化が解けて、空から落下。　と、ならないようにな・・・。」

「なるほど確かに可能性は高そうですね」

ゲンナイの説明に光子郎は納得すると、分かりましたと、了承した。

「後、言っておくが、このバードラモンは戦闘が全く出来なくてな・・・
そのかわり、普通のバードラモンより早いが、戦闘には巻き込まないでくれ」

ゲンナイの言葉に、子供達は了承すると、バードラモンに乗った。
すると、バードラモンは小さく雄叫びを上げると、
翼を大きく羽ばたき、南の方への飛び立っていった。

「気を付けるんだぞ、選ばれし子供たちよ・・・」

ゲンナイはそう言うと、粒子になって消えていった。

第二話　謎（後書き）

相変わらず、ダメ文ですいません。

次は、戦闘描写が少しはいるかも（戦闘描写って言うほど戦わない・・・

予定だけど）

戦闘描写難し過ぎる・・・

次は何時もよりダメ文だと思います・・・

第三話　悲劇（前書き）

パートナーデジモン達ほとんどしょべっていなかったｏｒｚ

登場キャラが多いからそっちに気がいっていました・・・

すいません・・・

第三話　悲劇

「・・・やはりダークタワーが立っていましたね」

光子郎は地面から真っ直ぐ立つ、黒い塔を見ながらそう言った。

「今すぐ破壊しましょう！」

賢は光子郎にそいうと光子郎は小さく首を横に振りった。

「ダメです！　今はピッドモン達と合流するのが先です！」

「でも光子郎、ダークタワーを破壊するぐらいならすぐに終わるじゃないか。
それに、ダークタワーがある限り、俺たちは進化することができない・・・
それなら今の内に破壊するほうがいいんじゃないか？」

「・・・おかしいと思いませんか、太一さん・・・」

「・・・どういうことだ。光子郎？」

「こんなに目立つダークタワーを先に来た、ピッドモン達が気が付かないわけがありません。
それなのにタワーが破壊されていない。しかも、タワーと地面周

辺の接触部分が不自然な跡が
残っています。
つまりピッドモン達、成熟期デジモン達でも破壊できなかったという事になります。
しかもピッドモン達は天使型デジモン。闇の存在であるダークタワーとは相性がいいはずです。
それなのにタワーが破壊されていない・・・つまり、
ピッドモン達でも破壊できなっかったということになります。」

光子郎が一気に説明すると、太一達も納得した表情を見せた。

「なので、僕達はまず、ピッドモン達と合流することを先決に行動しましょう」

光子郎の言葉に子供達は頷くと、目的の場所へ飛んだ。

「そろそろ目的地です。みなさん着陸の準び・・・ッ!!!」

「！　どうしたんだ光子郎!?」

「・・・どうやら状態は僕達が考えてた以上に悪いです・・・」

光子郎の呟きに、子供達は何があったと言わんばかりに光子郎の位置から、目的地を見つめた。
するとそこには信じられない光景が目に入った。
頭がないデジモン・・・おそらくピッドモンが足から徐々に消えていく光景だった。
その周りには、卵・・・デジタマがいくつも転がっており、大半は無残にも砕けていた。

「そんな・・・」

ヒカリは目から涙を流しながらそう呟いた。

デジモンは死ぬか、寿命が尽きるか、力尽きると自らのデータをコピーし、デジタマに変わる。
そしてデジタマから孵るとデジモン達は暗黒のデジモン以外、前回の記憶を引き継ぎ、
生まれ変わることができる。
しかし、逆にデジタマが砕けるという事は、そのデジモンはもう、
永遠に生まれ変わることなく、
ダークエリアと呼ばれるデータのごみ箱に意思を持たないデータとして送られてしまうという事だ。

ヒカリ達はデジタマが砕けたという現実を受け止める事は出来なかった。

しかし無理はない。
なぜならヒカリ達・・・いや、初代選ばれし子供達ですらそんな光景を目にすることがなかったのだ。
さらに、選ばれし子供と言われても所詮は普通の子供だ。
デジモンを倒す事にもためらうほどの、優しい心を持つ者達が初めてデジモンの本当の死をその目で見てしまったのだから。
しかもデジタマは落としたぐらいじゃ絶対に割れることはない。
つまりこのデジタマ達は割られたのだ。完全な悪意を持って。

「・・・許さない・・・」

「「「え!?」」」

「絶対に許すものか!!!」

タケルの余りに小さく、そして別人のような殺気に子供達は失っていた冷静さを取り戻した。

「タケルさん・・・」

伊織は独り言のようにそう呟いた。

タケルは伊織にとって大切な仲間であり、そして心を一つにすることでできるジョグレス進化の
パートナーである。だが、伊織には今のタケルの心の中を一切読み

取ることはできなかった。

「タケル・・・必ず仇を取ろう・・・」

「・・・はい」

太一はタケルにそう言うと、今後の作戦を話し始めた。

「まずはこの辺で着陸して、そこから歩いて向かおう。地上から、空中のバードラモンを攻撃された　ら、今のバードラモンには避けることは出来ないからな・・・。という事でバードラモン。この辺で着陸してくれ！」

太一がそう言うと、バードラモンは小さく吠え、その後、すぐ下の森の中へ着陸した。

「ありがとう。バードラモン！　お前は先にゲンナイサンの所へ戻っていてくれ・・・
ここから先は危険だ・・・」

バードラモンは頷くと、翼をはばたかせ、来た道を戻っていった。

大輔達は、太一と話すことができなかった。

太一は何時ものように振る舞っているように見えるが、怒っている

のが丸分かりなほど、
目が鋭くなっていた。
そんな様子を見たことがない、大輔達はかける言葉が見つからず、
そして自分達の中にある怒りを
抱えていたため、誰も必要なこと以外は話すことはしなかった。

「「「ッ！！」」」

子供達が歩き出してから数分、先ほど空から見ていた場所・・・
勇気のデジメンタルのほこらの前に着くと、子供たちの目に入ったのは、先ほど空から見た光景・・・
数個残ったデジタマと無残にも砕けた数十個のデジタマが転がった光景だった。

子供たちは自分の中で膨らんだ、悲しみと怒りを胸に閉じ込め、作戦通り、辺りを冷静に見渡した。
しかし、周りには、デジタマと、戦闘の後が残ってただけで、
それ以外は見パッと見ただけじゃわからなかった。

だが次の瞬間、ほこらの中から何かの影が飛び出た。

「「「ッ！！」」」

子供達の前にパートナーデジモン達・・・アグモン、テントモン、ブイモン、ワームモン、
ホークモン、アルマジモン、パタモン、テイルモンは飛び出すと、何があってもパートナーは守る！
という気迫を体から出し、戦闘態勢に入った。

ほこらから飛び出した影・・・赤と黄色の物体はそのままほこらのすぐ前で倒れた。

その物体は頭から鼻ぐらいまでの大きな赤いマスクをつけており、背中には刀、拳には手裏剣が握られていた。
子供たちはそれがイガモンというデジモンだときずき、驚きの声を上げたがイガモンがうつ伏せで倒れたまま手を子供たちの方へ震えながら上げると、かすれるような声でいった。

「た・・・たすけ、て・・・」

子供達はそれを聞いて、急いでイガモンに駆け寄ろうとしたが、その瞬間、黒い影がほこらから飛び出した。
子供達はそれに驚き、歩みをやめた。
黒い影は飛び出した勢いのまま、イガモンの上まで行くと、
手に持っていた何かでイガモン額を貫いた。

「がっ！！！」

イガモンはそのまま動かなくなり、そして粒子を出し、そしてイガモンのいた場所に、
デジタマが出現した。

ヒカリ達は声を出すこともできなかった。
目の前で助けをもとめたデジモンを今まで見たことが無いほど、残虐な方法で殺されたのだ。
まだ子供の彼らには余りにも信じることができない現実だったのだ。

黒い影・・・黒いコートを着たそれは、顔をフードで隠しており、
両手には手袋を着けていた。
つまり、まったく体が見えなかった。・・・その者の手には真っ黒い鍵のような剣が握られており、
その剣先は、デジタマの方を向いていた。

そして、黒コートの者が腕を大きく振り上げると、固まっていた、
子供達はそいつが何をしようとしているのかにきずき、必死に停止の声を上げた。
しかし、黒コートの者はその声を無視し、剣を持った腕を振り下ろした。

第三話　悲劇（後書き）

戦闘描写入れられなかった・・・

でもオリジナル展開はめちゃくちゃ書きやすい！

オリキャラはさらに書きやすい

ダメ文をなのに、よんでくれてありがとうございます！

第四話　驚愕（キョウガク）

『ベビーフレイム！』

その瞬間、アグモンが技名を叫びながら、火の玉を吐き出した。
火の玉は真っ直ぐ黒コートの者の方に向かって、飛んでいった。
黒コートの者はそれを軽く右にジャンプをして避けた。
それを待っていたかのようにテントモンは男がデジタマから離れた瞬間、自身が出せる最高速度でデジタマのところまで行き、そしてデジタマを持って、子供たちの後ろまで飛んでいった。

子供たちはデジタマが割られなかったことに、安堵のため息を付いたが、コートの者が何をしようとしていたかを思い出すと、コートの者を睨みつけた。

コートの者はというと、攻撃を避けてからずっとこちらを向いたままだった。その様子は、不気味以外の何物でもなかった。

しばらくこの誰も喋らない沈黙の時は続いたが、この空気の中、ヒカリは、コトーとの者に向かって話しかけてきた。

「・・・どうしてあなたはこんなことをするの？」

しかし、黒コートの者はヒカリの質問に答えず、こちらを向いたままだった。
すると、ヒカリは質問内容を変えて、再び話かけていた。

「ここにいくつも割られているデジタマをこうしたのは貴方？」

「・・・」

「答えろよ！！！」

ヒカリの質問に黒コートの者は答えずにいると、
その反応に対しタケルの怒りが爆発した。黒コートの者に向かって
殺意のこもった声でそう叫んだ。
黒コートの者は小さく笑うような動作をとると、初めて、子供たち
の前で声を出した。

「フン、もし俺だと言ったらどぉ～なるんだ・・・？」

黒コートの者・・・男は馬鹿にするような言い方でそう言うとタケ
ルは怒りを膨れ上げながらも静かに答えた。

「そうだとしたら・・・お前をここで倒す！」

「倒すって、殺すの間違いだろ？」

タケルの言葉に男はニヤ付いてるのがわかるような言い方でタケル
にそう返した。

「でも、まだ死にたくないしな・・・僕じゃありません!!」

明らかに聞こえるようにそう呟き、そして先程とは全く違う声・・・人間で言う、小2ぐらいの声でそう答えた。

その反応にタケルの怒りが更に増加し、再び大きな声を上げようとした瞬間、それは太一によって止められた。

「タケル!　気持ちは分かる。でもここで冷静さを失えば、それはヤツの思うツボだ!」

太一がそう言うと、少しは頭が冷えたのか、タケルは顔をうつむき、分かりました、と呟いた。

「・・・お前は一体何者なんだ?」

「フン!　馬鹿か・・・誰が折角お前たちに何も知られていないと、いうアドバンテージを捨ててまで、お前たちにいうバカがどこにいる?　・・・お前たちはそれが通用するようなぬるい戦いしか経験したことがないのか・・・」

「?　どういうことだ!?」

「こっちの話だ」

「・・・お前はなぜこんなことをする?」

「何故って、理由があれば今回のことなかったことにしてくれるのか？」

「そんなはずがないだろう！　お前がやったことは、消して許されることじゃないんだ！！」

太一と男の話の中、賢がそう叫んだ。
賢は昔、デジモンカイザーと名乗って、デジモンたちを傷づけていた時期があった。
今は、その時のことを後悔しており、償えることじゃないとわかっていながらも、デジタルワールドの警備や復旧作業を人一倍頑張っているのだ。そんな彼にとって、デジモンが理不尽に傷づくことはどんな理由があっても許すことのできないことだった。
男はなぜか賢が言った言葉に対して、すぐには言い返しては来なかった。
話すようになってからは今まで、言われたら、すぐに言い返してくるほどの男がなぜかこの時は、
賢が話し終わってから数秒かかった。

「・・・そうか・・・。ならお前たちも俺と同じようなことをしているから、お前たちも許される存在じゃないな」

「お前と俺たちを一緒にするんじゃねえ！！」

大輔が男に向かって叫んだ。
大輔たち選ばれし子供たちは、自分がやってることに誇りを持って

いた。
それを自分たちと同じと言われ、大輔は黙っていることが出来なかった。
それに大輔にはデジタマを壊した覚えなど、一切なかった。

「一緒にするな、か・・・何が違うんだ？　勇気と友情の紋章を受け継いだ者よ」

男が言ったことに対し大輔は怒りを燃え上がれさせ、再び声を大にして言い返そうとしたが、
太一によって止められた。

「・・・どうして紋章の種類まで知っている？」

「何度も言わすなよ。なぜお前たちに説明しなければならない？
・・・こういう時は最低でもこっちにとって利益なことなものを用意しなければ、
お互い、公平とは言わないだろ・・・
でも、別に言ってくれるかは置いておいて、相手に質問するのはいいことだと思うぜ～。」

「・・・わかった。質問を戻そう・・・。どうしてお前と俺たちは一緒なんだ？
俺たちはお前のようにデジタマまでを破壊したことはないはずだ！」

「別にやり方まで、同じとは言っていないだろ。お前たちは俺とは違うやり方で、デジタマを破壊しているだけだ。」

「・・・どういうことだ？」

「まあこれは俺に関する話じゃないからな・・・まあ答えてやろう。
まずお前たちが殺したデジモンの名を数体言ってやる・・・デビモン、エテモン、ヴァンデモン、
ディアボロモン、スカルサタモン・・・どいつも知ってるだろ？
お前たちがこいつらを倒したとき、デジタマは発生したか？」

男の言葉に太一たちは考えた。しかし記憶を引きずりだして思い出してみても、奴の言ったとおり、
デジタマが発生しなかったということを思い出した。

「どうだ？」

男はさっきより少しだけ高い声でそう言っていた。
わかっているのだろう。自分が言ったデジモンが、子供たちが倒されたとき、デジタマが発生しなかったことを。

「・・・確かに発生しなかった・・・・・ヴァンデモンと、エテモン、スカルサタモンに関しては、理由がわかるが、それ以外はわからない・・・」

「フン！・・・今の時点でお前たちは俺と同じデジタマ殺しじゃないか？　だって分かっていたんだろ？　人間界・・・リアルワールドで死んだデジモンは生まれ変わることができないことぐらい・・・」

太一たちは男の言葉に何も言い返すことが出来なかった。
確かに自分たちは知っていた。人間界でデジモンが死ねばどうなるかを。

「それとそいつら以外のデジタマが発生しない理由は・・・お前たちが完全なる殺意を持ってデジモンを倒したからだ。
聖なる力は完全なる敵意を向けて、敵を攻撃し、そして、倒してしまうとデジモンはデジタマとなって生まれ変わることができないんだ・・・まあ、ディアボロモンは例外だけど、とりあえず、心当たり・・・あるだろう？」

「「「・・・・」」」

「まあ、お前たちが殺したデジモンは他にもいるが、ここでこれ以上という意味はない。」

「で、でも、仕方がなかったんだ！　倒さなければ被害者が出ていたんだ！」

「どんな理由があっても許されることじゃないのか～・・・希望の紋章を持つ選ばれし子供よ」

「・・・確かに私たちはあなたと同じ事をしていたのかもしれない・・・でも、私たちは倒さなければならない状態だった。あなたと違って！」

「俺にも理由はあるさ・・・殺意を向けられ、殺されそうになった

から、殺したんだよ。
ほらどうだ？　正当防衛は立派な理由だろ？愛情と純真の紋章を受け継いだ選ばれし者よ」

タケル、京の言葉に男は、冷徹にそう言った。

「京さん！　これ以上こいつと話しても無駄です！　これ以上の被害者が出る前に、ここで倒しましょう。」

「そうだぎゃ～！　ここでコイツを倒さないと、絶対に被害者がでるだぎゃ～！」

ホークモンとアルマジモンの言葉に、子供たちは考えるのを後にして、この男を倒してからにしようと納得した。
しかし、ヒカリは、その言葉には賛成しなかった。

「ダメよ！　話し合いが出来ているんだから、ここで戦う必要はないわ！」

「そ～だよ～争いは失うばかりで、得るものの方が遥かに少ないよ～」

ヒカリの言葉に、男は先ほどまで話していた声より、優しそうな声でそう言った。

その反応に対して、ヒカリを除く、子供たちと、デジモンたちは一

層の決意を固めた。

「ヒカリ・・・わかってくれ・・・。こいつは俺達の話なんておもしろ半分で聞いてるやつだ。ここでこいつを倒さなかったら、もっとたくさんのデジモンたちが倒され・・・死ぬんだぞ。ヒカリはそれでいいのか？」

太一の言葉にヒカリはうつむいてしまった。しかし、しばらくすると顔を上げ小さな声で尋ねてきた。

「・・・本当にそれしかないの？」

「ああ・・・」

「・・・わかった・・・」

ヒカリがそう言うと、太一と光子郎を除く、子供たちはカバンやポケットからＤ３とＤターミナルを取り出し、手に持った。

「いくぞ、みんな！」

「「「わかった」」」

「「「デジメンタルアップ！！」」」

子供たちがそう言うと、Ｄターミナルから光が飛び出し、そしてそ

の光がD3にあたり、そこから各デジメンタルが飛び出した。
すると、ブイモンたちは光に包まれた

男がニヤリと口を歪ませたのは、フードのせいで、誰も気がつかなかった。

第四話　驚愕（キョウガク）（後書き）

デビモンのとき・・・デジタマは発生しませんでしたよね？
すいません・・・記憶が曖昧です・・・

アルマジモンやばいほど使いにくい・・・
もうあんまり喋らさないでおこうかな・・・

戦闘描写はつぎ・・・あるにはあります。
ちなみに絶対に次は戦闘描写があるのでクソ文の可能性が高いので
覚悟をしておいてください・・・

本当はバイトの前・・・９時３０分には完成したのですが、
サブタイトルを入れずに投稿してしまったため、エラーが起き、
すべて消えてしまいましたｏｒｚ

第五話　困惑（前書き）

パートナーデジモンファンの皆さん・・・ごめんなさい

第五話　困惑

「「「え!?」」」

子供たちは困惑の声を上げた。
なぜならデジモンが進化中にもかかわらず、男がこっちに向かって、先ほどのテントモンのスピードを超える速さで走って来たからである。

男は自分の攻撃が当たる範囲まで接近すると、初めにいつの間にか手ぶらになっていた右手で、
進化中のブイモンの喉を突き刺した。

「がっは!?」

ブイモンはそのまま後ろに後ろに飛んでいくと、光りに包まれ、幼年期デジモンのチコモンになっていた。

男は次に近くにいた、アルマジモンのところに行くと、ホークモンがいる方めがけておもいっきり脇腹あたりを蹴り飛ばした。
直接攻撃されたアルマジモンはもちろん、かなりのスピードで飛んできたアルマジモンと激突したホークモンのダメージはひどく光が消えると、各ポロモン、ウパモン、に退化していた。

その次は、パタモンの方へ向かうと、左手でパタモンの腹を思いっきり殴り飛ばした。

吹き飛んだパタモンはダメージのせいでトコモンに退化した。
最後に残ったテイルモンを男は左足で蹴り上げた。
吹き飛んだテイルモンが光が消えるとそこには成熟期のままのテイルモンがふらふらと立ち上がった。
成熟期の防御力のおかげで退化することはなかったが、進化が中断されてしまい、次に進化するほどの体力も残されていなかった。
男はそれで満足したのか、先ほどまでいた位置にバックステップで戻るとこちらに向かって、ケラケラと笑いながら言った。

「おや～？　なんで進化の光に包まれたはずなのに、進化してなく、逆に退化してるのかな～？」

男の言葉を聞きながらも、子供たちは傷ついたパートナーの元へ向かい、自分の腕の中へと抱きしめた。

「ちょっと！！！　進化中に攻撃なんて卑怯よ！！！」

京が男に向かってそう言うと、男は笑うのをやめ、怒りのこもったような声で言ってきた。

「あ～ん！？　卑怯だと！？　笑わせるなよ！　多勢に無勢で戦ってきたお前たちに言われたくないな・・・。それに先に武力行使してきたのはお前たちだろ？
俺を勝手に倒すとか言ってきやがって・・・それに俺はまっすぐ正面からお前たちを攻撃したんだぞ！

後ろからいきなり攻撃してきたわけでもあるまいし・・・まあ、後ろからの先制攻撃も立派な戦い方だ。多勢に無勢のお前らにくらべたらよっぽどのな！」

男はそう言うと、一息つき、再び話し始めた。

「それに進化中に攻撃される可能性があるってことはわかってたんじゃないか？
勇気の紋章・・・もうめんどくさい、八神太一、泉光子郎！」

太一と光子郎は何も言い返すことは出来なかった。
自分たちはかつて、ディアボロモンとの戦いでそれを経験したはずだったのに。

「さ～て。お前らの中で後、戦えそうなのが、アグモンとテントモンとワームモン・・・後ぎりぎりテイルモンといった所か」

男はそう言うと、アグモンと、テントモンは俯いていた。
彼らは自分たちの行動に後悔していたのだ。
ブイモンたちは進化中だったので動けなかったがアグモンたちはそんなことはなかった。
しかも、アグモンとテントモンは、ディアボロモン戦で進化中に攻撃を受けた張本人だ。
なぜ、その時の経験を活かせなかったのか・・・と思っていたのだ。
男はそれをアグモンたちの様子から理解すると、視線をデジモンか

ら子供たちへと変えた。

「さ～て。俺としては別にお前らを見逃してもいいんだが、お前らは俺を倒すとか言ってたな・・・
ここで見逃せば、コレから先、お前たちに命を狙われながら、暮らさないといけなくなるな・・・そうなると、やっぱりお前らにはここで消えてもらうのが良さそうだな・・・
だが勘違いするなよ？　お前たちが先に喧嘩を売ってきたんだ・・・
」

男はそう言いながら一歩ずつ子供たちへと近づいてきた。
子供たちは初めて自分たちに向けられそうになっている圧倒的な力に足が震えて動かなかった。

しかしそれも無理は無い。子供たちは殺意を向けられたことすらほとんどないのだ、攻撃の余波は受けたことはあるが、まして、自分たちに向かって直接力を向けられそうになるなど今までになかったのだから。
しかもその力を持っているものが一歩ずつゆっくりとこっちに歩いて歩いてきてるのだ。

男は子供たちの３ｍ手前で止まると、冷たい声で言ってきた

「さ～て。最後に言い残すことはないか？」

子供たちは口を開くことも出来なかった。

デジモンたちは、攻撃すればその瞬間から、周りもろとも攻撃させると思っているため、
動くことは出来なかった。

子供たちの中にはここまでか・・・と呆れ目ているものでさえいた。
しかし、その圧倒的な空気の中、その空気を破壊する言葉が一人を除く、子供たちの耳に入ってきた。

「ごめんなさい！！！」

「「「え？？？」」」

ヒカリがそう言って、頭を下げると、子供たちは先ほどまで口を開けることすら出来なかったはずの口から困惑の声を出した。

男は驚く素振りひとつ見せずにじっとヒカリの方を見つめると、言

葉を発した。

「・・・どうして謝るんだ？」

「だって、お互い話し合っていたのに急にこっちがあなたを明らかに攻撃するような素振りを見せたからこんな事になっているんでしょ？」

「・・・でもお前が謝る必要はないんじゃないか？　お前は最後まで攻撃に関しては、反対してただろ？」

「・・・それでも私も最後にはそれに賛成してしまったから同じよ・・・

だから、本当にごめんなさい・・・」

ヒカリはそう言うと、再び頭を下げてきた・・・

男はその様子にため息をつくと、さっきまで出していた殺気をなくすと、話をしてきた。

「・・・流石は光の紋章を持つ選ばれし子どもだな・・・わかった。今回のことはお前に免じて水に流そう。」

「「「え！？」」」

「だが勘違いするなよ・・・これは貸しだ。いつかは何かで返してもらおう！」

男はそう言うと子供たちに背を向け片手を空にかざした。
するとその手の先に闇が広がった
男はその闇の中に入っていった。

「待て！」

男は声が聞こえた方向・・・タケルの方を見ると、そこには睨むような目をした少年がこちを睨んでいた。

「・・・僕はお前を絶対に許さない！・・・」

「・・・ああ。分かっている」

男はそう言うと闇に包まれそしてそこから姿を消した。

第五話　困惑（後書き）

急展開ですいません。

でも、こんな感じになることははじめから決まっていたもんで・・・

もし、こんな展開が嫌という方が多数いらしゃる場合は、一部描き直すので感想に書いてください。

一様、頭の中には結末と、所々の展開は決まっていて、登場キャラクターもほぼ決まっているので、完成はさせるよう、頑張ります！

・・・いつか外伝を書けるといいな～・・・

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

第六話　出会い

子供達はとデジモンは、しばらくそこで休んでから、アーマー進化できるくらいまでデジモンたちが回復すると、デジタマを持って、ゲンナイの家へ帰っていった。

「行ったか・・・」

その様子を森の中で見ていた2つの影が、子供たちが去るのを確認すると、先ほどまで子供たちがいた場所へ歩いていった。

「それのしてもアイツら、――――にコテンパンにされてたね」

「ああ・・・だがあいつ相手じゃ仕方ないさ」

「そうだね・・・で、アイツらは使えそう?」

「そうだな～・・・ちょっと無理そうかな・・・」

「ええ!?　ここまで来たのに無駄足かよ・・・」

「そう言うなって。これからはしばらくこの世界で過ごすことも多くなるだろうから、まあ地形の確認とでも思ってくれ。
それに・・・久々にアイツらの顔を見れてうれしかったし」

「どうせ嫌でも毎日顔を合わせることになるんだから別に今日会わなくてもよかったじゃん！」

「そう言うなってモノドラモン～・・・」

少年がそう言うと、モノドラモンはまったく・・・と言いながらため息を付いた。

「もうすぐ、この場所の監視のセキュリティーが修復される！さっさと、目的を果たそうぜ！」

モノドラモンが少年に向かってそう言うと、少年は、わかったわかったと言いながら、モノドラモンから離れた。
すると次の瞬間、モノドラモンは光に包まれ、光が消えると、そこには赤い羽根みたいな物を生やした、体の所々がサイボーグで出来た、人型のデジモンがいた。

「行くぞ！　サイバードラモン！」

「ああ。わかった・・・

リョウ！」

選ばれし子供たちはあれからゲンナイさんの家へ行き、さっきの出来事を話そうとした。
しかし、光子郎が、

「僕一人で十分です」

と言うと、みんなもそれに納得し、先に帰ることにした。

そして、しばらく話し合っているうちに、今日は太一の家で泊まることになった。

明日からは週末で、太一の家に今日は親が帰ってこないため、こういうことになったのだ。
しかし、子供達は浮かれる様子を見せなかった。
なぜかと言うと、今回、みんなが一つの家に集まる目的は遊ぶためではなく、
今回あったことを話し合うために集まったのだから・・・

「さて、早速で悪いが光子郎！」

太一がそう言うと光子郎は頷き、辺りを見回した。
今回太一の家で泊まることになっているのは、
大輔、賢、京、タケル、光子郎、ヤマトの全６人だ。
伊織は明日明後日に剣道の試合があるため、今回は席を外している。
ヤマトは光子郎から連絡がでここにいる。
ヒカリは元々この家の住民だから、ここにいる。
ちなみにデジモン達は、自分のパートナーの膝に座っている。

「まずは、今回の出来事をまとめたいと思います。
ちなみに、ヤマトさんには大雑把に説明はしています・・・
今回僕たちはゲンナイさんの連絡でデジタルワールドに向かいました。
そして、なぜかモニターに映らなかった場所を僕たちが調査することになりました。
ここまでは大丈夫ですね？

光子郎の言葉にみんなは頷いた。それを確認すると、光子郎は話を再開した。

「分かりました。　そして僕たちはまず、先に調査をしているピッドモン達天使型デジモンのグループを探すことを目的に行動を開始しました。すると、ダークタワーを発見しました。
このダークタワーはすでに何者かによって攻撃された跡がありました。
僕たちはそれをピッドモン達と仮説を立て、僕たちには破壊できないと結論をだし、
とりあえずは放っておくことにしました・・・そして、今から言うことは、ゲンナイさんと話して、分かったことです・・・。
ダークタワーは、僕たちがゲンナイさんの家に帰っている途中に何者かによって破壊されたようです」

光子郎の言ったことに対して、子供達は驚きの声を上げた。

「どういうことだ？　光子郎。あのタワーは成熟期の天使型デジモン達が束になっても破壊できないほどの強度を持っているはずだろ？」

「はい。そのことに関してはゲンナイさんが他の場所のダークタワーを調べて確認済みです」

「という事は、少なくとも、完全体デジモンか・・・。光子郎、お前たちが戦ったっていう黒コートの男が怪しくないか？」

ヤマトが光子郎にそういうと光子郎は右手をあごにつけながら言っ

た。

「僕もそれが一番可能性が高いと思っています。・・・でも、それだと、いろいろふに落ちないことがあるんですよ・・・」

光子郎がそういうと、子供達も考え込んだ。

「もし仮にあの男がタワーを破壊したとすると、彼が消える際に使った、闇の回路を使う意味が分からないんですよ・・・」

「光子郎さん！　闇の回路ってなんすか？」

大輔がそう言うと大輔と光子郎を除く子供達とデジモンはわからなそうな目で光子郎を見つめてきた。
光子郎はそれを見ると、しまったと言わんばかりの顔をした。

「すいません。説明していませんでした。
闇の回路とは、闇の力を持つ者だけが使える道みたいなものです」

「闇の力を持つもの・・・」

「はい。ちなみに心が強くないと使えないそうです」

「心が・・・強い？

「心の強さとは、簡単に言えば、覚悟の強さ、決意の強さ、などといった、心に関する強さを持っていることを言うようです」

タケル、ヒカリの言葉にそれぞれそう答えると、光子郎はパソコンを取り出し、あるデータを見せてきた。
そのデータは古い本のページをデータ化したものだと光子郎は説明すると、マウスで画面を動かし、
あるページの所で、マウスを止めた。

「みなさん・・・これに見覚えはありませんか?」

光子郎がマウスで指した先には子供たちが先ほど見たもの・・・黒コートの男が初めに持っていた、鍵のような剣が載っていた。

「これは、キーブレードというものです」

光子郎が言ったことに対し、テイルモンは驚きの声を上げた。

「キーブレードですって!? なぜそんなものをあいつが持っているんだ!?」

「テイルモン・・・この鍵みたいな剣をを知っているの?」

「・・・ああ。キーブレードとは本当に心が強い者にしか使えない

と言われている伝説の剣で、
絶対に折れることのない武器で、ホーリーリングをクラス以上の力をもっているらしい・・・」

ヒカリの質問に、テイルモンはそう答えると、光子郎が捕捉で説明した。

「ちなみに、キーブレードには3種類あるようです。一つは光のキーブレード、一つは闇のキーブレード、そして、Xブレードと書いて、キーブレードと読むと読むそうです。
光のキーブレードは、さっき言った条件と、決して歪むことがない、光を持つことらしいです。
闇のキーブレードは、さっき言った条件と、決して消えることがない絶対的な悪の感情らしいです。
・・・ちなみに奴が持っていたキーブレードは闇のキーブレードです・・・」

「・・・という事は、奴は絶対的な悪の感情を持っているってわけか・・・」

光子郎の言葉に太一がそう言うと、ヒカリは少し考えるような表情をした。
しばらくすると、考えがまとまったのか、静かに、そしてハッキリといった。

「私・・・あのデジモンが悪いデジモンに思えないの・・・」

「何を言ってるんだ、ヒカリちゃん！　あいつらはパタモン達を攻撃してきたんだよ！」

「それは私たち彼を明らかに攻撃するような行動をとったからだよ！」

「でもその前にイガモンを殺したじゃないか！」

「そ、それは・・・」

「それに、あいつはピッドモン達も殺したんだよ！　僕はあいつを絶対に許さない・・・」

ヒカリとタケルはそれぞれ言い合うと、ヤマトが間に入ってきた。

「二人とも、落ち着け！」

ヤマトがそういうと、二人は言い合うのをやめた。

太一はヒカリをじっと見つめると、ヒカリ対して、質問を投げかけた。

「ヒカリ・・・お前はどうしてあいつを庇うんだ？」

「・・・わからない・・・でもどうしてか彼が悪く言われるのがいやって思う気持ちがあるの・・・」

結局、今後のあの男に対する解決法は見つからず、ダークタワーの件も結局は情報が集まってから、また話会うことになった。

土曜日と日曜日を使って、デジタルワールドを調査したが、何も見つからなかった。

第六話　出会い（後書き）

大輔達空気過ぎ・・・

次はあいつが・・・

キャラクター紹介　原作主人公編（前書き）

今更ですがキャラ紹介を作ったので投稿して見ました。

・・・・・本当はだいぶ前から書き始めたは居ましたんですが、
原作キャラの説明を書いているときはあまりにもヤル気が出ず、
こんなにかかってしまいました・・・・・・

・・・・・まあアニメ原作主人公キャラの説明はかなり少ないですが、
それ以外のキャラの説明は細かくする予定なのでご許しください・・
・・・・

キャラクター紹介　原作主人公編

八神太一（やがみたいち）

デジモンアドベンチャー（以降無印）の主人公。
昔は口よりも体が先に動くタイプだったが、昔の旅の経験から、
今は、考えてから行動するように心得てる。
勇気の紋章を持つ選ばれし子ども。パートナーデジモンはアグモン。
中三で今年は受験だが、すでにサッカーの推薦を受けており、
そのコーチにも事情を説明しているため、
デジタルワールドに行く時にはいつもいる。

八神ヒカリ（やがみひかり）

無印の選ばれし子供。前作は途中から、８人目の選ばれし子供として、
太一たちとの旅に加わった。光の紋章を持つ選ばれし子ども。
パートナーデジモンはテイルモン。
デジモンアドベンチャー０２（以下０２）でも、
中心メンバーの一人として活躍する。闇に対しては人一倍に敏感。
この小説の真実に大きく関わっている。
この小説オリジナルの設定が最も多いキャラ。
小学六年生。京とはジョグレスパートナー。

泉光子郎（いずみこうしろう）

無印の選ばれし子供。当初は太一以外とあまり話さなかったが、徐々に他の人とも話すようになっていった。

知識の紋章を持つ選ばれし子ども。パートナーデジモンはテントモン。

無印での冒険後、パソコン部を創り、初代部長となる。

参謀役を務めることが多い。中二のため、デジタルワールドに行くときは大抵いる。

高石岳（たかいしたける）

無印の選ばれし子供。闇に対して絶対的な敵意を見せており、闇の存在を認めることができない。

希望の紋章を持つ選ばれし子ども。パートナーデジモンはパタモン。

02でも中心メンバーとして活躍する一人。

本宮大輔（もとみやだいすけ）

小学六年生。伊織とはジョグレスパートナー。

０２の主人公。サッカーが得意で、太一の後輩である。
いつも前向きで何事にもくじけない。
何も考えていないように見え、
猪突猛進な性格に思われることもあるが、冒険の中で成長し、
みんなを引っ張るリーダー的存在になった。
勇気と友情の紋章を受け継いだ選ばれし子ども。
パートナーデジモンはブイモン。
この小説の真実に大きく関わっている。小学六年生。
賢とはジョグレスパートナー。

一乗寺賢（いちじょうじけん）
０２のもう一人の主人公。
過去の戦いで暗黒の種子が植えつけられる。
その時のことは種子の影響で忘れてしまってる。
種子の影響でデジモンカイザーとなってしまったが、
その後改心して選ばれし子どもとして戦い、贖罪を続ける。
優しさの紋章を持つ選ばれし子ども。
パートナーデジモンはワームモン。
この小説の真実に大きく関わっている。
大輔とはジョグレスパートナー。

井ノ上京（いのうえみやこ）

０２のメインキャラクターの一人。
明るい性格でみんなを引っ張っていくが、
パニくることもある。光子郎の後輩。
愛情と純真の紋章を受け継いだ選ばれし子ども。
パートナーデジモンはホークモン。
ヒカリとはジョグレスパートナー。

火田伊織（ひだいおり）

０２のメインキャラクターの一人。
とても真面目で幼い正義ではあるが正義を重んじている。
頑固で多少融通のきかないところもある。
祖父に剣道を習っている。
知識と誠実の紋章を受け継いだ選ばれし子ども。
パートナーデジモンはアルマジモン。
タケルとはジョグレスパートナー。

キャラクター紹介　原作主人公編（後書き）

・・・・・・もしもっと説明して欲しいという人いらっしゃれば感想に
書き込みをお願いします・・・・・・
その場合は、私も決心して全力でキャラ説明したいと思います・・・・

第七話　新たな疑問（前書き）

今更５話の展開に、後悔中・・・

タイトルも、もう2文字のいい感じの奴が思い浮かばない・・・

昨日のグラフが１００ユニーク超えてた！！！

みなさん、本当にありがとうございます！

今の所、ユニーク数が私の小説を書く、元気の源になっています！

第七話　新たな疑問

そう誰かが叫ぶと、周りの人達・・・クラスメイトたちが椅子から立ち上った。

「起立！！！」

「礼！！！」

「「「おはようございます！！！」」」

「着席！！！」

そう誰かがいうとクラスメートたちは自分の席に着席した。

大輔は眠そうな表情でその動作をこなした。

大輔たちは昨日、一昨日の休日に、デジタルワールドをくまなく調査をしたのだ。

くもなく調査と言っても、実際にデジタルワールドの全てを回ったわけではない。

デジタルワールドは４つに分けられていて、四聖獣と呼ばれるデジモンによってそれぞれのエリアを管理されている。

そして、チンロンモンと呼ばれるデジモンに管理されている東エリアが大輔達が行くことのできるデジタルワールドだ。他のエリアに

は絶対に行くことは出来ないとゲンナイが言っていたため、必然的に、
大輔達は、東のデジタルワールドくまなく調査した。
しかし、新しい発見は、なかった。
だが、大輔達は、先日に急に出現した、ダークタワーの破壊に成功していた。
タワーは、大輔達が唯一用意できるデジモン・・・パイルドラモン、シルフィーモン、シャッコウモンの三体の同時攻撃で破壊することが出来た。太一たち、先代の選ばれし子供達は、完全体に進化させるのに必要なだと言われている物・・・紋章を持っていなかった。
よって、彼らのデジモン達は成熟期までしか進化できなかった。
だが、戦力が落ちたのは、彼らだけではなかった。
大輔と賢のジョクレスデジモン・・・パイルドラモンは究極体に進化できなくなっていたのだ。
大輔達は元々チンロンモンから借りた力で進化していたのだ。
それがなくなれば、進化できなくなるのも仕方がないことだった。
そうやってぼーっと、窓から外を見ていると、先生に注意され、しぶしぶ先生の方を向いた。

「以上で朝礼は終わりだ。だがその前に、転校生の紹介をする」

先生がそういうと、大輔達のクラスメートはざわざわと騒ぎ始めた。
しかし、それを先生が注意し、教室が静かになると先生が、扉に向かって入ってこいと言った。
すると扉が開き、そこから少年が姿を見せた。
少年は教室に入ってくると、先生の隣まで歩くと、子供たちの方へ体を向けた。

「転校生の秋山遼です。トルコからやって来ました。何度も転校を繰り返しているので、どれぐらい一緒にいれるか分からないが、どうぞよろしく！」

「秋山君は両親の都合で転校を繰り返している。日本に来るのも久しぶりらしいから、みんな仲良くしてやってくれ。それで、秋山君の席は・・・あそこだ」

先生がそう言うと、大輔は、げぇ！と声を上げた。先生が指差したのは、空席になっている、大輔の右側の席だったからだ。しかし、そんなことはお構いなく、リョウは大輔の隣の席に座った。

「・・・どうも、秋山遼だ。これからは隣同士になるんだからよろしくな。」

「ああ。俺は本宮大輔。こっちこそよろしく。」

二人はそれぞれ挨拶すると、それ以来は会話をしなかった。

そして休み時間になるたびに周りに質問をされていたリョウであったが、３時間目の休み時間は、次が体育という事で、リョウの周りに人が集まることはなかった。
リョウも早速、先生から借りた、体操服に着替えていた。
大輔もさっさと着替えていたが、リョウがさっきまで着ていたズボンから取り出したものを見て驚きの声を上げた。

「な、なんでお前がＤ３を持っているんだ！？」

すると、リョウはズボンのポケットから体操ズボンのポケットに入れようとしていたもの・・・Ｄ３を大輔に見せると、リョウが言ってきた。

「そんなに驚くことじゃないだろ？　君だって持ってるじゃないか」

そう言うとリョウは、同じくポケットに入れようとしていた大輔のＤ３を指差した。

「確かに俺も持っているけど・・・」

「だろ？　そんなことよりいいのか？　もうこの教室には俺たち二人しか残っていないぞ？」

「！　マジかよ・・・なら急ぐぞ！」

大輔がそう言って、教室を飛び出すと、リョウは小さくため息をつき、大輔の後を追いかけて行った。

体育が終わると次は給食の時間だ。

今回の給食のメニューは大輔の大好物のものだった。

大輔は先ほど持っていたリョウに対する疑問を、さっきの授業のサッカーと給食の二連コンボで忘れ去ってしまった。

そして放課後になると、大輔とタケルとヒカリは、パソコンルームへ向かった。
リョウはその様子を見届けると、教室から出て行った。

「はあ・・・なんもみつかんね～！・・・」

大輔がそういうと、周りの者達も疲れたようなため息をついた。

「そんな3，4日で見つかるものでもないだろ・・・」

太一が大輔に向かってそう言うと、大輔はだって～と返してきた。
太一、光子郎、空、大輔、伊織、ヒカリは今日もデジタルワールドの異変を探していた。

しかし、結果は空しく、今日も何も発見することができなかった。

「ソラ～、私、お腹がすいたよ～」

「そうね。今日はピヨモン、頑張ってたもんね」

ソラはそう言うと、ピヨモンの頭を優しくなでた。
今日の子供たちの調査方法は、基本的にピヨモンの進化系・・・バードラモンの背中から地上を見下ろして、探すというものだった。よって、ピヨモンは空を飛びっぱなしだった。なのでピヨモンのお腹がすくのも仕方がないだろう。

「今回も変わったことを発見することができませんでした・・・」

光子郎がそう呟くと、大輔は何かが頭の中で浮くんで来そうな感じがしていた。

「変わったことって、そういえば・・・・・・・・！！！　　ああ！！！」

大輔が大声でそういうと、周りはびっくりしたような反応をした。

「どうしたんだよ～大輔？」

「太一さん・・・今日俺、俺たち以外にD3を持ってる奴とあったんです・・・」

太一たちは余りにも突然すぎる大輔の衝撃的な言葉に、驚愕の声を上げた。

「どういうことだ、大輔!?」

「そうだよ大輔君。僕たちは今日ずっと一緒にいたじゃないか!それなのにいったい何時、そんな隙が・・・ま、まさか!?」

「・・・ああ。今日俺たちのクラスに転校してきた秋山って奴が持っていたんだ・・・」

「それは実に、興味深いことですね・・・デジヴァイスを持ってるならまだしも、D3となると、見過ごすことのできる事ではないですね・・・」

光子郎がそういうと、子供達も頷いた。

「・・・とりあえず、明日、秋山君にはパソコンルームに来てもらいましょう。
大輔君!　明日秋山君に放課後、パソコンルームに来るように伝えてください!」

「分かりました！」

大輔は光子郎の言葉に大きく頷いた。

第七話　新たな疑問（後書き）

大輔の隣が空いてるとか、ご都合主義ですいません・・・

第八話　新たな謎（前書き）

バイトの勤務時間が長いときは、投稿が遅くなります・・・

リョウの性格はテイマーズを参考にしました！（急いで２８話を見てきました）

ちなみに、サイバードラモンは今のところ、ゲームを参考にしようと思っています。

第八話　新たな謎

「なあ、秋山・・・」

大輔は、次の日、何時もより少しだけ早く学校に行くと、大輔の隣の席には既にリョウが座っていた。
大輔は一瞬躊躇いながらも、リョウの元へ歩いて行った。その後ろには、タケルとヒカリがついて来ていた。
リョウの隣まで来たが、リョウは本を読んでいてこちらには気付かなかった。

大輔は、そんなリョウに話しかけた。
すると、リョウはこちらに気付いたのか、読んでいた本をパン！と閉じると、大輔に向かって返事を返した。

「うん・・・ああ、おはよう本宮君」

「あ、ああ。おはよう・・・なあ、秋山、今日の放課後空いてるか？」

大輔はリョウにそういうと、リョウは一瞬ピクリと眉を動かしたが、それに大輔達は気付くことはなかった。

「・・・ごめんだけど、俺は、学校が終わったら、
すぐに家に帰らないといけないから、放課後は遊べないんだよ」

リョウはそう言うと、わるいな・・・と言いながら、笑顔で大輔にそう言ってきた。

「・・・放課後にすぐに家に帰らなければいけない理由ってなに？」

すると、タケルは、大輔の後ろから出てきてリョウにそう言った。

「・・・君は？」

「僕は高石タケルって言うんだ」

「・・・そうか・・・俺は知ってるかもしれないが、秋山遼って言うんだ。よろしくな。
それでさっきの質問に対してだけど・・・それはちょっと言えないんだ・・・悪いな」

リョウがそう言うと、タケルは、そうなんだ・・・と言って、大輔の後ろへと戻っていった。

大輔は、何度か、そこは何とか・・・などと言って、リョウに頼んだが、そのたび、リョウが謝りながら断った。結局、リョウが首を縦に振ることはなかった。

「という事があって、秋山をここに連れてくることは出来ませんでした・・・」

大輔は太一にそういい、謝りながら、頭を下げると、太一は大輔の髪を右手でクシャクシャにしながら言ってきた。

「謝らなくていいぞ、大輔」

「で、でも・・・」

「秋山に理由があったんだからしかたがない・・・」

太一がそう言うと、大輔は頭を上げてきた。
顔には先ほどの暗い顔はなく、何時ものように明るい顔をしていた。

「それより光子郎！　秋山の毎日家に帰らないといけない理由って

なんだと思う？
・・・もしかしたら、Ｄ３を使って、デジタルワールドに言ってるんじゃ・・・」

「たぶん、それはないと思います」

光子郎は太一の予想に対してそう言うと、パソコンをこちらに向けてきた。
そこには世界地図が映られていた。

「これはデジタルゲートを感知するプログラムを導入した、世界地図です。ゲートが開くとその場所がわかるようになっています。
これによると、最近、日本では、この場所以外ゲートが開いていません。
もちろん、過去にもトルコにもゲートが開いたことはありましたが、それは、
あの及川の時の事件の　時ぐらいしかありません。
このプログラムはゲンナイさんと共同で開発したシステムです。
それを簡単に抜けることなどできるはずがありません」

「光子郎はんらの作ったプログラムをごまかせる人間なんていまへん！」

テントモンの言葉に太一たちは納得した。

「秋山さんの帰らないといけない理由は分かりませんが・・・」

光子郎がそう言うと、一つの仮説を太一たちに話し始めた。

「・・・秋山さんは、新しく選ばれた、選ばれし子供なんじゃありませんか？」

「どういう事ですか？　泉先輩？」

「これは仮説です・・・秋山さんは、最近選ればれし子供に選ればれた。
　理由は、最近、デジタルワールドで起きている異変に対抗するためですよ」

光子郎がそういうと、京たちは納得したような顔をした。

「・・・つまり、あの男に対抗するための戦力というわけですね」

伊織がそう言うと、周りは暗い空気を出し始めた。

「あいつには戦力だけじゃなく、何か作戦を立てなきゃならねぇ・・・。
　前みたいに進化中の攻撃で全滅！　ってことにならねぇ～ようにな・・・」

「そうですね。・・・ピッドモンや、イガモン達の仇を取るためにもね・・・」

太一の言葉にタケルがそう言うと、周りは俯いてしまった。
ここにいる、太一、光子郎、大輔、京、伊織、タケル、ヒカリ、各パートナーデジモン達は、みな、
イガモンの死を目の前で見た者達だ。デジタマは壊されなかったが、それでも目の前で残酷に殺されたイガモンの姿は、忘れることは出来なかった。

「・・・でも、あの人は、私たちを見逃してくれたよ・・・」

「あんなのは奴の気まぐれさ!!!　ヒカリちゃんも見ただろ？
たくさんのデジタマが壊された光景を!!!」

「でも、あの人はダークタワーを破壊してくれたかもしれないんだよ？」

ヒカリの言葉にみんなは黙ってしまった。
ダークタワーは大輔達の完全体デジモン3体の攻撃で破壊することのできたものだ。
そんなことがあの時出来そうな者はあの黒コートの男ぐらいしか心辺りがなかった。
成長期とはいえ、今までに数々の戦いを乗り越えてきたブイモン達を一撃で戦闘不能にしたのだから。

「・・・それは多分、その男じゃないわ・・・」

「・・・どういうことですか？」

「・・・私はあの男の攻撃を受けても、退化しなかった。
それはつまり奴が完全体クラスの力を持っていないことを意味するわ・・・。
つまり、奴はダークタワーを破壊することは出来ない。
・・・という事は・・・」

テイルモンはそこまで話すと、言葉を止めてしまった。

「・・・どうしたの、テイルモン？

ヒカリはそう言うとテイルモンは俯きながらも話出した。

「奴が完全体クラスの力を持っていないとすれば、
彼はピッドモン達を全滅させることは出来ない・・・」

テイルモン言った事は、太一たちを驚愕するには十分な威力を持っていた。

「・・・あそこには少なくとも三十を超えるデジタマがあった。

それを成熟期クラスの力しか持っていないあの男が全滅させることのできるはずがない・・・」

「で、でも、奴はキーブレードとかいう伝説の剣を持っていたじゃないか！　それを使えば・・・」

「・・・あの武器は、普通の相手に対してはただの折れない剣です・・・

さらに、奴が持っているのは闇のキーブレード・・・

天使族のピッドモンたちとは明らかに相性が悪すぎます・・・」

テイルモンの言葉にタケルが別の可能性をいい、それを光子郎が打ち砕いた。

「な、なら奴はどうしてあそこにいた！　・・・どうしてイガモンを殺したんだ・・・」

タケルが呟いた言葉に大輔達は誰も答えることができなかった。

第八話　新たな謎（後書き）

テントモンしゃべらしにくい・・・

第五話での展開にやっぱし後悔中・・・ヒカリが男を庇いすぎ・・・

第九話　再戦（前書き）

はじまりの街がどんなんか忘れてしまいました・・・

今回が初めてのまともな戦闘描写？

・・・遅すぎましたね・・・すいません・・・

第九話　再戦

「・・・これがはじまりの街だって言うのか・・・」

大輔は建物がグチャグチャになった、はじまりの街の入り口の様子を見てそう呟いた。

大輔たちは先程までパソコンルームであの男について話していたが、突然ゲンナイからのメールがあり、この前と同じ現象・・・あの男が現れた時と同じ、
何かに妨害されているせいでそこの場所の現状がわからない。
と、ゲンナイから言われ、大輔たちは自分たちで調査に行くと名乗りを上げたのだ。
そして実際に来てみると、先程言ったような状態になっていたのだ。

はじまりの街は普通、寿命を迎えたデジモン、死んだデジモンがの場合、たどり着き、
そして、新たな生命を誕生させる神聖な場所だ。
デジタマから孵ったデジモンは幼年期という。人間で言う、赤ちゃんの事だ。

ここにはそのようなデジモンがたくさんいる・・・
しかし、この子たちを守るデジモンは、エレキモンという成長期デジモンしかいない。
だが、はじまりの街には聖なる加護があり、悪の心を持ったデジモンは入ることはできないという、
常識があるから、普段はそれで構わないのだ。
しかし、この様子をみると、そんなことは信じれなくなってしまう

ほど、ボロボロになった、
はじまりの街の入口の看板を見つめながら大輔たちははじまりの街へと入っていった。

「・・・酷い・・・何でこんな事に・・・」

京は手で鼻と口を覆いながらそういった。

周りはこの前と同じようにデジタマが転がっていた。
今回は壊されたデジタマが数個しか見つからなかったが、酷い状態であることに変わりは無かった。

「・・・またあいつの仕業だ・・・」

タケルが震えた声でそう言うと、他の選ばれし子供達は、気を引き締め、奥へと歩き出した。

大輔たちは奥に行くほどボロボロになった街を進んで行き、そして、街の中心だったところにたどり着いた。
そして選ばれし子供たちはある光景を目にし、自分の心にある怒りが爆発的に膨れ上がった。

幼年期デジモンたちに囲まれ、泣きつかれているエレキモンの姿と・・・
目の前に闇の回路を開き、ここから去ろうと、こちらに背を向けている黒コートの男の姿だ。

「てめえええええええええええええ！！！」

大輔が今までに出したことがないぐらいの大声を出した。
しかし、子供たちは少しも大輔の方を向かず、黒コートの男を睨めつけていた。

男は大輔の大声が耳に入ったのか、こちらを振り返って、言ってきた。

「・・・うん？　俺に何か用か？」

男はめんどくさそうにそう反応すると子供たちはさらなる怒りを覚えた。

「お前・・・よくもこんなにひどいことを二回も・・・」

「・・・お前達には関係ないだろ」

「関係ないものか！」

伊織の言葉に彼は言い返してき、その言葉にタケルが反応すると、彼は、やれやれとため息を付きながら、言ってきた。

「関係ないだろ。別にここはお前たちのお前たちのものじゃあるまいし、
いちいちやることを文句を言われる筋合いはないな」

「だからって、お前がデジタマを壊していい理由になるわけ無いだろ！」

「だからお前たちと同じ事をしてるだけじゃないか～。
そうだろ？」

「お前と一緒にするな！」

タケルが男に対してそう返すと、男は笑うのをやめ、コチラに向けて、戦闘態勢を見せた。

「お前たちは、自分のやったことを認めずに、他のやつが同じ事をやると、
自分たちで裁くのか・・・おまえたちのように命を差別し、自分

たちを特別と思い、
罪を認めぬものを放おっておくわけにはいかない！
我が正義の名のもとに、お前たちに制裁を加えよう！！！

タケルは男の言葉を聞き、怒りが爆発しかけた。
男が言っていることは、どう見ても向こうが正義でこっちが悪の言い方だ。
しかも男もそれがわかっており、クックックと、笑うような言葉が聞こえてきた。

「お前がそんなことをいう資格なんてない！！！　行くぞパタモン！
絶対にアイツをここで倒して見せる！みんなは手を出さないでくれ！」

タケルはそう言うとデジヴァイスを握り、パタモンに向かって叫んだ。

「行くぞパタモン！」

「わかったよ。タケル！　パタモン進化！・・・

・・・エンジェモン！」

男は進化中も攻撃することなくただじっとタケルを見つめていた。

タケルはその様子に嫌気がさしながらも、進化しているパタモンの姿を見ていった。

「さ～て。これで負けても言い訳はできなくなったな～」

男はニヤニヤ笑いながらそう言うと、腕をエンジェモンに向け、かかってこいと言わんばかりに指をクイクイと動かしていた。

エンジェモンもその余裕な態度に不快を覚えたが、男が剣を出さずに丸腰でいたのでそのことを尋ねた。

「キーブレードを出さないのか？」

「いらないだろ。お前相手に」

男はからかうこともせずただ当然の事のようにそう言うと、タケルが男に対し言ってきた。

「お前こそ負けた時の言い訳をする気か！？」

「え？　いや、出したら即効で決着がついて、面白く無いだろ？」

男はさっきのように、からかうこともなく、

ただそれが常識だと言わんばかりの口調でそう言ってきた。

タケルとエンジェモンは、その態度が逆にからかわられるよりもカチンときた。

「でも確かに言い訳にされそうで嫌か・・・わかった。
お前達が俺に勝ったら、何でも一つ、質問に答えてやろう。
・・・例えば今デジタルワールドで起きようとしている事とか、・・・
お前たちの仲間に起きようとしている異変とかな・・・」

タケルは仲間の異変っと言ったあたりで一瞬思考が入ったが、すぐ戯言と無視し、
エンジェモンに向けて言った。

「いけ！　エンジェモン！」

「わかった！　行くぞ！　私たちは悪を認めはしない！」

エンジェモンはそう言うと男に向かって一直線に向かって飛んできた。

『ヘブンズナックル！』

エンジェモンは男との距離が１０メートルを切ったあたりでそう叫び、光で包まれた右手の拳を男に向かって付き出した。

男はそれを限界まで惹きつけ、当たる瞬間に相手の懐めがけてヒョイッと右に軽く避けた。

すると男は右手を付き出したエンジェモンからみて左側の懐にいとも簡単に入り込んだ。
完全に無防備なその体に男は右脇腹を右斜下からの右フックでおもいっきり突き刺した。

ただでさえ完全な無防備な体に、完全な人型系の弱点で有る脇腹を的確に、
更にエンジェモン自身が出せる、最高速度で突撃してきたので、その分、威力も激増する。
今までの戦いのように、ただ、体に向かって攻撃されるただの攻撃しか知らないエンジェモンの体は、
一点集中のたった一回の攻撃を受け、いとも簡単に崩れていった。

「！　エンジェモン！！！」

タケルはあまりの光景に目を疑った。
タケルの目にはただ男がエンジェモンの攻撃を避けたようにしか見えなかっただろう。

次の瞬間崩れていったエンジェモン・・・パタモンの姿をタケルは呼ぶことしか出来なかった。

第九話　再戦（後書き）

初めての?戦闘描写、とうでした?

エンジェモンは人に近い姿をしていたので、こんな攻撃をしたら効くかな~と思って書きました。

ちなみに家にあった、はじめの一歩（父の）を参考にしました！

・・・納得のいかない人はすいません・・・

こんな攻撃の仕方しか思いつき・・・書けませんでした・・・

出来れば今回の戦闘描写を感想にて、意見を出して欲しいんですが、出来ればで構いません・・・

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

第十話　敵対（前書き）

一人称めっちゃ難しいです・・・

これで合ってるかもわからないので、

間違っていたら指摘してください。

今回は少ない・・・・・です。

第十話　敵対

ｓｉｄｅ大輔

「どっちにしても速攻で終わったな」

黒コートの男がタケルに向かってそう言ってきた。
俺たちはその光景を信じれなかった。

相手は成熟期クラスの力しか持っていなく、更に闇の存在のはずだ。
闇との戦いなら格上だとしても戦うことができるはずのエンジェモンがたった一撃で倒されたのだ。
しかも男はキーブレードを使うことなく、素手で戦い、そして勝ったのだ。

俺たちが黒コートの男を見ていると、男がコチラの目線に気付いたのか、タケルから俺たちに視線を変えるとこっちに向かって言ってきた。

「残念だったな。こいつが俺に勝てばお前たちは真実を知ることが出来たのに・・・・・・」

「・・・・・貴方はデジタルワールドで起きている異変について何か知ってるんですか？」

光子郎さんが男に向かってそう尋ねた。

「さあ～どうだろうな？　俺は負けたら言ってやると言ったが、勝ったから言う必要はないな」

「最初から話すつもりはなかったんでしょ！」

「それは違う。俺は負けたらちゃんと話していただろう。
・・・・・俺は約束を破らないのを誇りとしているからな」

男が京の言ったことに対しそうはっきりと返すと男は続けて俺たちに言ってきた。

「それと・・・どうする？　お前たちも俺と殺り合うか？」

「・・・・・その前に私の私の質問に答えて」

ヒカリちゃんはそう言うと俺達よりも一歩前に出た。
その表情は何か迷っているような表情をしていた。

「・・・・・なんだ？　光の紋章に選ばれし子供よ？」

「私の名前は八神ヒカリ！　そんな名前じゃないわ！」

「分かった。分かった。光の紋章に選ばれた子供よ」

ヒカリちゃんの言葉にアイツはそう言うと、ヒカリちゃんは言っても無駄だと思ったのか、
呼び方を変えるのを諦め、一度俯いて、顔を上げると、男に向かって言った。

「あなたがこの前、ダークタワーを破壊したの？
・・・・・デジタマをあんなふうにしたのも貴方？」

「ダークタワー？　ああ。あの時、お前らと会った所の近くにあったやつか。
あれは俺じゃね～よ。そして後者の質問だが・・・・・俺が壊したが？」

男はヒカリの質問にそう答えた。するとヒカリは俯いてしまった。

ヒカリちゃんは俺達の中で唯一アイツを庇ってたからな・・・・・・
その事が間違いだと気付いてしまったのか・・・・・・
アイツは絶対に許さない！　ヒカリちゃんを悲しめさせやがって！

「・・・・・どうしてアナタはここに来たの？」

ヒカリが震えるような声でそう尋ねると、男は静かに言ってきた。

「理由は２つあるな・・・・・一つはお前たちに関係ないから言う必要はない、

もう一つは・・・・・・お前たちのせいだ」

「私たちの・・・せい？」

「ああ。俺の二つ目の目的はこの前破壊しかねたデジタマを回収すること・・・・・・。

そして回収が難しい場合は・・・・・・あのデジタマを破壊するよう計画している」

アイツが言ったことに対して俺たちは声も出なかった。

アイツは前、壊しそこねたデジタマをわざわざ壊すためにここまで来たと、俺たちに言ってきた。

俺たちアイツに対する怒りが膨れ上がった。

「・・・・・・この前、私たちを見逃してくれたのは・・・・・・」

「・・・・・・フン、そんなこと言わずとも、お前たちの中で答えは出てるのだろ？」

ヒカリの最後の男に対する敵じゃないという考えは、男がいとも簡単に打ち砕いた。

ヒカリは、タケルがこの前言ったことを思い出し、俯いてしまった。

「質問はこれで終わりか？　なら俺は帰っていいか？　目的も果たしたし・・・」

アイツはそう言うと、コートの中からデジタマを出して俺たちに見せてきた。
俺たちは、怒りの言葉をアイツに言おうとしたが、その前にヒカリがちゃん俯きながら、話しだした。

「・・・・・・貴方はこれからもこんな事を続けるの？」

「ああ」

ヒカリの言葉に男はあっさり答えると、場に数秒の沈黙が発生した。
しかし、ヒカリは俯けた顔を上げた。
そこには先程のように迷った顔はなく、大輔たちと同じように怒りの顔をしていた。

「・・・・・・もう、こんな事はさせない。貴方はここで私たちが倒す！」

「！！！　そうだヒカリちゃん！　これ以上の犠牲者を出ないようにアイツをここで倒すんだ！
みんな、行くぞ！」

俺がそう言うとみんなもそれに納得してくれ、各デジヴァイスを握った。

「みんな進化だ！」

太一さんがそう言うとみんなも頷き、進化を開始した。
男は動かず、ただじっとそこに立っていた。

「アグモン進化・・・・・・・

グレイモン！」

「テントモン進化・・・・・・・

カブテリモン！」

「ブイモン進化・・・・・・・

エクスブイモン！」

「ホークモン進化・・・・・・・

アクィラモン！」

「アルマジモン進化・・・・・・・

アンキロモン！」

各デジモンはそう叫ぶと光に包まれ、光が消えると、そこにそのデジモンの姿はなく、
別の姿をしたデジモンがいた。

「大輔達の言うとおり、これ以上お前の好きにさせるか！」

エクスブイモンがそう言うと他のデジモンも同意した。

「これでお前たちも言い訳は出来ないな・・・。さあ、第二ラウンドを始めようか？」

男は両手を胸ぐらいに上げながらそう言った。

第十話　敵対（後書き）

進化長い・・・しかし、今は仕方が無いんです・・・

感想や誤字があった場合、出来れば連絡をお願いします。

第十一話　新たな敵？

『メガフレイム！』

グレイモンは口を大きく開けながらそう叫ぶと、口の中から、巨大の火の玉が飛び出してきた。
火の玉は、男に向かって一直線で飛んで行った。が、
男は右にジャンプし、避けた。

「おいおい、いきなり怖いことをするな～」

男はそう言うと、グレイモンに向かって走っていった。

『メガブラスター！』『ブラストレーザー！』

男の耳にそう聞こえると、左右からカブテリモンとアクィラモンの空からの攻撃が飛んできた。

男は先程よりも速いスピードで走ることでそれを難なく避けた。

男がグレイモンの5メートル手前まで行くと、左からエクスブイモンが飛びかかってきた。

それをバックステップで避けた。

しかし、次に男の視界に映ったのは、こっちに向かって口を開けているグレイモンの姿だった。

『メガフレイム！』

男は空中に居たため、それを避けることは出来ず、直撃した。
ドゴォン！！！
辺りの砂が巻き上がりふんじんとなり、グレイモン達の視界をさえぎった。

「やった・・・・・・のか？」

大輔はそう言いながらも気を抜くことはしなかった。
しかし、心の奥底では終わったんじゃないか？という思考が飛び回っていた。
あいつは完全体じゃない。だからこれで終わりだ。
あいつはエンジェモンを一撃で倒した。だからまだ戦いは終わっていない。

２つの思考が大輔・・・大輔たちの思考でグルグルと回っていた。

・・・・・石が転がる音がした。ふんじんの中で。

視界が晴れていく・・・・・・

「おいおい。それはやってないフラグだぞ？」

そこから今一番聞きたくない奴の声が聞こえてきた。

「・・・・・さすがはエンジェモンを倒しただけはあるな・・・・・」

「それは褒め言葉と思っていいのかな？」

太一の言葉に男はそう答えた、男の姿が見えてきた。
さっきいた場所とほぼ変わらない場所にいた。

だがさっきと決定的に違う場所があった。
それはグレイモンの攻撃を止めたと思われる右手の手袋が敗れ、
機械でできた人型の腕があらわとなっていた

「コンビネーションだけは一人前だな。
俺に攻撃を当てるとは・・・・・だが、まだ足りないな・・・・・」

「・・・・・それは褒め言葉として受け取っていいんだな？」

「構わないよ」

太一は仕返しにさっき男が言ったことと同じ言葉を返した。
が、男はイラつく様子は全く見せなかった。
そして次の瞬間、消滅したはずの男の手袋が男の手に付けられていた。

「驚いたか？　このコートは特別製でな・・・・・・破れてもすぐに再生するんだよ。
しかも、このコートを着ている限り、体が汚れることは無いんだ。
まあ、防御力は無いんだけど」

「・・・・・お前、サイボーグ型デジモンなんだな？」

「お前たちがそう思うなら、そう思ってくれればいい。
それと俺に防御させた褒美に何か質問に答えてやろう。
答えてくない質問以外な。まあ、別に無視してくれて構わないが・・・・・・」

大輔たちはそんな物必要ない等と叫んでいたが、
太一と光子郎は二人で話をしだした。
そして、しばらくすると光子郎が男に向かって言ってきた。

「なら聞きます。・・・・・・今デジタルワールドで何が起きようとしているんですか？」

「言いたくない」

「・・・・・・貴方は何者なんですか？」

「言いたくない」

「・・・・・・貴方の目的は何なんですか？」

「言いたくない」

「テメェ！　言いたくないバッカじゃねーか！！！」

光子郎の質問に男がそう答え続けると、大輔が男に向かってそう叫んだ。

「仕方が無いだろ。言いたくないんだから。
・・・・・・お前ら二人も答えないとわかってて聞いてるだろ？
なら次で最後だ。次で答えられないことだったら質問タイムは終わりだ」

男がそう言うと、太一と光子郎は互いを見つめ合い、頷くと、
今度は太一が男に質問してきた。

「・・・・・・俺たちの仲間に起きようとしている異変て何だ！？」

「・・・・・・まあ、正解だな。俺にその質問をすることがお前らにとって
唯一プラスとなる質問だ」

大輔たちは太一と男の会話を遮らず、耳を澄ませていた。
大輔たちはすでに男に対しての怒りは爆発しそうだったが、
仲間の異変という言葉を聞いて黙っていた。

「お前たちの仲間の・・・・・・おっと、名前まで言う必要は無いか。
そいつの体の中にある暗黒の種子が咲こうとしている。
・・・・・・さあ、いったい誰のことを言ってるのかな?」

男がそう言うと大輔たちは驚いた。
さっきまでショックで膝をついていたタケルまでもが驚いていた。

「嘘つくんじゃねえ!!! 賢の暗黒の種子が咲くわけがねえ!
アイツは・・・・・・もう暗黒の種子なんかに負けたりはしねぇ!」

「・・・・・・暗黒の種子の効果が強まっていると言ったら?」

「どういう事だ!?」

「さあ、どうだろうな~。
・・・・・・もうすでに暗黒の種子の影響を受けて苦しんでるかもな?」

「貴方が言ってることが嘘だとしたら?」

「・・・・・さっきも言ったが、俺は嘘はつかない。
だが、お前たちが信じないと言うのならそれは仕方が無いことだ。
心当たりがある者も居ると思ったんだが・・・・・・」

男の言葉に大輔たちはハッとなった。

【・・・疼くんだ・・・僕の体にある暗黒の種が・・・奴が誰なのかわからないけど、
とにかく・・・疼くんだ・・・】

賢は確かにそう言っていた。大輔たちの記憶が今ハッキリと思い出された。

「そうだ・・・・・賢は言ってたじゃねぇか・・・・・・暗黒の種子が疼くって・・・・・・
！　おいお前！　賢は奴のせいで種子が疼く、って言ってた。
奴が誰か知ってるのか！？」

大輔は男に向かってそう叫んだ。
すると、今までどんな事をしても動揺しなかった男が
明らかに動揺した素振りを見せた。

「なんだと！？　奴のせいで種子が疼く、だと！？

・・・・・おい、それは本当にあいつが言ったのか？」

「こんなこと嘘言っても意味が無いだろ！
それでお前は知ってるんだな？
奴の事を！」

「・・・・・・・・・・・・そうだと言ったら？」

「今すぐお前を倒して、ボコボコにしてはかせる」

「・・・・・ああ。知っている。俺は奴のことを知っている」

「なら答えろ！　アイツが言ってる奴って誰なんだ！？」

「これぐらいなら、お前たちも知る権利はあるだろう・・・・・・
奴の名はミレニアモン。一乗寺賢に暗黒の種子を埋め込んだ張本人だ」

第十一話　新たな敵？（後書き）

やっと名前を出せました・・・

それと、賢が２０００年にデジタルワールドを冒険したことをアニメで大輔たちは知ってるんですか？

すいません・・・忘れてしまいました・・・

出来れば感想で教えてくださると嬉しいです。

あと評価も出来ればおねがいします。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

第十二話　逃走（前書き）

今回は短いです。すいません・・・・・・・

第十二話　逃走

「ミレニアモン・・・・・・・」

「・・・・・お前はミレニアモンについて何か知ってるのか？」

太一が呟くと、男は太一が何か心辺りがあるか聞いてきた。

「・・・・・ない・・・な。
俺はそんなデジモンの名前を聞いたことはない」

「・・・・・そうか。まあゲンナイですらそいつのデジモンについては
詳しい事は言えないほども存在だからな」

男が淡々と言った。

「「「ミレニアモン・・・・・・・」」」

「・・・・・お前らは何か知っているか？　選ばれし子供たちのパートナーデジモンたちよ」

デジモンたちが何か考えているような声でそう呟くと、男はデジモンたちにそう問うと、

デジモンたちの代表として、アグモンが言ってきた。

「わからない・・・・・・わからないんだ！
僕はその名前のデジモンを聞いたことがある、実際に合ったことがある気がするんだ・・・・・・」

グレイモンがそう言うとデジモン達も頭を抑えながらそう言った。

「・・・・・・そうか・・・・・・」

「・・・・・・それであなたはミレニアモンの事をどれだけ知ってるんですか？」

光子郎が男に向かってそう言うと、男はしばらく黙り、そしてハッキリと言ってきた。

「これ以上お前たちに言う必要は無いな。
俺がこの事を話したのは、簡単に言えば褒美みたいな物だ。
続きが聞きたければ俺を倒すんだな」

「もう、デジモン達に酷い事をしないって約束できないの？」

「出来ないな」

ヒカリの言葉に男がハッキリそう答えると、ヒカリはそう、と呟い

た。

「なら私はアタナを許さない！　お願いテイルモン！」

ヒカリと言葉にテイルモンは分かったと答えると男に向かってダッシュしてきた。
男もそれを見ると、テイルモンに向かってダッシュしてきた。

『メガブラスター！』

その行動に対してカブテリモンはとっさに反応し男に向かって必殺技を撃った。

しかしそれを男は無視し、そのままの速度で走っていた。

その行動にデジモンたちは驚いていた。
カブテリモンの攻撃を男がさっきと同じようにスピードを上げて避けると思っていたからだ。

カブテリモンの攻撃がかなり近づくと、男は軽く前にジャンプし、片足で着地した。
男のジャンプは本当に軽く、カブテリモンの攻撃を避けられないほどの距離だった。
しかも男は片足で着地したままで体を少し倒し、その場に停止していた。
デジモンたちは驚いたが、

どうせ攻撃が当たる瞬間に避けると思いその行動に何の疑問も持たなかった。
テイルモンは止まることなくダッシュしていた。

そして、カブテリモンの攻撃が当たる瞬間、男は消えた。
否、男はテイルモンのすぐ前に加速したスピードで現れた。

テイルモンは声を上げることも出来ず、そのまま顔に思いっきりパンチを食らった。

「うっ！」

テイルモンはそのまま今までダッシュしていた道に吹き飛んだ。

男は吹き飛んだテイルモンの方を見ていたアンキロモンの所へ行き、そのまま顔を殴った。

しかし、アンキロモンは吹き飛ばず、その場で倒れただけだった。

すると男は倒れたアンキロモンの裏に回りこんだ。
そしてアンキロモンが立ち上がり、そちらを振り向くと、そこに男の姿はなかった。

第十三話　わかり始めた現状（前書き）

宿題が残ってるため、更新ができないことがあります・・・・・・

すいません

第十三話　わかり始めた現状

「クソ！　何なんだよアイツ！」

大輔は叫んだ。
男が姿を消した後、大輔たちはしばらくは周りを警戒していたが、すぐに男がもういないということに気付くと、大輔たちはゲンナイにはじまりの街の復興を頼み、
パソコンルームに戻っていた。

「いろいろ挑発してきたくせに、途中で逃げるなんて許せねぇ！！！

「・・・・・うん。
アイツははじまりの街をあんなにも滅茶苦茶にしてたくさんのデジモンたちを・・・・・・」

「デジタマも取り返せなかったわ・・・・・・」

大輔、タケル、京はそれぞれ今回の男のやったことにそれぞれ頭にきていた。

「ごめん、大輔・・・・・・。俺がもっとしっかりしてたら・・・・・」

「何お前が謝ってるんだよ！　悪いのはぜーーーんぶアイツだ！」

「そうよ。だからホークモンもそんな顔しないで」

「・・・・・分かりました、京さん」

「・・・・・・皆さん」

光子郎がそう言うと、子供とデジモンたちは一斉に光子郎の方を向いた。

「皆さんがあの男を許せない気持ちは十分わかります・・・・・・ですが、
僕達が話し合う必要があるのはあの男についてではありません・・・・・今後についてです」

「・・・・・・アイツが言ってた、ミレニアモンの事か」

太一がそう言うと、光子郎は無言で頷いた。
しかし、そこに大輔が口を挟んだ。

「でも、太一さん。アイツが言ってたことが本当かは分からないですよね？
アイツは俺たちを混乱させるために嘘をついたんじゃないですか！？」

「・・・・・・なら、大輔は今デジタルワールドに何が起きているかと、
賢の暗黒の種子に何が起きているかアイツの代わりに言ってみろよ・・・・・・」

「そ、それは・・・・・・」

太一の言葉に大輔は何も言えなかった。

「・・・・・あいつが言ってたことは、全部、説得力があるんだ・・・・・・
ミレニアモンについても、賢についても・・・・・・・」

「僕もそう思います。
あの男が言ってたことは今までわからなかった事とほとんどつじつまが合うんです・・・・・・」

光子郎はここまで言うと一度、言葉を区切り、そして再び話しだした。

「まず、世界に起きている異変についてです。
あの異変はゲンナイさんでも全く分からないんです。
そして、ミレニアモンについても、ゲンナイさんは知らなかった・・・・・・。
つまり彼の言うとおり、ミレニアモンが現れたから異変が起きた。
しかし、ミレニアモンを知らないゲンナイさんは異変がなぜ起きているか分からない。
・・・・・これ以上にないぐらい、つじつまが合ってると思いませんか?

光子郎の言葉に誰も返すことは出来なかった。
大輔たちもあの男が嘘を言ってないということを理解した。

「そして一乗寺君についてです。
彼は奴という、謎の存在と、暗黒の種子が疼くというキーワードを僕達に教えてくれました。
そしてあの男が言った、ミレニアモンが一乗寺君に暗黒の種子を埋め込んだと言ってました。
・・・・・ここまで言えば、みなさんも理解できたでしょう」

「・・・・・あの人は嘘を言ってない・・・・・」

「正解です。伊織くん」

光子郎がそう言うと、光子郎と、太一を除く子供たちが俯いた。

「・・・・・あの人は、私たちと敵対してるはずなのに、
どうしてこんな重要なことを教えてくれたの?」

「・・・・・僕は彼が僕達に対して敵対していないんじゃないかなと思います」

「・・・・・そういうことですか? 光子郎さん」

「・・・・・それは簡単なことです。僕達が彼に対して、攻撃をしなければ、向こうも攻撃しないし、
こちらが話せば、向こうも話します。

これは敵対していたら絶対に不可能なことです・・・・・・」

タケルは光子郎の言葉に俯いてしまった。
タケルは理解したのだ。光子郎の言っていることは間違いではないと。

「・・・・・それでも、デジモンたちにあんなひどい事をするあの男を私は許せない・・・・・・」

「許す必要はありません。彼がやっていることは間違っていることなんですから。
・・・・・でも、彼が嘘をつかないと言うことは信用してもいいかもしれません。
それを確かめるためにも僕達は一乗寺君に合うべきです」

光子郎の提案に、大輔たちは頷いた。

第十四話　過去（前書き）

宿題のせいでなかなか上げれません・・・・・・・

すいません・・・・・・

後、評価ありがとうございます！お気に入り登録ありがとうございます！

見た途端、テーションが上がりましたｗ

第十四話　過去

「こんな時間にどうしたんですか？」

賢は半開きになっていた扉を開けながら大輔たちに向かってそう言ってきた。

大輔たちはあれから、賢の家に向かった。そして家の前のインターホンを押した。
するとそこから賢の母が出てきて賢を呼んで来てくれた。

「こんな時間にすいません。一つ直接聞きたいことがあって。
・・・・・・一乗寺くんは今日、学校を休んだそうですね？」

「はい。母さんが僕の顔を見て、今日は学校を休めっと言ったんです。
・・・・・・僕は元気なんですけどね」

「・・・・・・暗黒の種子が疼くんじゃないですか？

「ッ！！！」

光子郎がそう言うと、賢は驚き、光子郎の顔を見た。

「あの男が言ってました。一乗寺くんの暗黒の種子の力が強まって

いるって。
・・・・・・ミレニアモンのせいで」

「ミレニアモン!?」

「! 何か知ってるんですか!?」

光子郎がそう言うと、賢は顔を歪ませ、頭を右手で抑えながら言ってきた。

「分かりません・・・・・・でも、ミレニアモンの名前を聞いた瞬間、僕の心が反応したんです。
・・・・・・僕は知っています・・・・・・心が知ってるんだと思います。ミレニアモンの事を」

「ミレニアモン!?」

賢がそう言うと、賢の部屋からゆっくりこっちに来ていたワームモンが大きく反応した。

「ミレニアモンを知ってるの? ワームモン」

賢の問に答えることなく、ワームモンは顔を俯かせていた。

「・・・・・・何か知ってるんですね？」

「・・・・・・僕は知らない。ミレニアモンなんて知らない・・・・・・」

光子郎の質問にワームモンはそう答えると、背を向け、賢の部屋に向おうとしていた。

「・・・・・・ワームモンは知ってるんだね。ミレニアモンの事を」

賢がそう言うと、ワームモンは歩くのをやめ、背を向けたまま、その場に止まった。

「ワームモン！　僕は知りたいんだ！　なぜ僕がミレニアモンを知ってるかを！」

賢がそう言うと、ワームモンはゆっくりとこちらを振り向き、賢の方を見て、一瞬大輔達に目線を向けると賢に向かって言った。

「ごめん。賢ちゃん・・・・・・言えないんだ」

「どうして？」

「・・・・・・」

「ワームモン。僕はもう何を知っても大丈夫さ。僕にはこんなにもたくさんの仲間がいるんだ。
何を知っても怖くはないよ」

ワームモンはそれを聞くと再び俯いた。しかしすぐ顔を上げた。
その顔には先程のようなおどおどした顔はなかった。

「・・・・・賢ちゃんはミレニアモンと会ったことがあるよ。・・・・・戦ったことも」

「僕がミレニアモンと戦った!?」

ワームモンの言葉に賢だけではなく大輔たちも驚いた。

「どういうことだよ! 賢がミレニアモンと戦ったって!?」

「・・・・・言ったとおりだよ。大輔」

「・・・・・では何時、一乗寺くんはミレニアモンと戦ったんですか?」

「・・・・・・・２０００年の春休みだよ」

「・・・・・・・・２０００年と言えばディアボロモンが現れたとしですね・・・・・・」

光子郎はワームモンの言葉にそう呟いた。

ディアボロモンとは２０００年に現実世界のデータに突然出現したデジモンだ。
そいつはデータを食べることで成長し、
最後にはデータを使って、日本にロケットを撃った。
ディアボロモンは最後はオメガモンに止めを刺された。

これが光子郎たちが知る、２０００年の大きな出来事だ。

「２０００年に僕がミレニアモンと戦って、どうなったの？」

「賢ちゃんはミレニアモンを倒したんだよ」

「倒したってどういう事だ！？　ミレニアモンは聞いた話では究極体クラス！
そいつを賢とワームモンだけで倒したなんて・・・・・・」

「・・・・・僕達だけじゃないよ・・・・・僕達以外にも人間とデジモンは居たんだ」

太一の言葉にワームモンは顔を少し下に向けながらそう言った。

「・・・・・・一乗寺くん以外の人間とは！？」

「・・・・・・3人いたのは覚えてるんだ。

・・・・・でも2人の顔も名前も何故か全然思い出せないんだ！
一緒に戦った仲間なのに・・・・・・」

「・・・・・・2人のことが思い出せないということは、1人は覚えてるということですね？」

光子郎の言葉にワームモンは頷くと、顔を上げて言った。

「その人の名前はリョウ。秋山遼って言う名前だよ」

ワームモンの言葉に賢は頭を抑え、
大輔たちは大声を上げて驚いた。

第十四話　過去（後書き）

ゲームを知ってる人はいませんと思いますが、原作改変しています。

第十五話　進展

「秋山リョウって・・・・・・まさかあいつが・・・・・・」

「！　大輔たちはリョウのことを知ってるの!?」

「・・・・・ああ。そいつはこの前、俺とタケルとヒカリちゃんのクラスに転校してきたんだ・・・・・・」

大輔がそう言うとワームモンは驚いた。
しかし、大輔たちも先ほどのワームモンの言葉にとても驚いていた。

「・・・・・ということは、あいつの放課後の用事って・・・・・・」

「ほぼ確率にデジタルワールドでしょう」

大輔の言葉を光子郎が途中で遮ると、持っていたパソコンの電源をつけ、
カタカタと音をたてながら言った。

「・・・・・どうやら彼には僕とゲンナイさん以上のコンピュータ能力を持っている、
またはそれができる仲間がいると考えて間違いなさそうです」

光子郎はそう言うと、パソコンを打つ音が数秒止まり、そしてまた聞こえ出した。

「・・・・・すいません。僕が前、彼はデジタルワールドに行ってはいないと言い切らなければ
もっと早くに秋山くんのことに気づいたかもしれません・・・・・・」

「お前が気付けない相手に俺たちが気が付く事なんて出来なかったはずだ。
だからそんなに気を落とすな！」

「・・・・・・はい」

光子郎は太一の言葉に頷き、パソコンの画面を閉じて、秋山遼について話し始めた。

「おはよう。本宮！」

「・・・・・ああ。おはよう」

大輔が教室に入るとそこにはリョウがすでに座っていた。
リョウは大輔に挨拶をすると、再び手に持っている本を読み始めた。

大輔がその場で動かずに立ってると後ろからタケルとヒカリが歩み寄ってきていた。
二人の真剣な顔を見ると大輔は昨日の知ったことを直接リョウに聞くという事を思い出し、
戸惑いながらもリョウに話しかけた。

「・・・・・な、なあ。秋山」

大輔がそう言うとリョウは顔を上げて、大輔の目を見た。

「なんだい？」

「・・・・・今日の放課後、パソコンルームに来て欲しいんだけど・・・・・・」

大輔がリョウにそう言うと、リョウは少しくらい顔になり、
大輔に言った。

「・・・・・悪いけど、放課後は用事があってさ～、悪いな！」

「用事ってデジタルワールドの事でしょ？」

リョウの言葉にタケルが後ろから話しかけた。

「・・・・・・どうしてそう思うんだい？」

「最近デジタルワールドに起きている異変を調べているんでしょ？」

「・・・・・・質問に答えて欲しいんだけど・・・・・・」

「ミレニアモンが原因なんでしょ？」

タケルの言葉にリョウは目を見開いて驚いた。
リョウはすぐに元の爽やかな笑顔に戻ったが、リョウがタケルに言った。

「・・・・・どうしてそれを知ってるんだい？」

「黒いコートを着たデジモンが言ってたんです」

ヒカリが男にそういうと、リョウは先程よりも目を見開いて驚き、小さく呟いたが

大輔たちには聞こえなかった。

「・・・・・あいつがその事を君たちに話すなんてな・・・・・・
一度、君たちと話す必要があるみたいだな・・・・・・
分かった。今日の放課後、君たちに付いて行くことにするよ」

リョウがそう言うと、大輔たちは喜びの声を上げたが、周りのクラスメートに一斉に見つめられ、
小さくなりながら自分の席へ戻っていった。

第十五話　進展（後書き）

リョウの話し方おかしいかもしれません・・・

ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

何か伝えたいことがある場合は感想で、
この小説が気に入ってもらえた場合は評価をお願いします！

第十六話　選ばれし子供集合（前書き）

更新できなくてすいません。

学校の宿題をしていたら全然更新できませんでした・・・・・・

これからは最低2日に1回は更新できるよう、頑張ります！

そして気づいたらユニークが１０００突破！！！

そして評価がＵＰ！！！

こんなダメ文の小説を読んでくれて、評価してくれてありがとう！

これからも頑張っていきたいと思います！

第十六話　選ばれし子供集合

「あなたが秋山くんですね？」

大輔たちは学校が終わるとリョウを連れてパソコンルームへ行った。
ドアを開けるとそこにはまだ誰も着ていなかったが、しばらくすると光子郎が来た。
光子郎の視界にリョウが映ると光子郎はリョウにそう質問した。

「・・・・・・そうですが・・・・・・」

リョウは光子郎の質問に少しだけ俯いてそう答えた。

「そうですか。僕は泉光子郎と言います」

光子郎がそう言って挨拶すると、周りを見回して今来ている人数を確認するとリョウに言った。

「あなたの話についてですが、全員が揃ってからでも構いませんか？」

「・・・・・・別に構いませんよ」

「ありがとうございます。
あと、大輔君。すいませんがゲートを開けてもらえませんか？
ここのゲートの先でデジモンたちが待機しているので・・・・・・」

「分かりました！」

大輔はそう言うと部屋にあるパソコンの前に立ち、Ｄ３をかざした。
するとそこからパルモンを除く選ばれし子供たちのパートナーデジモンが飛び出してきた。
その中でワームモンはリョウの姿を確認すると、
大きな声を上げてリョウに向かって飛びついた。

「リョウ～！！！」

「！　ワームモンか・・・・・・」

リョウはそう言うと飛びついてきたワームモンを受け止めた。

「・・・・・彼らに俺のことを話したのは君かい？　ワームモン？」

「ごめん・・・・・・」

ワームモンがそう言って顔を俯かせるとリョウはため息を付いて言

った。

「ワームモンが秘密を話すって事はそれほどの事が起きているって事だろ？
　なら仕方ないさ・・・・・・」

リョウはそう言うとワームモンを床に降ろして言った。

「此処から先に質問はみんなが来てからでいいか？」

「・・・・・・わかった」

ワームモンがそう言うとリョウはワームモンの頭を撫でると、窓側の方へ歩いて行き、
窓の前から空を見上げだした。
光子郎はその行動をただの時間つぶしと理解すると、
デジモンたちと会話をして全員が揃うのを待った。

「・・・・・さて、後は一乗寺君だけですが・・・・・・」

光子郎がそう言っている途中に、部屋の扉が開いた。
そこには少し息を切らした賢が居た。
そしてリョウのことを見つけると右手で頭を抑えだした。
そしてしばらくすると賢は頭を抑えながらリョウに話しかけてきた。

「リョウ・・・・・・さん？」

「・・・・・ああ。久しぶりだな、賢」

リョウがそう言うと、賢は目元にたまっていた涙を袖で拭いていた。
するとリョウが言った。

「思い出したのか？　賢？」

「・・・・・少しだけですが思い出しました」

「そうか・・・・・なら全員揃ったみたいだから、そろそろ質問タイムを始めましょうか？」

リョウはそう言いながら周りを見渡した。
周りには太一、ヤマト、光子郎、空、ジョウ、大輔、賢、タケル、ヒカリ、京、伊織が居て、

その足元や腕の中にはパートナーデジモンがいる。

「・・・・・そうですね。今から秋山くんに質問します。
みなさんもそれでよろしいですね？」

光子郎がそう言うと、太一たちは頷いた。

第十六話　選ばれし子供集合（後書き）

集合って言っておきながら、ミミは登場していません・・・・・・・

アメリカ?にいるので、なかなか登場させづらいです・・・・・・・

第十七話　秋山遼（前書き）

私の小説は他のと比べて圧倒的に戦闘が少ないですね・・・・・・・

でも中盤になれば戦闘が増える・・・・・・はずです。

評価ありがとうございます！

これからも頑張っていきたいと思います。

第十七話　秋山遼

ｓｉｄｅ光子郎

「初めに訪ねます・・・・・・あなたは何者ですか？」

放課後からそんなに時間が経っていないパソコンルームで僕は秋山君にそう尋ねた。

秋山くんはその質問にう～ん、とアゴに手をつけながら言ってきた。

「俺は秋山リョウ。選ばれし子供で、２０００年に賢とデジタルワールドを旅した、賢の友達さ！
・・・・・・それ以外は何を言えばいいのか・・・・・・」

秋山くんはそう言うと一条寺くんの方を向き、言った。

「賢はどれくらい俺の事を思い出したんだい？
・・・・・・それとワームモンは俺のことをどれくらい覚えているんだ？」

秋山くんの問に一条寺くんは俯き、そして言った。

「・・・・・すいません。僕はリョウさんの名前くらいしか思い出せません。
・・・・・でも、僕の心がリョウさんを覚えているみたいです。だから僕は記憶がなくてもリョウさんの事を友達だと分かるんです！」

「・・・・・なるほど。心が覚えているか・・・・・・・・・・・・・・・・それでワームモンはどうなんだ？」

「僕がしってるのは僕達と賢を合わせた４人でミレニアモンを倒したことだけさ・・・・・・」

一条寺くんとワームモンの言葉を聞くと、秋山くんはうでを組み、目を閉じて何かを考え始めた。
しばらくすると目を開いて言った。

「・・・・・大体わかったよ。でも一つ間違ってるよ。
ミレニアモンを倒した選ばれし子供は全部で５人だ。
・・・・・それで皆さんは他に質問はありますか？」

秋山くんがそう言うと、太一さんが尋ねた。

「・・・・・賢と秋山以外のミレニアモンを倒した選ばれし子供を教えてくれ」

太一さんがそう言うと秋山くんは俯いて言った。

「・・・・・・すいませんがそれは言えません」

「なぜだ?」

「・・・・・・それは僕がその子を巻き込みたくないからです」

秋山くんは頭を上げてハッキリとそう言うと太一さんは疑問を持った顔でまた尋ねた。

「巻き込みたくないってどういうことだ?」

太一さんがそう言うと秋山くんは目線を下に向けて言った。

「・・・・・・その子は俺達のことを何も覚えていないからです。デジタルワールドで一緒に旅をしたことも、一緒に笑ったことも、・・・・・・戦い方も・・・・・・」

秋山くんがそう言うと、太一さんは悪いことを聞いてしまった、と言う顔をして、
流れを変えるためか、それともただ気になったのか、また秋山くんに尋ねた。

「その子ってことは他の子供たちはどうなんだ!?
ほら!　賢たちと合わせて5人いたんだろ?　そいつらの事は・・・・・・

「・・・・・その子達はもうこの世にはいません・・・・・・」

太一さんの言葉を遮るように秋山くんはそう言った。

「・・・・・・悪い」

太一さんが暗い顔をしてそう謝ると秋山くんが言ってきた。

「・・・・・別にかまいませんよ。・・・・・知らなかったわけですから・・・・・・
・・・・・それで他に質問はありませんか?」

秋山くんはそう言って周りを見渡したが、大輔くんたちはさっきの話しで重くなったこの空気で
発言するのが難しいのか、黙ったままだった。
しかしその空気の中、タケルくんは秋山くんに尋ねた。

「・・・・・その子達は殺されたの?」

「！　タケル！　そんな事は聞いたらダメだろうが！」

大輔くんが大声でタケルくんに言うと、タケルくんもそれが分かっていたのか、顔を俯けた。

「・・・・・・別に構わないよ」

秋山くんがそう言うと、大輔くんが気まずそうな顔をして言った。

「・・・・・・いいのか？」

「いいよ。
君たちが選ばれし子供としてその子達の事が気になるのは当然の事なんだし・・・・・・」

秋山くんはそう言うと窓の方に向かって行った。
窓から見える景色はすでに赤くなっていた。

「それで質問はそいつらが殺されたのかって言う質問だったな・・・・
一人は殺されて、・・・・・・もう一人は濁流に巻き込まれて死んだよ・・・・・・」

秋山くんが悲しそうな顔をしてそう言うと、
尋ねた本人であるタケルくんが謝った。

そしてその後話しの本題であるミレニアモンのことを僕が秋山くんに尋ねた。

「・・・・・ミレニアモンは先輩たちが知ってるように賢に暗黒の種子を埋め込んだ張本人です。
それで今デジタルワールドで起きている大半の異変はミレニアモンのせいで起きています」

「それで秋山は何時も放課後にデジタルワールドを調査していたのか・・・・・・・」

「まあ、大体そうだよ。本宮達もデジタルワールドを調査していたんだろ?」

「そうだけど・・・・・・そうだ!
なんで秋山は一人でデジタルワールドを一人で調査していたんだ?
同じ選ばれし子供なんだから一緒に調査したほうが効率はいいだろ?」

大輔くんの質問に秋山くんは言いにくそうに言った。

「・・・・・・それは君たちを巻き込みたくなかったんだよ」

「・・・・・・どういう事だ?」

ヤマトさんがそう尋ねると秋山くんが真剣な顔で言ってきた。

「・・・・・今、デジタルワールドで起きようとしていることは先輩たちや本宮たちが戦った時よりも遥かに危険な戦いになるからです。

・・・・・そんな戦いに一体で完全体にもなれない人がいても危険なだけです。

・・・・・最悪、命を落とします」

僕達はその言葉に言い返すことは出来なかった。

秋山くんが言うとおり僕達は完全体にすら一体でなれないのだ。

それに僕達はたった一体のデジモンに二度も敗北しているのだ。

二回目の戦いもあのまま続いていたらおそらく負けていただろうと僕は思う。

「でも、秋山だって一人じゃ危険だろ!?」

「俺は大丈夫さ！　俺にも仲間はいるし」

秋山くんはそう言うとこの部屋の扉の方へ歩いって言った。

「どこに行くんだ!?」

「もう俺から言えそうなことはないのから帰るよ。

俺のパートナーデジモンもお腹を空かしているだろうし・・・・・・
」

秋山くんはそう言って扉を開いてこの部屋から出ようとしていた。

「待って！」

その時ヒカリさんがそう言って秋山くんを呼び止めた。
秋山くんはその声のしたほう・・・・・ヒカリさんの方を向いて
立ち止まって言った。

「・・・・・・なんだい？」

「あなたは黒いコートを着たデジモンの事を知ってる？」

「・・・・・・・・・・・・知らないな。そんなデジモンは」

秋山くんは前を向いてそう言うと、この部屋を出ていった。

第十七話　秋山遼（後書き）

ジョウを話させることが出来なかったよｏｒｚ

なかなか登場しないキャラなのに・・・・・・

デジモンたちも空気すぎ・・・・・・

第十八話　黒コート（前書き）

ＰＶ１００００突破！！！
評価ＵＰ！！！

皆さん私の小説を見て下さり、ありがとうございます！

これからも頑張っていきたいと思います！

第十八話　黒コート

ｓｉｄｅ太一

「・・・・・僕達はこれからどうします？」

秋山が帰ってからしばらくした後、光子郎がそう言った。

「これからとは？」

伊織がそう尋ねると光子郎が答えた。

「これからの僕達の行動についてですよ。
秋山くんが言ったように僕達じゃミレニアモンには勝てません。
・・・・・いや、その配下にも勝てないでしょう・・・・・」

「そんなことはないですよ！　俺たちはジョグレスで完全体になれるし、
アグモンたちも抜群のコンビネーションがあるじゃないですか！
だから俺たち全員で戦えばどんなデジモンだって・・・・・・

「だが僕達は黒いコートのデジモンに二度も負けました」

大輔の言葉を遮るように光子郎がそう言った。

光子郎の言うとおり俺たちはアイツに二度も負けている。
そんな俺達じゃ秋山の邪魔になるだけだろう・・・・・・

「あいつは進化中に攻撃されて負けただけです！
二回目だって、俺たちはまだ負けてなかったですし！」

光子郎の言葉を大輔は必死に否定していた。

無理も無いな。大輔たちは今まで前線でデジモンたちと戦っていたのに
急に戦闘メンバーから外されたようなものだ。
・・・・・・俺たちが去年の戦いで味わった世代交代みたいなものだろう・・・・・・
あの時はどうして俺たちは何も出来ないんだっと悔やんでばかりだった。

「・・・・・・大輔くんはそのデジモンが卑怯なことをしたから負けた。
と、思っているのかい？」

光子郎に必死に抗議する大輔の姿を見かねたのか、
ジョウが大輔にそう言った。

「はい！　あいつはブイモンたちが進化中に攻撃してきました。
こんなの絶対に卑怯じゃないですか！」

ジョウの問に大輔は先程まで光子郎に言っていたことと同じ事を言って、
質問を返した。

「でも僕達はもっと卑怯なことをしているよ」

「えっ！？」

「だってそうだろ？　僕達は今まで全員で戦うっていう手段で戦っていただろ？
それはつまり大勢で少数のデジモンと戦っていたということだよ。
酷いときはたった一体のデジモンに対してもこれをしたこともある。
これは卑怯とは言えないかい？」

ジョウの言葉に大輔は黙ってしまった。

ジョウの言うとおり俺たちは今までそういう戦いを当たり前で行っていた。
巨大なデジモンならまだしも人型のデジモンにも俺たちはそうして戦っていた。
そんな俺達がアイツの行動を卑怯という資格はないだろう。

「全員で戦うのを僕は卑怯だと言われても僕は仕方が無いと思う。
でも進化中に攻撃は僕は卑怯だとは思わない。

「！　どうしてですか！？」

「じゃあ聞くけど大輔くんは進化中に攻撃してはいけないなんてどうして思うんだい？」

「だって、進化中はブイモンたちは動けないんですよ！
こんな時に攻撃だなんてやっぱり卑怯ですよ！」

「なら大輔くんは
ダメージを受けてボロボロになっている相手に攻撃するのは卑怯だと思うかい？」

「それは・・・・・」

大輔はジョウの言葉に何も言い返せなかった。

「卑怯とは言わないだろ？
だってそれは僕達にとっては攻撃を当てるためのチャンスなんだから。
今までだってそういう時は大体全員の一斉攻撃でそのデジモンを攻撃してきたんだから。
進化中の攻撃だってそれと同じさ！
相手にとっては数で負けているんだからそういうチャンスは普通

見逃してはいけないんだよ」

「で、でも、進化中に攻撃なんて俺たち今まで・・・・・・

「・・・・・彼は本当に僕達のことをよく知っていますね・・・・・・」

大輔の言葉を光子郎が突然さえぎってきた。
俺は光子郎の言ったことの意味がわからなかった。
それは大輔も同じようで光子郎に今言ったことの意味を尋ねた。

「・・・・・・それはどういう意味ですか光子郎さん?」

「・・・・・・彼…いや黒コートの男と初めて会った時のことを覚えていますか?

光子郎がそう言うと子供たちの何人かは俯いた。
無理も無いだろう。目の前でイガモンが殺された時のことを思い出したんだろう。

「・・・・・・覚えてますが?」

「なら彼がその時に僕達に対して言った言葉は覚えていますか?」

大輔はそう言われると目を閉じて腕を組んで考えだした。
しかしすぐに目を開けると思い出せないと言わんばかりに頭をかき始めた。

俺も考えたが思い出せなかった。

光子郎は大輔が思い出せないとわかると再び口を開いて話しだした。

「お前たちはぬるい戦いしかしたことがないのか・・・・・・という事を言ってました」

大輔はそれを聞くとカチンときたのか、
先程よりも大きな声で男を馬鹿にするようなことを言い始めたが俺がそれを止めると、
光子郎が続きを話し始めた。

「彼の言ったように僕達は本当の戦いなんてした事はほとんど無いのかもしれません・・・・・・」

「・・・・・・どういうことだ、光子郎?」

「・・・・・・僕達はいつも敵の前で進化をしていました。
しかしそれを止められたことはディアボロモンを除けば一度もありません・・・・・・
・・・・・・僕達はそれが当たり前と思っていました。
これを温いと言わずになんと言いますか?」

光子郎の言葉に俺たちは何も言えなかった。
あいつの言うとおり俺たちは
今まで進化中は攻撃されない環境でしか戦ったことがなかったのだ。
俺たちはそれからまもなく学校の下校時間になりそうだったので急いで学校を出た。

ｓｉｄｅｏｕｔ

真っ暗な世界・・・・・・周りが見えないという暗さではなく、ただ空が真っ黒な世界。
そこにはたくさんの真っ黒のうずが縦横無尽にあり、
そのうず同士の距離は大体１００メートルほどあった。
地面は真っ白で、デコボコが全くなかった。

そんな何もない世界で、２つの影が見つめ合っていた。

一つは全身黒ずくめで地面に届きそうなほど長い腕を持ち、羽のようなものを生やしており、
目元は鋭く、赤色の目を持ったデジモン。
その姿は堕天使と呼ぶのににふさわしい姿をしていた。

もう一つの影は真っ黒のコートを着ており、頭はフードを被っているため顔は見えなかった。

「・・・・・お前は何者だ？」

堕天使のデジモンがコートの者にそう尋ねた。

「？　俺か？　俺は・・・・・・」

黒コートの男はそう言うと被っていたフードをおろした。
フードを取ると、今まで無理やり入れてたのか、男の髪の毛が勢い良く飛び出してきた。

堕天使のデジモンは男の姿を見て驚きの声を上げた。
ここにいる筈のない顔をした者がそこにいたからだ。

「な…なぜお前がここにいる！？」

「？　・・・・・・！　ああ、多分お前は勘違いしているぜ。
俺はお前が知ってる奴とは別人だぜ。デビモン」

男はそう言うとデビモンは信じられないのかそれを不定してきた。

「フン・・・・・騙されるものか・・・・・・お前の顔は私は忘れたりはせぬぞ！選ばれし子供よ」

「まあ、確かに俺は選ばれし子供だけど・・・・・・」

デビモンの言葉に男は否定は出来ないのか、頭をかきながらそう言った。

「何か腑に落ちない所があるがまあいい。
お前はここで消えてもらおう！　我が新しい力で！」

デビモンはそう言うと全身を光に包まれた。
しかしすぐにその光は消えて、中からは顔面を覆うマスクをつけ、体は先程と変わって白に近い色になっており、
その姿はどこか改造したらしき後が所々に見られた。

「ふはははは！　これが私の新たな姿・・・ネオデビモンだ！」

「・・・・・俺はお前がその姿になったことの方が気になるぞ・・

・・・・」

男は先程よりも真剣な表情になっており
その目は過去に同じものを見たことがあるような表情をしていた。

「なぜオマエがデジモンを連れて無いかは知らないが、
せめて一思いに殺してやろう・・・・・・」

ネオデビモンはそう言うと、羽をバサっと広げ男に向かって飛行してきた。

「死ね！　『スタンクロウ！！』」

そう言うとネオデビモンの手が雷に包まれ男に向かって来た。

「行け・・・・・・――――！！！」

男がそう言うと空からすごい勢いでデジモンがデビモンに向かって急降下してきた。
その速さはデビモンよりも比べ物にならないスピードだった。

デビモンはそれに気付かず、男に向かって真っ直ぐ飛んでいるだけだった。

『ブイブレスアロー！！』

そのデジモンの口からデビモンに向かって、矢印に近い姿をしたブレスが撃たれた。

「！？　な…！？」

デビモンにそれを避けることは叶わず、デビモンは上下真っ二つにわかれた。

「ぐぁぁ・・・・・・な、何なんだ…そのデジモンは…」

デビモンもさすがと言うべきか、真っ二つになった後もしばらく生きがあった。

「お、お前たちは何、者だ・・・・・・」

デビモンがそう言うと男はニカっと微笑み、そしてデジモンと共に言った。

「俺たちは・・・・・・」

「僕たちは・・・・・・」

「「勝率１００％テイマーだぜ！！」

第十八話　黒コート（後書き）

自分の小説を見直したら、戦闘数があまりにも少ないことに気が付きました。

これからはできるだけ増やしていきたいと思います。

今回は他にも黒コートを着たものがいると知ってもらうための演出を入れました。

最後に謎のテイマーが出現！

奴の招待は・・・・・・！？

感想、または評価をお願いします！

第十九話　絶体絶命？（前書き）

やっと頭のなかにある展開の一つを書くことができました・・・

第十九話　絶体絶命？

「今日は秋山は家の用事で欠席だ」

大輔たちの担任の先生がそう言うと大輔は隣のリョウの席を見た。

昨日の話し合いから翌日のことなので大輔はリョウの欠席に疑問を持ったがすぐに
その疑問は消えた。

「なるほど・・・・・・今日は秋山くんが欠席ですか・・・・・・」

大輔たちからリョウの欠席の話を聞くと、光子郎と太一は考えこんだ。

「・・・・・・どう思う、光子郎？」

「・・・・・・おそらく家の用事というのは嘘ですね。彼は多分デジタルワールドにいます」

「デジタルワールドにって、別に学校が終わってからでもいいんじゃないですか？」

「・・・・・・多分デジタルワールドに異変が起きているんですよ」

大輔の疑問に光子郎が答えると光子郎を除く子供たちが驚きの声を上げた。

「それはどういうことですか！　先輩！」

「・・・・・先程からゲンナイさんと連絡が取れないんですよ・・・・・」

京の問に光子郎がそう答えると大輔が一歩前に踏み出して言った。

「俺たちも行こう！　デジタルワールドへ！」

大輔の言葉に子供たちは頷いた。

「そうだな。俺たちは選ばれし子供なんだ！
デジタルワールドに危機が迫ってるなら行かなきゃな！」

太一の言葉に大輔は少しだけ言いにくそうに言った。

「太一さんはデジタルワールドに行ってばかりでいいんですか？
今年はサッカーの推薦を狙うって言ってたじゃないですか！」

大輔の言葉に太一は一瞬だけポカンとなったが、すぐに笑いながら言ってきた。

「そういえば言ってなかったな！
実は俺、もう推薦されてるんだよ」

「！　ほ、本当ですか！？」

「本当だ。それでその推薦してくれた学校の監督は
１９９９年のヴァンデモンの事件の時に助けた人でな・・・・・・
事情を話したら、最悪、今年の夏の大会には出なくても推薦して
やるって言われてな。
・・・・・でも、進学後少しでも怠けたプレーや、
実力が劣ってるとわかればすぐ取り消すって言われたがな・・・・
・・」

太一がそう言うと、大輔はそうなんですか、と本当に安心した顔を
見せた。

「だから俺のことは気にしないで大丈夫だ！」

太一は大輔の髪の毛をクシャクシャにしながらそう言った。

「八神先輩がそういう事なら大丈夫ね！
じゃあデジタルワールドに行きましょう！」

京の言葉にここにいる太一、光子郎、大輔、伊織、タケル、ヒカリ
が頷いた。

ｓｉｄｅ大輔

「太一～大変だよ！」

デジタルワールドに着くとそこにはアグモン達が居た。

「どうしたんだ！　アグモン！」

アグモンの言葉に太一さんがそう言うと、アグモンが慌てながら言

った。

「さっきから向こうですごい爆発が見えるんだ！」

アグモンはそう言うとその爆発が起きているらしい方向に指を向けた。

俺たちはその先を見たが爆発なんて起きていなかった。
だがその場所のすぐ近くにある物をみて俺たちは驚いた。

「だ…ダークタワー・・・・・・」

伊織がそう呟くと俺達もそれぞれ声を上げたが、その時その近くで大きな爆発が見えた。

「！　確かに爆発が起きているらしいですね・・・・・・どうしますか？」

光子郎さんはそう言うと太一さんの顔を見た。
でも光子郎さんは太一さんがなんて言うか分かっているような表情をしていた。

「決まってるだろ・・・・・・みんな行くぞ！」

太一さんの言葉に俺たちは頷いた。

あれから俺たちはそれぞれのデジモンをアーマー進化させて、
爆発が起きている場所に行くため、森の中を移動していた。
ブイモンはライドラモン。ホークモンはホルスモン。アルマジモン

はディグモン。
パタモンはペガスモン。テイルモンはネフェルティモンになって、太一さんたちはライドラモンに乗って移動していた。
ある程度爆発が起きていた場所に近づくとあるデジモンが空にいるのを確認できた。

「あれはメガドラモン！」

光子郎さんがそう言うと続けて太一さんが言った。

「……完全体か」

太一さんの言葉に俺たちは少しだけ驚いたが光子郎さんが何かを考えているのに気づいた。

「どうしたんですか？　光子郎さん？」

「・・・・・メガドラモンの様子がおかしいんですよ。
あの動きはただ周りを攻撃しているわけではありません。
・・・・・おそらくメガドラモンは今誰かと戦っているのでしょう」

「・・・・・・秋山くんですか？」

タケルの質問に光子郎さんはわかりませんと言うと、俺たちに向かって言った。

「誰が戦っているか分かりませんが、とりあえず急ぎましょう！
ここから見る限り、そのデジモンはメガドラモンに押されています」

光子郎さんの言葉に俺たちは頷きライドラモンたちは更にスピードを上げた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

そして森を抜けると大輔たちの目にメガドラモンと戦っているデジモンの姿が目に入った。

「なんでお前がメガドラモンと戦っているんだよ!!!」

それは大声でそのデジモン・・・黒コートの男に向かって叫ぶと、メガドラモンの攻撃を避けながら男がこちらを見て、驚いているような様子を見せた。

「！　なんでお前らがここにいるんだよ・・・・・・」

「お前こそどうしてここに!?」

今度はタケルが男に向かって叫ぶとメガドラモンがこっちに気づいたのか、
こっちに向かって飛んできていた。

「！　みんなさんデジモンから降りてください!」

光子郎の言葉に大輔たちはすぐにデジモンから降りた。

するとライドラモンたちがこっちに飛んできているメガドラモンに向かって飛んだ。

『ブルーサンダー！！』

ライドラモンはそう叫ぶと頭の角に電気が集まり、そしてメガドラモンに向かって放たれた。
しかし、
メガドラモンがいる場所はかなりの上空のため攻撃が当たる前に消滅してしまった。

「私に任せてください！『レッドサン！！』」

ホルスモンがそう言うと、目から赤い光線が放たれた。
その攻撃は確かにメガドラモンに当たったが、効いている様子はなかった。

「・・・・・お前たちじゃ勝てねぇよ。お前らはさっさとここから離れるんだな。
戦いの邪魔だ！」

大輔たちが声をした方を見るとそこには黒コートの男がいた。
男はそう言いながらもこちらに近づいていた。

「誰がお前の言うことなんて聞くかよ！」

大輔がそう言うと、光子郎が横から言った。

「・・・・・どうしてですか？」

「！　光子郎さん！　こいつの言ってることなんていちいち気にしちゃダメですよ！」

「大輔！　今はそんな事を言ってる暇はないだろう！
こいつの言うことも一理ある。なぜならあいつは完全体だからな」

太一の言葉に大輔は黙った。
太一は男に対して自分の意見を言った。

「確かに勝てないかもしれない・・・・・だが勝つ必要はない！
あいつについているイービルリングさえ破壊したら・・・・・」

太一の言葉に大輔たちはハッとなった。

今デジタルワールドにはダークタワーが出現している。
ならイービルリングがあってもおかしく無い。
現に今まで平和だった場所でデジモンが暴れている。
これは操られていると考えてもおかしくないという考えが子供たちの頭に浮かんだ。

しかし、その考えを男はいとも簡単に打ち砕いた。

「あいつは操られてなんかいないぞ」

「「「えっ！？」」」

男の発言に子供たちは驚きの声を上げた。

「どういうことだ！？」

「簡単な事だ。あいつは自分の意志で攻撃をしているだけだ」

タケルの問に男はそう言うと、メガドラモンたちの方を見た。

そこには必死にメガドラモンたちの攻撃を避けているライドラモンたちの姿があった。

避けるだけではなく、
スキをみてライドラモンたちも攻撃をするがメガドラモンには通用せず、
ここから見ても押されているのがわかった。

「どうしてですか！？
今まで平和だった場所で急にデジモンが自分の意志で暴れだすなんて・・・・・・」

「簡単な事だ。あのメガドラモンは別の場所から来たというだけだ」

伊織の質問に男が答え、男の言葉に子供たちは納得したが、
ならどこから来ているのか？　と訪ねようとした瞬間、メガドラモンたちの
戦闘に変化が起きた。

「！　ホルスモン！」

ホルスモンにメガドラモンの攻撃が命中したのだ。
完全体の攻撃をまともにくらったホルスモンは吹き飛び、ポロモンに退化してしまった。

それに動揺したディグモンにメガドラモンは腕を向け、
そこからホルスモンに当てた攻撃と同じ必殺技を撃った。

動きの止まっていたディグモンにそれを避けることは出来ず直撃し、
ディグモンはウパモンに退化した。

「このままじゃみんなが！」

ヒカリがそう呟くと子供たちは何か作戦がないか考えたが何も思いつかなかった。

光子郎も子供たちと同じで何も思いつかなかったが、

ライドラモンたちの戦いをただ真剣に見ている男の姿が目に入り、ダメ元で尋ねた。

「・・・・・あなたは何か作戦を思いつきませんでしたか?」

光子郎がそう言うと男は光子郎の方を向いた。

「・・・・・あると言ったらどうするんだ?」

男の発言にタケルが大声で言った。

「ふざけるな! お前なんかに思いつくはずがないだろう!
どうせお前は僕達に戦わせて自分は逃げるつもりなんだろ!?」

「・・・・・」

タケルの言葉に男は何も返さず男はただ光子郎を見つめていた。

「・・・・・タケルくん。彼にそのつもりはありません」

「・・・・・どうしてそう思うんですか?」

「なぜなら彼がまだここにいるからですよ。
彼は僕達が来たあとも逃げずにずっとここにいました。
逃げるならその時に逃げたほうが確実なはずです」

光子郎がそう言うとタケルは黙りこんだ。

タケルも理解したのだ。男がその気になれば自分たちが来た時点でここから離れることができたことを。

「・・・・・・教えてもらえますか？　あなたが思いついた作戦を？」

「・・・・・・言ったところでお前たちはそれを実行するのか？」

「それは分かりません・・・・・・でも
少しでも選択肢を増やすのはいいことだとは思いませんか？」

光子郎がそう言うと男はため息をついた。
そしてその後うでを上げて指を４本立て、子供たちに見せた。

「・・・・・・まずお前たちには４つの選択肢があった」

「！　４つですか！？」

「ああ。４つだ。
１つめは今のようにメガドラモンに勝負を挑み、そして全滅する

選択肢だ」

光子郎は自分たちに４つも選択肢があったとは思わず声を上げたがすぐに黙った。

「そして二つ目は俺が最初に言ったようにここから逃げることだ。まあ、これはもう実行不可能だがな」

「逃げるなんて選択肢、僕達が選ぶはずがないだろ！」

「どうしてだ？」

「どうしてってそれは・・・・・・

「ここには他のデジモンはいない。地形もすでにボロボロ。相手は格上の完全体。　お前たちがここに残ってまで戦う理由がわからないんだが・・・・・・」

それを聞くとタケル…子供たちは黙りこんだ。

男の言うとおり子供たちが危険をおかしてまでここで戦う理由がなかったのだ。

子供たちがここに残った理由は……

「俺の言うことを聞きたくなかったからだろ？」

男の言葉に子供たちはハッと頭を上げた。

「心を読まれたとでも思ったのか？
そんなことが出来なくともお前らの顔を見ればわかるんだよ。
お前たちが俺と敵対しているのはわかっていたが、
それが自分のパートナーデジモンを失ってまでも貫きたいことだとは思わなかった・・・・・・」

男の言葉に今度こそ子供たちは何も言い返せなかった。
男の言うとおり自分たちは逃げるべきだったのだ。
守るデジモンも土地もなく、戦えばほぼ負けるとわかってる戦いをただ男の言うことを聞きたくないという理由でパートナーをあんなにも傷付けて・・・・・・
いや、このまま行けばパートナーを失ってしまうという結論が子供たちの頭で生まれた。

「・・・・・話を戻すぞ。
３つめは俺と共にメガドラモンと戦うという選択肢だ」

男の発言に子供たちは頭を上げた。

「どうしてお前と一緒に戦わなければならないんだ!?」

「わからないか？　俺は今あいつと敵対している。
それぐらいはわかっていただろ？

それでお前らもあいつと敵対している。
なら組むのもわかるだろ？」

子供たちは確かに知っていた。
自分たちが来るまで男は一人でメガドラモンと戦っていた。
つまりどうしてもメガドラモンを倒したければ男と組むのが一番良かったのだ。

「な、ならどうしてライドラモンたちがメガドラモンに向かって行ったときに
お前も一緒に行かなかったんだ！」

「行けば俺も巻き添いで攻撃していただろ？」

伊織の質問に男はすぐに答えた。

男の言ったことを誰も否定は出来なかった。

「まあ、今から俺が行っても無駄だな・・・・・・
そしてお前らに残された最後の選択肢だ・・・・・・」

男がそう言うと子供たちは一斉に男のほうを見た。

「・・・・・俺にデジヴァイスを貸す選択肢だ」

子供たちはその発言に驚きの声を上げた。

第十九話　絶体絶命？（後書き）

男がでる話はかなりスラスラ書けます。

ずっといてくれればいいのに・・・・・・

評価または感想をお願いします。

第二十話　深まる男の謎（前書き）

評価が２０突破！！！

お気に入りが一桁アップ！！！

皆さん、本当に有難うございます！！！

第二十話　深まる男の謎

「デジヴァイスを貸せってどういう事だ！？」

男の言った事に大輔は大声で尋ねた。

「言葉通りの意味だ。俺にデジヴァイスを貸すと言う選択肢だ。ちなみにＤ３でも構わないぞ？」

男はあっさりそう言うと、再びメガドラモンたちの方を見た。

「別に貸したくなかったら貸さなくてもいいんだぞ。・・・・・・俺も出来れば使いたくない手段だからな」

「・・・・・・あなたにデジヴァイスを貸したらどうなるんですか？」

「！　先輩！　ダメですよ！　こんな奴にデジヴァイスを貸すのなんて・・・・・・」

「大丈夫ですよ京さん。とりあえず聞くだけです」

京にそう言うと光子郎は再び男の方を見て言った。

「・・・・・なぜあなたにデジヴァイスを貸すという選択肢があるんですか？
ここはデジタルワールドなので別の場所に送り返すことも出来ま・・・・・ま、まさか!?・・・・・・・よ」

「勘違いするな。別にリアルワールドに送り込もうとは思ってねぇよ」

光子郎の言葉を男はそう言ってさえぎった。

「・・・・・ならどうするんですか？
他人のデジヴァイスを使っても進化もさせることは出来ませんし、それ以外に出来ることは他のデジヴァイスと連絡することと、ゲートを開くことぐらいです。
それなのに貴方はデジヴァイスを使って何をするつもりですか！？」

「答えるつもりはない」

光子郎の言葉に男はアッサリとそう答えた。

「ふざけるな!!!」

「ふざけているつもりはないぞ希望の紋章を持つ選ばれし子どもよ。
俺がこの方法を使いたくない理由がお前たちにこれを知られるか

らだ。
だから仮に俺がお前らのデジヴァイスを使って何かをしても
それに関しては何も答えないからな？」

タケルの言葉に男はそう言うと
子供たちに向かって言った。

「今言った４つの手段が俺の思いついた手段だ。
まあ、希望の紋章を持つ選ばれし子どもの言ったように
俺程度が思いついた作戦だからこれ以外にも手はあるかもしれない・・・・・・
だからお前らで他の手段を思いつけば俺にデジヴァイスを貸さなくてもいいんだぞ？」

男はそう言うと光子郎の方を向いて尋ねた。

「さあどうするんだ？　知識の紋章に選ばれし子どもよ？」

「・・・・・・あなたにデジヴァイスを渡しても現状に変化が起きるとは思いません。
あなたに今出来ることはデジヴァイスを持って逃げることぐらいのはずです。
なのでデジヴァイスを貸すことはできません」

「・・・・・・そうか」

男はそう言うと再びメガドラモンたちの方を見つめた。

子供たちもメガドラモンたちの方を見ながら、他の手段がないか必死に話し合っていた。

そこにメガドラモンたちの戦いを見ていた子供たちに驚きの光景が目に入った。

「！　どうして避けなかったんだ!?　ライドラモン!?」

先ほどまで高速移動で避けていたメガドラモンの必殺技をライドラモンは
その場にとどまり、避けることなく直撃したのだ。

大輔は倒れこんだライドラモン…チコモンの姿を見てそう叫んだ。

倒れたチコモンに止めを刺そうとしたメガドラモンに
ペガスモンとネフェルティモンが必殺技を当てて注意をそらした。

子供たちはそれに少しだけ安堵の息を漏らすと、なぜライドラモンが攻撃を避けなかったかと、
現状を打開する手段を考えた。

そこに男が小さく呟いた。

「・・・・・無闇やたらに動き回るからそうなるんだよ・・・・・

・」

子供たちは一斉に男のほうを見て、
男がなぜライドラモンが攻撃を避けなかったのかを知っていると理解知り、
そこで代表で太一が男に尋ねた。

「・・・・・・おい！　今のはどういう意味だ？」

「うん？　・・・・・ああ。ライドラモンが適当に相手の攻撃を避けるから
　避けることのできない状態に追いつめられるんだ……と思ってな？」

「……つまりお前はなぜライドラモンが攻撃を避けなかったか知っているわけだな？」

「ああ」

男は簡単にそう言うと右手を上げてチコモンの後ろの方を指さした。

「お前たちにも見えるだろ？チコモンの後ろに何があるかが」

太一たちは男の指さした方をジッと見つめた。
そしてそこに何があるのかが分かった。

「！　ポロモン！？」

「分かったか？　ライドラモンが攻撃を避けようとしたときにアイツの姿が目に入ったんだろう。
自分が避けたらポロモンに直撃すると理解してな・・・・・・
あいつが避けてたらポロモンは確実に消滅していたからまあ判断は正しいが、
もとはと言えばアイツが周りを気にしないで攻撃を避け回るからそうなったんだから、
まあ当然のことかな？」

男の消滅という言葉を聞いて京たちはゾッとした。
自分たちのパートナーに消滅しそうになったという現実を見てようやく理解したのだろう。
先程よりも焦りながら、そして大声で作戦を考え始めた。

男もそれを無言で聞きながらメガドラモンたちの方を見ていた。

そこに男に歩み寄る足音が耳に入りメガドラモンたちの方を見ながら言った。

「・・・・・・どういうつもりだ？　光の紋章を持つ選ばれし子どもよ？」

「・・・・・・あなたに私のＤ３を貸します……」

「！　ダメだヒカリちゃん！　こいつにD3を貸すなんて・・・・・・

「なら大輔君はこれ以外の方法があるの！？」

「そ、それは・・・・・・」

ヒカリの言葉に大輔とヒカリを止めようとした子供たちは俯いた。
大輔たちはあれからどんなに考えても方法が思いつかなかったのだ。
なのでヒカリの言葉に誰も言い返すことが出来なかったのだ。

「・・・・・・あなたにこれを貸せば、テイルモンたちは助かるの？」

「・・・・・・最悪でもメガドラモンから逃すことだけは約束しよう・・・・・・」

「それはどういうことだ！？」

「簡単な事だ。もし途中であいつ以外のデジモンが襲ってきたら、全滅する可能性があるという意味だ」

男の言葉に光子郎は冷や汗を流した。
自分たちがメガドラモンの事を考えるのに精一杯の時に
男はその先を考えている。
自分たちは戦略では男には勝てないと理解したのだろう。

「・・・・・それでもこのままテイルモンたちがやられるよりはずっといいわ」

「・・・・・お前が俺にD3を貸すとは思わなかったわ。
この中で俺に貸そうと思うのは知識の紋章に選ばれし子ども位と思っていたぞ・・・・・・」

「……私は貴方が今までやってきたことを許せない！
でも感情だけでは動いちゃダメだとさっき思い知ったから・・・・・」

ヒカリはそう言うと自分のポケットからピンク色のD3を取り出して男の方に差し出した。
男はそれを左手で受け取ると、少しだけヒカリと距離を取り、そして子供たちに向かって言った。

「先ほど言った通り、
これからやることに対しての質問は受け付けないがそれでもいいのか？」

ヒカリ以外は納得できなそうな顔をしていたが、
ヒカリの決断をむやみに否定するのは間違えだと思い、頷いた。

「・・・・・行くぞ！」

男はそう言うとヒカリのＤ３を持っている左手を左に真っ直ぐ伸ばした。
すると突然Ｄ３が光を放った。
そして光が消えるとそこにはピンク色のＤ３ではないものが握られていた。

「「「な！？」」」

子供たちはそれに驚きの声を上げたが男はそれを無視し、小さく呟いた。

「うわぁ！？」

すると突然大輔が驚きの声を上げた。子供たちは一斉に大輔の方を見た。
そこには大輔のポケット…ディーターミナルが光を出していた。
そしてそこから勇気のデジメンタルが飛び出し、
ヒカリのＤ３だったものの中に入っていった。

男は更に右腕を右に大きく伸ばした。
すると男の手にバーコードみたいなものが発生した。
男はその手を手にＤ３だったものにのせて言った。

「・・・・・スピリットエボリューション！！！」

男はそう言って右手を思いっきりスライドさせた。

すると男は光に包まれた。

そして光が消えたあとには黒コートの男の姿はなく、肩ぐらいまでに伸びた黄色の髪をして、

体中を勇気のデジメンタルに似たものを付けており、

顔にマスクをつけているデジモンがそこにはいた。

「・・・・・アグニモン！」

男はそう呟いた。

子供たちは余りの驚きに口を開けて驚いていた。

「D3が変化した！？」

「デジモンが自分だけでアーマー進化した！？」

「スピリットエボリューション！？」

「アグニモン！？」

子供たちのうちの誰かがそれぞれそう言ったが、

男はそれを無視してその場で思いっきりジャンプした。
メガドラモンはまだこちらに気づかずにペガスモンとネフェルティモンと戦っていた。

「・・・・・『ファイアダーツ！！』」

アグニモンは自分の手の甲をこするようにしてそこから炎の矢を幾つか飛ばした。
それらがメガドラモンに命中すると今までどんな攻撃をしても全く動じなかった
メガドラモンから苦痛の声が上がった。

「グォォォォ！？」

アグニモンは自分の右手を下に向けそしてそこから一瞬だけ炎を出した。
するとアグニモンは更に上空に飛び上がった。
苦痛を上げて停止しているメガドラモンの上まで上がると、
体を回転させながら急降下した。

『サラマンダーブレイク！！』

アグニモンはそう言いながら急降下のスピードと回転の力を利用して思いっきりメガドラモンの背中あたりに蹴りを繰り出した。

メガドラモンはそれに耐え切れず地上に叩き落された。
子供たちはただ圧倒的なその戦いを驚きながら見ていた。

「ど、どういうことだよ!?　なんで勇気のデジメンタルにあんな力があるんだ!?」

特に大輔の表情には驚き以外の表情が含まれていた。
今まで自分が使っていたデジメンタルにあれほどの力があったことにショックを受けていたのだろう。自分が使うよりも遥かに強いそれを見て
大輔はただ悔しさを噛み締めていた。

アグニモンは地面に着地するとすでにメガドラモンは起き上がっていた。
だがメガドラモンの羽は先程の攻撃でボロボロになっており
もう先ほどのように自由に飛び回ることは出来そうになかった。

だがメガドラモンはまだ諦めておらず尻尾を使って体を支え、
アグニモンに向かって3つに開いた両手を向けていた。

「グォォォォ!!!」

メガドラモンは怒りを含んだ雄叫びを上げ、

アグニモンに向かって先ほどまでペガスモンたちに使っていた技を両手から放った。
アグニモンに有機体ミサイルが迫ってきた。
アグニモンは動かずにただそのミサイルを見つめていた。
そしてアグニモンがいた場所が爆発し、煙に包まれた。

子供たちはなぜアグニモンが攻撃を避けなかったのかが理解できなかったが、
それは次の瞬間に答えが出た。

「自分の目の前を攻撃して視界を悪くするとは
・・・・・やはりお前は破壊しか能がないデジモンなんだな・・・・・」

アグニモンはメガドラモンの後ろでそうつぶやくと両腕に炎を巻いた。
メガドラモンは急いで振り返って反撃しようとしたがその前にアグニモンが叫んだ。

「遅い！！！『バーニングサラマンダー！！』」

アグニモンの腕に巻かれた炎が竜の姿となってメガドラモンを貫いた。

メガドラモンは体からデータを出し、その場にはデジタマがひとつ転がっていた。

第二十話　深まる男の謎（後書き）

勇気のデジメンタルが炎のスピリットに・・・

多分今まで書いた中で一番の設定改変だと思います・・・

でも似てるからいいよね！？

・・・納得のいかない人はすいません・・・

感想、または評価をお願いします！

第二十一話　忘れられた記憶（前書き）

お気に入りと評価がだんだん上がってきてテンションが上がってきています。

でもやっぱり自分の文章力が嫌になってきます。
同じ表現を繰り返し過ぎな気がしますが、これ以外の方法がないため、
これからも同じ表現を繰り返してしまうかもしれませんが・・・・

出来ればアドバイスを下さると嬉しいです。

第二十一話　忘れられた記憶

大輔たちはポカンとした表情でアグニモンの戦いの終わりを見ていた。
自分たちのアーマー進化では全く刃が立たなかったメガドラモンを同じデジメンタルを使って
無傷で勝利した、アグニモンを大輔たちは信じられないといった表情で見つめていた。

同じくペガスモンと
ヒカリが男にD3を貸したために退化したテイルモンも
ペガスモンの上…上空からその戦いを見ていた。

「デジヴァイスを選ばれし子供よりも使いこなすなんて・・・・・・・
アイツは一体・・・・・・」

テイルモンはそう言うがそう言うとペガスモンがゆっくりとアグニモンの近くに着陸していった。

「・・・・・お前はそのデジタマを破壊するつもりか?」

ペガスモンがそう言うとテイルモンはハッとなった。

ペガスモンが言ったように男は今までデジタマを破壊し回っている。
つまり今回もデジタマを破壊するつもりではないか?

テイルモンはそれに気づくと
男に質問した時点から戦闘態勢に入っていたペガスモンに続き、戦闘態勢をとった。

「・・・・・・今回は破壊するつもりはない」

アグニモンの予想外の言葉にペガスモンとテイルモンは驚きの声を上げた。

アグニモンはそれを無視し、体から光を一瞬発して元の黒コートの姿に戻っていて、
テイルモンたちの方へと歩いて行き、テイルモンの前で左手を突き出した。
その左手にはヒカリのＤ３が握ってあった。

「・・・・・・これを本人に返しておいて貰えるか？」

男は素っ気無くそう言った。
テイルモンはそれを右手で受け取ると両手で大事そうに抱えた。

「・・・・・・確かに返したからな」

男は静かにそう言うとテイルモンたちに背を向けてそこに闇の回路を作ると
その中に消えていった。

ｓｉｄｅテイルモン

私は男が消えたあと、ペガスモンにチコモンたちを乗せ、ヒカリたちのところへ飛んだ。

ヒカリたちの所へ着くと大輔たちが一斉に質問してきた。

私はそれを一先ず無視してヒカリにＤ３を返した。
そうするとヒカリを含めた全員がそれをひっくり返したり自分のと比べたりして調べたが
すぐにヒカリに返したため、どうやらそれはただのＤ３だったようだ。

「・・・・・彼は確かにこれをＤ３以外の何かに変化させていました」

光子郎はそう言うと、しかしと言って言葉を区切って言った。

「・・・・・でもこれは大輔くんたちとなんの変わりのないただのＤ３です・・・・・」

「でもあいつはヒカリちゃんのＤ３を別のものにに変化させていましたよ！？」

「・・・・・それは僕にも分かっています！　でも、
このデジヴァイスにはなんの以上も変化も見られないんです・・・・・」

光子郎がそう言うと、私たちはただ無言でヒカリのＤ３を見つめていた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ賢

僕は今日、学校を休んでいた。
母さんが顔色が悪いから休めと言ったのもあるが、
僕が布団から出てこないのが一番の理由だろう。
僕は悩んでいた。リョウさんのことを・・・・・・
大切な友達だってことは分かる。でも名前以外は何も思い出せない。
それが僕にとってはどうしようもないくらい辛い事だった。
そんな僕の隣にずっといてくれるワームモンの姿がいつもよりも大きく見えた。
「・・・・・・ワームモン・・・・・・」
僕がそう小さく呟くとワームモンはすぐに目を開けて言葉を返してくれた。
「何？　賢ちゃん？」
「・・・・・・ワームモンはずっとリョウさんの事、覚えていたの？」
「うん・・・・・・。リョウたちとデジタルワールドを冒険したっていう事と、
リョウの名前だけは覚えてた・・・・・・」

ワームモンはとても気を使ってそう言った。
分かっているんだろう。僕がリョウさんの事で悩んでいることを・・
・・・・

「・・・・・僕は昔にデジタルワールドを冒険したことしか覚え
ていなかった・・・・・・
リョウさんの名前も覚えていなかったんだ!
・・・・・・友達失格だよね・・・・・・」

僕がそう言うとワームモンは優しく僕の名前を読んでくれて、
僕はワームモンを抱きながらゆっくりと眠りについた・・・・・・

「‥‥ちゃ‥ん・・・・けん・・・・けんちゃん・・・・・・」

僕をそうやって呼ぶ声が聞こえ、目を開けてみるとそこには母さんの姿があった。

「‥んん・・・どうしたの？　母さん？」

僕があくびをしながらそう言うと母さんは焦りながら言った。

「リョウくんが・・・・・・リョウくんが来てるのよ！」

僕は母さんの言葉にどうして母さんがリョウさんのことを知ってるかという疑問に気づかず、急いで玄関に走っていった。

玄関の扉を開けると、そこにはなぜか心が暖かくなるような笑顔をした

リョウさんの姿があった。

「よう！　遊びにきたぞ！」

第二十二話　周り始めた歯車（前書き）

今日評価を見て私はたまげた……

文章評価とストーリー評価が5ずつ増えてる、だと……！？
それで総合評価が３２、だと……！？

しかもユニークが２０００越え、だと……！？

作者は驚きのあまり何度もそれを見直してしまいました！

評価を着けてくださった方、ありがとうございます！！！

これからはその評価に恥じないようにラノベ片手に頑張って書いていきたいと思います！！！

第二十二話　周り始めた歯車

「リョウさん……」

賢にとって今一番会いたくて、一番会いたくない人の姿がそこにあった。

「……そうしたんですか？　今は授業中のはずじゃ……

「学校はサボってきたぜ！」

リョウが賢の言葉を遮り、親指を立てて、清々しい笑顔でそう言った。

賢はその表情にため息をつくと、自分の中に先ほどまでの暗い気持ちがなくなっているのに気が付いた。

「……リョウさんはすごいね……」

「？　何が？」

リョウは本当にわからないような顔をしてそう言うと、賢は何でもないですと言って
先ほどの言葉をなかったことにすると下を向いていった。

「……リョウさんは僕がリョウさんのことを忘れていたことを怒っていないんですか？」

賢がそう言うと、リョウは不思議そうな表情をしながら言った。

「？　どうしてだ？　賢は暗黒の種子の影響で俺のことを忘れていたんだから、
別に怒る必要はないだろ？」

賢は自分が暗黒の種子の影響で記憶を失っていたという事を知らなかったが、
それを知っても、それでも！　といって言葉を続けて言った。

「……僕は大切な友達のことを忘れていたんだ！
……これは許されることじゃない……

「それは違うぞ！　賢！」

リョウの突然の大声に賢は驚いて顔を上げた。

そこにいた少年の顔には先ほどのようなふざけたような表情は消えていた。

「……賢が暗黒の種子を埋め込まれたのは俺たちが原因なんだ……ミレニアモンの最後の悪あがきで撃たれたそれは仲間の一人が狙われたんだ……

それを賢がかばって……ごめん……あの時俺たちが最後まで気を抜かなかったらお前は……

「それは違います！」

リョウの言葉を今度は賢がさえぎった。

「……僕はその時のことは覚えていません……

でも！　僕はきっと後悔なんてしていないはずです！」

賢がはっきりそういうとリョウは一瞬呆気にとられ、そして下を向いて小さく微笑んだ。

「……やっぱりお前は強いな、賢。……さすがはあいつの弟子なだけはあるな……

……いや、それだけじゃないな。賢！

お前は自分が思ってるほど弱くないぜ！」

リョウは賢の肩に手をおきながらそう言った。

「……弟子？　……僕には師匠がいたんですか？」

賢はリョウの言った言葉の中に気になるキーワードがあったため、それについて質問した。

「……ああ……心の師匠みたいなものだったな……」

リョウが明らかに暗くなった表情でそういうと賢は自分が触れてはならない事に触れていまったことに気が付き、リョウに謝った。

それをリョウは賢の髪の毛をクシャクシャにしながら言った。

「別に賢が謝ることはないぞ！
自分に師匠がいるってわかれば誰だってそいつが誰かが気になるしな。
……それにそいつは俺たちの仲間の一人だったんだ。
……いつかは知ることになってたんだから……」

「……という事はその人は前に言ってた、選ばれし子供なんですか？」

「……ああ。

この前濁流に飲み込まれて死んだ選ばれし子供がいるって言っただろ？
……そいつのことさ」

リョウは賢の肩に置いた手をどけながら言った。

「……そいつは俺たちの中でリーダー的存在だったんだ。
それでいつも仲間のことを考えてるような奴だった……」

「……すごい人だったんですね……」

リョウがどこが自慢げに語る姿を見て、賢は本当にすごい人だったんだな、と思った。

「それで賢……お前に大事な話がある……」

突然そう告げたリョウの顔は真剣だった。
しかし、その顔はどこか言いにくそうな顔をしていた。

「……なんですか？」

その表情をみて、賢も真剣なまなざしでリョウを見つめた。

第二十二話　周り始めた歯車（後書き）

今回は戦闘はありませんでした。

しかし、次からは物語が動き始める……気がします……

取り合えず1～3話の内に進み始めます！ドン

なので書き方のアドバイスがもらえるとうれしいな！

……すいません……

感想、または評価をお願いします！

第二十三話　見え始めた突破口？（前書き）

最近見るたびに評価が増えていて、作者は怖くなってきましたw

お気に入りも少しずつですが増えてきました！

今回は忠告どうり、ストーリが進みませんでした・・・・・・すいません

多分後二回ぐらいで進み始めます。

それと昨日は更新できずにすいませんでした。

思いつかなかったならまだしも、昨日は学校の体育で疲れてダウンしていただけでした・・・・・・

前振りが長く？　なってしまいましたが、ここからは本編です！

あいわらずダメ文です・・・・・・

どうしたら良くなるか、アドバイスを下さると助かります！

第二十三話　見え始めた突破口？

ｓｉｄｅ光子郎

あれから僕たちはブイモンたちが回復するまでその場所で休み、そして回復するとブイモンたちをアーマー進化させ、それに乗って帰った。

パソコンルームにつくと、外はもう赤色に染まっており、カラスの姿が所々に見え、
それはもうすぐ学校の下校時間を意味するものだった。
僕たちは先ほど後回しにした男についての話を始めた。

「……皆さんは今回のことで何か言いたいことがありますか？」

まず僕がそう言って皆さんに尋ねた。
するとほぼ全員がピクリと反応した。どうやら全員に言いたいことがあるようだ。

「……僕はあの男がデジヴァイスを変化させたのが気になります……」

伊織君がそう言うと、大輔君、タケル君、ヒカリさん、京さんが暗い顔をした。

無理もないだろう。
自分たちが一年以上使ってきたＤ３を自分たち以上に使いこなす男。
その男はデジモンで、さらに他のデジモンたちを殺しまわっている
最低な存在だ。

……しかし、彼は今回僕たちを助けている。

大輔くんたちもそれがわかっており、しかし納得できていない様子
だった。

「……僕もそれは気になります。
ここにいる皆さんもそれは気になっていると思います」

僕はそういうと先ほどヒカリさんに借りた、ピンク色のデジヴァイ
スを接続した、
パソコンを大輔君たちに見えるように置いた。

「これを見てください。
Ｄ３をパソコンを使って調べましたが、何の異常も見られません
でした。
……他のＤ３とも比べましたが何の違いも見られませんでした」

パソコンに移っている数字を見比べても何の違いがないことを大輔
君たちが確認した。
しかし大輔君たちは納得できていないような表情だった。

「でも！　……あいつは確かにヒカリちゃんのＤ３を何かに変化させていたんだ。
　なら、Ｄ３になにか細工したはず……」

「……それは違うわ」

大輔くんの言葉をヒカリさんが遮ってきた。

太一さんはヒカリさんが言った意味を理解できずにどういう事だと質問した。
理解できなかったのは太一さんだけではなく僕も含めた全員がその意味が理解できなかった。

「……だってあの人はＤ３を貸せって言ったけど、
　別にデジヴァイスでも構わないって言ってたわ」

ヒカリさんの言葉に僕を含めた全員がハッとなった。

確かに奴はデジヴァイスでも構わないと言っていた。
いや、逆にはじめはＤ３ではなく、デジヴァイスを要求していた！

……Ｄ３を変化させるという、余りにも衝撃な事のせいでそんなことは忘れてしまっていた。
どうやら太一さんたちもそうだったようだ。

「……確かに言っていました。
……どうやら僕たちは思った以上に奴の話を聞いていなかったようです……」

僕がそう言って顔を俯けると、
何かを思い出したのか、タケル君が大きな声で言った。

「！　そうだ！　あいつはデジヴァイスを変化させるのを
僕たちに見られたくないって言っていた！」

タケルくんの言葉に僕を含めた全員がハッとなった。

「！　確かに言ってわ！
私たちにこの方法を私たちに見られたくないからあまり使いたくないって！」

「……つまり、やり方次第では俺たちもあれが出来るかも知れないってことか……」

京さんの言葉に太一さんがそう呟いた。
でも僕はそれを不定するように太一さんの言葉を否定した。

「……多分、それは不可能です……」

そう言うとここにいる全員が僕のほうを一斉に見た。
その顔はどうして？　という疑問を持った顔だった。

「……どうしてだ？　光子郎？」

太一さんがそう言うと僕は自分の考えを口にした。

「確かにＤ３を奴が使っていたように変化させることは出来るかもしれません……
でも、僕たちがそれを使うことが現実的に不可能です」

「……もっと分かりやすく言ってくれないか？」

「なら先程あったことを例にして説明します……
まず、黒コートの男はヒカリさんのＤ３を変化させた。
それを使ってアーマー進化……いえ、
奴はスピリットエボリューションっと言ってましたね。
とにかく進化しました。……ここまではよろしいですか？」

僕がそう言うと皆さんは頷いてくれた。
どうやら全員理解出来ているようだ。

「なら続けます。奴はＤ３を使って自分で進化しました。

という事は……

「……自分で使わないと意味がないという訳か……」

「正解です」

僕の言葉を太一さんが遮って結論を言った。

どうやら皆さんも理解したようで、
先程までの何とかなるかも知れないという空気が消えてしまっていた。

……仕方がないんです。
出来ないことは出来るだけ早いうちに知っていたほうがいいんだから……

「……なら俺たちがあれを使うにはブイモンたちが自分でD3を使って
進化しなきゃいけないってことですか?」

「……そう言うことになりますね」

大輔くんが僕が思っていたことを言ってくれたおかげで説明が必要なくなりました。
これが出来ればテントモンたちも戦うことができるようになる!
これは何としても成功させなければ……

「よし！　明日からはデジタルワールドで特訓だ！
コロモン！　絶対にこれをマスターしようぜ！」

「ボク、がんばるよ～！」

「ワテも頑張ります！　光子郎ハン！」

太一さんがそう言うとコロモンとテントモンは張り切ったような声を上げた。

「……どうやら僕が言うまでもないみたいですね……
太一さんの言うとおり明日からデジタルワールドで特訓したいと思います！
皆さんもそれでよろしいでしょうか？」

僕の言葉に皆さんは力強く頷いてくれた。

「なら、明日から特訓です！
しかし、その前にゲンナイさんに会って、話がしたいと思います。
なので明日は先にゲンナイさんの家に向かいましょう！」

僕はそう言ってパソコンを閉じると、
もう下校時刻ギリギリなことを皆さんに仕え、ゾロゾロとパソコンルームを出た。

第二十四話　揺らぎ始めた日常（前書き）

評価とお気に入りが毎日上がっている・・・・・・

評価をくださった方、ありがとうございます！！！

お気に入り登録してくださったお方、ありがとうございます！！！

これからも最低でも2日に一回は更新できるよう、頑張りたいと思います！！！

第二十四話　揺らぎ始めた日常

見上げる限り、空は真っ黒な空間……地面は真っ白な場所……
たくさんの真っ黒な渦が縦横無尽にある場所で黒コートの男は立っていた。

男の手には真っ白な鍵の剣…光のキーブレードが握られていた。

「……貴様……何者だ!?」

そんな声を上げたのは、男の数十メートル前方にいる数十体のデジモンの内の一体だった。

「俺が何者かは名乗る必要はない……」

男はそういうとキーブレードを持った右手を肩ぐらいまで上げ、そのデジモンに向けた。

「……ここからさっさと引き返せ。
ここから先はお前たちが住んでいる場所とは違う世界だ」

男か静かにそういうとデジモンたちは一斉に笑い声をあげて言った。

「ギャハハハ！！！　そんなことは知っているさ！
俺たちはその世界を支配するためにここに来んだからな！！！」

デジモンたちがそういうと男は先ほどよりも低く、そして小さな声で言った。

「……成熟期十数体で支配できる世界だと思っているのか？」

「お前だって分かってるんだろ？そっちの世界は俺たちの世界より弱い世界だ。
こっちの世界の成熟期で完全体に勝てるほどのな……
しかもそっちの世界ではほとんど究極体は存在しない……
なら、俺たちだけでも世界の一部なら支配は簡単だって事だ！」

男はその話にピクリと反応した。

「……そんな話、どこで知ったんだ？」

「バーカ！！！　お前になんて教えるかよ！」

デジモンたちはそういうと先程のように笑い声をあげた。

「と、いう事だから俺たちは今から世界征服に行からそこをどけ！

俺たちは今、最高に気分がいいから今なら見逃してやる」

「……引くつもりはないのか？」

「ああ～ん!?　聞こえなかったのか？
俺たちは今から世界征服に行くって言ってんだろ!?
いい加減、殺すぞ？」

デジモンたちはそういうと、先程までは全くなかった殺意を一斉に男に向けた。
男はそれを無視すると先程まで上げていた腕をおろし、言った。

「……退かないなら仕方がない……お前たちの命はここまでだ」

男はそういうと握っていたキーブレードを消した。

「……おいおい、戦うか戦わないかどっちかにしろよ!!!」

デジモンたちの内の一体がそう言いながら男に向かって走ってきた。

「消えろ!!!」

男はその場を動かず、ただ一言、言葉を呟いた。

「――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ」

「な！？」

デジモンは驚きの声を上げると男に切られ、消滅した。

「な、なんなんだ！？　あの剣は！？」

デジモンの一体がそう言った。

男の手には神々しいほどの光を放った剣が二本握られていた。

「……この技は――――――――――によって、
特定の制御された場所でしか使えない技だ……
契約した武器を引き出す魔法……いや、魔術か……。俺が唯一使える魔術さ……」

デジモンたちは既に男の話など聞いてはいなかった。
自分たち闇のデジモンにあのような聖なる光を放つ剣など……成熟期である自分たち
に防ぎきれるものでは無いと感じ取ったのだ。

「さて」

男がそう言いながら自分たちに歩み寄ってきた。
一歩ずつ一歩ずつゆっくりと……

「ご覧の通り、お前らが挑むのは光の剣。聖なる剣（つるぎ）！」

その後に男が言った言葉をフードで見えないはずの口元がニヤリとしたように
デジモンたちには見えた。

「恐れずしてかかってこい！！」

男はそう言いうと、デジモンたちは挑発されたための怒りのせいか、
それとも、その場に留まるのが耐えきれなくなったのか、
デジモンたちが一斉に男に向かって走り出した。

ｓｉｄｅ光子郎

「今日も秋山君は休みですか……」

次の日の放課後、大輔君が僕に今日も秋山君が学校を休んだことを報告してくれた。
先生の言う話では家庭の事情らしいが、恐らくは嘘だろう……

「そうですか……なら、とりあえずは秋山君のことは置いておき、デジタルワールドに行って、ゲンナイさんに話を聞きましょう」

僕はみんなにそう言った。
分からないことを考えるよりは、今、出来ることをするほうがいいと僕が思ったからだ。

大輔君たちもそれを分かってくれて、頷いてくれた。

そして京さんの掛け声とともに、僕たちはデジタルワールドへ向かった。

ついた先のデジタルワールドは前のような異変は起こっておらず、
いつものような平和な風景だった。

そしてそこにはデジモンたち……それぞれのパートナーデジモンたちが
僕たちを迎えてくれた。
ちなみに今ここにいるメンバーはいつも通り、
僕、太一さん、大輔君、タケルくん、ヒカリさん、伊織君、京さんだ。
僕たち以外の初代選ばれし子供は、今年が受験だったり、外国にいたりと、
様々な理由のため、あまり、集まることは出来ない……
ちなみにその人たちのパートナーデジモンはそれぞれの家に
幼年期デジモンの姿で生活している。

おっと、話がずれてしまいました……
とにかく僕たちはゲンナイさんの家に向かった。
昨日聞けなかった話を聞くために……

「よく来たな。選ばれし子供たちよ……」

ゲンナイさんの家に着くと、青年の姿をしたゲンナイさんが
僕たちを迎えてくれた。
……やっぱり見慣れないな……

「こんにちは、ゲンナイさん。今日は昨日聞けなかった話を聞きに来ました」

僕がそう言うとゲンナイさんは先ほど僕たちに向けてくれた笑顔を消し、
真剣な表情になった。

「……分かった。話そう……
ここではなんだから、中で話そう」

ゲンナイさんの言葉に僕たちは頷き、ゲンナイさんについて行った。

「……さて、昨日起きたことだったな……」

僕たちが全員座れるような広い場で腰を掛けると、ゲンナイさんが話し出した。

「……昨日、このデジタルワールドのデータが乱れた」

「？　どういう事？」

「つまり、昨日、デジタルワールドの様々な場所に出現していたゲートが開いたんだ」

大輔君の呟きに、ゲンナイさんがそう言うと、僕たちは驚きの声を上げた。

出現していたゲートという事は確か、異変が起きてから発生したゲートのことですね。

それは確か人間界にではなく、デジタルワールドにつながっているはずだ

つまり……

「……昨日、かなりの場所でゲートから出現したデジモンが暴れまっわったんだ」

「！　昨日暴れたのはメガドラモンだけじゃなかったのか！？」

「！　完全体まで現れていたのか！？」

太一さんの言葉に今度はゲンナイさんが声を上げた。

「え？　ゲンナイさんって確か、
このデジタルワールドを管理してるんじゃなかっんじゃないですか？
それなのに昨日起きたことを知らないなんて……」

「……すまないが、ゲートが開いた瞬間、その場所のデータが乱れたんだ……
だから昨日起きたことは、報告があったことしかわからないんだ。
……それで昨日完全体が現れたという報告は来ていない。……つまり……

「……完全体が現れたのは僕たちが行った、場所だけだったという事になります……」

ゲンナイさんの言葉を僕は遮るように言った。

質問をした京さんも納得したような表情をしていた。

「……そういうことになるな。
それにしても、完全体相手によくぞ無事だったな？
君たちは既に完全たちになる力を失っているはずだが……」

「……そのことについては今からお話しします……」

僕はそう言って、ゲンナイさんに昨日あったことを話した

「……そんなことがあったとはな
……黒コートのデジモンがデジヴァイスを変化させて戦うか……」

「……何か心当たりはありますか？」

僕の言葉にゲンナイさんはゆっくりと首を横に振った。

「……すまないが心当たりはない……」

「……そうですか……」

ゲンナイさんの言葉に僕たちはもしかしたらと少しだけ期待していただけあって、
見た目で分かるくらい落ち込んだ。

「……それにしてもデジモンが自分でデジヴァイスを使って変化させる。
……そんかことは可能なのか……？」

「でも、俺たちは確かにこの目で見ました！
男がＤ３を別の何かに変化させるのを！」

「……疑っているわけではない……
！　まさか！？」

「どうかしたんですか！？　ゲンナイさん！？」

大輔君の言葉にゲンナイさんはそれを不定し、
そして突然声を上げたため、僕はゲンナイさんに尋ねた。

「……いや、何でもない……それより君たちはこれからどうするんだ？」

「……僕たちはこれから男がやった、デジヴァイスの変化を試してみたいと思います」

「そうか……、なら私は力を貸すことは出来ないな……
私はデジタルワールドで起きている異変を再び調査するとしよう」

ゲンナイさんがそう言うと、僕たちはここにいても邪魔になるだけと思い、
ゲンナイさんの家を出た。

そして男のようにデジヴァイスを変化させる特訓をパートナーデジモンとともに頑張るが、
変化することは一度もなかった。

第二十四話　揺らぎ始めた日常（後書き）

ついにやってしまった・・・・・・

光のキーブレードを持った男がやった詠唱はみなさんが知っているあの詠唱です。

効果は原作よりも遙かに?劣っています。
しかも自由に使えません・・・・・・

デジモンの小説にこの詠唱を使って、怒っている方がいらしゃるかもしれませんが、謝ることしかできません・・・・・・

第二十五話　光子郎の決意（前書き）

評価が４０越え……

評価をくださったお方、ありがとうございます！！！

そしてすいません！！

昨日投稿できなくて……

投稿できなかった理由はネタが思いつかなかったからです……

そして今回はどちらかといえば必要ない話です……

最悪、大輔の話をよんだら他は読まなくても
物語に影響はないと思います……

なら、なぜこの話を書いたかって？

……それは……選ばれし子供達も成長しているとわかってもらうためです！

……今回それがわかるのは光子郎だけですが……

第二十五話　光子郎の決意

ｓｉｄｅ大輔

特訓を開始して数日、あれからも一度もデジヴァイスが変化することはなかった。
俺たちは毎日特訓とデジタルワールドの

「・・・・・・！？　皆さん！！」

光子郎さんが急に大きな声を上げた。
その声はどこか慌てているような声だった。

「どうしたんですか？　光子郎さん？」

俺がそう尋ねると光子郎さんは深刻な顔で言った。

「……またゲンナイさんと連絡が取れなくなりました」

その言葉に俺たちは一斉に反応した。

「……という事はデジタルワールドでゲートが開いているというわ

けか！」

「……恐らくは……」

太一さんの言葉に光子郎さんは短くそう答えた。

「なら行きましょう！
デジタルワールドを平和にするのが俺たち選ばれし子供たちの使命なんだから！」

俺がそうやって思っていたことを口に出すと、横からタケルが口をはさんできた。

「……また完全体がいたらどうするつもりなの？
ダークタワーがないっていう保証もないし」

「……その時はその時だ！」

俺がそう言うとタケルはため息をついた。
どうしてだ？

「……やっぱり大輔君は大輔くんだね！
分かった。行こう！　デジタルワールドへ！！」

「「「おう！！！」」」

タケルの言葉に太一さんたち全員が声を上げた。
なんだかよくわからないけどみんな行く気になってくれたようだ。

「よし！　じゃあ行くぜ！！」

俺はそういってパソコンルームのパソコンにＤ３を向けて、ゲートを開いた。

デジタルワールドに来てみると、そこには前来た時のような平和な空気はなく、
所々で爆発音が聞こえる場所に変わっていた。

「……これは予想以上に危険な状態ですね……」

「！　そんな冷静に言ってる暇なんてないだろ！！！」

光子郎さんが呟くと、太一さんが掴み掛った。

「お兄ちゃん！　今はそんなことをしている暇はないわ！」

ヒカリちゃんがそういうと太一さんは渋々と手を放して、光子郎さんに謝っていた。

「……とりあえずここから一番近い、ムゲンマウンテンのほうに行きましょう。

別れての行動はなしです」

光子郎さんの言葉に誰も文句は言わなかった。
俺はみんなでバラバラに行動して、一気に解決したかったが口には出さなかった。

俺にだって分かる。今の俺たちには離れて行動するだけの力はない……
それはメガドラモンの戦いで嫌と言うほど理解している。

俺たちは光子郎さんの提案で、今の内に進化することになり、
ジョグレスが出来る、ヒカリちゃん、京、タケル、伊織はそれぞれのデジモンをジョグレスさせ、
シルフィーモン、シャッコウモンに進化させた。

俺は賢がいないからジョグレスが出来ないため、
ブイモンをエクスブイモンに進化させた。

光子郎さんもテントモンをカブテリモンに進化させた。
太一さんはアグモンは進化しても飛べないし、大きくて背中に乗せて飛べないから、
進化せずにいた。

すぐに戦闘になっても戦えるようにと光子郎さんの提案で
俺たち選ばれし子供とアグモンはカブテリモンの背中に乗った。

……最近の光子郎さんはこういう戦闘に関する作戦も積極的に言ってくるようになった。
実際、ありがたいんだけど、急にどうしたのだろう？

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ光子郎

皆さんが僕の提案に乗ってくれた。
僕は戦闘に関する知識は素人とほとんど変わらない。

僕はそんなことよりもデータ収集といった情報を使って皆さんをサポートしてきた。

……でもそれだけではダメだと最近思った。
きっかけは黒コートの男との出会いだ。

僕たちは奴と戦闘を行った。……そして負けた。
圧倒的な戦力差で負けたならまだ納得もできる。
相手が人質を取るなどの卑怯な戦法をとったならまだいい訳ができる。

……でも、奴はそんなことをせず、ただ真っ直ぐ僕たちと戦った。

戦ったとは二回。
一度目は進化中の攻撃。
これは卑怯なことではないと丈さんも言っていた。
僕もそう思う。

戦闘中に動きを止めた相手を待たなければならないなんてルールは存在しない。
ゆえに、一度目の敗因は油断だ。

そして二度目の戦闘。
二度目の戦闘は初めにエンジェモンが一対一で勝負を挑んだ。
しかし結果は惨敗。
奴は、一撃でエンジェモンを倒してしまった。

この時僕は、奴が完全体デジモンではないか？　と、思った。
しかし一度目の戦いでそれはないと結論を出してしまっている。

なら、どうやってエンジェモンを一撃で倒したのか……
その答えはすぐ近くにあった。

パタモンにあの時のことを聞いている時、それを聞いた丈さんが言ってくれた。

『もしかしてそいつはただ攻撃するのではなくて、
人体にダメージが通るように攻撃をしたんじゃ？』

僕はその仮定を聞いて分かった。
丈さんが言った事は仮定では無く、結論だという事を……

それが分かるとなぜエンジェモンが一撃で倒れたのかもすぐに分かった。

理由は単純……ただ、人体の弱点である部分を攻撃されただけ……
実際はエンジェモン自体が出していたスピードの分、遥かに威力が上がっているが、
実際はただそれだけ。

僕はこの瞬間に自分の中にある仮定ができた。

奴は自分よりも強い奴と戦い慣れてるのではないか、と……

そんなことはありえない。
あんなに強い男が苦戦するほどの奴がいたらゲンナイさん……
デジタルワールドの守護者たちが気が付かないはずがない。

……僕たちに知らされないはずがない……
その時はそう思って、この考えを心に閉じ込めた。

しかし、この閉じ込めた考えが再び出てきたのは奴とメガドラモンとの戦いだった。

僕たちが敵わない完全体相手に僕たちが来るまでたった一人で戦い、そしてそんな状況でもいくつもの戦略を考えだす……

さらに僕たちが一つも思いつかなかった作戦を奴は4つも思いついていた。
そのうちの一つは出会った時点で逃げるという選択肢だった。

もし仮に僕たちが逃げていても、男は負けることはなかっただろう……
いや、もしかしたら一人で勝っていたかもしれない……

そんな男に僕は恐怖した。

奴が本気で僕たちを消そうとすれば簡単に消すことが出来るかも知れない……

僕はそれを理解したとき決意した。

少しでも奴の考えが分かるよう……少しでも奴に対抗できるよう……
……奴を倒せるように僕が……

僕はそんな決意を胸に秘めながら、森の上を飛ぶカブテリモンの背中の上で、

戦いに使えそうな作戦を考えていた。

第二十六話　選ばれし子供たちの決意（前書き）

ひ、評価が５０越えだと・・・！？

いつも評価をくださっている方、本当に有難うございます！！！

私の小説が５０を超えるなんてはじめは夢にも思いませんでした！！！

そして今回もすいません・・・・・・

今回の話も話していてばっかです・・・・・・

次からは当分はこんな風に話すことはなくなると思います・・・・・・

・

第二十六話　選ばれし子供たちの決意

空に気味が悪い雲が浮かぶ中、森の上を飛ぶ複数にデジモンの上に選ばれし子供たちは乗っていた。

子供たちの顔にはいつものような明るい表情を浮かべておらず、誰が見ても緊急事態だと感じ取れるほどの空気を出していた。

選ばれし子供たちがムゲンマウンテンに向かって数分、前方には先程よりも近くなったムゲンマウンテンがあった。

「……そろそろ目的地ですね……」

そんな中で光子郎は誰もが理解していることをあえて口にした。
子供たちはその言葉にそうねすね・・・などの言葉を前を向いたまま言った。
その様子は、どう見ても緊張をしている表情だった。

光子郎はそんは子供たちに何かを言おうとしたが踏みとどまった。
光子郎には見つからなかったのだ。今の子供たちにかける言葉を。

無理もないと光子郎は思った。
最近の自分たちはあまりにも不甲斐なさが目立ったのだから。

いや、それもあるかも知れないが、恐らく一番の理由は、
自分たちに異変を防げるか？　という思いだろう。

最近の子供たちは一体もデジモンを救うことが出来ていない。

むしろ目の前で無残にも砕け散ったデジタマを見すぎている。

そんな自分たちに自信が持てないのは仕方がないだろう・・・

デジタルワールドに行こうと一番に声を上げた大輔ですら……

結局、子供たちはムゲンマウンテンに着くまで一言も話すことはなかった。

「……着きましたね」

ムゲンマウンテンにたどり着き、山の中央辺りに着陸すると、
カブテリモンから降りた子供たちの中で初めに声を上げたのは光子郎だった。

ムゲンマウンテンの風景はいつもと変わらず、
デコボコとした地形、斜面にそこから生えるように置いてある
岩が道を険しくしており、登山には向かない地形だった。

しかし、いつもと違うのはムゲンマウンテンの上空が真っ黒な雲で覆われていた。
先程いた方を見てみると、そこの上空はいつもと変わらない青い空があった。

「……どうやら異変が起きているのは間違いなさそうですね……」

辺りを見回しながら大輔たちの返答を待つことなくそう言うと、
ムゲンマウンテンの頂上辺りを見上げた。

「……なにがあるかは分かりませんが、油断は禁物です。
全員固まって行動しましょう」

大輔たちが頷くと光子郎はカブテリモンたちにあまり高く飛ばず、自分たちを囲むようにいるように言い、ムゲンマウンテンを登り始めた。

「……俺たちは今回こそ選ばせし子供たちらしい行動をとれるのかな……」

「……どうしたんだ？　大輔。お前らしくないぞ？　パソコンルームでの言葉はどうした？」

「……俺らしくないのはわかってますよ、太一先輩……でも、最近の自分の活躍を考えると、どうしても自信が持てないんですよ……」

大輔の言葉に太一・・・いや選ばれし子供たちは黙り込んでしまった。

大輔の悩みはここにいる全員が悩んでいることだ。黙り込むのは無理もなかった。

「……なら皆さんはお帰りください」

光子郎の言葉に太一たちは驚愕の表情を浮かべた。

「今の皆さんは異変を抑えれると思ってはいません。

そんな人がいたら今回も僕たちは何も守れません」

「光子郎！　そんなことは俺たちだって分かってる！！
でも…「分かっていません！」！？」

「皆さんは恐れているだけです！　また目の前でデジモンの死を見ることを……」

光子郎の言葉を言い返せるものはここにはいなかった。
結局はそうなのだ。選ばれし子供たちはまだ子供。
目の前で本当の死を迎えるデジモンを
見たくないと思うのは当然なことなのかもしれない……

「……僕だって、そんな光景は見たくはありません……
でもそれと自分に自信が持てないのは関係ありません！！
僕たちは選ばれし子供です！　そんな僕たちが自信を持たなければ、
失う命があるんですよ……」

光子郎の最後の言葉に太一たちはハッとなった。
自分たちは選ばれし子供だ。自分たちははデジタルワールドを救うために選ばれた。
なら、そんな自分たちがしなければならないのは落ち込むことではない！

ほんの数週間前まで当たり前に思っていたことを大輔たちは思い出した。

「……そうだ……俺たちは選ばれし子供……なら俺たちはデジタルワールドを
何があっても救わなきゃならないんだ！」

「……そうだったな……それたちはそんな当たり前のことを忘れていたんだな……」

大輔がそういうと太一はそういって俯いた。
しかし、すぐに顔を上げ、先ほどまでの暗い顔が嘘なような
希望であふれている表情で言った。

「よぉ～し、デジタルワールドに起きている異変を全部解決して、
あの黒コートの奴をブッ飛ばすぞ！！！」

「「「おお！！！」」」

太一の決意表明に光子郎を含んだ全員が大声で賛同した。

「……この先が頂上だな……」

ムゲンマウンテンの頂上付近の岩の裏で太一はそう言った。

「はい。ここから先はこの山の頂上……昔、デジモンと戦ったところです……」

光子郎の言った言葉にタケルはピクリと反応したが、
すぐにごまかすように言った。

「……この先に異変の原因のデジモンがいるんですか？」

「……それは分かりません……でもこの先のゲートに出現していたゲートから何かが
来たのは間違いありません……」

光子郎はそう言いながらパソコンを開いてタケルたちに見せた。
ムゲンマウンテンの地図にある門のようなアイコンが赤く点滅していた。

「これは僕とゲンナイさんが作ったものです。
この門はゲートを表しています。そして赤いアイコンが……

「……ゲートから来たデジモンのことですね？」

「正解です、タケルくん。
つまりこの先にデジモンがいることはほぼ間違いありません！」

光子郎がそういうと大輔たちはそれを凄い、などと言って褒めるが
光子郎が

「……しかしこれは異変の近くに行かないと感知できません……
どうやらゲートが開くと、そこから妨害データがでてしまうようです……
そのせいで、ゲンナイさんとも連絡が取れませんし……」

光子郎はそう言いながらパソコンを閉じると大輔たちの方を見て言った。

「……皆さん、準備はよろしいですか？」

大輔たち、デジモンたちはその言葉に頷いた。

「……なら、行きましょう！」

光子郎がそういって一歩前に踏み出すと、
太一はアグモンをグレイモンに進化させた。

そして光子郎よりも先にデジモンたちが飛び出した。

第二十七話　成長する者（前書き）

前の話を投稿した次の日に評価を見てみると・・・・・・６０を超えていた！！！

お気に入りももうすぐ２０に・・・・・・

そしてユニークが２００００突破！！！！！

皆さん、私の小説をここまで読んでくれて本当に有難うございます！！！

そして新しく評価してくださったお方、
評価してくれてありがとう御座います！！！

これからも頑張って行きたいと思っているので、
応援をよろしくおねがいします！！！

あと感想もいただけたら嬉しいです！

第二十七話　成長する者

ムゲンマウンテンの頂上は火山が噴火したあとのようにてっぺんがなく、
大きな空洞になっている、そしてその空洞の中はゴツゴツとした岩が転がっている。

そんなムゲンマウンテンの頂上の中央・・・空洞の中心には暗黒の力を放つ、
ゲートが出現していた。

光子郎たちは山の頂上から中央を見つめた。

そこには3体のデジモンがゲートの近くに立っていた。

「あれは・・・タスクモンとサイクロモンに・・・レアモン!?」

伊織がそういってなぜここにいるか分からないという表情をすると
光子郎が説明した。

「……どうやらゲートを通ってこちらに来たようですね……
どれもこの辺にはいないデジモンですから……」

「なら話を聞いてみましょう！　もしかしたら間違ってこっちに来たのかもしれないわ！」

「……それは多分違うわ……」

「違うってどういうこと？　ヒカリちゃん？」

「……あのデジモンたちからは暗黒の力を感じるの……」

ヒカリは京にそう言った。
そうするとエクスブイモンが言った。

「大輔！　俺もそう思う。あいつ等からは闇の力を感じる……」

エクスブイモンはそう言いうと急に戦闘態勢をとった。

他のデジモンたちも戦闘態勢をとったので、何事だ、
と言わんばかりに大輔たちが周りをきょろきょろすると
カブテリモンが話してくれた。

「……どうやら向こうもこっちに気が付いたようでっせ！」

ガブテリモンはそういうとサイクロモンたちの方へと飛び去った。
他のデジモンたちも同様にサイクロモンたちの方へ向かった。

「……どうして子供がこんな所に・・・！　お前らは選ばれし子供たちか！？」

「そうだ！　大輔たちは選ばれし子供だ！」

エクスブイモンがそう言い、サイクロモンたちにゲートの方へ帰るように言うとサイクロモンたちが下品な笑い声を出した。

「ギャハハハハハ！！！　俺たちは運がいいみたいだな！こんなに早くに選ばれし子供たちに会えるとは！」

「どういう事だ！？」

「俺たちはな・・・選ばれし子供を消すために生き返ったのだ！！お前たちではないが、選ばれし子供には恨みがあってな・・・悪いが死んでもらおう！！！」

サイクロモンはそういうと口を大きく開け、エクスブイモンたちの方に向けて言った。

「喰らえ！！『ハイパーヒート』！！！」

「くっ！！」

それをエクスブイモンたちは飛行、グレイモンは横にジャンプする

ことで避けた。
その攻撃をまともに受けた地面は溶けていた。

「お前らはこの数の差が分かっているのか？」

「ハ！　お前らなんぞ成熟期３体で十分だ！！」

タスクモンはそう言いながら空中から着地しようとしているグレイモンに向かって走り出した。

『ホーンドライバー！！！』

「くっ！！」

グレイモンはそれをタスクモンの角を持つことで直撃を避けたが、タスクモンのあまりの突進の力にグレイモンは吹き飛ばされた。

「喰らえ！！！『トップガン！！』」

シルフィーモンは腕を前に出し、レアモンに向けて放った。
その攻撃をレアモンは避けることなく、直撃した。
レアモンは粉塵に埋め尽くされ、姿が見えなくなった。
シルフィーモンはそれに疑問を感じたがすぐにその場を離れようと

した、
すると、その中から声が聞こえてきた。

「グププププ！！！　オラにそんな攻撃は通用しない！！！！
オラを倒したかったら全員の一斉攻撃でもするんだな！！！！」

「なら同時に攻撃だ！！
行くぞシルフィーモン！！　『アラミタマ！！！』」

「分かった！　『トップガン！！』」

シャッコウモンがそう言うと両目から赤い光線を放った。
シルフィーモンもそれに合わせて自分の必殺技を放った。

その攻撃をまともに受け、再びレアモンは地面からでた粉塵に包まれた。

「今度こそやったか！？」

シルフィーモンがそう言うと再び粉塵の中から声が聞こえてきた。

「グププププ！！！　お前らは本当に完全体か？
二体がかりの攻撃でオラを消滅させることができないなんて笑えるんだな！」

その声を聞いてシルフィーモンとシャッコウモンは驚愕の表情をした。
自分たち二体の必殺技をまともに受けて
倒せない成熟期がいるとは思っていなかったんだろう。
その表情には絶望も含まれていた。

その戦いを遠くから見ていた子供たちも慌てはじめていた。

「どうするんだ!?
サイクロモンとタスクモンのコンビネーションのせいでこっちは攻撃できなくて、
頼みの綱のシルフィーモンとシャッコウモンもレアモンにダメージを与えることが
出来ないなんて……」

大輔が頭をかきながらそう言うと京が、
何かを思いついたのか、突然大きな声を上げた。

「！　そうだわ!!　サイクロモンとタスクモンは一先ず置いておいて、
まずレアモンを倒しましたらいいんだわ!!!」

京がそう言うと光子郎は首を横に振って言った。

「……それは出来ません」

「どうしてですか！？」

「此処からじゃ分かりにくいかもしれませんが、カブテリモンたちの表情を見てください。カブテリモンたちは既にサイクロモンとタスクモンのコンビネーションに避けるのに精一杯です。

サイクロモンたちを置いて行くなんて出来ません・・・・・・

そしてレアモンには『ヘドロ』という危険な技があります。

……ただでさえ強力なにおいの毒ガスを放っているレアモンのヘドロは

下手をすれば一撃で成熟期を倒す力を持っている可能性があります。

つまりシャッコウモンたち完全体二体で戦うのがベストです。普通は」

光子郎は最後の言葉を強調しながら言った。

その口元は少しだけ吊り上っていた。

「……普通は？」

「はい。普通はそうやって戦うのがベストでしょう。

……最近の僕なら確実にそうやって戦っていました……

でも、今は違います！」

太一の言葉に光子郎はそう答えると、
一歩前に踏み出して、右手を大きく上げた。

「さて今から反撃と行きましょうか」

光子郎は手を上げながら後ろの太一たちの方を向いて言った。

第二十七話　成長する者（後書き）

子供たちだけとかかなり書きにくいです・・・・・・

他のキャラが出る時と比べたら3倍ぐらいも書くスピードが違います・・・・・・

でも、子供たちも活躍させないと行けませんね・・・・・・

第二十八話　反撃開始！（前書き）

お気に入りがついに２０に！！！

そして評価が６０後半に！！！

ラッキー７７まであともう少し・・・

え？　７７７じゃないと意味が無いだって？

いいんですよ！　わたし的に７７でも縁起がいい気がしますし

第二十八話　反撃開始！

「・・・・・・どういうつもりだ？」

サイクロモンはエクスブイモンたちがとった行動を目にしてそう呟いた。
タスクモンとレアモンは口にはしなかったが、その表情にはサイクロモンと同じ疑問の表情をしていた。

エクスブイモンたちがとった行動は単純なことだった。
シルフィーモンとシャッコウモンがサイクロモンたちの方に行き、その代わりにレアモンの前にエクスブイモンが来ただけの単純な作戦だった。

「グプププ！！！　お前一人でオラを倒せるとでも思ってるのか？」

「それはどうかな？」

エクスブイモンはレアモンの言葉に短くそう答えると空に飛びあがった。
そして胸に刻まれたＸの文字を光らせた。

『エクスレイザー！！』

その攻撃をレアモンは避けることなくただ正面から喰らった。
先程のようにレアモンにはダメージがなく、相手もそれが分かっているのに
なぜ攻撃してきたのか疑問に思っていると地面から吹き荒れた粉塵で見えない
エクスブイモンが言った。

「お前なんて俺一人で十分だ!!!」

エクスブイモンがハッキリそう言うとレアモンはその言葉に怒りを覚えた。

「オラに挑発するなんていい度胸だな!!!
オラを怒られたことを後悔させてやるんだな!!!」

レアモンはそう言うと粉塵が晴れたと同時にエクスブイモンに
自分の必殺技であるヘドロを放った。

当然それをエクスブイモンは避けると再びレアモンに必殺技を放った。

「……どういうつもりだ?
本当にあいつ一体でレアモンを倒せるとでも思っているのか?」

「さあそれはどうかな？」

シルフィーモンはそういうと手の甲をサイクロモンに向けた。

『トップガン！！！』

「無駄だ！！！『ハイパーヒート！！！』」

シルフィーモンが放ったエネルギー弾をサイクロモンの
ハイパーヒートがぶつかりあった。

しかしパワーはサイクロモンの方が上のようで、シルフィーモンの
トップガンと
ぶつかると同時にトップガンを消し去り、
サイクロモンの攻撃はシルフィーモンに向かった。

「くっ！！！」

それをシルフィーモンは横にジャンプすることで避けた。

「クックック！！！　どうやら思った通り、
パワーも俺の方が上のようだな？　完全体！！！」

「……」

「おいおい・・・今度は無視か？」

「まだだ！！！　『アラミタマ！！！』」

「フン！　『ハイパーヒート！！』」

今度はシャッコウモンが必殺技を放つがそれをサイクロモンは自分の必殺技で打ち消した。

「クッッ！！！」

先程のようにサイクロモンの必殺技はこちらが放った攻撃を突き破り、
シャッコウモンに向かってきた。
それをシャッコウモンは避けようとするが、
体が重いためその攻撃を避けることが出来ずに直撃した。

「全く拍子抜けだな・・・・・全くこの程度とはな……聞いた以下の存在だな」

サイクロモンはそうシルフィーモンに言うと、

口を大きく開け、シルフィーモンに向かって必殺技を放とうとした。
しかし、先ほど自分が攻撃した地面の砂が粉塵のように巻き上がっている
場所に黒い影があるのに気付き、イラついた声でいった。

「ちぃ！　まだ生きていたのかよ……しぶとい奴だ。
　その分厚い体のおかげか？　まあどちらにせよこれで止めだ！
死ね！！」

サイクロモンはそう言ってシャッコウモンに自分で撃てる最高のエネルギー体を飛ばした。

ーーーこれで決まる

サイクロモンはそれを全く疑っていなかった。
先程の戦闘で、シャッコウモンたちは完全に自分以下だと思っているのだ。
つまり、勝利を確信している。
自分の最高の攻撃が防がれるわけがない・・・耐えれるはずがない・・・

サイクロモンはこの時シャッコウモンたちの戦闘で初めて気を抜いた。

……そしてサイクロモンの必殺技がシャッコウモンにあと数秒であたるという瞬間、
シャッコウモンは行動にでた。

サイクロモンの必殺技を腹部にある穴のような場所に吸い込んだ。

「！！！　なぁ！？」

サイクロモンが驚きの声を上げるが
シャッコウモンはそれを気にせず
頭部についている煙突のような場所から煙を噴き上げた。

「今だ！！！」

シルフィーモンがそう叫ぶと、
シャッコウモンとエクスブイモンとグレイモンを除く選ばれし子供のデジモンたちが
一斉にサイクロモンに各自の必殺技を放った。

「ぐぁあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

サイクロモンはその攻撃を避けることが出来ず、直撃した。

そして地面に倒れこみそうになるが、足に力を込めそれを防いだ。

シルフィーモンたちはこれを逃せばチャンスはないと思い、
それぞれの必殺技を放ち続けた。

「ちっ！」

タスクモンは舌打ちをしてサイクロモンの方を見たが、
助けようとはせず、
サイクロモンに攻撃しているせいで動けない
シルフィーモンたちに必殺技を放とうとした。

しかし攻撃は行われなかった。

なぜならシルフィーモンたちに攻撃を行おうとしたタスクモンを
グレイモンが止めたからである。

「くっ！！　お前は俺との力の差が分かっていないのか！？
さっき俺に吹き飛ばされたばかりだろうが？」

「さっきのは突進の助走があったから吹き飛ばされたんだ！
助走を行っていない今のお前の突進なら俺にも止めることぐらい
できる！」

グレイモンはタスクモンの角を持ち、タスクモンの突進を防いでい
た。

そしてサイクロモンはやがてシルフィーモンたちの攻撃に力尽き、

倒れた。
そして体から0と1の配列のデータが体から出現し、
それがひとつにまとまってデジタマとなる・・・・・と思われていた。

しかし実際はデジタマは出現せず、
0と1の配列のデータは黒いゲートに吸い込まれていった。

そのことにシルフィーモンたちは疑問を感じたが、
今はタスクモンたちを倒すのが先決だと思ってその考えを打ち消した。

サイクロモンがやられた事で一気に形成が悪くなったタスクモンは
自暴自棄になり、
光子郎たち選ばれし子供がいる場所に突進していったが、
その後ろ姿をシルフィーモンたちに攻撃され、
サイクロモンと同じように0と1のデータを体から出し、そしてそれは
ゲートに吸い込まれていった。

第二十八話　反撃開始！（後書き）

選ばれし子供たちの戦闘かきにくい・・・

書く気がでない・・・

でも頑張らないと・・・

第二十九話　驚愕（前書き）

更新できなくてすいません！！！

最近テストが近づいてきたことと、
悪魔のゲームのせいでなかなか更新できませんでした。

全くナ〇コめ！！！

・・・・・・言い訳すいません・・・・・・

更新はテストが終わってからにしようかな～と思っていたんですが、
評価を見てその考えは吹き飛びました。

８０点だと・・・・・・！？

少し見ないうちに評価が激増していてとても嬉しかったです！！！

なので、更新頻度は減りますが、
テスト期間中にもできるだけ更新できるように頑張ります！

第二十九話　驚愕

「ひ、ひぃぃぃ！！！」

仲間のタスクモンとサイクロモンを失ったレアモンは悲鳴のような声を上げた。

そしてシルフィーモンたちに背を向けて、ゲートの方に逃げた。

「……」

だがそれを読んでたのか、レアモンの前にエクスブイモンとグレイモンが現れ、
レアモンのゆく手を遮った。

レアモンは何とかしようとしばらく周りを見渡して何かないかと探した。

しかし、すぐにシルフィーモンとシャッコウモンとカブテリモンが追い付いてきた。

「……お、オラはただ間違えてゲートをくぐっただけなんだな！」

「……お前は確か選ばれし子供たちを殺すとか言ってなかったか？」

「あれはあいつらが勝手にそう言ってただけなんだな！！！
オラは関係ない！！！」

レアモンは腕を使いながら必死にそう言った。
その姿があまりにも必死だったので、エクスブイモンたちはどうするか迷ったが、
そこに後ろの方にいる子供たちのうちの一人の声が聞こえてきた。

「お～い！！！　レアモンは見逃していいぞ～～～～！！！」

遠くの方で大輔がそう言ってるのが聞こえてきた。
そしてその後ろには光子郎が少し微笑んだ顔でこっちを見ていた。
どうやら見逃すのは全員が納得してるようだとシルフィーモンたちは理解した。

そしていまだに必死に言い訳をするレアモンの姿を見て、
シルフィーモンはため息をつきながら言った。

「……どうやら選ばれし子供たちは君のことを見逃して構わないと言っているぞ」

「！！！　本当なんだな！？」

シルフィーモンの言葉を聞いてレアモンは頭を上げてうれしそうな顔でそう言った。

「私たちもそれについては納得している。……だがその代り……
「分かったんだな！！！
もう選ばれし子供たちの前には二度と会わないと約束するんだな
！！！！」

シルフィーモンの言葉を遮るようにレアモンはそう言って頭を下げた。

シルフィーモンたちは別に二度と会わなくていいんだが、と思いながらも、
レアモンにもう危険がないと思い、レアモンにゲートに向かうように言った。

その言葉にレアモンは逃げるようにゲートの前に走っていき、そしてゲートの前で
立ち止まった。

シルフィーモンたちはその動作に疑問を感じて質問しようとしたが、その前にレアモンが背を向けたまま言ってきた。

「……もう、オラと選ばれし子供は二度と会わないんなんだな……」

レアモンは小さな声でそう言った。

「……なぜなら、選ばれし子供たちは……」

レアモンがゆっくりとこっちを振り向きながら言った。

「ここで死ぬんだからな！！！」

レアモンは先ほどのような弱弱しい態度が嘘のようにそう言った。
そしてすでに発射準備が整った口のヘドロを
シルフィーモン……選ばれし子供の方に向けた。

『ヘドロ！！！』

レアモンの口から圧縮されたヘドロが発射された。
そのヘドロは寸分の狂いもなく、大輔たちの方へと飛んで行った。

「！！！　ダイスケけえぇえええええええええええ！！！！」

エクスブイモンはヘドロを発射され、
それが大輔たちに向かってると理解したと同時に真っ先に飛んだ。
他のデジモンたちもそれぞれのパートナーの名前を叫び、
飛べる者はエクスブイモンと同じように飛んで行った。

「グプププ！！！　今更行っても間に合わないんだな！！！」

レアモンはエクスブイモンたちの行動を嘲笑いながらゲートの中へと消えていった。

「！！！　皆さん！！！　攻撃が来ます！！！　今すぐ逃げてください！！！」

遠くからではレアモンの攻撃は見えにくかったが、
レアモンのこっちに向けての攻撃動作とデジモンたちの必死の声でこっちに
攻撃が来ていると瞬時に判断した光子郎は大輔たちに大声でそう言った。

その声に大輔たちは表情を変えながらも、
必死にレアモンの技の効果範囲から逃げようと走った。

しかし、ここは山だ。足場は通常の地面と比べて圧倒的に悪い。
そこに突然死が迫ったのだ。
何時ものように動けるはずがなかった。

「きゃあ！！！」

大輔の後ろの方から声が聞こえてきた。
後ろを振り返ってみるとそこには地面と平行になっているヒカリの姿があった。

「！！！　ヒカリちゃん！！！」

大輔はすぐにヒカリの元へと駆け寄った。
そしてヒカリを立たせてそこを去ろうとしたが既にレアモンの攻撃は大輔たちのすぐそこにまで迫っていた。

「くっ！！」

大輔は今から逃げても間に合わないと悟り、ヒカリを覆うように抱きしめ、
レアモンの攻撃が直接当たらないようにした。

「「「ダイスケぇえええええええええ！！！！！！！！」」」

後ろの方と前の方からそれぞれ大輔を呼ぶ声があったが
大輔はそれに答えず、目を思いっきりつぶった。

誰もが大輔とヒカリの死を想像した。
大輔自身もそれを想像した。

ここから行ってもエクスブイモンたちは間に合わない。
もちろん太一たちもだ。

攻撃が風を切る音を感じながら大輔は時期にくる痛みを覚悟した。

『守護方陣(しゅごほうじん)！！！』

しかし、空の方から何かが叫ぶ声が聞こえてきた。

そしてすぐに何かと何かがぶつかる様な音が響きわたった。
やがて音が止むと、大輔は眼を開け、ゆっくりと後ろを振り向いた。

「！！！　お前は！？」

そこにいたのは黒いコートをまとった者だった。
何時ものように深くフードを被っているせいで全くみえない顔。
全身が真っ黒でまるで闇を連想させるような姿をした者。
そして何時ものように右手に握られた漆黒の……？

そこで大輔は疑問を感じた。

男の手には何時ものような漆黒の鍵の剣が握られておらず、代わりに持つところ以外が真っ白な鍵の剣が握られ、地面に突き刺さっていた。

そして黒コートの者の足元は魔方陣のようなものが展開されていた。

大輔は改めて周りを見回した。
そしてあることに気が付いた。

「結界・・・？」

黒コートの者を中心に大輔とヒカリを包むように光の結界が展開されていた。

「綺麗……」

いつの間にか大輔の腕から離れていたヒカリが結界を見てそう言った。

「……」

黒コートの者が地面からキーブレードを引き抜くと結界は消えた。

「……お前は……

「「「大輔！！！」」」　「「「ヒカリちゃん！！！」」」

大輔が黒コートの者に何かを言おうとすると、
後ろの方と前の方からそんな声が聞こえてきた。

大輔とヒカリは自分たちに集まってきた仲間たちに心配をかけさせたなどと怒られた。

そしてしばらくすると光子郎が黒コートの者に質問してきた。

「……どうしてあなたは大輔君たちを助けてくれたんですか？
それにその手に握られているのは……」

光子郎がそういうと大輔とヒカリを除く子供たちが驚愕の声を上げた。

「それはキーブレード！？
でもいつもみたいに黒くない……ってことは光のキーブレード！？」

京がそう言うと、今度は太一が言ってきた。

「……どういう事だ？　お前が持っているのは闇のキーブレードのはずだ！
それなのにそれはなんだ！？」

太一が黒コートの者に向かってそう言うと、
黒コートの者は大輔たちの方に体を向けて言った。

「……どういう事って、どういう事ですか？」

太一たちはそれを聞いて驚きの声を上げた。
正確にはその言葉では無い。

黒コートの者の声は何時もの奴と全く違う声だった。
その声は何時ものように何か悪意のこもった声ではなく、
人間でいう、小学５年生くらいの声変りをしていない男の声に近かった。

「……お前、何時もの奴とは違うのか？」

「……何時もの奴とは？」

男は少し首を傾げながら太一の質問にそう返した。

「……どうやらあなたは奴とは別人のようですね……」

太一が返答に困っていると後ろから光子郎がそう言いながらこっちに向かって歩いてきた。

そして太一の横で止まると男に向かって言った。

「……今回は大輔君たちを助けてくれてありがとうございます」

光子郎が頭を下げてそう言うと男が言った。

「……別にお礼を言う必要はありません。
僕が助けたかったから助けただけなので……」

男がそう言うと光子郎は頭を上げた。

そして先程から話しかけようとしていたヒカリに男は気が付き、ヒカリに向かって言った。

「……どうしたんですか？　僕に何か言いたそうな顔をしていますが……」

男の言葉にヒカリは一瞬ためらったが、すぐに言ってきた。

「……助けてくれてありがとう……あなたが助けてくれなかったら私たち・・・・・・」

ヒカリはそこまで言うと急に俯いた。

先程まで死が目の前まで接近していたのだから無理もないだろう。

男はため息をつくとヒカリに向かって言った。

「……僕に感謝するのはもういいんです。
……でも僕より先に感謝する相手がいるんじゃないんですか？」

男がそう言うとヒカリはハッとなった。

自分を初めに助けてくれた大輔のことを思い出したのだ。

自分がこけた所に走って来てくれて、そして庇おうとしてくれた存在を……

「大輔君……助けてくれてありがとう！」

ヒカリは心から笑顔でそう言った。
その表情を直接向けられて大輔は顔が真っ赤になっていた。

第三十話　黒コート（前書き）

最近投稿できなくてすいません・・・・・・

時間がないのもありますが、
一番の理由は思ったように小説が書けないことです。

なので次からは一人称？　をメインに書いていきたいと思います！

第三十話　黒コート

「……では僕はこれで……」

男はそう言うと大輔たちに背を向けた。
その先を見据えているのは先ほどレアモンが入っていったゲートだった。

「待ってください！！！」

光子郎は男が去るのを止めた。

男は体を前に向けたまま、フードで隠れた顔をこちらに向けて言った。

「……まだ僕に用があるんですか？
出来れば手短にお願いしますよ……」

「すいません……まだ貴方には聞きたいことが幾つかあるんです……」

光子郎はそう言うと一端一息おき、
そして何かを見さざめるような目で男に言った。

「……貴方はどうしてその闇のコートを着ているんですか？
それは闇の存在が好んで着るもののはずです。
……それに貴方は別に悪いことをしている訳でも無さそうです…
…それなのに
どうして顔を隠しているんですか？」

光子郎の言葉に子供たちとデジモンは頷いた。
光子郎の言う通り、男が黒いコートを着て、顔を隠す必要性が分からないのだ。

男はその質問に少しだけ黙ると、話し出した。

「……このコートは闇に飲まれるのを防ぐために着ています」

「「「闇に飲まれない為!?」」」

「……はい……。僕は分け合って闇が強力な場所によく行くんです。
その時にこのコートが無いと数回ならまだしも、
何度も通る場合は危険なんですよ」

「……闇の世界……」

「……その通りです……。
闇の世界は危険な場所が多い……なので少しでも危険を減らすため
このコートを着ているんです。
……僕以外にもこのコートを着ている者は沢山いますよ？」

男はタケルの呟いた言葉にそう説明するした。
そして光子郎はというと、まだ納得していないらしく腕を組んで何かを考えていた。

「……ならあなたと同じ黒いコートを着ていて、
闇のキーブレードを持っているデジモンを知っていますか？」

「……闇のキーブレードを持った、デジモン？
……知らないですね……」

「そうですか……」

光子郎は男の言葉に落ち込む様子もなく答えた。

「……そろそろ行きますよ。　これ以上はアイツを逃がしてしまいそうなので……」

男はそう言うと再び戦法を向き、光子郎たちに背を向けた。

「待って！！！」

ヒカリがそう言って男を呼ぶと、男は振り向かずに言ってきた。

「……貴方たちはこの異変にかかわらない方がいいです。
解決するまでデジタルワールドには来ないことをお勧めします……」

男はそう言い残すと、ゴツゴツした足場の地面を大きく踏み込んだ。

足場が悪いはずの道を男は止まることなく走っていた。
そしてゲートの前まで行くと、男はそのまま入っていった。

その様子を子供たちとデジモンはただジッと見ていた。

「……光のキーブレードを持つものか……」

子供たちはあれからゲートの前まで行き、中に入ろうとしたが見えない壁のようなものにゆく手を遮られ、結局中に入るのを諦めた。

その後これからどうするかという話になり、光子郎がゲンナイさんに会えば何かわかるかも知れない、という事を言い、その意見に光子郎以外も納得したため子供たちゲンナイさんの家に向かった。

「……何か心当たりはありませんか？」

顎に手を付けて考え込んでいるゲンナイに光子郎はそう尋ねた。ちなみに光子郎たちとデジモンはいくつもの大きなソファーに腰を掛け、そのソファーに取り囲まれているかのような場所にゲンナイは立っていた。

「……すまないが私はキーブレードに関することは伝説くらいしか知らないんだ。
私自身もキーブレード使いなど見たこともない……」

「そうですか……」

子供たちの中の誰かがそう返すと子供たちとデジモンは大きなため息をついた。

ゲンナイさんなら、と思ってここに来たのだから落ち込むのも無理はない。

ゲンナイはだが、と話を続けてきた。

「……恐らくそのデジモンはこの世界……いや、
少なくともこのエリアのデジモンではない」

「……どういう事ですか？」

「……あのゲートを調べて分かったことがある。
まず一つは、あのゲートは別のデジタルワールドにつながっているという事だ」

「「「別のデジタルワールド？」」」

「ああ。だから私たちには通ることが出来ないのだろう……」

「なら、闇のキーブレードの男も別の世界のデジモンってこと？」

「おそらくは」

京の質問にゲンナイはそう答えると先程よりも力のこもった表情で言った。

「……そしてもう一つ分かった事だが、
もしかしたら君たち選ばれし子供たちもそのゲートを通ることができる
方法が分かったという事だ……」

ゲンナイの言葉に子供たちは歓喜の表情を表に出した。

「それは本当ですか!?　ゲンナイさん!?」

大輔が歓喜の表情でそう尋ねるとゲンナイは強張った表情でああ、と答えた。
その態度に光子郎は何かを感じ取ったのか、
ゲンナイにこう尋ねた。

「……何か問題でもあるんですか?」

光子郎の質問にゲンナイは少し暗い表情で話し出した。

「……その方法には協力者が必要なんだ。……キーブレードを持った者のな……」

第三十一話　動き始める状況（前書き）

題名が思いつかなくなってきました・・・・・・

ネタバレにならないように、できるだけ本編に関係する題名を考えるのは
そろそろ限界かもしれません・・・・・・

それと一人称?はとても書きやすいですね！

選ばれし子供たちしか出ない話でも書きやすいです！

第三十一話　動き始める状況

ｓｉｄｅ光子郎

あれから僕たちは少しゲンナイさんと話した後、
リアルワールドに戻った。

「はぁ・・・せっかくゲートを使って敵の本拠地を直接叩けると思ったのにな……」

大輔君は一人そうため息を付いていた。
僕もゲートを通るにはキーブレードが必要と知った時には正直ガッカリしました。

今、確認できているキーブレード使いは2体だけです。
そしてゲンナイさんの話とキーブレードの入手条件から考えて、
他にキーブレード使いがいないでしょう……
仮に居たとしても、恐らくその方と僕たちは会うことはないでしょう……

なら必然的にキーブレード使いは二体になります。
しかし、ここに問題はあります。
まず闇のキーブレードを持つデジモン……奴は平気で他のデジモンを殺す、
外道です。そして頭がとてもいい……
自分から危険な事に関わらないでしょう……
それに奴の性格から考えてただで僕たちに手を貸してくれないでし

ょう。

……僕たちにはそんな対価を払えるものはありません……

そしてもう一体のキーブレード使い……光のキーブレードを持つデジモン……

彼は恐らく光のデジモンでしょう……

それは彼のキーブレードが証明してくれます。

彼にゲートのことを話せば手を貸してくれるかも知れません。

しかし、彼は僕たちにもうデジタルワールドに来ない方がいいと言ってました。

恐らく僕たちを巻き込んで敵の本拠地に行こうとしないでしょう……

何より彼と連絡を取ることは出来ません……

……まさに八方ふさがりですね……ハァ……

「どうしたんだ光子郎？　ため息なんかついて」

僕が顔を上げると太一さんが僕を見下ろすような体制で僕を見ていた。

どうやら僕は思考の世界に入っていたようだ……

窓から見える風景が先程見た時よりも赤く染まっているのがよくわかる。

「すいません太一さん。少し考え事をしていました……」

僕はそう言いながら足に力を込めて立ち上がった。

「お前が考えていたことはゲートの事だろ？
……俺たちだけじゃゲートを通れないなら
キーブレード使いの力が必要だがそれは……」

「……ほぼ不可能ですね……」

僕は太一さんの言葉を遮るようにそう言うと僕と太一さんは小さくため息を付いた。

「……とりあえず今俺たちに出来ることは
デジタルワールドの調査と警備、くらいだな……」

「……はい。それ以外は少なくとも今は思いつきません……」

僕と太一さんは今できることを確認したが、
今まで道理のことしか出来ないと分かってしまい、再びため息を付いた。

「光子郎さん！　太一先輩！
そんなため息ばかり付いてたら幸せが逃げちゃいますよ？」

「京さんの言う通りです！　物事はポジティブに考えましょう！」

京さんとホークモン……ポロモンがそう言ってきた。

「……そうですね。
ため息ばかり付いてもないも変わりませんね」

僕はそう言って京さんに笑顔を向けた。

……とりあえず今は僕たちに出来ることをやりましょう

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ大輔

あの戦いから一日たった次の日、
俺は学校の教室の中にいた。

「今日からはデジタルワールドの調査と警備をしないとね」

「……それは前からやってただろ？」

タケルがそう張り切っているが俺は自分の机にぐったりと倒れこんでいた。

「それはそうだけど、今は私たちにはそれぐらいしか出来ないの・・・・・」

ヒカリちゃんが俺の机の横に来てそう言ってきた。

「それはそうでけど俺はさ、
何かドンと一発で解決できるような事をしたいんだよな～」

「はいはい。そんな方法あったらいいね」

「ふふふ！　そうね」

俺の言った言葉をタケルとヒカリちゃんが呆れるように言ってきた。
分かってるんだよ。俺にもそんな方法はないってことは・・・・・・・
でも今のままじゃ何も解決なんてしないんだ！
・・・・・・何かいい案ないかな・・・・・・

「そう言えば秋山くん、ここ最近学校を休んでるね・・・・・・・何かあったのかな？」

タケルがそう言って急に話題を変えてきた。

……確かにここ最近秋山は学校に来てないな。
多分2、3日は来てないな。
何かあったのかな……

俺達が秋山について考えていると学校のチャイムが鳴った。

席に座っていないタケルとヒカリちゃんは急いで席に戻っていった。

「起立！！！　　礼！！！」

「「「おはようございます！！！」」」

「着席！！！」

……結局秋山は今日も休みか……本当に何かあったのか……？

俺がそうやって考え込んでいるとそこに……

バン！！！

「痛ってぇ！！！！！！！」

「さっきから呼んでるだろ！　本宮！」

俺の頭に出席簿が叩きつけられた。

本気で痛い……

クッソ……クラスの奴らの殆どが笑ってやがる……

あ！　タケルも笑ってやがる！！！

クッソ……後で覚えてろよ……

俺がそう思いながらタケルを睨んでいるとタケルは手を横に挙げてやれやれと

言わんばかりに手を振りやがった！

……マジで後で覚えてろよ……

「はい！　本宮大輔います！！！」

「いるなら最初から返事をしろ！」

は～いと俺は返事をすると先生はブツブツ言いながら教卓へ戻っていった。

そして俺のせいで止まっていた出席確認の続きを始めた。

「……よし。今からホームルームを始める！

……だがその前に一つ言っておかないといけないことがある。

秋山は家庭の事情で転校した。

突然だが家庭の事情じゃ仕方がない。

本人も別れの挨拶が出来なくて残念がっていた」

秋山が転校だって！？

……それは本当に家の事情なのか？

とりあえず後で光子郎さんに報告しないと……

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ光子郎

「秋山君が転校ですか？」

僕がパソコンルームに入るとそこには
何か慌てている様子の大輔君がいた。
大輔くんは僕が来たことに気づくと同時にその事を言ってきた。

「家庭の事情って言ってたけど絶対に違いますよね！？」

「……大輔君の言う通り、十中八区違うでしょう」

普通転校するのには幾つかの手続きが必要なはずだ。
それなのに来て数日で転校なんておかし過ぎる……
恐らくデジタルワールドの異変と関係しているでしょう……

「……それで秋山君が何処に転校したか知ってますか？」

「……先生に聞いたんですが知らないらしいです」

僕の質問に大輔くんではなく、タケルくんが答えてくれた。

……やはり怪しいですね。担任の先生にすら転校先が知らされていないなんて……

「……賢なら何か知ってるんじゃないか？」

僕と一緒に教室に入ってきた太一さんが言ってきた。

確かに秋山君と一乗寺君は昔からの友達のはずですから何か聞かされていてもおかしくありません。

「今日はデジタルワールドには行かず、一乗寺君の家に向かいましょう！」

僕の言葉に皆さんは賛成してくれた。

……連絡を取ればいいという意見も出たが、
最近の一乗寺君のデジタルワールドの出席率から考えて、
恐らく彼は暗黒の種子の影響を受けている可能性が高いので、
様子を見る必要もあったので直接あった方がいいと言うと、
納得してくれた。

第三十二話　一乗寺賢の判断（前書き）

こっちの小説がまだ終わっていないのに
次の小説を投稿してしまいました・・・・・・

一様向こうはこっちが行き詰まったときに書こうと思っています・・
・・・・

予定では向こうは３０話から５０話ぐらいまでで終わると思います・
・・・・・・

第三十二話　一乗寺賢の判断

ｓｉｄｅ大輔

俺たち、タケル、ヒカリちゃん、伊織、京、太一さん、光子郎さんとそのパートナーデジモンは賢の家に向かって歩いていた。
空の風景はまだ学校が終わったばかりなので青く、心地い風と日差しが
俺たちを差していた。

「……賢、大丈夫かな……」

俺は心配になって小さくそう呟いた。

賢の暗黒の種子の力はどんどんあがってる……
もしかしたら賢はまたカイザーに……！
いや、それはない！！

賢はもうカイザーにはならない！！！　俺はそう信じてる！

俺はそう一人で小さくよし、と呟くと、
全速力で走って、目の前に見えてきた賢のマンションの入り口まで走った。

「俺が一番乗りだ！！！」

「あ！　待ってよ。ダイスケ～！！」

俺が叫んで走ると、後ろから必死にチコモンが俺を追いかけてきた。

その様子に太一さんたちは呆れていたけど、

俺は気にせずそのまま走って行った。

ピンポーン！

俺は賢の家のインターホンを押した。

しばらくするとはーいと、賢のお母さんの声が聞こえてきた。

そして賢の家の扉が勢いよく開いた。

「あら、貴方たちは賢ちゃんの友達の……

「本宮大輔です。あの～賢は居ますか？」

俺はがそう言うと賢のお母さんは少しだけ暗い顔をした。

「……賢ちゃんは家にはいないわ……」

「そうですか……なら何時ぐらいに帰ってくるか分かりますか？」

俺の言葉に賢のお母さんは黙り込んだ。
あれ？　俺何かいけないことでも聞いたのかな……？

「……賢ちゃんは当分帰ってこないわ……」

「……どういう事ですか？」

賢の母さんの言葉に光子郎さんが質問した。
賢が当分帰って来ないってどういう事なんだ！？

「……賢ちゃんはデジタルワールドを平和にするため、
リョウ君と一緒に旅に行ったわ……」

「秋山と旅にだって！？」

俺は余りの衝撃にかなりの声を出してしまった。
太一さんたちも声は出さなかったけど、
俺と一緒でかなり驚いた表情をしていた。

「……かえって来るのは早くても夏休み中ってリョウ君が言ってたわ……」

「……止めなかったんですか？」

「もちろん初めは止めたわ。
……でも賢君の真剣な目を見たら止めても無駄たと分かったの……
それに今回はちゃんと私とお父さんにちゃんと許可を取ろうとしてくれたの……
……私たちにちゃんと相談してくれたんだから、親としては背中を押して上げるのが優しさだと思ったの……」

ヒカリちゃんの質問に賢の母さんはそう答えた。

俺たちはその話をただ黙って聞いていた……

賢の奴……俺たちに何の相談もなくそんな大事なことを決めるなんて……

「……分かりました……じゃあもし帰ってきたらこの電話番号に電話していただけませんか？」

「分かったわ……」

光子郎さんはそう言って自分の電話番号を書いた紙を賢の母さんに渡した。

「……では僕たちはこれで失礼します……」

そう言って光子郎さんが賢の母さんに頭を下げて、エレベーターの方へ歩いて行った。

俺たちもまだ他に聞きたいことがあったが、光子郎さんの後を追いかけた。

「光子郎さん！　賢のことを聞かなくていいんですか！？」

賢のマンションの下で俺は光子郎さんに質問をした。

「他にも何か賢から聞いていたかもしれないじゃないですか！？」

「多分それはありません……」

俺の疑問に光子郎さんは答えた。

「……一乗寺君のお母さんの話からおそらく、
一乗寺君が旅のことを両親に打ち明けた時、
秋山君は一緒に居たはずです……
そして秋山君は僕たちを旅に誘わなかった……そしてその旅は最低でも
夏休み中……つまり最低でも後、一週間は帰って来ないという事

になります……
それは恐らく、危険な場所に向かうということなんでしょう……」
「なら、どうして賢だけ誘ったんだぎゃ～？」
「恐らく何か理由があったんでしょう……
その理由までは分かりませんが……」

光子郎さんの言葉に俺たちはその理由を考えたが全く想像もつかなかった。

「……推測でいいなら一つだけ理由が分かります……」
「それはホンマですか？　コウシロウハン！？」

テントモンの言葉に光子郎さんは小さく頷いた。

「……恐らく暗黒の種子が関係あるのではないかと僕は思います……」

「「「暗黒の種子！？」」」
「どうしてそう思うんですか？」
「……すいません……ただの勘です……」

京の言葉に光子郎さんは気まずそうに頭を下げてしまった。

「ま、とりあえず今からデジタルワールドで情報収集だな！
もしかしたら賢たちを見たデジモンがいるかもしれないし」

太一さんがそう言うと俺たちははい！と返事を返した。

第三十三話　消えた一乗寺賢（前書き）

最近評価が上がらなくなってしまいました・・・・・・

多分更新できなかったからでしょうね・・・・・・

と、そんなことは置いておいて、
やっとここまで書けました！！！

もうすぐ、新章突入です！！！

そこまで頑張って書いていきたいと思います！！！

・・・・・・それと出来れば書き方のアドバイスを頂けると嬉しいです・・・・・・

第三十三話　消えた一乗寺賢

ｓｉｄｅ太一

あれから俺たちはデジタルワールドで
賢たちを見たデジモンはいないかと探しまわった。

メンバーはさっき居たメンバーと、ソラ、ピヨモンが新しく加わっていた。
どうやら賢のことをメールで話したら、空から探せるデジモンがいた方がいいでしょ？
と、部活のテニスをさぼって手伝いに来てくれた。
……今年は最後の大会なのに……

「太一！！」

俺は呼ばれた方を向くと、そこには少しだけ怒った顔をしたソラが居た。
今俺、ソラ、アグモンはバードラモンの背中の上に乗って、空中から賢たちと、
賢たちを目撃したデジモンを探している。
アグモンは進化しても空を飛べない為、
空を飛べるバードラモンと組んで賢を探していた。

「……今私には最後の大会があるのに……ってこと考えていたでし

ょ？

うっ、どうやら俺の考えていることがバレている様だ……

「……だってそうだろ？　中学三年の大会は夏で最後なんだ。
それなのに……」

「……私は仲間が居なくなったのを無視してまでテニスはやりたくないわ。
太一だって最後の大会があるのにデジタルワールドを無視できないから
部活をさぼってデジタルワールドを飛び回ってるんでしょ？」

……なにも言い返せないな……

「私もそうしたかったけど、私は教育係的なポジションも担当してるから、
すぐには辞めれなかったの……
でも、それももうすぐ終わり！
私の役目を受けづいてくれる二年生の後輩が出来たの！
……だから今度からデジタルワールドに行くときは誘ってね？」

「……おう」

ソラが俺に向けた笑顔がかわいくて、俺は眼をそらして前を向いた。

side光子郎

sideout

「人間の子供を乗せた、スティングモンらしきデジモンを見た
デジモンが居たって本当ですか!?」

僕はパソコンルームのパソコン前で少しだけ大きな声で
伊織君にそう尋ねてしまった。

【はい。……どうやらそのデジモンと、
もう一体のデジモンはあのゲートの中に消えていったそうです……】

ゲートにだって!?　あのゲートはキーブレードの力が無いと開かないはず……
!?　まさかリョウ君のデジヴァイスにはそれを開ける機能があったのか!?……

「……すいませんがそのゲートの場所を教えていただけませんか?
今から全員を集めてそちらに向かいたいので……」

【あ、はい!　分かりました!!!】

……うかつでした……リョウ君のデジヴァイスが僕たちのと違うことを
すっかり忘れていました……

……とりあえず送らててきたデータを全員に送信しないと……

僕は伊織君の通信を切って、太一さんたちにその場所のデータと、一乗寺君がどうなったかを簡単に説明したメールを送った。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ大輔

「賢たちはこのゲートの向こうに行ったってことですか？」

「……そう言うことになりますね……」

俺は光子郎さんから送られてきたメールを見て、
急いでその場所にエクスブイモンで向かった。

そこにはすでにみんなが居て、全員が暗い顔をしてゲートの方を向いていた。
そして俺は光子郎さんに賢がそのゲートに入っていったかを確認すると、
光子郎さんは肯定の言葉を返してきた。

「……恐らくリョウ君のデジヴァイスでこのゲートを開けたと考えられます。
目撃したデジモンもキーブレードらしき鍵の剣は
持ってなかったと言っていたようです……」

・・・・・クソ！！！

秋山が俺たちと違うデジヴァイスを持っていたのは分かってたじゃねぇーか……！！
秋山が違うデジヴァイスを持っていたのを初めに知ったのも俺だ…

……！！！

……どうしてそのことに気が付かなかったんだ……

「とりあえず僕はゲンナイさんの所に向かいます。
……皆さんはどうしますか？」

「……ゲンナイさんになんかようなんだ？」

エクスブイモンが光子郎さんにそう尋ねた。
エクスブイモンの言う通り今、ゲンナイさんの家に向かうのは何か理由が
あるはずだ。みんなもエクスブイモンと同じようにそれが気になっていたようだ……

「……ゲンナイさんはキーブレードを使わずに
このゲートを超える方法を知っているかもしれません……」

「「「えっ！？」」」

「……この前のゲンナイさんの様子から、
ゲンナイさんは何か僕たちに隠している様子でした……
多分それがゲートを超える理由なんでしょう」

「で、でもそれならどうしてこの前その事を教えてくれなかったん

ですか？」

「本当の理由は分かりません……
でもそれは多分危険な方法だからなんでしょう……」

「「「危険な方法？？？」」」

京の疑問に光子郎さんはそう返した。
……危険な方法ってどういう事なんだ……？

「……詳しいことはゲンナイさんの家に向かえばわかると思います
……
それで皆さんは……聞くまでもなかったみたいですね……」

光子郎さんは俺たちの顔を見るとそう言った。
そしてカブテリモンの背中に乗って言った。

「……行きましょう！」」

俺たちはその言葉に頷き、それぞれここに向かった時に乗っていた
デジモンの背中に乗り、空からゲンナイさんの家に向かった。

第三十三話　消えた一乗寺賢（後書き）

空とソラがややこしい・・・・・・

第三十四話　残された方法（前書き）

皆さんにお伝えしなければならないことがあります・・・・・・

テストの期間が一週間を切るため、
更新頻度が激減するかもです・・・・・・

さて、物語ももうすぐ中盤?になります。

ここから先は一人称?ではなく、
３人称?（神からの目線?）で書いていくことが増えると思います。
なので、こうしたらいいという感想をいただけると助かります！

第三十四話　残された方法

ｓｉｄｅ光子郎

僕たちはゲンナイさんの家の前まで着くと、
デジモンの進化を解除してゲンナイさんの家に入っていった。
家の中にはいくつものモニターを見上げてみているゲンナイさんの姿があった。

ゲンナイさんは僕たちが後ろにいるのに気付いたのか、
ゆっくりと振り返って言った。

「……よく来たな。選ばれし子供たちとそのパートナーよ……」

「……ゲンナイさん。今日は用があってここに来ました……」

「……ゲートの先に行く方法か？」

ゲンナイさんは突然確信を付くようなことを言ってきた。
僕はそれに少しだけ驚いたが、
すぐに冷静になって言った。

「……やっぱりあるんですね。ゲートを超える方法が……」

「……ああ」

僕の質問にゲンナイさんは小さく答えた。

「ならどうして前来た時に教えてくれなかったの？」

アグモンの問いにゲンナイさんは黙り込んだ。

「……危険…だからですか？」

「……」

僕の問いにもゲンナイさんはすぐには答えなかった。

……しばらく沈黙が続いた後、ゲンナイさんはゆっくりと口を開いた。

「……光子郎君の言う通り、この方法は危険なんだ……、

いや、危険すぎる！！」

「……そんなに危険なんですか？」

ゲンナイさんの力のこもり過ぎた声を聴いて、

ヒカリさんはゲンナイさんにそう尋ねた。

「……この方法は確かに成功すればゲートの向こうの世界に行くことが出来る……
だが！、この方法を使って、ゲートを抜けようとすればほぼ確実に誰かを失うことになるだろう……」

「誰かを失うって！　そんな……」

「……残念ながら事実だ。
今の我々の戦力じゃ、それぐらいやらないと成功しない」

ゲンナイさんの余りの言葉に僕を含めた全員が固まってしまった。
……まさかそれほど危険な方法だなんて！……

「……その方法ってどんなことをするんですか？」

その中で、ゲンナイさんに質問する声があった。
……大輔くんだ！

「……この作戦を実行するつもりなのか？」

「……それは分かりません……だって、俺はまだその作戦を知らない！
それなのに聞く前から諦めるなんて、俺はしたくない！！！」

……大輔君の言うとおりだ。

僕たちは何をしているんだ！
まだその方法も聞いていないのに、ただ成功率を聞いて、勝手に絶望していた！
……そんなのは僕たち…いや、選ばれし子供たちらしくない！
僕たちは今までの冒険で、確立なんて気にしていなかった。
ただ、前に進んでいただけだった！

……本当に僕たちは聞く前からなに絶望しているんだろう……

「……それでゲンナイさん。その方法とはどんな方法なんだ？」

太一さんがゲンナイさんにそう尋ねた。
……どうやら皆さんも僕と同じ考えのようだ。

「……聞いたら後悔するだけかもしれないぞ？
なんせ、この作戦はやろうと思えばいつでも出来ることなんだから……」

「……出来る出来ないはとりあえず話を聞いてから決めることにします」

僕はゲンナイさんを真っ直ぐな瞳で見つめた。

ゲンナイさんは僕の目を数秒見つめ、そして辺りを見回した。
僕もゲンナイさんと同じように辺りを見回すと、
そこには僕と同じように真っ直ぐな目でゲンナイさんを見つめる、

太一さんたちが居た。

ゲンナイさんはそれを見ると小さくため息を付いた。
そして真剣なまなざしをして言った。

「……あのゲートは別の世界を繋ぐものだ。
あの先には別の世界が存在する……ここまでは分かるな？」

僕たちは勿論と頷いた。
……大輔君も大丈夫のようだ……

「……なら単純な話、
あのゲートを使わなくても別の世界にいければあのゲートを通る必要はない……」

ゲンナイさんはそこまで話すと一端息を付いた。
……確かに僕たちはあのゲートを通りたいわけではない……
ただゲートの先の世界に行きたいだけだ。
……でもそれは本当に可能なのか？
っと、どうやらゲンナイさんが続きを話し始めるみたいですね……

「つまりこの世界と向こうの世界を繋ぐ別の場所を通ればいい……
そしてその場所の名は……暗黒の海だ……
知っているだろう？」

僕たちはゲンナイさんの想定外の言葉に声を上げてしまった。
暗黒の海!?　ヒカリさんや京さん、一乗寺君が迷い込んだ暗黒の世界の事ですか……

「……暗黒の海は様々な世界につながっている……
だがあの場所は君たち選ばれし子供の力によって封じられている……
だが、逆に開けることも可能だ……」

「でも、そんなことをしたら……」

「もちろんそのことは考えている。
お前たち選ばれし子供がその海に入る時と
向こうの世界に繋がるゲートを発見した時だけ、封印を解くのだ……
……どちらにしても危険だがな……」

「で、でもあの世界には！……

「……デーモンが封じられているな……」

ヒカリさんの質問にゲンナイさんは小さく、そして力がこもった声でそう言った。

……一年前の戦いであまりにも強い力を持ったデジモン…デーモンを僕たちは暗黒の海に封じた……

……つまり暗黒の海にはデーモンがいるという事だ……

……なるほど……全員がたどり着けないとはこういう事ですか……

「・・・・・・デーモンは君たち選ばれし子供が束になっても倒せなかったデジモン。
・・・・・・前回のような作戦が使えない今、
君たちにデーモンを退ける方法はない・・・・・・」

・・・・・・その通りですね……
前回は一乗寺君のD3のおかげでデーモンを暗黒の海に封じ込めることが出来ました。
……だけど今回は一乗寺君がいないし、何より、戦う場所が暗黒の海ならば
別の場所に送ることもできない……

「……それで暗黒の海へのゲートはどうやって開くんですか?」

僕…僕たちはその言葉に驚きの声を上げ、それを言った人の方を見た。
……大輔君だ

「……分かってるのか?
暗黒の海に行くという事はデーモンと遭遇する確率が高い……
見つかれば終わりなんだぞ?」

「なら見つからなければいいだけです!

……俺は賢を探す方法があるのに黙って賢が帰ってくるのを待ってたりなんてできません！
……それに俺一人が行けば、みんなを巻き込むことに……

「大輔！！！」

大輔君が話している途中に太一さんが大きな声で大輔君の名前を呼んだ。

「……なに一人で解決しようとしてるんだよ？
ここにはこんなにも仲間がいるだろ？
……お前一人で何でも背負うんじゃねぇーよ……」

「……でも太一さん！　デーモンに見つかれば全滅なんですよ！？
それなら俺一人が……

「……それでもしお前がデーモンに殺されたら俺は……
俺たちはデーモンを倒しに暗黒の海に行くことになるな……」

太一さんは眼をつぶり、腕を組みながら困ったような表情でそう言った。
……太一さん…あなたは……

「……なら俺はお前と行くぞ！　後で追いかけるなんて嫌だからな」

「……太一さん……」

大輔君の目に少しだけ涙のようなものが見えますね……
だけど僕たちを忘れてもらったら困ります……

「太一さん。それには勿論僕も誘ってくれるんですよね？」

太一さんは少しだけ驚いた表情をしたがすぐにニッっと笑って言った。

「勿論だ。……頼りにしてるぞ！」

「ちょっと待った！！！」

その声に僕たち三人は驚いて声が聞こえた方……京さんの方を見た。
そこには僕たちとゲンナイさんを除く全員が
少しだけ怒ったような顔をしてこっちを見ていた。

「私たちを誘わないなんて大輔はいつからそんな白状な男になったの？」

「京……」

「太一先輩が言ったように私たちは仲間なの！！！

頼ってくれないと、悲しいわよ。
……それに私たちだって賢君をほっとけないのよ？」

京さんがそう言うと後ろの人たちもうんうんと頷いた。

「……それでどうする？
私たちも誘ってくれるの？」

京さんの問いに大輔君は小さくため息を付いた。
だけどすぐにうれしそうな顔をして言った。

「ならみんな……俺と一緒に賢を探しに行ってくれるか？」

「「「勿論！！！」」」

大輔君の言葉に全員が肯定した。

「……決まったようだな……」

「はい！　……俺たちは暗黒の海に行きます！」

ゲンナイさんはその言葉に目をつぶった。
そして険しい顔をして言った。

「……なら作戦決行日はどうする？」

「「「へ？？？」」」

「……君たちには学校というものがあるんだろ？
それとも、行ってすぐに一乗寺賢が見つかるとでも思っていたのか？」

ゲンナイさんの言葉に大輔君はうっっと声を上げていた。
……そう思っていたようですね……

「なら作戦決行日は5日後にしましょう。
その日には全員が終業式が終わって、夏休みにはいっています」

「でもそんなに時間がたったら……」

「……仕方がないんですよ……
もし僕たちが今暗黒の海に行ったとして、
一乗寺君がすぐに見つからなかったら、
またすぐに暗黒の海を通らなくてはいけません……
一度目でもデーモンに見つかる可能性が高いのに、
二度同じ日に同じ場所を通るのは得策ではありません……」

僕がそう言うと大輔君は渋々納得してくれた。

「……なら作戦実行は5日後でいいんだな？」

「「「はい！！！」」」

僕たちは大きな声で返事をした。

第三十四話　残された方法（後書き）

デジモンを話させる隙間が見つかりませんでした・・・

第三十五話　出動！　暗黒の海（前書き）

皆さんすいません！！！

テストのせいで全く更新できませんでした・・・・・・

テストは金曜日までありますが、
余裕ができてきたので、
もうすぐ2，3日に一回の更新に戻せそうです。

・・・・・後、小説の書き方を三人称に戻してみました！
何か悪いところや感想があれば書いてもらえると助かります。

第三十五話　出動！　暗黒の海

「……本当に行くんだな？」

選ばれし子供たちが作戦決行を決めてから五日がたった。
今日はゲートを開く約束していた日。
ここには賢を除く選ばれし子供たちが集合していた。

「勿論です！！！」

そう強く返事を返したのはこの作戦を決行する切っ掛けとなった少年…大輔だった。

「心配はいらないですよ」

大輔の返事を聞いても未だに暗い顔をするゲンナイに太一はそう言った。

「確かにアイツがやっていたデジヴァイスの変化をさせることは出来ませんでしたが……」

太一はそう言いながらも顔を少しだけ下に下げていた。

この五日間、太一たちとデジモンは何度もデジヴァイスを変化させようと
何度も挑戦した。
だが結局、黒コートの男のように変化させることは出来なかった。
場に一瞬沈黙の空気が流れた……
すると太一はだけど、と少しだけ大きな声でそう呟き、顔を上げた。

「俺たちにはそんな物がなくたって、こんなに仲間がいるんです！！
恐れる必要なんてないんです！！！」

太一は周りを見渡しながらそう言った。
周りには賢を探しに行くと伝えると自分も行くと、
言ってくれた仲間が……全員がそろっていた。

「そうよ！　それに私とミミが居れば、どんなデジモンも怖くないわ！」

植物の姿をしたデジモン……パルモンはパートナーのミミを見ながらそう言った。

「そうねパルモン！　私たちが居ればどんな事態も楽勝ね！」

パルモンの言葉を返すようにミミはテンションが高いまま、
大きな声でそう言った。

ミミも賢を探しに別のデジタルワールドに行くと伝えたら、私も行く！
と言ってきた者の一人であった。
基本的にミミは外国にいるため、
年に数回会うか合わないかぐらいでしか会えないが、
このどうやら向こうも今日から学校が休みなのか、一緒に行ってくれる事になった。

「……全くミミ君は変わらないな……」

ミミの様子にため息を付きながら丈はそう呟いた。
丈も有名な高校に行ったせいか、毎日勉強をする日が続いている。
それなのに賢のことを話すと丈は自分も行くと言い出したのだ。
太一たちは俺たちだけでも大丈夫と言ったが、丈は
「ここで一乗寺君のことを探しに行かなかったら、
僕は勉強に集中出来そうにないから……」と言ったので、
太一たちは丈を頼ることにしたのだ。

空やヤマトも同じような理由で一緒に来てくれることになった。
これで初代選ばれし子供は全員集合だ。
後ここに居ないのは賢だけだった。

「……最後にもう一度訪ねる。

本当にいいんだな？」

「「「はい！！！」」」

ゲンナイの警告に子供たちとデジモンははいと返した。

ゲンナイは子供たちの決意を感じたのか、
それともこれ以上言っても無駄だと思ったのかゆっくりと話し出した。

「……君たちの決意はよく分かった。
これ以上私が口を挟むのは君たちの決意を踏み握ることになるな……」

ゲンナイはそう言うとゆっくりと子供たちに背を向けた。

「……付いてくるがいい……」

ゲンナイの呟きに子供たちとデジモンは返事を返し、ゲンナイの後を追っていった。

「……ここは・・・・・・？」

子供たちの一人からそのような言葉が聞こえた。
誰が言ったかは分からないが、
その疑問は子供たちとデジモン全員が感じていた疑問だった。
その質問に答えるようにゲンナイはゆっくりと答えた。

「ここはゲートを安定して開けるために用意した場所だ」

へぇ～と子供たちは呟くと辺りを見回した。
この部屋の真中には大きな鏡のような物が置かれていた。
しかし鏡といってもその中にはガラスなどは無く、
空洞が開いていて、向こう側が見えるようになっていた。

「ここにあることをすることで暗黒の海へのゲートを開けることができる」

「・・・・・・そのある事とは？」

「光の選ばれし子供のデジヴァイスでこの空洞に光を当てることで

ゲートは開く。」

「私のデジヴァイスでこのゲートを開ける？」

ゲンナイの言葉にヒカリは首をかしげた。

「・・・・・どうして私のデジヴァイスで暗黒の海のゲートが開くんですか？
暗黒の海のゲートは一条寺くんのデジヴァイスでしか開けれないはずじゃあ……」

「確かに暗黒の海のゲートを封印したのは彼だ・・・・・・
だが、君のデジヴァイスには闇に対する力がある。
それを使えば一時的にゲートを開けることは可能だ」

ゲンナイの説明を聞いて納得したのかヒカリは自分のデジヴァイスを見つめだした。

ゲンナイはポケットから地図のようなものとＤ３のような機械を取り出した。
それを持って光子郎の前まで移動して、光子郎の前で差し出した。

「……そしてこれが向こうでゲートを開けるのに必要なものと、
その場所を示す地図だ。向こうに行くと自動的に起動するから、
その地図が示す周辺でゲートを開けるといい……
そうすれば無事もう一つのデジタルワールドに行くことは出来る

だろう……」

光子郎は地図と機械を受け取り、ゲンナイの説明に、はいと答えた。

「……健闘を祈っているぞ。選ばれし子供とそのパートナーたちよ……」

その言葉に子供たちとデジモンは元気よく返事を返した。

「じゃあゲートを開きます！」

ヒカリはそう言ってデジヴァイスをゲートに掲げた。
すると空洞にゲートが出現した。
ゲートから発生した光に子供たちとデジモンは包まれ、
光が消えるとそこに子供たちとデジモンは居なかった。

ゲンナイはその様子を静かに見守っていた。

第三十六話　手の上で踊る者たち（前書き）

あと・・・・・後少しで評価が１００に　ザワザワ・・・・・・・

そしてユニークも５０００超え！！！

ここまで読んでくださった方・・・・・・

ありがとう御座います！

第三十六話　手の上で踊る者たち

「ここが暗黒の海・・・・・・」

大輔は一人そう呟いた。
辺りは先程居た、デジタルワールドの、ような明るさはなく、
心を不安にさせるような暗さをした場所だった。

「・・・・・・暗黒の海・・・・・・前来た時と全然変わってないわ・・・・・・・」

ヒカリはポツンと呟いた。

ヒカリと京、テイルモン、ホークモンは
賢とワームモンと一緒にこの世界に迷い込んだことがあった。
迷い込んだ時、ヒカリは恐怖状態に陥って、まともな状態ではなくなっていた。

「・・・・・・ヒカリちゃん」

「・・・・・・大丈夫ですよ京さん」

京の心配をヒカリはうち笑うような笑顔を見せることでなくした。
当時、この場所でヒカリを支えたのは誰でもない京だった。
絶望の言葉をあげるヒカリを説教し、
そしてヒカリが一人ではないということを改めて教えた。

「私は闇だって照らせちゃう、光なんだから！」

「・・・・・・そうだったね！」

昔京に言われたことを今度は京に言うと、
京は小さく笑った.
ヒカリは心配しなくても大丈夫とおもったのだろ。

「皆さん。気をつけてくださいよ。
・・・・・・デーモンに見つかれば厄介なことになるので・・・・・・」

光子郎の言葉に全員がコクリと頷いた。

子供たちとデジモンはゲンナイさんがくれた、地図を頼りに進んでいた。
暗黒の海にはデーモンの気配はおろか、
デジモンの気配さえ全くなかった。
光子郎たちはそんな不気味な道をただひたすら、静かに進んだ。

……そしてしばらく歩くと広い場所に出た。

「……ねえ。コウシロウ。まだ着かないの？」

沈黙の空気が耐えられなかったのか、ブイモンは光子郎にそう尋ねた。

「後もう少しですよ」

光子郎は手に持っていた地図をブイモンに見えるように開き、
現在地と目的地を指差した。

「……意外と呆気なかったですね。
結局、デーモン所かデジモンにさえ一体も出会わなかったですし……」

伊織はため息を付きながらそう呟いた。

伊織はこの中では最年少の選ばれし子供だ。
だが、そうだと言っても考え方はこの中でもかなり大人だ。
それは家庭状況や彼の父の事のせいかもしれない。
……とにかく伊織の考え方は大人に近いと言ってもいい。
伊織は今の状況に不可解な気持ちを持っていた。
彼は気が付いたのだろう……余りにもうまくできすぎていることを……

他にもそれに気が付いている者も居たが、それはただうまく出来過ぎて、
ただ考え方が不安になっているだけだとその考えを切り捨てた。

「……もうすぐですね。
……一乗寺君が行った世界へと繋がるゲートの場所まで……」

タケルは質問もされていないのに、そう呟いた。
恐らく目的を口に出すことで、きちんと目的を確認しているのだろう。
その呟きが耳に入ったものは、真剣な表情になった。

「僕達たちはデーモンのことを経過しすぎたんだね・・・・・・」

パタモンはまた緊迫しはじめた空気を緩めるためか、
そう呟いた。

タケルたちはそれにそうだね、といった言葉をそれぞれ返した。
もうここまでくれば大丈夫……誰もがそう思い始めていたのだろう
……

『クックック……ワシがどうしたのだ?』

その瞬間、子供たちの時が止まった。
理解したくないのだろう……その言葉を放った者の事を……

「クックック……無視するとは酷いじゃないか……一年ぶりの再会
だというのに」

言葉を返さない子供たちに対して声の主はニヤついたような声で話し
出した。

「それとも忘れてしまったのか?
まあ無理もないな……人間にとっての一年はのそれなりの時間ら

しいからな……
　まともに話していなかったワシのことなど覚えていなくても無理はないだろう……
　どれ。自己紹介をするとしようか……」

子供たちの数十メートル先に姿を現したその者は、
子供たちの想像どうりの者だった。

「……デーモン……」

「クックック……覚えていたのか……それは光栄なことだ！」

子供たちの誰かが呟いた言葉に対し、
その者……デーモンはニヤ付きながらそう返してきた。

「ちきしょう！！！　後もう少しだったのに！」

大輔は心からそう叫んだ。
あと少しで目的地なのに……そんな思いが大輔の中で回っていた。

「クックック……そうだな。
　後もう少しで一乗寺賢がいる世界のゲートにたどり着けたのだったのだがな……」

「「「！！！」」」

デーモンの言葉に全員が驚愕の表情をあげた。
どうしてデーモンが自分たちの目的を!?
……そんな考えが子供たちも頭の中を回し始めた。

「……いつからですか?
いつから僕たちを付けていたんですか?」

そんな中光子郎はデーモンに尋ねた。

どういう事!? と声を上げる者も居たが、
それに言葉を返す余裕があるものは居なかった……

「……いつからだと!?
クックック……始めからだ。
お前らがこの世界にきた瞬間から、ワシはお前らの様子を見ていた!」

「……僕たちも目的を探るためですか?」

「ああ……。
無いとは思うがワシを倒しに来た可能性があったからな……
さすがに倒す準備をしているかもしれない者に
簡単には接触しようとは思わなくてな……
少々様子を見させてもらった……」

光子郎の問いに、デーモンはあっさりそう答えた。

子供たちはまさか最初から自分たちがデーモンの手の上で踊らされていたと知り、
絶望の表情が顔に表れ始めた……

「……さてと。
お前たちには一年前の借りを返さなくてはな……」

子供たちの様子にお構いなく、デーモンは戦闘態勢のようなものを取った。
その表情は、新しく手に入ったおもちゃでどうやって遊ぼうか考えているような表情だった……

「……ちきしょう!!!　やるしかないのか!?」

大輔はそう叫びながらポケットからＤ３を取り出した。

「無理だ大輔!!!　ここは引くしかない!」

「クックック……逃げ切れるとでも思っているのか?」

太一の叫びにデーモンは分かりきっていることを子供たちに尋ねてきた。

……今、デーモンから全員で逃げ切るなど不可能だ。
そんなことは全員が理解しており、
デーモンに直接そう言いかえされた太一はクッ！
と奥歯を噛みしめることしか出来なかった。

「クックック……。
お前たちが生きてここから出るにはワシを倒すほか存在はしない！」

「クソッ！！！　やるしか無いのか！？」

太一はそう叫びながらポケットからデジヴァイスを取り出した。
他の子供たちもそれぞれデジヴァイスを取り出した。

「ダイスケ……俺、頑張るよ！」

突然ブイモンが大輔の前に飛び出し、
そう言ってきた。

すると他のデジモンたちもそれぞれのパートナーの前に出た。
その目線はデーモンの方を見ていた。

「……私たちはパートナーデジモン……どんな時でもパートナーを守って見せる！」

テイルモンの言葉にそれぞれのデジモンが肯定の声をあげた。

「みんな……よし！　行くぞ！！！」

「「「おう！！！」」」

デジモンたちの言葉を聞いて、
消えかけていた闘志を再び燃え上がらせた子供たちは
デジヴァイスを握る手をさらに強く握って言った。

「「「進化だ！！！」」」

子供たちの言葉に反応するようにデジヴァイスは光を発生させ、
それぞれのデジモンを光で包みこんだ。

「アグモン進化・・・・・・

グレイモン！」

「テントモン進化・・・・・・

カブテリモン！」

「ガブモン進化・・・・・・

ガルルモン！」

「ピヨモン進化・・・・・・

バードラモン！」

「パルモン進化・・・・・・

トゲモン！」

「ゴマモン進化・・・・・・

イッカクモン！」

「ブイモン進化・・・・・・

エクスブイモン！」

「ホークモン進化・・・・・・

アクィラモン！

テイルモン、アクィラモン、ジョグレス進化・・・・・・

シルフィーモン！」

「アルマジモン進化・・・・・・

アンキロモン！」

「パタモン進化・・・・・・

エンジェモン！

エンジェモン、アンキロモン、ジョグレス進化・・・・・・・

シャッコウモン！」

成熟期7体と完全体二体になったパートナーデジモンはデーモンを睨みつけていた。

「クックック……少しは相手になってやろう……」

第三十六話　手の上で踊る者たち（後書き）

進化が長い・・・・・・他にもっといい書き方はないのか？・・・・

第三十七話　デーモン（前書き）

評価が１００突破・・・・・・・

・・・・・ついに１００突破しました！！！

はじめはどうせ私の作品なんて評価してくれない・・・・・・
っと思っていました。
だけど、ある日評価されているのを見てびっくりしました！

まあそれでも１００突破するなんて思っていなかったんですけど・・
・・・・

今回は文を細かくして見ました。
どうやらこうしたほうがクオリティが上がるらしいので・・・・・・
・・・・・・でも見にくくなっているかもしれません・・・・・・

その場合は感想で悪いところや改善点を書いてくれると助かります
！

第三十七話　デーモン

『メガフレイム！！』

グレイモンは戦いが勃発したと同時に
自らの最大火力の必殺技をデーモンに向けて放った。
それはデーモンに一直線に向かって飛び、
後僅かで直撃するという距離まで接近した。

だがデーモンはそれを避けようとはせず、
ただ薄気味悪い笑みを浮かべてそれを見ているだけだった。

そしてグレイモンの技がデーモンに直撃し、辺りに爆発音と粉塵が
舞い上がった。

だがグレイモンたちは相手が自分よりも格上だと理解しているため
か、
それで気を抜いたりはせず、他のデジモンとともに再び必殺技を放
ち続けた。

デーモンの姿は粉塵のせいで見えない為、
グレイモンたちの必殺技は先程デーモンが立っていた場所に向かっ
て放たれた。
そこに向かって放たれる必殺技はどうやら直撃しているらしく、
爆発音が次々と鳴り響いた。

その事実に誰もが疑問を覚えた。

デーモンがその気になればグレイモンたちの攻撃を避けるなど、造作もない……という事は、一年前の戦いで痛いほど身に染みている。
しかし、デーモンはそれを行っていない。
もしかしたら既に粉塵で全く見えない場所に立っているデーモンは偽物なんでは……
そんな考えが子供たちとデジモンの頭を回った。
しばらく技を放った後、子供たちはパートナーたちに撃つのをやめるように言った。
それにデジモンたちは驚いたりせず、すぐに撃つのをやめた。
誰もが不可解だと思っていたのだ。この状況を……
子供たちとデジモンはどこから現れるかと辺りを見回した。
粉塵の中にいるのはデーモンの偽物だと判断したためだろう。
そして、自分たちがエネルギーを使い果たした所に表れて、攻撃しにくる……
それがデーモンの作戦だと子供たちは判断した。
そして不快感を呼ぶような笑い声が聞こえてきた……粉塵の中から……

「クックック……もういいのか？」

デーモンは戦闘開始早々から一歩も動いては居なかった。

子供たちとデジモンはその事実に絶望したが、
すぐに思考を切り替え、
相手にペースを取られないようにするためか光子郎がデーモンに尋ねた。

「……どうしてカブテリモンたちの攻撃を避けなかったんですか？」

その問いにデーモンはニヤニヤとした表情で言ってきた。

「クックック……最初から一方的に倒すだけでは面白くもなんともない……
だから、私は、お前らにハンデを与えたのだ……
初めの攻撃は攻撃を防御することも避けることもなく、
受けるというハンデをな……」

その事実を聞き、子供たちは絶望せざるおえなくなった。

「……さて……
今度は私の番だ……精々楽しませてもらうぞ？」

それからは一方的な戦いだった……

デーモンは眼にも止まらぬ速さでグレイモンたちに接近し、
次々と攻撃を仕掛けた。

グレイモンたちも負けずに技を放つが、
先程とは全く違い、その攻撃が当たることはなかった……

デーモンが繰り出す攻撃をグレイモンたちは受け、そして立ち上がり、攻撃を放つ、
だがそれをデーモンは避ける……この繰り返しだった……

だがそれ以上に不可解なことがあった……

デーモンの攻撃はすべて直接攻撃のよるものであり、その攻撃がまとも命中しても、
グレイモンたちはふらつきながらも立ち上がることが出来ていた。

……つまりデーモンは手加減をしているのだ……今の状況を楽しむために……

しかし子供たちに出来ることは何もなかった……
今までの戦いでも子供たちが出来るのは応援することと
進化をさせることぐらいだったが、そのどちらも実行することは出来なかった……

……いや、応援することは出来ていた……だが、子供たちはそれをしなかった……
……子供たちは心の奥ではそれが意味のないことだと思っているのかもしれない……
今行われている戦いは今までに行われてきた戦いの中でも類を見ないほど、
圧倒的な状態だった……

パートナーデジモンは大半が自身の最大の力を発揮できる形態に

進化することが出来ない……
……仮に進化できたとしてもそれですらもデーモンを倒すこともできないだろう……

だが子供たちがデジモンたちを応援しない理由はほかにあった。
……それは純粋な恐れだろう。

目の前で大切な仲間が痛められている状況……
パートナーを失ってしまうかもしれない恐怖……
……子供たちにとっては自分がこの後どうなるかよりもそれが怖かった……

誰もがここに来たことを後悔した……
……いや、ここに来たことは後悔していなかったのかもしれない……
だが、もう少し準備をしていたら……
デーモンと遭遇した時の対処方法でも考えておけば……

そんな考えが子供たちの頭を回った……

そして目の前で何かが倒れるのが見えた。

「「！！！　シャッコウモン！？」」

「クックック……そいつの技は地味に厄介だったが所詮はその程度だ……」

子供たちの目線の先にはそれぞれのパートナーデジモンが映っていた……

その姿は先程のような戦闘に適した姿ではなく、
弱弱しく弱った幼年期デジモンの姿をしていた。

子供たちはそれぞれのパートナーの元に駆け寄った……

だがそれは足元の近くに放たれたデーモンの攻撃によって遮られた。

子供たちはそれに純粋に怒りを覚え、デーモンを憎むような目で睨めつけた。

「……ほぉー……こんな状況まで追い詰められて
まだそんな目を私に向けることが出来るのか……」

デーモンは感心したような素振りを見せた。

……しかし次の瞬間、恐ろしいほどの狂気を含んだ表情を浮かべた。

「クックック……私はお前たちの絶望した表情を見てみたくなったぞ！」

突然自分たちに向けられて言われた言葉は
先程話していた時とは明らかに何かが違っていた。

デーモンは近くに倒れていたチビモンに目線を向けるとニヤリと口元と緩ませた。

「お前たちを絶望に叩き落とす最高の作戦を思いついたぞ！」

デーモンは地面に倒れているチビモンに向かって腕を伸ばした。

その行動に子供たちはデーモンがやろうとしていることが分かった。

「やめろぉおおおおおおおおおお！！！」

その行動を理解したと同時に大輔はデーモンに停止の声を上げた。

だがデーモンがそんなことで止まるはずはなく、

逆にチコモンの方に向けられた腕に炎のようなものを生み出した。

炎は段々と大きさが増し、遂には大輔たちの身長ほどになった。

「グハハハハ！！！　死ね！！！フレイムインフェル……

『デモンズランス！！』

デーモンが必殺技を叫び終えるよりも前に空から何者かの声が響き、

デーモンの言葉を遮った。

そしてデーモンに向かって飛んできたのは闇をまとった槍のような

ものだった……

デーモンはそれを直視したと同時に、それが今まで戦っていたグレ

イモンたちよりも

遥かに危険なものだと、直感で判断した。

デーモンは余りにも突然のことで思考の世界に入りかけていた。
だが、すぐそこまで迫った闇の槍に気が付き、
デーモンはそれを最小限の動きで避けた。

だが、それが地面に直撃したと同時に闇の槍は大きな爆発を上げた。
デーモンはその爆発を喰らい、
その技の本当の強さは鋭く尖った闇の槍で相手を貫くのではなく、
槍が当たったと同時に巻き起こる爆発が本当の使い方だと理解した。

ｓｉｄｅ大輔

チコモンに放たれそうになったデーモンの技を見て、
俺はもうダメだと諦めてしまいそうになった……
誰が見ても分かるほど劣勢なこの状況……
俺たちにはすでにデーモンを止める力はなかった……
……いや……そんなものは初めから無かったのかもしれない。

そんなことを考えているとデーモンは自分の技を言い始めた。
俺はこれから起こることを想像してしまい、
思わず目をつぶってしまった……
そしてデーモンの技が言い終わる……直前に空から聞き覚えのある
声が響いてきた。
思わず俺は目を開き、その声の方を見た。
そこには真っ暗なコートを着た者が闇をまとった槍を投げつけている
ところだった。
その槍は真っ直ぐデーモンに飛んでいき、そしてデーモンのすぐ近
くまで接近した。
だがそれをデーモンは避けた。だけどそれと同時に闇の槍がすごい
爆発を発生させ、
デーモンを黒い炎で覆い尽くした。
それと同時に黒コートの奴は地面に着地した。
奴はちらりとこっちを一瞬振り向くかえると、
すぐにデーモンの方を見て、右手を横に挙げた。
それと同時に俺たちの足元に闇が発生した。
その闇は俺たちを少しずつ飲み込んできた。
俺たちは必死に抵抗した……闇に飲みこまれないために……
だが既に力を使い果たして倒れているチビモンたちにそんな力は無
く、

あっという間に闇の中へと飲み込んだ。

俺もみんなも自分たちを飲み込む闇に抵抗しながら
必死にチビモンたちの声を叫んだ。
だがそれに返事が返ってくることはなかった……

「てめぇ！！！　よくもチビモンたちを……！！！」

俺は黒コートの奴に怒りの言葉を叫んだ。

しかし黒コートの奴はそんなことも気にせず、すぐに言葉を返してきた。

「……チビモンたちは無事だ……
この闇は闇の回路だ……危険は無い……
だからお前たちも抵抗せずに闇に飲まれろ……！」

「そんなこと信じれるかよ！！！」

「そうだ！！！　こんな闇に危険が無いなんて嘘だ！！！」

「……速くしろ！
デーモンの動きを止めていられるものもう僅かだ！
……このままじゃお前たちはデーモンに殺されるぞ！？」

俺とタケルの言葉に対し、

奴は本当に時間が無いと言わんばかりの声でそう言ってきた……

……確かにこのままじゃ俺たちはデーモンに殺される……

……でもだからって闇に無抵抗に飲み込まれろと言われても無理だ！

俺たちは奴の言葉を聞きながら必死に闇から抵抗していた……

だが、後ろの方から誰かの声が聞こえてきた……

「……この闇は多分大丈夫……」

ヒカリちゃんは俺たちに聞こえるような声でそう言ってきた……

「大丈夫って！？　どうしてそんなことが分かるんだ？　ヒカリ？」

「……なんとなくそんな気がするの……
それにこの闇は大丈夫なんでしょ？」

「……ああ……今回のこの闇はお前たちに全く害はない。
約束しよう……」

太一さんの質問にヒカリちゃんは曖昧に答えて、それを奴が補足した……

「……貴方は嘘はつかなかった……だから私はそれを信じる！」

ヒカリちゃんはそう言うと今まで必死に抵抗していた動きをやめた。
それと同時にヒカリちゃんはあっという間に闇に飲みこまれてしまった。

その光景を見て俺たちはヒカリちゃんの名前を叫んだが、
先程同様、返事は帰って来なかった……

「！！！　速くしろ！！！　デーモンを抑えていた炎が消えかかっている！」

奴の言葉道理、デーモンを囲っていた黒い炎は消えかかっていた……
それを見て光子郎さんは決意したらしく、俺たちに言った……

「……皆さん！！！　……ここは彼を信じましょう！」

「光子郎さん！　でも……

「そんなことを言っている暇はありません！
……それに彼は嘘はつかない……
それだけは絶対に嘘ではないはずです！」

光子郎さんはそう言うと同時に動きを辞めた。
そして先程のように闇は光子郎さんをあっという間に吸い込んでし

まった……

俺たちは少し悩んだが、光子郎さんと同じように抵抗するのを辞めた。
すると闇がすごい勢いで吸い込んできた。

抵抗しようとする衝動を必死に抑え、
そして俺たちは闇の中へと吸い込まれてしまった……

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ黒コート

「……行ったか……」

俺はあいつらが全員姿を消したのを見て、少しだけ張っていた気を抜いた……

「……どういうつもりだ？なぜお前はこの世界にいる？
……お前は何者だ？」

デーモンが俺に向かって質問をしてきた。
……すでに奴を抑えていた闇の炎は消え去ったのか……

「……どちらにも答えられないな……」

「……なら別の事を問おう……お前はなぜあいつ等を助けるような真似をしたんだ？
選ばれし子供たちの様子から、お前は奴と敵対している関係のはずだ」

「……俺にもいろいろ理由があるんだよ……めんどくさいことになる……」

俺はそう言いながら先程と同じように腕を上げ、
そして自分の背後に闇の回路を発生させた。
だがそこに不可解なことが起きた……

「……どうした？　このまま俺を逃がしてもいいのか？」

デーモンはここから脱出しようとしている俺を止めようとはせず、
ただ俺の事をジッと見ていた。

「……お前の存在があまりにもイレギュラーすぎてな……
全く理解できないのだよ……お前という存在が……
だから今回は見逃そう……私も今
何者かと分からない者と戦う時ではないのでな……」

「……そのセリフ的に、何時かは戦う、っていう事か？」

「恐らくな」

俺はその発言にあることを推測したが、
今は何もできないと判断し、
闇の回路の中へと消えた。

第三十八話　ＩＮＸＥＫＴ（前書き）

・・・・・・やっとここまで来ました・・・・・・・

頭の中ではこの話まではすぐに行く予定だったんですが結局４０話近くまで来てしまいました・・・・・・

今のところは初期設定のままで書けていますが、
それもいつまでもつかどうか・・・・・・・・

第三十八話　ＩＮＸＥＫＴ

ｓｉｄｅ大輔

俺は闇のに吸い込まれ、真っ暗らな場所に少し居た。
だけどしばらくすると後ろに光が見え、体がそこに吸い込まれていった……

そして突然目の前に日差しが差した。

ドォンっと地面に尻餅を着いた俺は少しだけ打った尻を撫でた。

「……皆さんも彼を信じてくれたんですね……」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた……

「「「！！！　光子郎さん！？」」」

俺が光子郎さんに向かって返事をするとそれと被るように声が聞こえてきた。
俺はその時初めて周りを見渡した……
そこには俺と同じように尻を撫でている太一さんたちとパートナーデジモンの姿があった……

「！！！　太一さん！？」

「よう大輔……お互い無事のようだな！」

「はい！　俺は大丈夫です！！！
……太一さんたちも大丈夫そうですね！！！」

「ああ……そのようだな」

太一さんと俺は周りで座り込んでいるみんなを見ながら言った。

「……どうやら私たちは元のデジタルワールドに飛ばされたみたい……」

「ヒカリちゃん！？」

光子郎さんの後ろからヒカリちゃんが歩いてきたそう言った。
……どうやらヒカリちゃんにも怪我はなさそうだ！

「……ここはゲンナイさんの家の近くです。
一度ゲンナイさんに……！！！」

光子郎さんはそこまで言うと俺たちの後ろの方を目が見開くように見ていた。
ヒカリちゃんもビックリするようにそこを見ていたから俺……俺たちも

後ろを振り返ってみた……

そこには殺風景な景色が広がっており、
そこに不自然なように存在する暗闇……闇が小さく広がっていた……
その闇はあっという間に大男一人が通れるぐらいまで広がり、
そしてその中から、俺より少しだけ小さい大きさの影がそこから見えてきた・・・・・・
……そこから現れたのは黒コートの奴だった……

「……全員怪我は無いようだな……」

「……どういうつもりだ？
突然俺たちを助けるなんて……」

俺は男の問いを無視して疑問を投げかけた。

「……大輔君！　……彼は理由があったのでしょうが僕たちを助けてくれたんです。
……一様お礼は言っておかないと……」

うっっと俺は声を上げた。

……確かに助けては貰ったがこんな奴にお礼なんて言いたくない……
そう光子郎さんに言おうとしたらその後ろで何か恐ろしい気配を感じた。
ゆっくりと振り返ってみるとそこに笑顔でこっちを向く

ヒカリちゃんの姿があった。
だがその笑顔には同時にそれ以上の怖さがあった……

「……タスケテクレテアリガトウ」

かなりボー読みになったが、ヒカリちゃんから怖さが消えた。
……どうやら今のでよかったらしい

奴も俺が礼なんていうと思ってなく、
それと俺がボー読みで言ったのを疑問に思ったらしく不意に
俺の後ろの方にいるヒカリちゃんの方を見た。

「……お前も大変だな……」

……どうやらそれだけで状況を理解したみたいだ……
奴が今までしてきたことを許すことは出来ないが、
仲良くはなれるかもと俺は少しだけ思った……

コホンッとワザとらしい咳を光子郎さんはした。
……どうやら空気を換えるらしい……

「……今回は助けてくださり、ありがとうございました。
……しかしどうして暗黒の海に居たのですか？
あの海は封印られていており、

先程ヒカリさんのD3を使うしか一乗寺君のD3でしか
開けることは出来ないと言われました……」

「……お前たち、だけの場合はそうだろうな……」

奴はお前たちを強調するように言ってきた……という事は
奴にはそれ以外の方法があるってことか……

「……キーブレード、ですか……。
……それでもどうしてそこまでして暗黒の海に行ったんですか？
あの世界には貴方が必要しそうな者は何もありません……
あなたがあのタイミングであそこにいたのは僕たちを付けていたか、
……わざわざ助けに来たか、その二つしかありません……

「……」

「……もし、最初から付けていたとしたらなぜ僕たちを助けたかが分かりません。
デーモンとの戦いに巻き込まれるなんて、
貴方にはマイナスの以外のなんでもありません……。
……質問します……貴方はどうして暗黒の海に居たんですか？」

奴はフードの中から光子郎さんの事をしばらく見つめると、大きくため息を付いた。

「……お前……最初に会った時よりも厄介になってるぞ……」

「ええ。……誰かさんのおかげですね」

「……お前の言う通りだ……俺はお前らが暗黒の海に行ったと聞き、わざわざ助けに行ったんだよ……」

「……理由は聞いても？」

「……俺はある奴らと組んでいてな……
そいつ等とは目的が一部一致するから組んでいるんだが、
その組んでいる奴の一人にお前らの身を案ずる奴が居て、
俺が基本的に暇なのを良い事に俺にお前らのことを頼んできたんだよ……。
「もし大輔たちに何かあったら頼みます」ってな・・・・・・」

「大輔くんたちって・・・・・・！！！
どうしてお前が賢たちと手を組んでるんだよ！？」

俺は奴の言葉から、奴の俺達の事を頼んだのが賢だと気付き、
なぜ賢がこいつとなんか……と困惑しながらも奴に質問を投げかけた。

「言っただろ……俺の目的と奴らの目的は一部一致するところがある……
だから一時手を組んでいるだけだ」

「……一乗寺君たちという事は秋山君も一緒という事ですか？」

「ああ」

光子郎さんの質問に奴はあっさりと答えた。

「……という事で俺はお前たちの事を奴らに任せられている……
お前たちの行動を拘束したりはしないが、
危険なことはするな……
……それが一乗寺賢の願いでもある」

「……なら俺たちはどうしたらいいんだよ!?」

俺は思ったことを口にした。

俺は賢を探すために危険を冒してまで暗黒の海に行った……。
だがその作戦は失敗し、後少しで全滅と言われる所まで追い詰められた。
もうダメだ！　……そう思った瞬間空から奴が来て、俺たちを助けた……

……はっきり言って不愉快だった……だってあいつは
あまりにも大事なものを俺たちの目の前で奪いすぎている……

そしてこいつが俺たちを助けた理由は賢が頼んだからだとよ……

なら俺たちはどうしたらよかったんだ!?
……どうしたらよかったんだ……

「……やりたい様にすればいいだろ」

俺の思考を遮るように奴はそう言ってきた。

「……やりたい様にやれって？
やりたい様にやったから俺は仲間を危険にさらしたんだぞ！！！」

「……やりたい事が常に正解で安全である筈がないだろ……
それに仲間の事もお前がそこまで気にする必要はないだろう。
……こいつらは自分の遺志で暗黒の海に行ったんだろ？
……お前が無理やり連れて行ったんなら話は別だが……」

「そんなことする筈がないだろ！！！」

「ならさっき言った通りだ。
アイツらは危険だと分かっていてもお前に付いて行く事を決めた
……
それはあいつ等も一乗寺賢を探したいと心から思ってたからだ。
……お前はそんな決意を無駄にしてまで自分に責任を押し付けたいのか？」

「……」

俺は奴に言われたことに対して何も言い返せなかった。

「……大輔。
俺は別にお前が危険な場所に行くから付いてきたわけじゃないんだぜ？
……俺もお前と同じで賢が心配だった……
そして同時に賢が勝手に秋山と旅に出たことに対して怒っている……
……俺たちという仲間が居ながら何の相談もなしに行ったんだからな。
だから次あったらドカンと言ってやりたいんだ！」

太一さんの言葉にヒカリちゃんたちも頷いていた。

……太一さんたちも俺と一緒で賢を探したかったんだ……。
そして危険なことに巻き込まれているなら一緒に戦いたかった……

……それが危険なことだと分かっていても……

……俺は無駄にいろいろ背負いすぎていたのかもな……

「……やっとその表情になったか……
……そうするために似合いもしないのに俺がわざわざ説教をしてやったんだ……
少しは感謝しろよ……」

「……似合わないことをしましたね……」

俺が顔を上げると奴がため息を付きながらそう言ってきた。
……悪かったな。手間をかけさせて……
光子郎さん、俺もそう思います。
「そう？　私は結構板についてる気がしたわよ？」
ヒカリちゃんはそれを否定するように言ってきた……
……いや、絶対合ってないって。
「……だが今回したことは自分も仲間も命を落とすほどの間違いだった……
……言いたいことは分かるな？」
「……次は同じ失敗をするな、だろ？」
俺の答えに奴は小さく笑うと俺たちに背を向けた。
これから奴がすることに光子郎さんはいち早く気が付き、奴に言った。
「待ってください！！　貴方は僕たちの敵じゃない……
なら一緒に手を組みませんか？」
「……手を組む？」

「はい。　僕は……僕たちは別に一乗寺君を探すのを諦めたわけではありません。
……ですから、
貴方には一乗寺君の行った世界に繋がるゲートを開けて欲しいんです！」

「……俺は別にお前らの思っているような仲間では無い……
俺はただ一乗寺賢に頼まれたのもあって、わざわざお前らを助けに来ただけだ……
お前らと手を組む必要性を感じない」

光子郎さんの提案を奴は却下し、向こうへと歩き出した。
……まずい、このままじゃ賢を追いかける最後の手段が……

「……わよ……」

ヒカリちゃんが何かを小さく呟いた。
だが奴はそれに気づかず、また一歩向こうへ足を進めた……

「……貴方が手を組まなかったら私たち、また暗黒の海に行っちゃうかも……」

悪魔のような笑みでそう言った。

奴も驚いたのかシュっとこちらを振り向いて言ってきた。

「……お前たちは今回の事で向こうが危険なことは理解しただろが……」

「でも、また何か作戦が出来たら行くことになると思うわ。
……だって私たちにはそれ以外一乗寺君たちを追いかける方法は無いもの……」

ヒカリちゃんの言葉に俺たちは唖然となった。
ヒカリちゃんの言っていることはあまりにも脅しだ。
奴は俺たちがどんな作戦を立てていたとしてもまた暗黒の海に行ってしまった場合、
助けに行かなくてはならないだろう……。

なぜなら、奴は賢たちと手を組んでいる。
……そこで俺たちが死ぬようなことになれば恐らく賢たちの信用を失う……
……奴と賢たちの関係なんてそんな物だろう。
だってあいつはデジタマを壊すような奴なんだから……
賢たちもそれぐらいは知ってるだろう……

「……俺を脅しているのか？」

奴は少し低い声でヒカリちゃんにそう尋ねた。

……まあそう思うよな……

「そんなつもりはないわ。でもその通りでしょ？
それに貴方は一乗寺君に私たちを頼むって言われているんでしょ？
ならその言葉通り貴方は私たちを見守らなきゃならないわ……
そうでしょ？」

ヒカリちゃんの言葉に俺たちは茫然となりながら男の対応を見ていた。
……確かに俺たちはもう暗黒の海に行って賢が行った世界のゲートに行くしか方法はない。
そして賢の言葉通りなら奴は俺たちが危険な場所に行く場合、その行動を見守らなきゃならない……
……奴が可哀そうに見えてきた……

奴はヒカリちゃんの言葉に黙り込んだ。
何かを考え込んでいる様だ。

……でも俺は知っている……
こうなってしまったヒカリちゃんを止めるすべはないという事を……

奴が突然大きなため息を付いた。
……そのため息を今日付いたため息の中でも一番デカかった。

「……分かった。
お前たちと一時的に手を組もう。
……俺もお前らが勝手に死ぬのは困るんでな……」

「そう！！！　よかったわ！」

奴の言葉にヒカリちゃんは喜びの声を上げていた。

……ヒカリちゃんはたまに怖い……
俺たちはそれを再認識した。

「……で、出発は明日でいいのか？」

「そ、そうですね……
テントモンたちを治療することを考えたらそうなりますね……」

ヒカリちゃんの一面に驚いていた光子郎さんは少しだけ、慌てていた。

……奴は何時もと変わりなく、話していた。
……奴はすごい奴なんだなと俺は心の底から思った。

「……なら明日、ゲンナイの家に集合しろ。
時間はいつでもいい。
お前らが全員集まったら俺も姿を現す」

奴はそう言って先程のように背を向けて歩き出した。

「あ！！　待って！」

それをヒカリちゃんはまた呼び止めた。

「……今度はなんだ？」

奴はだるそうな声でそう言ってきた。
……だがその様子は何時もと変わりなく、コートの上からでも分かるくらい、
ピシッと背筋が伸びていた。

「まだ貴方の名前をきいてないでしょ？」

「……名前なんて必要……

「手を組むことになったんだから無いと不便だわ！」

奴の言葉を遮るようにヒカリちゃんは言った。
……そう言えば俺たちはアイツの名前を知らないなぁ。

「……俺の事は好きに呼ぶがいい……」

「……真っ黒やフード男……とかでもいいの？」

「ああ」

その言葉にヒカリちゃんは少し困っていた。

……あのヒカリちゃんに言葉勝ちするなんて……なんて奴だ！

「……人の名前を決めるなんて俺たちには出来ない……
だからお前が自分の呼び名を考えてくれ……」

太一さんが助け船を出すように奴に言った。

……確かに話せる奴の名前を勝手に決めるなんて俺たちには出来ないな……
しかも奴自身が決めれば、もしかしたら本名か、
それに近い言葉を言うかもしれない……

「……ＩＮＸＥＫＴ……俺の名はインゼクトだ……ゼクトとでも呼ぶがいい……」

「……ゼクト君ね！　よろしく！」

「……ああ」

奴……ゼクトはヒカリちゃんに短すそう返すと、
ゆっくりと向こうの方へと歩いて行った……

第三十八話　ＩＮＸＥＫＴ（後書き）

ｉｎｘｅｋｔでインゼクト・・・・・・あっているでしょか？

・・・・・皆さんはネーミングセンスが悪いとか言うかもしれませんね・・・・・・

後、リリカルのインゼクトは関係ありません！！！

第三十九話　新たな世界への旅たち（前書き）

・・・・・・やっとここまで書けました。

頭の中ではこんなにかかる筈ではなかったのに・・・・・・という思考で埋め尽くされています。

・・・・・・無駄な描写が多すぎすんですかね？

そして次からは新章突入です！！！

第三十九話　新たな世界への旅たち

大輔たちは黒コートの奴……ゼクトと別れた後、ヤマトの家に集合していた。
理由は一度、今後の事を話し合いたちという光子郎の提案と、その時偶然父が残業で家にいないという事でヤマトの家にお邪魔していた。

大輔たちの目の前には中々食べる機会がない、豪勢なピザが机の上を占拠していた。

「ヤマト先輩～。
本当食べていいんですか!?」

「ああ。
さっき言った通り、親父に連絡を取ったら出前でも取れって言われたんだ。
気にせず食べろ」

ヤマトの言葉に大輔はそれじゃあ～と大きな声で手を合わせ、そして目の前のピザの一切れを手に取った。

うめぇ～と歓喜を上げる大輔に苦情しながら太一たちもピザを口に運んだ。

「……それではこれからの話をしましょう」

大量のピザを食べ終えた大輔は机の上を片付けて、
本来の目的であるこれからについて話し始めた。

「……僕たちはゼクト君と手を組むことになりました。
これは非常にありがたいですね」

「ええ。彼が居ればわざわざ暗黒の海に行かなくとも
あのゲートの先に行くことが出来るもの！」

「空さんの言う通りです。
彼のキーブレードがあれば一乗寺君たちが
くぐったゲートを直接通ることだ出来ます……」

ですが、と光子郎はいったん話を区切り、そして言った。

「……すでに一乗寺君たちがゲートを通ってからかなりの時間がたってます。
たとえゲートを通っても、一乗寺君たちを探し出すのは困難です……」

「……今の内に何か対策を考えておきたい……という事だな？」

「はい」

太一の言葉にどうしろはコクンと頷いた。

「……確かに何の策もなしに一乗寺君たちを探し出すのは無可能に近いですね……」

「行けるところ全部探したら見つかるんじゃない？」

この中で最年少の伊織の意見にミミはアゴに手をくけながらそう答えた。
ミミの言葉にさすがミミお姉さま！という目を向けている京がいた。

「伊織君の言う通り、無策じゃ一乗寺君たちに会うなんてほぼ不可能です。
……ミミさんの意見も僕たちが探し回っている間に
一乗寺君たちが移動してしまう可能性が高いです」

光子郎の言葉にミミはムゥと口を膨らませた。

「……じゃあ一乗寺君たちの旅の目的を考えればいいんじゃないかな？」

「旅の目的ですか？」

「うん。
一乗寺君たちがどうして旅をしているかを考えるんだ。
それが分かれば僕達がその道を頼りに一条寺くんたちを探すことができる」

大輔の疑問に応えながら丈は答えた。
他の子供達もそれに賛同し、そのことについて話し合う事になった。

「……まず一乗寺君は母親にデジタルワールドを救いに行くと言ったそうです……
このことから一乗寺君たちはデジタルワールドを救うために戦っているという事が予想できます……しかし……

「……一乗寺君たちは別のデジタルワールドへ行った。
……つまり一乗寺君たちの目的はここでは果たせないということですね？」

「……はい。……思い出してください。

一乗寺君が旅立つ決心を立てたのは秋山君と接触したからです。
そして秋山君の目的はこの世界で起きている異変を止めること……
つまりミレニアモンを倒すことです」

タケルの言葉に続けるように光子郎は話を続けた。

「なら俺たちもミレニアモンを探せばいい、っていう事ですね？」

「……それがそうもいかないんです……」

どういう事？　と子供たちの大半が疑問を含んだ目で光子郎を見つめた。

「……前にも言いましたが、ミレニアモンは究極体デジモンです……
僕たちがミレニアモンたちと鉢合わせになったら全滅は免れません」

光子郎の言葉にここに居る全員が俯いた。
今の自分たちが究極体と出会えばどうなるかは
今日の体験で身に染みるほど理解している。
自分たちの無謀な作戦のせいで命を落としかけたのだ。
もし、ゼクトが助けに来なかったら自分たちの命は無かったと誰もが理解している。

「……だから僕たちはミレニアモンを探しながらも
ミレニアモンとは合ってはならないのです……」

その意見に大輔以外はすぐに納得し、
光子郎の言葉で大輔も不服ながら納得した。

「……後はゼクト君の事です」

その言葉で子供たちは話し出した。

「……彼は確かに私たちを助けてくれた。
……でも私は彼がやっていることは許せない！」

「私も空さんと同じ意見です！
……私はまだ目の前で死んでいったイガモンの事を忘れられません……」

空と京は自身の気持ちを隠すことなく言葉にした。
彼女たちもゼクトと手を組まないといけないことは理解している。
だが、理解していると言ってもそれはただ分かっているだけ。
彼の事を認めることは今の彼女らたちには無理なことだった。

しかし、それに対するようにヒカリが自身の意見を話し始めた。

「……私はやっぱり彼……ゼクト君を悪いデジモンとは思えないの……」

「……それには理由はあるのか？」

ヒカリの言葉に太一は先日から気になっていたことをヒカリに尋ねた。

ヒカリは光の紋章に　選ばれし子供であり、闇の力に人一倍敏感である。

そんなヒカリが闇の存在であるゼクトに悪い感情を持っていないことはここにいる全員が知っていた。

太一以外もそれが気になっていたのか、太一がそう質問するとピタリと各々の言葉が消え、その目はヒカリに対して向けられていた。

「……分からないの。
私も彼がどんなに悪いことをしているかは分かってるの！
……でもどうしても彼を悪いデジモンだとは思えないの……」

ヒカリは消えるような声でそう告げると顔を俯けてしまった。

太一たちもどうしたらいいかと試行錯誤したが、結局は思い浮かばず、結局いつの間にかもとに戻っていたヒカリに安堵の息を漏らしたか、結構な時間になったため、それぞれは自分の家へと帰っていった。

「おはよう！　みんな」

「もう来てたのか……」

翌日、太一とヒカリは起床してすぐ、
寝る前に準備した小さなバッグを背負ってデジタルワールドに足を運んだ。
そしてゲンナイの家に向かった。
だが行ってみるとそこにはすでに自分たちを除く選ばれし子供と、
各々のパートナーデジモンがゲンナイさんと話し込んでいた。

太一たちが足跡を立てて近づくとそれに大輔が気づき、太一とヒカリに対して
元気な挨拶をしてきた。
その挨拶に他の子供たちも気づき、それぞれ挨拶を返してきた。
ゲンナイも太一たちが来たのに気づき、ゆっくりとこちらに近づいてきた。
太一とヒカリはとゲンナイに挨拶を交わした。

しばらくするとそこにいる誰かが、ふとある言葉を漏らした。

「……全員そろったら現れるとか言ってたけど、
現れないじゃない……」

子供たちは確かにとその言葉に同意した。
ゼクトは全員がそろったらゲンナイの家に現れると言った。
だが、全員がそろった今でも彼の姿は無く、現れる気配もなかった。
騙されたんじゃ!?と声を上げるものが現れる中、それは破られた。

「……ずいぶんと速い集合だな」

ゲンナイの家の裏の方からトコトコと歩きながらゼクトは言った。

「……さて全員そそった事だ、
今からゲートに向かうか?」

光子郎たちはゼクトの言葉に無言で頷き、ゲートがある場所まで歩いて行った。

「・・・・・・ここだな」

ゼクトはそう言うと目の前にある多いな闇の渦……ゲートを見上げた。
ゲートは前見た時と何の変りもなくそこに存在していた。

「……ゲートを開けるぞ。いいんだな？」

ゼクトは子供たちに最後の確認を促した。
それに対して子供たちとデジモンは頷いた。

ゼクトは無言で右手を前にかざした。
するとシュっという音と同時に漆黒のキーブレードが出現した。
そのキーブレードの先端に光が出現し、
それがゲートに向かって放たれた。
その光を受けたゲートは中心に集まるように維持させていたゲートがその中心から開くようにゲートが開いていた。

それにゼクトは無言で飛び込んだ。
ゲートの中心に触れると同時にゼクトの姿は消え、
そこにはゲートだけが取り残されていた。

「……よぉ～し、俺も！」

ゼクトがゲートの中に消えてから数秒、
大輔が意を決したのか空元気のような声でそう叫び、
ゲートへと飛び込んだ。

すると大輔の体はゼクトと同じように消えていった。

「ダイスケ～俺も！！」

大輔が飛び込んだのを目にしたと同時にブイモンは大輔を追いかけるように、
ゲートへと飛び込んだ。
そしてその体は大輔たちと同じようにそこにはなかった。

「……よし。俺たちも！」

大輔たちの行動から、
ゲートへ対する恐怖が消えた他の子供たちはパートナーデジモンを抱え、
次々とゲートへと身を投げた。

そして最後のペアーがゲートへ姿を消すと、
そこにはゲートだけが空しく存在していた。

第四十話　新たな世界（前書き）

新章突入です！

この世界は知る人は知る世界なんで、この小説を読んでくれいる方に、
理解できる方はいらっしゃるかもしれません・・・・・・・

・・・・・最近よく思うんですが、
作者は物語を進めるのが遅いですね・・・・・・・
今回も新世界に入ってから移動もせずに、
話だけで終わってしましました・・・・・・

・・・・・無駄な描写が多すぎるんですかね？

第四十話　新たな世界

大輔たちが入ったゲートの中は真っ暗な道が続いていた。
見渡すかぎり、空は真っ黒でいたるところに真っ黒なうずがある以外何もない世界だった。

ゼクトはその中を戸惑いもせず、
ただ真っ直ぐに幾つもあるうずの一つへ進んでいった。

「……このうずはそれぞれが別のデジタルワールドに繋がっているんですか？」

「……その通りだ。
このうずはそれぞれのデジタルワールドに繋がっている」

「じゃあ賢がどれを通ったかなんて分からないじゃないか！？」

ゼクトの言葉に大輔は立ち止まり怒鳴るような声で言った。

しかしそれに対しゼクトは歩みを止めずに答えた。

「……確かにこの場所にはたくさんの世界に繋がるゲートがある。
だが、どのゲートから入って来たかでどのゲートが通れるかは決まっている」

「……つまり、沢山選択肢があるように見えるけど、

実際は一つだけってこと？」

ゼクトが言うにはこの世界は特別な場所であり、
ミレニアモンの力で、普段は使えないゲートが出現はしているが、
どのゲートから入ったかで、どのゲートを通れるかは決まっている
という事らしい。
仮に間違えたゲートを通ろうとしてもそのゲートが開かないだけで、
間違ったら終わりという事はないようだ。

「……この場所は俺が先導してやる。
だが、このゲートを出たら俺が先導することはないと思え」

大輔たちはその言葉に文句の一つも言ってやりたかったが、
付いてきてもらっている立場のため、そのことに関しては強くは言
えなかった……

ゲートをくぐった先には先程の暗さを消し去るような光が指していた。
周りは岩石で囲まれ、地面は補強されているのかまっすぐになっていた。
だが空は今まで見た中でも最も綺麗な青色の空だった。
それが大輔たちが初めに見て思った印象だった。

「……ここが俺達とは違う世界のデジタルワールド・・・・・・」

太一は誰かに聞かせるわけでもなく、ただポツリと独り言を漏らした。
だがゼクトはそれが聞こえたのか、
その言葉に答えるかのように話し始めた。

「……確かにここはお前たちの居たデジタルワールドとは違う世界だ。
だが、全く違う世界ではない」

「……どういう事？」

「……この世界はお前たちの居た世界のパラレルワールドの世界だ。
全く違うとは言えないな」

途中に京の疑問に答えながらゼクトはそう説明した。
だが大輔たちはゼクトの説明に頭に？マークを浮かべていた。
それにゼクトは気が付いたが、冷たく言い放った。

「……なんでも俺に聞こうとするなよ？
質問するなら少しはお前たちで考えてからにしろ……
そこにいる奴が分からなかったときぐらいは質問に答えてやる。
……お前は俺が言った意味を理解しているだろ？
知識の紋章に選ばれし子供さん」

ゼクトの言葉に子供たちは知識の紋章に選ばれし子供……光子郎の方を一斉に見た。

いきなり話を振られて光子郎は驚いていたが、すぐに表情を戻し言った。

「……パラレルワールドとは簡単に言えばもしもの世界です。
たとえば僕が今じゃんけんをするとします……
二人でじゃんけんをするとしたら、
じゃんけんで起きるパターンは三つになります。
じゃんけんに勝つ、負ける、引き分ける……
ここまでは分かりますね？」

光子郎の言葉に太一たちは頷いた。
大輔も頷いていたことから、

光子郎は全員が理解していると判断し、続きを話し始めた。

「そして僕がじゃんけんでグーを出したとします。そして相手はパーを出しました。

……しかし、もしも僕だここでチョキを出していたらジャンケンには勝っていました。

逆にパーを出していたら、あいこになってジャンケンは続きました。

……このようにもし、あの時ああしていたら……という似ているけど

違う世界……それがパラレルワールドです」

「……つまりこの世界は似てるけど違う世界、という事か？」

太一の言葉に光子郎は頷いた。

だがゼクトはそれに対して補足を足すように言った。

「……パラレルワールドにもいろいろあってな……

この世界はお前たちが居た世界とは少しだけ似ている程度の世界だ……

だからチンロンモンのような四聖獣は存在しないし、

ゲンナイのようなホメオスタシスもいない……」

「……デジモンたちをまとめるデジモンが居にゃ～でこの世界は大丈夫なんだぎゃ？」

「……この世界にもそういうデジモンは存在する。

ホーリーエンジェモン……それがこの世界を守護するデジモンの

名だ」

「「「ホーリーエンジェモン！？」」」

ゼクトはアルマジモンの疑問にそう答えると子供たちとデジモンは一斉に声を上げた。

「……ああ。ホーリーエンジェモンがこの世界を守護するリーダーだが。

……何か問題でもあるのか？」

「い、いや……」

太一の言葉にゼクトはそうか、と答えるとゼクトは腕を組みながらそう告げるとメンバーの最後尾まで下がって行った。

恐らくこれ以上は自分は先導しないという事だろう。

子供たちはその事よりもゼクトが言ったホーリーエンジェモンの事が気になっていた。

ホーリーエンジェモンはタケルのパートナーであるパタモンが完全体に進化した時になる形態である。

完全体であるホーリーエンジェモンにこの世界全体のデジモンを守護するほどの力があるとは大輔たちには思えなかった。

特にもっともホーリーエンジェモンの力を知っているタケルには

ゼクトの言葉が嘘だとしか思えなかった。
……だがゼクトは嘘をつかないという事に関してはタケルも信用していたため、
そのエンジェモンの事を聞き返した。

「そのホーリーエンジェモンには合う事は出来るの？」

「ああ。ここから向こうに行った先にホーリーエンジェモン城という城がある。
……余程のことが無い限り誰でも会談はできるだろう」

ゼクトの言葉に光子郎たちは驚いていた。
まさかこの世界を守護するものに
そんなに簡単に会えるとは思っていなかったのだろう。

光子郎たちの世界でも、ゲンナイさんは例外だが、
チンロンモンたち四聖獣、……その上のデジモンたちには
自分たちからは合う事は出来なかった。

だがこの世界の守護するものは、すぐ行ける場所に城を立てており、
誰でも会えると言われたのだ。
彼らが困惑するのも仕方がなかった。

「……闇雲に一乗寺君たちを探すのは得策とは言えません……
まずはこの世界を守護するホーリーエンジェモンと会った方がよろしいかと……」

「……確かにな。
よし！　始めはホーリーエンジェモン城に向かおう。
……みんなもそれでいいか？」

太一の言葉にゼクトを除く全員が肯定の声を上げた。

第四十話　新たな世界（後書き）

・・・・・・次の投稿は遅くなるかもしれません・・・・・・

理由はガンプラを買ってしまったからです！
しかもＭＧを！

・・・・・・まあ少しづつ作る予定なので、今まで通り投稿できると思います。

第四十一話　初戦！（前書き）

もう四十話を超えてしまいましたか・・・

このままじゃ作者の書くデジモンは１００…いや、２００を超えてしまうかもしれません……

そんな長いダメ文小説を誰も読んでくれるはずが無いので、
これからはできるだけ話を進めていきたいと思います。

・・・・・作者にそんな力があればですが・・・・・・

第四十一話　初戦！

ｓｉｄｅ大輔

……今俺たちはあるデジモンと睨み合っていた。
そのデジモンは恐竜のような姿にオレンジ色の体をし、
所々にある青色の模様を付けたデジモン……グレイモンだ。

「……これが野生のグレイモンか……アグモンのとは全然違うな……」

太一さんは誰かに聞かせるわけでもなくそう呟いた。

……確かに太一さんのアグモンとは全然違うな……
見るからに凶暴だし……

「……どうやら怒っているようですね」

「……なわばりにでも入っちゃったんですかね？」

光子郎さんの言葉に京は続けるように言った。

「……十中八九、愛情と純真の紋章を受け継いだ選ばれし子どもの

言う通りだろう。
この地域のデジモンはなわばり意識が高いからな」

「私の名前は井上京よ！　そんな長い名前じゃないわ！！」

アイツの言葉に京はまた突っかかった。

……ここに来るまでにアイツは何度も俺たちを
勇気の紋章～などと言い、俺たちを名前で呼ぼうとはしなかった。
その事に俺たちは何度も突っかかって、名前で呼ばそうとしたが、
効果は全くなかった。

「私たちは仲間なんだから、名前で呼び合わなくちゃいけないよ？」

「……俺はお前らと組んでいるだけだ。そこを勘違いするな」

ヒカリちゃんの言葉にもアイツは耳を貸さず、
ただ理由を付けて俺たちの言う事を実行しなかった。

「……俺の事よりも目の前の奴の事はいいのか？
アイツを無視して話し続けたからか、相当頭に来ているぞ」

アイツの言葉を聞いて俺たちは一斉にグレイモンの方を見た。
そこには先程よりも目を見開き、歯の音を立てているグレイモンの

姿があった。
グレイモンはまさに怒りを抑えるのに限界で、
今にも襲いかかってきそうな雰囲気を出していた。

「ここは僕に任せてよ！」

そう言った者の方……アグモンの方を見た。

「僕もグレイモンに進化できるし、僕には太一が付いているんだ！
野生のグレイモンなんかには負けないよ！」

「……そうだな！　みんな！　ここは俺たちに任せてくれ！」

太一さんの言葉に俺たちは大きく頷いた。
確かに野生のグレイモンなんかに太一さんのグレイモンが負けるはずはない！
俺たちはそう思って、太一さんたちだけが戦うのを了承した。

そして太一さんは俺たちのお礼を言い、ポケットからデジヴァイスを取り出した。
そして今まさにアグモンを進化させようとしたとき、後ろから声が聞こえてきた。

「お前たちじゃ野生のグレイモンには勝てないぞ……」

「……野生の成熟期デジモンと戦うのにどうしてそんなことが言えるんだ？
俺とアグモンは今までたくさんのデジモンと戦ってきた……
野生のデジモンなんかには負けはしない！」

「……まあそう思うなら勝手にしろ……
一度その身を持って体験した方がいいだろう……」

太一さんは最後にアイツが言った事を無視して、デジヴァイスを握った。
するとそこから光が飛びで、アグモンを包み込んだ。

「アグモン進化・・・・・・・

グレイモン！」

光が消え、そこから目の前のグレイモンとほぼ同じ姿をしたグレイモンがそこに立っていた。

「いっけぇ～！！　グレイモン！！！！」

その言葉に答えるかのように太一さんのグレイモンは雄たけびを上げ、
野生のグレイモンに飛びかかっていた。

sideout

グレイモンは野生のグレイモンに飛びかかっていった。
それに対してか、野生のグレイモンも言葉にならない雄たけびを上げ、
その身に付いている鋭い爪が付いた右腕をグレイモンに対し振り下ろした。

「おっと！」

グレイモンはそれを間一髪で右に飛んで避けた。
そして右腕を大きく振りかぶったせいで隙だらけになった野生のグレイモンに
強く拳を握りこんだ右腕で殴り掛かった。

ドゴッッッ！！！

その一撃は野生のグレイモンの顔面に直撃し、ゆっくりと地面に倒れていった。
太一はそれを見届けると腹の底から歓喜の声を上げた。

八神太一はヤケになっていたのかもしれない・・・・・
敵であり、自分たちよりも不可解な力を持つゼクトに

同じ姿をしたデジモンを倒せないと言われたことによって……

同じくグレイモンも声には出さなかったがその心は太一と同じく怒りを含んでいた。
同じ姿をし、同じデジモンのである相手……しかも相手は野生のデジモンだ。
そんなデジモンに勝てないと言われ、
少なくともグレイモンもいい感情ではなかった。

そのせいかグレイモンの拳は何時もにもまして強く握られていた。
そのパンチが相手の顔面に思いっきりヒットしたのだ。
八つ当たりとは理解しながらもグレイモンの気持ちは晴れていた。

……そのせいで太一とグレイモンは気が付くのが遅れた。
野生のグレイモンが倒れる直前に思いっきり踏ん張り、体を起こしていたのを。

そして体を起こしたと同時に先程グレイモンがやったように思いっきり力を込めた
拳をグレイモンに振りかぶっているのを。

ドゴゴッッッッ!!!!!

野生のグレイモンの拳はグレイモンの顔面に思いっきりヒットした。
それは先程グレイモンが野生のグレイモンにやった光景によく似ていた。
だがそこからは別だった。

野生のグレイモンの攻撃を受けたグレイモンは地面に倒れこむのではなく、

巨体のはずの体をごと吹き飛んでいた。
それは辺りにある岩にあたるまで続いた。

「…クッッ！」

しかしグレイモンはもたれかかっている岩を支えに自らの巨体を立ち上げた。

両者が受けた攻撃は立った一発。
見た感じは変わらないパンチをお互い顔面に喰らっただけ。
……しかしそのダメージは歴然の差だった。

野生のグレイモンは鋭い牙がさえそろったその口を空に向けた。
次の瞬間、その口をグレイモンに向け、それと同時にその口を大きく開けた。

太一たちはその動作に見覚えがあった。

グレイモンはもしかしたら見たことはなかったが
それがどのような技かは瞬時に理解した。
グレイモンの必殺技、メガフレイムだ。

グレイモンはもたれかかっている岩を右にジャンプしながら思いっきり押した。
そうすることでメガフレイムから少しでも離れることが出来るからだった。

そのおかげあってか、メガフレイムが直撃することはなかった。
しかしメガフレイムが岩に直撃したと同時に巻き起こった爆風をまともに受けた。

その爆風でグレイモンは地面に倒れこんだが、すぐに立ち上がった。
その足は既にフラフラで、誰が見ても立ってるのがやっとだと理解できた。
だが、そんな状態なのにグレイモンは退化することなく
野生のグレイモンを睨みつけていた事だけは称賛できるだろう。

大輔たちはそこまで起きてから初めてことの重大さを理解した。

大輔たちはグレイモンが負けるとは微塵にも思っていなかった。
そのせいで本来取るべき行動を実行するのが遅れた。
大輔たちは急いでポケットから
デジヴァイスを取り出し、パートナーの名前を呼んだ。

パートナーたちも状況を理解しているため急ぐように大輔たちに返事を返した。
それを聞いた大輔たちは自分の手の中にあるデジヴァイスに力を込めた。

「行くぞブイモン！！！進化……

だがそれは途中で途切れてしまった。
理由は大輔たちが掛け声を辞めたからである。

大輔たちの目にはゼクトの後頭部への攻撃で、

一撃で完全に倒れこんだ野生のグレイモンの姿だった。

しかしそれを仕出かしたゼクトは倒れこんだ野生のグレイモンには眼もくれず、

太一……太一と恐らくグレイモンに対してゆっくりと呟いた。

「……だから言っただろ？　お前らじゃ勝てないって」

その言葉と同時に退化してボロボロになったコロモンを抱きかかえ、俯くことしか出来なかった。

第四十一話　初戦！（後書き）

・・・・・・作者の選ばれし子供達は悲惨ですね・・・・・・

でも途中……途中か最後らへんには大活躍すると思いますので、
暖かく見守ってあげてください！

決して作者が選ばれし子供たちが嫌いなわけではありません！

……ここで皆さんに質問なんですが、
アニメ、漫画、設定だけでも構わないので、
記憶を操るデジモン、
いなければコンピュータを操るのが飛び抜けて得意なデジモンを
教えていただけないでしょうか？

本編、外伝に登場するかはまだわかりませんが、
出来れば教えていただければ嬉しいです。

第四十二話　不可解な者（前書き）

最近本気でタイトルが思いつかなくなってきた……

どうしましょう……

第四十二話　不可解な者

ｓｉｄｅ大輔

野生のグレイモンとの戦闘後、俺たちは岩陰に隠れてコロモンの治療を開始した。
だが治療と言っても怪我をしている場所を包帯で巻くことくらいしか出来なかった。
丈先輩が持ってきた医療グッズは人間用であるため効果は全くなかった……

そしてこの場にはアイツはいない。

アイツは岩場にたどり着いたことには姿を消していた。
そんなアイツに俺達は怒りの言葉を漏らしたが、
今はコロモンのことが先と割りきった。

「……これが僕にできる全力だよ」

コロモンの体をほぼ包帯でグルグル巻きにした丈さんは俯きながらそう言った。

「……ごめん。全然役に立たなくて……」

「……丈は悪くないさ。悪いのは俺だ……
忠告も聞かずに、コロモンだけに戦わせた俺が悪いんだ……」

太一さんはそう言うと視線を眠っているコロモンに写した。

「……それにしてもこんな時にゼクト君はどこに行ったのよ!?
コロモンが大変な時に黙って居なくなるなんて!」

「落ち着いてください京さん!」

こんな空気に耐えかねたのか、京がアイツの文句を漏らし始めた。
状況が状況なので、ホークモンはそれを必死に止めた。

「……やれやれ。やっぱり俺は信用されてないんだな……
俺は悲しいぞ……」

突然後ろから声が聞こえてきた。
俺たちがそちらを振り向くとそこにはこっちに向かってゆっくりと歩いてくる
黒コートの姿……アイツが居た。

アイツの声は何時もと変わりなく無感情な言葉で、
悲しんでいる様子など全くなかった。

「……どこに行っていたんですか？　僕たちにあなたを止める権利はありませんが、

一様同盟を組んでいるのだから姿を消す時ぐらいは報告して貰えませんか？」

光子郎さんは何時もの口調……何時もより怒ったような声でアイツに言葉を返した。

……確かに俺たちは仲間なんかじゃないからアイツの行動を止める術は無い……。

でも光子郎さんの言う通り報告ぐらいしてくれたっていいだろう！

俺がそんなことを考えているとヒカリちゃんが話し始めた。

「……ねえ。その手に持っている物はなに？　葉っぱ？」

俺たちは誘導させるようにアイツの手元を見つめた。

……確かに黒い手袋に葉っぱなようなものが数枚握られていた。

「……お前たちはどうせデジモンを治療する物を持ってないと思って、

この世界に存在する治療に使える葉っぱを持ってきたんだが、

……どうやらお呼びじゃないようだな……」

その言葉に俺たちは驚愕した。

まさか敵であるアイツがこんなものを持ってくるとは思っていなかったからだ。

それに持ってきたという事は今の今までわざわざ採ってきたという事だ。

驚いて声が出ない俺達を自分の言った言葉でそうなったと勘違いしたアイツが言ってきた。

「……フン。冗談だ冗談。
俺に用は無くとも、この葉っぱには用があるんだろ？　……ほらよ」

そう言ってアイツは葉っぱを投げる……ような言葉を言いながらもわざわざこっちまで歩いてきて丈先輩の手の上に置いていった。

「……その葉っぱは張り薬として使うのが最も効果がある。
コロモンの包帯の下につければすぐによくなるだろう……」

「お前……」

「……言っておくが礼は要らない。
そんなことよりもこの事を貸しと
思っていてくれている方が俺としてはありがたいからな……」

太一さんの言葉にアイツはそう返すと、来た道をさっさと戻って行った。

「……どうせもう少しここで休むんだろ？

その間、見張りは俺がやる……。　……報告はこんな感じでいいか？」

アイツの言葉に光子郎さんはえ、ええ。と返事を返すと、
アイツはさっさと俺たちが見えない場所まで歩いて行った。

……とりあえず俺たちはこの葉っぱをコロモンに張って、
俺たち自身も少しの休憩した。

ｓｉｄｅｏｕｔ

それからしばらくして、コロモンが元気になったのを見計らって
俺たちはホーリーエンジェモン城に向かうのを再開した。

本当に見張っていたのかは分からないが、大輔たちが岩陰から出てくると
すぐに姿を現して、大輔たちのパーティーの最後尾に付いた。

しばらく無言で歩き続けた後、

体力は回復したが、大事を取って幼年期のままのコロモンが話し出した。

「……さっきは僕のために薬を取って来てくれてありがとう！
おかげでこんなに良くなったよ！」

「……礼は必要ない。
俺としてはそんなことよりも一乗寺賢の
探索を諦めてくれた方がうれしいんだが……」

「薬を探す途中にデジモンに襲われたりしなかったの？
この辺のデジモンは凶暴みたいだし」

ゼクトが呟いた言葉を無視してコロモンは話を続けてきた。
太一たちはその行動に呆気にとられ、
無視された当の本人はため息を付き、
コロモンに返事を返した。

「……この辺りに生息しているデジモンの弱点は把握している。
襲われたとしても問題はない」

ゼクトは何気に凄いことをあっさり言い放った。
その言葉に対しても大輔たちは呆気にとられた。

「……それって何気に凄いことじゃない？」

「……何気にじゃなくて普通にすごいことだと思うわ……」

それに対してミミはへぇ～と感心するように言い、
空が突っ込みを入れ、ミミに返事を返した。

「……情報とは武器だ。
知っていると知っていないとでは全く違う……」

「……随分悟ったような口ぶりだな……」

経験からの言葉なのか、ゼクトが告げた言葉はかなりの説得力があった。
太一は何か言い返したかったのか、それとも純粋に気になったのか、
ゼクトに思ったことを尋ねた。
その言葉はここに居る全員が思った言葉であった。

「……そうかもしれないな」

「……ね、ねえ、後どれぐらいでホーリーエンジェモン城に付くの？」

ゼクトは一言そう告げた言葉には何かもの凄く重いなにかがあった。
その空気を振り払うためか、
京は取りあえず話題が続きそうな事を言った。

「……さあどうだろうな」

一言で話題が途切れてしまった。
辺りに暗い雰囲気がまた漂い始めた。

「……なあ。さっきから気になっていたんだが、
お前はどうして野生のグレイモンに太一のグレイモンが負けると分かったんだ？」

静かに話を聞いていたヤマトが自分の中で疑問に思っていたことを言葉に発した。
ヤマトを含めた全員がゼクトが発するだろう答えに耳を傾けた。
この疑問はヤマトだけではなく、
デジモンたちも含めた全員が疑問に思っていたことだった。
その質問に対してゼクトはしばらく黙り込んでいたが、
話す内容が決まったのかゆっくりと言葉を発した。

「……お前たちが平均よりも弱いという事を俺は知っているからだ」

ゼクトはそう言い放つとパタモンがムスッとした表情で言ってきた。

「……弱いって、僕たちのこと？」

「……それ位はお前たちで考えろ」

ゼクトの言葉に頭にきたパタモンは文句を言ってやろうと
ゼクトの方を振り向こうとするが、それを行う事は無かった。

理由は簡単だ。それは……

「……あれがホーリーエンジェモン城か？」

「そうだ」

太一が確信を持って尋ねるとゼクトからは思った通りの返事が返ってきた。

数十メートルもある城壁に囲まれ、姿は城というよりも巨大な教会のような
造りをしているように見えた。
しかし、そこからは聖なる光のような輝きを放っており、
ここが聖なるデジモンが居ることだけはすぐに理解できた。

しばらくはその圧倒的な雰囲気に圧倒されていた大輔たちだったが、
近づいて来たデジモン……恐らく城の警備に任されていたのだろう
デジモンが
ゆっくりとこちらに歩いてきた。

「お前たちは何者だ!?」

全身が真っ白で獣人のような姿をしたデジモンは睨むような表情で
大輔たちに近づいて着たがある程度近づくと
驚いたような表情を見せた。

「!?　どうしてここに人間の子供たちが居るんだ!?」

「俺たちは別世界のデジタルワールドから来た選ばれし子供だ!
怪しいもんじゃない!」

獣人のデジモンが驚いたのを好機と思ったのか
太一は一気にそう話した。

しかしそのデジモンは太一が前に出て、
視界に入るとさらに驚いたような表情を見せた。

「!?　お前は……。　……なるほどそういう事か……」

そのデジモンは太一を見てさらに驚愕の表情を浮かべたが、
最後尾に居た黒コートの者……ゼクトが視界に入ると途端に冷静に
なった。

「……お前たち……。
確か別世界のデジタルワールドから来たといったな？
……他の世界の人間がここに何の用だ？」

殺気を含んだような目で見つめられた太一たちは一瞬
声を出す事は出来なかったが、
一度深呼吸をして息を整えるとゆっくりと話し出した。

「……俺たちは……

「待て！　……その話は城の中で聞こう。着いてこい！」

大輔の言葉を遮るとそのデジモンはドンドンと城の中へと消えていった。

大輔たちは一瞬どうしたらいいか分からなくなったが、
ホーリーエンジェモンに直接会えるかもと思い、
門番を通り抜け、城の中へと入って行った。

第四十二話　不可解な者（後書き）

……はやく黒コートの戦闘を書きたいな……

第四十三話　語られる者（前書き）

……自分の小説を読み返して思ったことがあります。

……下手ですね。

描写が少ないくせに話は全然進まない。

描写が下手！

……なんとかしないと・・・・・・

第四十三話　語られる者

しばらく歩き続けると、城の中でも最も広い場所……
足元がデータなようになっている場所に大輔たちはたどり着いた。

城の中でも最も神聖な雰囲気が漂う場所。
そこには先程の獣人型デジモンが腕を組んで部屋の中心に立っていた。

「……遅いぞ。異世界の選ばれし子供たちよ！」

獣人の眼球の無い目で睨められると、
子供も達は意識に関係なく声を発せられなくなった。

「――――よさないかレオ。彼らが怯えてしまっている」

その声が耳に入った大輔たちは獣人……レオの後ろにある
大きな空洞を見つめた。

神々しい何かを発する何かが少しずつ姿を現した。

否、大輔たちは知っている。
それがいったい何なのかを。

「……お前がホーリーエンジェモン？」

誰かがその影に問う。
その言葉に意味は無い。

……なぜならば。

「いかにも私がこの城の主。ホーリーエンジェモンだ」

そう語るホーリーエンジェモンは静かに何かを見つめていた。
だが子供たちはそれを確認することは出来ない。

なぜなら彼らは
ホーリーエンジェモンが発する余りにも神々しい何かに飲み込まれているのだから。
故に彼らが今理解できたのは二つ。

ホーリーエンジェモンが自分たちを見つめているのではないという事。
そして、彼が自分たちの仲間にいるパタモンの進化系……ホーリーエンジェモンとは
余りにも格が違うという事だった。

「そう緊張しなくてもいい。
私たちは別に君たちに危害を加えようと思っているわけではない。
君たちも私に後ろめたいことがあるわけではないのだろ？」

そうは言われても子供たちは完全に
ホーリーエンジェモンのオーラに飲み込まれている。
話したくても話せないのだ。

「……こいつらはそんなつもりでここに来たんじゃない。
ある人を探しに来ただけだ」

それを察したのか、コートの男はため息を付き、
代わりに子供たちが言いたかった言葉を口に発した。

「……ある人とは？」

「……え、ええっと一乗寺賢という人間です。
秋山遼という人間とパートナーデジモンと一緒に居るはずなんですが……」

コートの男のおかげで幾分マシになった光子郎は
ホーリーエンジェモンの問いにゆっくりと答えた。

「……一乗寺賢君は私は知らない。
リョウ君の事は知っているが最近は見ていないな……」

「秋山を知ってるんですか！？」

ホーリーエンジェモンの発した言葉に大輔は食いついた。
大輔以外も言葉には出なかったが、全員がその話に大きく耳を傾けていた。

「ああ。彼とは何度か面識がある……それ以外では話を聞いたぐらいだな」

「……話を聞いたってだれからですか？」

「この世界の選ばれし子供からだ」

「この世界にも選ばれし子供は要るんですか！？」

「ああ。　……君たちみたいに大勢じゃなく一人だがな」

ホーリーエンジェモンが答えを返すたびに誰かが新しく質問をする。
それが続き始めた。

「……すみませんがその選ばれし子供と会う事は出来ませんか？」

「……残念だが、彼は今この世界にはいない」

光子郎の質問にホーリーエンジェモンは表情を暗くし意味深げに呟

いた。

「……この世界に居ないっていう事は、今はリアルワールドに居るんですか？」

「……いや、違う。
今、彼は別世界に行っているんだ」

「別世界？」

「ああ。だからお前たちが会う事は出来ない」

顔を横に傾けながら言ったパルモンにはっきりと言葉を返すレオ。
その言葉に誰もがガクッと来た。
彼に会えば何かしらの情報を得られると思ったのだろう。
落ち込んでいる大輔たちに今度はと言わんばかりに
ホーリーエンジェモンは尋ねてきた。

「私からも一つ尋ねます。　……貴方は一体何者なんですか？」

そう尋ねる先にいるのはコートの男。

「――――――」

だがコートの男は答えない。
だたずっと深くがぶったフードの中からホーリーエンジェモンを見つめていた。
それで察したのか、
……それとも何かを理解したのかホーリーエンジェモンは一瞬目を閉じて言った。

「……いや、やはり答えなくてもいい。
……それで君たちはこれからどうするつもりなんだ？
一乗寺君は私たちも知らない。
リョウ君も、私たちは居場所もしらない。
他になにかあてがあるのか？」

その言葉に大輔たちは俯いた。
元より大輔たちには当てはなかった。
ただこの世界の秩序を守っているホーリーエンジェモンなら秋山の事を知っているのでは？　という願いを含めた思いでここに来たのだ。
行く宛などある筈がない。

「……デーモン城に入るために必要な鍵であるタグを貰えるか？」

ここまで口を開かなかったコートの男が
大輔たちにとっては衝撃的なことを口にした。

「デーモン城!?　なんだよそれは!!!」

「……言葉通りデーモンの城だ。
まあ、既に城の持ち主であるデーモンは居ないがな」

タケルの言葉にコートの男は説明するように話した。

「……なぜ君たちはデーモンという言葉にそんなに反応しているんだ?」

「……こいつらが居たデジタルワールドにも居たんだよ。デーモンがな……」

「ッッッ!!!　……それは随分大変だったんだな。
デーモンのダークウイルスのせいでそっちの世界も大変だったんだろう?」

「……残念ながらこっちの世界のデーモンはまだ生きている……
今は一様、封印されてはいるがな……」

ホーリーエンジェモンとゼクトはそれぞれ会話を交わしていた。

「ち、ちょっと待てよ!!!　デーモンが居たとかダークウイルスとか
どういう事なんだ!?」

「……そのままの意味で受け取るなら、
この世界にもデーモンが居て、今は倒されたという意味になりますね」

大輔は訳が分からないと言わんばかりに声を上げた。
それに対して光子郎は聞いたままの意味を発して説明した。
だが大輔たちも光子郎もそれが信じられなかった。
……いや、信じたくなかった。

デーモンは大輔たちが手も足も出なかった相手……万全な状態で戦っても
傷ひとつつけることは出来なかった。
それを別世界とはいえ、倒したというのを誰もが否定した。

「……私たちの世界にもデーモンは存在した。
・・・・・・いや、違う。
デーモンが現れたから選ばれし子供をこの世界に召喚したのだ」

「……ならその選ばれし子供は
最初からデーモンを倒すためにこの世界に呼ばれたの!?」

「・・・・・・そうだ」

ピヨモンの問にホーリーエンジェモンは静かに答えた。
大輔たちは今度こそ開いた口がふさがらなかった。

この世界の選ばれし子供は自分たち１２人の選ばれし子供よりも遥かに困難……いや
攻略不可能な使命をたった一人で背負ったということになる。

「……その選ばれし子供はデーモンを倒せたのですか？」

「ああ。
彼はこの世界の平和を崩した元凶であるデーモンを倒した！！！
……彼は本当によくやってくれた」

光子郎は確認のためか疑問に思っていたことを尋ねた。
しかし帰ってきた答えは、
先ほど導きだした答えと同じだった。

第四十三話　語られる者（後書き）

別世界の選ばれし子供！　彼の正体は一体！？

……小説内で明かされるのは当分先の予定です。

第四十四話　命を背負う覚悟（前書き）

評価が１２０突破です！！！

やはりオリキャラがいると書きやすいですね！

今回はいつもより見やすくなっている気がします。
この書き方がいいと思ったり、こうしたらもっと見やすくなると言った意見があれば感想で使えてもらえると助かります！

第四十四話　命を背負う覚悟

ｓｉｄｅヒカリ

「……そんな話は今は関係ない。それよりタグは貰えるのか？」

ゼクトくんが話を割るようにさっき大輔くんに途切された話を話し始めた。

「……済まないがタグは此処にはない。タグは元の封印している」

「ならそのタグを取る許可は貰えるか？」

「……それは別に構わないが、今更タグをどうするつもりなんだ？あれはデーモン城へ入る以外の使い道はないはずなんだが……」

「そこに用があるんだよ。
……まあ俺じゃなくて、秋山遼がな」

ゼクト君が最後に言った言葉に私たちは驚きを隠せなかった。
特に大輔君は、手掛かりがもうないと一番落ち込んでいたから、いきなりゼクト君から手掛かりを言われて驚くような怒ってるような顔をしていた。

「お前……秋山の目的を知ってたのか!?　どうして話さなかった!?」

「……聞かれなかったからだ。それに俺は嘘は付いていないぞ？
秋山遼の目的は知っているが、現在の居場所は知らない。
お前らが俺に聞いたのは居場所だけだ。目的は聞かれていない。
それなのに勝手に勘違いしたお前らが悪いだろ」

「ッッ!!!」

ゼクト君の言葉に大輔君が悔しそうな声を上げた。
……確かに私たちが勘違いしていたけど、それ位言ってくれてもいいじゃない!!!
私と同じように思ったのか、大輔君以外のみんなは怒る様な目でゼクト君を見ていた。

「……話さなかったのはもういい。
……確かに俺たちが勝手に勘違いしてただけだ。
なら秋山の目的はなんなんだ？　デーモン城になにがあるんだ？」

「……お前たちのデジタルワールドに
異変をもたらしたデジモン……と言えばわかるか？」

それってもしかして……

「「「ミレニアモン!?」」」

「正解だ」

「って、どうして別の世界にミレニアモンがいるんだよ！？」

大輔くんはゼクトくんに食いつくように言った。
私達がこの世界に来るのにどれだけ苦労したと思ってるの……
……それともミレニアモンには世界を超える力でも持っているのかしら？

「……おそらく何らかの方法で世界を超えたのだろう……
俺達が通ってきたゲートはそれを開ける力を持つもの、
そのゲートを通る資格があるもの、
……闇の意志を持つ、究極体以下の力を持つデジモン……その３つだけだ。
ミレニアモンはどれにも該当していない。
……それ以外の方法をつかったのだろう」

……あのゲートを通る条件がそんな条件だったなんて……
ゼクトくんがいなかったら絶対に通れなかったわ……

「……あなたはその方法が何かと予測することは出来ませんか？」

「……知っているじゃなくて予測するか……」

「……こう広い意味で言えば

僕達が勝手に勘違いせずに真実を知ることができるようなので…
…」

さすが光子郎さんね！！！
確かに広い意味で言えばゼクトくんがそのことを知っているかどう
か分かるわ！
……次から質問するときは私も広い意味で言わなきゃ！！！

「……確かに知りはしないが
予測は立てることは出来る……」

ゼクトくんがため息を付いてそう言った。
……もし私達が今まで通り知っているかと聞いてたら
絶対知らないって言ってたわ……

「……恐らく奴は対応したんだよ……闇のゲートに……」

……対応したってどういうこと？
そう思って光子郎さんの方を見てみた、
そこには私と同じで理解出来ないという表情をした姿があった。
……光子郎さんでもわからないのね。

「……理解できなくてもいい。
ただ奴は無条件で闇のゲートを通ることが出来る。

……それが理解できればいい」

「……じゃあミレニアモンは他の世界にも行けるってこと？」

「それはない筈だ。
……おそらく奴はこの世界にしか来ることは出来ない。
……この世界にだけ来ることが出来る理由は
お前たちの世界とここはよく似た平行世界だからだ」

アグモンの質問にゼクトくんはすんなりと答えた。
……とにかくミレニアモンはこの世界にしか来れないということね。

「……もういいだろ。　俺はタグを取りにこの世界を回る。
お前らはどうするんだ？」

「……その旅に僕たちは付いて行ってもいいのかい？」

「……別に構わないが、いいのか？　俺は秋山遼を探しに行くんで
はないんだぞ？」

丈さんの疑問にゼクトくんは疑問で返してきた。

「……どうする？」

「……ここは彼とともに行動したほうが良いかと。
この世界の地理も知らない僕達が無闇に探しまわっても
秋山くんとは会えないでしょう。

それなら時間がかかっても
最後には確実に秋山くんと会える選択を取ったほうがいいでしょう……」

ゼクトくんと一緒に世界を回るか、私たちの中で話し合いになった。
初めは一緒に旅をするなんて反対！　という意見が出ていたけど、
光子郎さんの考えを聞いて少しずつ減っていって、
最後にはお兄ちゃんの
「アイツはコロモンの為に薬を探しに行ってくれた。
……確かにアイツがやってることは許せないが、
少なくとも一緒に旅をするのはいいんじゃないか？」
という言葉で、ゼクトくんと旅をすることに決まった。

「……じゃ～な、ホーリーエンジェモン」

ゼクトくんはそう言うと城の出口の方へと歩き出した。

「……待て」

「……なんだ？　まだ何か用があるのか？」

「……一度私とゆっくり話をしてもらえないか？」

ホーリーエンジェモンはゼクトくんを呼び止め、
ゼクトくんと話をしたいと言ってきた。

それに対しゼクトくんはホーリーエンジェモンの方を向き、
フードの中からじっとホーリーエンジェモンを見つめた。

「……嫌だ……と言いたい所だが、お前が一つ、条件を飲んでくれるなら
その話を呑もう」

「……条件とは？」

ホーリーエンジェモンの疑問の言葉にゼクトくんは右手を自分の前に出し、
手に付けている真っ黒な手袋を外した。
その下には銀色の機械的な手があった。

「……最近整備をしてなかったせいか、うでの調子が悪くてな……
お前の城にあるパーツで整備させてもらえるか？」

ゼクトくんは右手をブラブラさせながらホーリーエンジェモンに言った。
……忘れてたわ。
ゼクトくんが機械系のデジモンだってことを……

「……それぐらいは構わない。
良ければこっちで修理してもいいが……」

「……その必要は無い。それぐらい自分で出来る……

……それじゃあ交渉は成立だな」

ゼクトくんは右手に手袋をはめ、
ゆっくりとホーリーエンジェモンの方へ歩いていった。
ホーリーエンジェモンはゼクトくんが来るのを見ると、
案内するように奥の部屋へと先導していった。

それに大輔くんも付いて行こうとしたら獣人のデジモン……レオだったかな？
レオさんに止められて、怒っていた。

「退屈だと思うがここで待っていて貰おう。
そんなに長い話では無さそうなんでな……」

レオさんにそう言われたので、私達はしばらく他愛もない話をして時間を過ごした。

そしてしばらくすると扉の方からゼクトくんがゆっくりとこっちに

歩いて来た。

「……もう話は終わりか？」

「ああ」

レオさんの質問にゼクト君はいつも通りあっさりと答えると私たちの方へ来て言い放った。

「……待たせたな。もうここには用はない。今すぐ出発するが、いいか？」

「……ああ。俺達も問題ない」

お兄ちゃんはみんなを見回してそう判断して言った。その言葉を聞いたゼクト君は私達を先導するようにせっせと城の入口へと歩いて行った。私達もそれに付いて行くように移動を速めた。

「……ねえ。これから何処に行くつもりなの？」

城を出た後もせっせと歩くゼクト君に京さんは疑問を浮かべた表情で尋ねた。

「……まずはここから一番近い、地の封印場所に向かっている」

「……地の封印場所ですか？」

「……言ってなかったか？
デーモン城に入るために必要なタグは
地・海・幽・空・鉄の五つの地域に封印されている。
今から向かうのはその内の一つだ」

伊織君の説明にゼクト君はすらすらと答えた。

「……地の封印場ってことは地形は地と言える場所なんだぎゃ？」

「その通りだ。
それぞれの封印場所は地・海・空のように
それぞれのデジモンが有利になる地形になっている」

「……つまりそれぞれの場所で戦い方を変える必要があると言う訳ですね」

アルマジモンの質問にゼクト君が答えて、それに光子郎さんが小さく呟いた。
……場所によって戦い方を変えるなんて大変ね……
出来ればデジモンと合わないようにしなきゃ……

「……今の内に言っておくが、襲って来たデジモンは、
向こうが逃げるかダウンするまで攻撃を辞めるなよ……」

私の考えていることに気付いたのか、ゼクト君はこっちを見ながらそう言ってきた。

「なんでだよ!?　向こうだって話せば分かってくれるかもしれないだろ?」

「……向こうから襲って来た時点でそれは無い。
この世界のデジモンは縄張り意識の他に
本能のままに戦うデジモン、
世界の混乱を望む奴らが居てな……
そんな奴らには会話なんて通用しない」

大輔君の怒りを込めた問いにゼクト君はそう答えた。
……私はデジモンと戦いたくなんてない。
……でも会話が通用しないデジモンに出会ったら私はどうしたらいいの?

「……僕達にデジモンを殺せという事ですか？」

「最悪そうなるだろうな。
この世界では寿命か、自分で力を使い果たす以外の方法でデジモンが死んだ場合、
デジタマは出現しない。
……お前たちの「殺す」という意味がデジタマを破壊することを言うなら
そういう事になるな……」

「ふざけるな！？　僕達にデジモンを殺せるわけがないだろう！！！」

「……前に言ったはずだ。
お前らも既にデジモンを殺しているという事を……。
……それにボロボロになってでも本能のままに戦うデジモンは生かしておけば他のデジモンが犠牲になるんだぞ？
……お前らはそんなデジモン達が犠牲になってもいいと言うのか？」

光子郎さん、タケルくんの言葉にゼクト君は当たり前のことを言うように
言った。
……確かに私達はデビモン、ヴァンデモンといったデジモンを「殺している」。
……でもだからって私達はデジモンの命を奪う事に納得なんてして

いない！！！

「……全ての命を救えるなんて思うなよ？
ここでそいつを見逃せば、何の罪もない他のデジモンたちが殺される。
逆にそこでそいつを殺せば、他のデジモンは殺されずに済む。
……お前らはこういう経験をしたことがないか？
止めを刺さなかったせいで、後で多くの命が奪われたという経験を……」

ゼクト君の言葉に私たちは俯いてしまった。
ゼクト君が言った事は私達が旅の途中で経験したことだった……
止めを刺すのを戸惑ったせいで相手に逃げられ、
後で多くの命が奪われた。
……そして私達はそれに怒り、そのデジモンを倒した。
……結局は倒しているのに私達は甘い考えのせいで
多くの命を失う羽目になってしまった……

そんな経験をした私達にゼクト君の言葉を不定することなんて出来なかった。

「……俺は目的の為だったら、それを邪魔する者を殺す。
それが例え聖なるデジモンだったとしてもだ……」

ゼクト君はそう言うと黙り込んでただ目的地へと歩みを続けた。
……私達はその背中に黙って付いて行く事しか出来なかった。

第四十四話　命を背負う覚悟（後書き）

……今回は何時もよりも暗いかも知れません……

第四十五話　黒コートの策略？（前書き）

今回は今まあでで一番マシ？　な戦闘シーンだと思います。

……人型以外の戦闘シーンって難しいですね……

人型の戦闘シーンを書いてみたいです……

第四十五話　黒コートの策略？

辺りを岩で囲まれた場所に三体のデジモンの影があった。

「いけぇ！　ガルルモン！！！」

ガルルモンはヤマトの声と同時に
目の前にいる真っ赤な恐竜のようなのデジモン……ティラノモンに
飛びかかった。

ティラノモン　恐竜型デジモン　属性データ種
　有史以前の世界に存在した古代の恐竜のようなデジモン。
発達した2本の腕と巨大な尾で全ての物をなぎ倒す。
必殺技は身体の色と同じ、深紅の炎を吐き出す『ファイアーブレス』。

飛びかかったガルルモンをティラノモンは体を大きく回転させ、
遠心力で威力が増した自らの尻尾で叩き落とした。

ガルルモンは地面に叩きつけられると、すぐに立ち上がり、
自慢のスピードでティラノモンから距離を取った。

「エクスブイモン！　空からの攻撃だ！！！」

大輔の言葉にエクスブイモンは頷くと、
空に飛び上がり、胸のX字の模様に光を溜め、
ティラノモンに向けて放射した。

『エクスレイザー！！』

ティラノモンは目線をガルルモンからエクスブイモンの必殺技に変えると、
鋭い牙が生えそろった口を開け、
そこから己の必殺技である『ファイアーブラスト』を放った。
巨大な炎の球はエクスレイザーとぶつかり相殺……否、突破された。
自分に飛んできた炎の球を何とかギリギリで避け、
再び狙われないよう空を飛び回った。

「……クッッ！！　二体でやっと同等に戦えるのかよ……」

「……みんなでかかればこんな奴……」

「……それじゃあ意味がないだろう」

上からヤマト、大輔、ゼクトがそれぞれ言い放った。

このような状態になった理由は過去にさかのぼる……

「……次から基本的に成熟期一体に対しては二体までしか戦う事を認めない」

しばらく無言で歩き続けた大輔たちは、急に立ち止まり、何かを思いついたような反応をしたゼクトから突然そんなことを言われた。

「ハァ？　何言ってんだよ!?　どうして俺達がデジモン二体で戦わなくちゃいけないんだよ!?」

「……同形態のデジモンになら数で押せば確かに基本的には勝てるだろう……
だが相手が完全体ならどうするんだ？
今のような戦い方じゃ、絶対に勝つことは出来ないじゃないか？」

「そ、それは……」

「……この旅は完全体と戦う機会が恐らくかなりある。
……今のお前たちはその内の一体と戦っただけで全滅するんじゃないか？」

大輔とゼクトは言い合うよう……いや、大輔の言葉にゼクトはただ思ったことを
そのまま口にした。

「……それとも今のまま何の対策もせず、完全体に出会った時に自分達のパートナーデジモンがボロボロにされるのが見たいのか？」

「そんな訳あるか！！！」

その言葉に対し、大輔は真っ先に声を上げた。
大輔に先に言われたせいで、他の者たちは何も言わなかったが、その瞳は大輔と同じ目をしていた。

「なら決まりだな。
次から基本的にデジモン二体とそのパートナー二人でデジモンと戦ってもらう。
……お前らもそれでいいな？」

ゼクトは大輔達よりも低い位置にいるデジモン達に確認するように尋ねた。

「私はそれで構わないと思うわ。
……事実このままじゃ私達はこれから先の戦いに勝てないわ……
……でもデジモン二体というのは分かるけど、
どうしてそのパートナーも数に含めているのかしら？」

テイルモンはゼクトの話を聞いた時に疑問に思ったことをそのまま口に出した。
子供たちの内の何人かもそれが気になっていたらしく、疑問の眼差しをゼクトへと向けた。

「……パートナー同士なんだから一緒にしただけだ。
何か問題でもあるか？」

「問題だらけよ！！！　そんな理由でもしミミ達に何かあったらどうするのよ！？」

「私も嫌よ！！！　ソラに危険な目にあってほしくないもん！！！」

パルモンとピヨモンは声を荒らげるように言い放った。
彼女たちは自分のパートナーに危険な目にあって欲しくないのだ。
なのでゼクトの言ったことに怒りを覚えるのは仕方が無いことだった。

「……なら自分達で守れ」

ゼクトはそう言うと再び歩き出した。
そんなゼクトにパルモン達は更に怒りのこもった言葉を口にするが、ハブらかされるだけだった。

ｓｉｄｅヤマト

アレから暫くした後、アイツは急に立ち止まった。

「なんだよ、急に立ち止まって……」

俺はそう言ってアイツに文句を言おうとした。

「……来るぞ」

アイツは小さな声で巨大な岩の方を見つめながら言った。
するとそれに反応するようにそこから言葉にならない言葉の遠吠えが聞こえてきた。

俺達はすぐさまポケットからデジヴァイスを取り出し、
いつでもガブモン達を進化させれるように準備をした。
……これは前にアイツに負けてから光子郎がするように言ったことだ。
こうする事で少しでも進化にかかる時間を減らすのが目的だ。
……これをアイツの前でやるのはシャクだが今はそんな事を言ってる場合じゃない！

「……初戦だな。誰が行くんだ？」

……そうだった。確かさっき決めたんだったな。
こんな時に！　と思う気持ちもあるが、さっきアイツが言ったことに対し、
俺は少なからず賛同している。

「……俺が行く。
……いいなガブモン？」

……だから俺が最初に行く！
俺自身に危険があるか確認も含め俺は初戦に立候補した。

「ヤマト……。よし！　分かったよ！！！」

ガブモンは俺の気持ちを察してくれたのか、
すぐにそう返事を返してくれた。
……さすが俺の相棒だな！

「……なら、二人目は俺が行く！」

「駄目だ。

アグモンはまだ戦いの傷が癒えて無いだろ？
……冷静になれ太一。お前らしくないぞ？」

「そうっすよ！　太一さんは今回は俺に任せてくださいよ！
キッチリ太一さんの分まで戦って見せます！！！」

大輔がそう言いながら前に出てきた。
……お前も他の皆のために……
流石太一のゴーグルを引き継いだだけはあるな！

「分かった。
今回は俺と大輔。ガブモンとブイモンだ。
……これでいいな？」

「……ああ。問題ない」

アイツはいつものように心がこもっていないような言い方で言ってきた。
……お前は基本的にいつもその態度だな……

「……よし！　行くぞ！　ガブモン！！！」

「ブイモンも頼むぜ！！！」

「「ＯＫ！！！」」

俺と大輔はそう言うとデジヴァイスを握る手の力を少し強めた。
それに反応したかのようにデジヴァイスは光を上げ、
ガブモン達を包み込んだ。

「ガブモン進化・・・・・・・

ガルルモン！！」

「ブイモン進化・・・・・・・

エクスブイモン！！」

光が消えるとそこにはガブモンとブイモンの進化した姿があった。

「いけぇ！　ガルルモン！！！」

ｓｉｄｅｏｕｔ

それからガルルモンとエクスブイモンは様々な攻撃をティラノモンに試した。

その幾つかは避けられたり相殺されたりしたが、
数で有利なため、幾つかは直撃した。
だが、ティラノモンには大きなダメージが見えず、
そのためかガルルモンとエクスブイモンは同じ事を繰り返すしか
なかった。

「クソ！！　このままじゃエクスブイモン達のエネルギーが先に無
っちまう！！！」

「焦るな大輔！！！　お前が焦ったらエクスブイモンも焦っちまう
！」

ヤマトは必死に大輔に冷静になるように言ったが、
内心ヤマトも焦っていた。

どんな攻撃をしてもティラノモンには効果がなく、
向こうの攻撃はまともに食らえば数発で戦いを終わらすほどの力を
持っている。
……ヤマトは必死に何か出来ないか考えたが、
何一つ思い付かなかった。

……不意にヤマトはゼクトの方を見た。
なぜそちらを向いたのかはヤマト自身も分からない。

……ゼクトはそれに気が付かなかったのか、
ヤマトに見つめられてもただ一つの方法を見ていた。

ゼクトの視線の先にあるのはティラノモンの姿だった。

……だがヤマトは何か引っかかった。
ゼクトが見ているのは確かにティラノモン。
それはヤマトにも分かっている。
……でも何か違う！　ヤマトはそう感じた。

ヤマトはもう一度ゼクトの目線の先を注意深く観察する。
そこにあるのは先程と変わりないティラノモンの姿。
……だがヤマトは観察を辞めない。

今出ぬ答えはそこにあると自分の直感が告げていたからだ。

……突如、ヤマトはハッと顔を上げた。
分かったのだ。
ゼクトが何を見ていたのかを……。
そして探していた答えが。

「ガルルモン！！　後頭部だ！　後ろに回りこんで後頭部を攻撃しろ！！！」

ヤマトの突然の言葉にガルルモンは呆気に取られた。
だがすぐに我に返り、ヤマトの作戦を実行すべく、
ティラノモンの方へ突撃した。

ティラノモンは自分に向かってくるガルルモンに気が付き、
向かい撃つべく、鋭い爪が付いている右腕を
ガルルモン来るであろう場所へと振り下ろした。

「今だ！！！」

ガルルモンはそう声を上げるとティラノモンの振り下ろしをジャンプでかわし、
ティラノモンの後ろへと回りこんだ。

ティラノモンは直ぐ様振り返ろうと体を動かしたが、
そうする前にガルルモンの声が響き渡った。

「遅い！！！」

ガルルモンはそう叫びながら右足を己の全ての力を込めティラノモンの首辺りに
振り下ろした。

ドゴォォォン！！

ティラノモンはその攻撃を受け、声も上げずに倒れこんだ。

「……正解だ。友情の紋章に選ばれし子供よ……」

その光景を見ていたゼクトは
誰かに聴かせるわけでもなく、

そう呟いた。

第四十六話　一乗寺賢（前書き）

軽くスランプになってしまいました。
……書きたいことはあるのにそれが文字で表現出来ない……
これが壁でしょうか？

私の下手な書き方のせいで理解出来ない部分とかありましたら、
感想にお書きください。
ネタバレや、ワザとそうしている部分以外で有りましたら
お答えします！

あと、デジモンの説明はめんどくさかったら飛ばしくもらって構いません。

第四十六話　一乗寺賢

ｓｉｄｅヤマト

「スゴイっすよ！　ヤマトさん！！！
ティラノモンの弱点を見つけ出すなんて！！！」

大輔はさっきの事に感動したのか、何度も何度も俺を褒め称えた。
……違う。俺じゃない……。
この方法を俺に教えたのは……

「ヤマトさん」

短く俺を呼ぶ人が居た。
……この声は……！

俺は声のした方を振り向き、俺を呼んだ人の顔を見つめた。

「……何だ？　光子郎……？」

「……あの作戦はどうやって思いついたんですか？」

……やっぱり光子郎も気付いていたか。

「……あいつのおかげだ。
アイツがずっとティラノモンの後頭部ばかり見ているのに俺は気付た。
……アイツは前の戦い……野生のグレイモンとの戦いで、
グレイモンの後頭部を攻撃し、一撃で倒したのをおもいだしたんだよ。
……それで体型が似ているティラノモンにも同じ手が通用するんじゃ……
と、思って実行しただけだ」

何時もの様に俺達と離れた場所に腕を組んで立っているアイツを見ながら
俺はそう言った。
……アイツはそれが聞こえているかいないかは分からないが、
ただ空を見上げていた。

「……彼がなぜデジモン二体と人間二人をチームにして
戦わせる意味が分かりましたね……。
デジモン達が戦っている間に僕達は敵の決定打になりうる場所を
見つけ出さないと行けないようですね」

「……普通に戦ってるだけじゃ、ここのデジモンには勝てないもんね」

光子郎の言葉にアグモンが呟くように言った。

……やっぱりグレイモンに負けたことを気にしているんだな。

「だぁあああああ！！！！！！
ブイモン達自体が強くなる方法はないのかあああああああ！！！！」

大輔は頭をかきむしりながら大声て叫んでいた。
……頭使って指示を出すとか苦手そうだもんな……。

……とにかくガブモンたちだけじゃない。
俺達も本当の意味で強くならないとな！

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｓｉｄｅ賢

「賢！　そっちに行ったぞ！！！」

リョウさんの言葉に反応した僕は殺気を感じる方向を向いた。
そこには数本の長い手足を持つクモのようなデジモン……インフェルモンが
こちらに向かって這うように迫っていた。

インフェルモン　完全体　所属不明　ウイルス種

手足の長い蜘蛛のような姿をした完全体デジモン。
頭や手足を伸ばした状態の通常形態と、
手足を本体にしまいこんだ繭形態をとることができる。
繭形態になるとあらゆる攻撃を跳ね返すほど防御力が上がるが、
一直線にしか進めず、軌道をかえられないのが欠点である。
強固なセキュリティーを物ともせずあらゆるネットワークに侵入することができる。
インフェルモンがネットワークに放たれたら最後、世界中が混乱に陥るだろう。
必殺技は口の中の銃口から、
凄まじい破壊力のエネルギー弾を打ち出す『ヘルズグレネード』
と、
繭形態で敵に突進する『コクーンアタック』。

だけど僕は一切慌てず、
規則的な動きでデジヴァイスを握る。

「……ワームモン。超進化だ」

僕がそう言うとワームモンは無言で頷いてくれた。
進化の光がワームモンを包み込んだ。

「ワームモン超進化……ディノビーモン！！」

そこに現れたのは蜂（ハチ）と竜が合体したような姿をしたデジモン……
ディノビーモンの姿があった。

ディノビーモン　完全体　突然変異型　ウイルス種

本来はスティングモンとエクスブイモンがジョグレスして進化した
突然変異型デジモン。
竜と昆虫のキメラ（合成獣）であり、“恐ろしい蜂”の名をもつ。
竜型とも昆虫型とも区別しにくい種であるが、昆虫の性質が色濃く出ている。
４枚の羽で上空を飛び、頭部の複眼で敵を的確に捉え、確実に敵の息の根を止める。
また、ディノビーモンはかなり凶暴な性格の持ち主である。
必殺技は素早い動きで残像を残しながら敵を切り刻む
“地獄の舞踏”『ヘルマスカレード』。

「……ディノビーモン」

「……分かっている」

僕の言葉に短くそう答えたディノビーモンは這ってくるインフェルモンに対し
４枚の羽根を器用に羽ばたかせ、向かって飛んだ。

「■■■

頭に向かって
上から掴む。
インフェルモンは苦痛の声を上げるがそれを無視し、
そのまま地面に向かって頭を叩きつける。
その衝撃でひるんだ体を切り刻む。

「……」

僕はディノビーモンが勝ったのを見ても黙り込んだままだ。
……僕達がアイツを倒すことは既に十回を超えていた。

「……賢」

リョウさんが悲しそうな声で僕の名を呼んだ。
……ここに居るってことはそっちも終わったんだね……。

「……お前が罪悪感を感じるのは分かる……。
だが、あの事件は偶然と偶然が積み重なって起きた事だ。
……お前が一人そんなに背負い込むことじゃないぞ？」

「……それは分かっています。
でもあの時僕達がアイツを倒せていれば！
……デジタルワールドにさえ送り込んでいれば……」

僕は無駄だと分かっていても、もしもの事を想像してしまう。

「……逃げかもしれないけど、
僕達が全部の原因じゃないことも分かっています……。
でも、やっぱりこれは僕達の責任なんです！」

「……賢ちゃん……」

僕の言葉にワームモンも悲しい声を上げる。

……やっぱり割り切るなんて僕には出来ないよ……
僕達のした事は余りにも大き過ぎたんだ……。

「……リョウさん。……次の予定出現場所って分かりますか？」

「……賢……。　……こっちだ」

僕はワームモンを再びディノビーモンに進化させ、
背中に乗り込む。

……まだ出現する場所があるなら、僕は止まらない。
僕達のせいで起こった最悪を無くすまで僕は戦い続ける。

……たとえ……この身に変えたって……！！！

第四十七話　命を奪う決意（前書き）

……更新遅れてすいませんでした。

少しスランプに陥ってしまってました……

第四十七話　命を奪う決意

大輔達はあれから一夜を岩陰で過ごし、目的地に向かって一本道を歩いていた。
一時間ほど歩き続けていると、
滝が流れ出、靴くらいの深さをもつ川が流れる広い岩場にたどり着いた。

「……さっきまでとはなんか感じが違うね？」

「……どうやら目的もモノは近いようですね」

京とホークモンはそれぞれの思ったことを口にした。
二人が言うようにこの場所は明らかに今までとは何かが違い、
何かを感じさせるような場所であった。

「ゲームで言うならボス前のセーブポイントって所か？」

「……大輔君……」

大輔の呑気（のんき）な言葉にヒカリは小さくため息を付いた。
だが大輔の言ったことも大方間違ってはいない。
そう思ったのは、
常に戦闘には最前線で関わってきた子供達……
太一、ヤマト、光子郎だった。

「……ここが目的地ですか？」

光子郎たちの空気から何かを感じ取ったのか伊織はコートの男に尋ねる。

「……正確に言えばもう少し歩いた場所だ」

男はそこで一旦言葉を区切り、だが、と続けた。

「……戦闘が行われるとしたらここ以外に絶好な場所はないな」

男の言葉に子供達とデジモンは緊迫した空気を一斉に発した。

「……だが、まだ気配は感じない。
……向こうがコチラに気がついているかは知らないが、
戦闘が始まるのはもう少し後のようだ」

男はそう言うと近くの岩に飛び乗り、
座り込み、片足を曲げるようにして立てて、そこに腕を置くようにして座った。

「……さて、逃げるなら今だぞ？
おそらくここには十中八九完全体がいる。
……さすがにそいつとの戦闘で人数制限はしないが、
本当に勝てるのか？」

「勝てるよ！！！」

ブイモンは右腕を上げながらそう訴えた。

「そうだ！！！
俺達は負けない！！！
……この前はダークタワーがあったのと、
相手が空を飛ぶデジモンだったから負けたけど、
今回は違う！！！」

大輔はゼクトに答える。

「……確かに前とは状況は違うが、それでも……
おっと、おしゃべりはここまでのようだな……」

ゼクトはそう言うと勢い良く岩から飛び降りた。

どういうことだ？と誰かが問おうとしたその瞬間、
獣のような雄叫びがあたりに響き渡った。

それと同時に姿を現したのは二体のデジモンだった。

デルタモン　成熟期　合成型　ウイルス種

3体のデジモンが融合した合成型デジモン。
それぞれが別々のデジモンとして存在していたが、
強力な電磁波の嵐を受けたコンピュータの暴走により、
バグが生じ融合してしまった。3つの頭、2本の尻尾をもつこのデジモンは、
体の特徴を生かした3段攻撃を得意とし、
1度に3対のデジモンとの戦いも可能だといわれている。
しかし、それぞれが凶悪なデジモンだったため、
破壊という統一の意識はあるが協調性がなく普段は仲が悪い。
必殺技は3つの口から出るエネルギーを合わせて
発射する『トリプレックスフォース』と
左腕のデジモンが繰り出す『スカルファング』。

ダークティラノモン　成熟期　恐竜型　ウイルス種

元はティラノモンだったが強力なウイルスによって肉体が破壊されたデジモン。
ウイルスによって更に協力になった二本の腕と巨大な尾で
全ての物をなぎ倒す。
元にあった知性はすでに消滅し、

今はただ命じられた司令のみを実行する様になってしまった。
必殺技は変化した体と共に色も変わった
漆黒の炎を吐き出す『ファイアーブラスト』。

「グルルル……選ばれし子供……殺す……」

「ガガガ……ここに来るもの……殺す……」

「……どうやら歓迎されてはいないようだな……」

「「「当たり前だろ（でしょ）！？」」」

デルタモンとダークティラノモンの言葉に対してゼクトが呟き、
それに子供たち全員が突っ込んだ。

「……こいつらを倒せばボスが出現……って所だな」

ゼクト……コートの男は右手に漆黒の鍵…キーブレードを出現させ
ながら呟く。

「ゼクト君も戦ってくれるの？」

その行動を目にした子供たちは驚愕し、
その中でヒカリは全員の言葉を代弁するかのように問いた。

「……お前らだけじゃ全滅しそうだからな」

「別に俺達だけでも倒せる！！！」

「……成熟期だからって油断はするな。
こいつらはこの世界で戦ってきたどのデジモンよりも強い。
……特にこのダークティラノモンの方は
成熟期クラスではかなりの力を持っている。
……お前らのパートナーが一撃でも攻撃を受けたら終わりだな。
……しかもこの戦いの後には完全体との戦いがあるんだぞ？
ここでダメージを受けすぎればどうなるかな？」

男の言葉にムスっとなった大輔は自分達だけでやれると言い張るが、
的を得ている男の言葉によって黙るしな出来なくなった。

「……それとコイツらは殺せよ？
そうしなければ更なる被害が出るぞ？」

男の言葉によって大輔達は驚愕した。

「殺すって、それは……

「コイツらに自分の意志など存在しない。あるのはここに来るものを全員殺す事と、
選ばれし子供を殺すことだ。
……こんな危険なヤツを生かしておくのか？」

「……伊織、……悔しいけどゼクトの言うとおりだぎゃ……。
コイツらからは意思なんて伝わってこなぁぎゃ」

否定する伊織に対しアルマジモンは悲しみを含んだような声で言う。

「……殺さないという考え自体を否定するつもりはない。
……だが、本当に殺さなければならない相手ぐらい自分で考えろ。
コイツらを生かせば、戦いをやめてくれるのか？
……違うな。
コイツらは恐らく動けば死ぬという状態になっても戦うだろう……」

「……話し合いは通用しないんだな？」

「無理だ。
……俺を信じないで話し合うとしても俺は止めないが、
その間に仲間が死んでも文句は言うなよ？」

黙り込んでいた太一は男に問うと、
男はありのままに答えた。

「……みんな……

太一が顔を歪ませ、その先の言葉を言いづらそうにしていると、
全員がその気持ちを感じ取り、
太一が言葉を言い放つ前に言った。

「……みんな！　進化だ！！！」

「「「……おう！！！」」」

大輔の言葉を筆頭に全員がポケットからデジヴァイスを取り出した。

「……お前ら……」

「……太一さんが嫌って思っていることは俺たち全員が知ってます」

大輔達は太一に真剣な眼差しでそう訴えた。
その先は言葉は要らない。
……そう言っているように太一は感じた。

第四十七話　命を奪う決意（後書き）

……大輔達は今までにデジモンを殺したことはありますが、ゼクト……他人に言われてそれを実行するのには抵抗がありました。

今回はそれが少しなくなってということです。

第四十八話　ゼクトＶＳダークティラノモン　一瞬の決着（前書き）

……今回は短いです。

……すいません。

第四十八話　ゼクトＶＳダークティラノモン　一瞬の決着

「……進化するための数秒は二体とも俺が引き受けてやる。
進化したらお前らはデルタモンを倒せ。
……ダークティラノモンは俺が倒す……いいな？」

黒コートの男は大輔達の返事を聞かずに、デルタモン達の方へと駆け出る。
男の接近に気付いたデルタモン達は同時に咆哮を上げ、男を威嚇する。
その咆哮は辺りの岩に反響し、通常の咆哮とは比べものにならないほどの
音量が響き渡る。
大輔達は余りの咆哮に耳をふさぐ。

「……」

だが男はその咆哮に微塵も反応せず、最短ルートでデルタモン達に向かって駆ける。

威嚇が意味の無いと理解したデルタモンとダークティラノモンは
男に殺気を集中する。

……この間、十秒も無かったが大輔達は動く事が出来なかった。

「……！！！　みんな！　進化だ！！！」

咆哮のせいで唖然となっていた意識をいち早く取り戻した太一は、全員に進化をするように言い放つ。

その言葉でハッとなった子供達は急ぎ気味にデジヴァイスを握りしめる。

それと同時に光を上げたデジヴァイスはその光で各デジモンを包み込む。

ブイモン達はそれぞれ自身の姿が変わりはじめる。

向こうではそれは関係ないと言わんばかりに、デルタモンは己の三つの頭を男に向け、そこにエネルギー（トリプレックスフォース）を集中する。

エネルギーが溜まったと同時にそれを解き放つ。

それは真っ直ぐ男に向かって飛ぶ。

「……フン」

男はそれが狙いと言わんばかりに声を上げ、それを余裕を持って避ける。

トリプレックスフォースは狙いが外れても向きを変えず巨大な岩に向かって飛ぶ。

ドォゴン！！！　と大きな音を立てながらぐずれ落ちる大岩。

それと同時にその岩を中心に粉塵が舞い上がる。

ブイモン達は既に成熟期への進化を終え、
戦闘態勢に入っていたが粉塵のせいで男達が見えなかったため、
待機していた。

「……どう思う？　光子郎君」

丈はこの状態を不可解に思い光子郎に問う。

「……丈さんの思っている通りだと思います。
……この粉塵も僕達の進化時間を稼ぐための策略なんでしょう……」

粉塵の方を見ながらそう答える光子郎の額からは一滴の汗が流れ落ちた。
……男は一人での戦いだけでは無く、味方がいる戦いにも長けている。
……逆に言えば男はパーティー戦での戦いに慣れているという事だ。
つまり、仮に一人で数人の相手と戦う事があっても、
彼は瞬時に相手が使いそうな作戦を考え付くことが出来るという事だ。

……出来ればこのままお互い休戦状態で居たい。
光子郎は心からそう思った。

「グォオオオオオオ！！！！！！！！！」

突如、粉塵の中から苦痛の悲鳴が響き渡った。
その悲鳴が響き渡った後も数秒ごとに悲鳴が響く。
……粉塵が晴れた後、大輔達の目に映った光景は、
体中から人間でいう血と言う血を体から垂れ流し、
誰の目から見てもボロボロのダークティラノモンの姿があった。

その数メートル手前には漆黒のコートを
ダークティラノモンの血で真っ赤で染めた男の姿があった。
男は一瞬、大輔たちの方を見るような動作を取ると、
最後の攻撃と言わんばかりにボロボロのダークティラノモンの方へ
と駆けた。

粉塵のせいで見えなかったとは言え、
誰にやられたのかを理解したダークティラノモンは怒りに声を震えさせ、
向かって来る男に対し、巨大な右腕を振り下ろす。

「……遅いな」

それを男は後ろにジャンプして避けるのでは無く、
ダークティラノモンに密着するように前に飛んで避けた。

どうしてそう避けたのか理解できなかった大輔達は
その後に起こる展開に目を疑った。

ダークティラノモンの十数メートル先で男に向け標準を定めていた
デルタモンは
ダークティラノモンもろとも男に向け、
三つの顔から放つ必殺技、トリプレックスフォースを発射した。

その光線は寸分も狂うことなく真っ直ぐ進み、
そしてダークティラノモンと男を包み込んだ。

大きな爆発音が響き渡った後に
何かが倒れるような音が大輔たちの耳に入った。

爆発が起きた場所を見てみるとそこには体中を黒こげにされ、
足から顔に向かって0と1のデータとなっているダークティラノモン
の姿があった。
……だが、そこに男の姿は無かった。

「……お前たちが来るのが遅いから一体倒したぞ?」

いつの間にかすぐ近くに居た男にそう投げかけられた。
……その姿は先程見た時と変わらず、デジモンの血で真っ赤に染ま
っていた。

「……さあ、次はお前たちの番だぞ?
精々、ダークティラノモンのようにならないよう

にアイツの必殺技は喰らわないこと……

「……どうしてデルタモンは仲間のダークティラノモンに技を撃ったの!?」

男の言葉にかぶせるように京は悲痛の声を上げた。

「……簡単な事だ。
敵である俺がアイツの近くに居た。だたそれだけだ」

「そんなの可笑しいじゃない!?
どうして味方ごと攻撃するの!?」

「……アイツらはお互いを味方と思っていなかった。
ただ、同じ命令を受けた、それだけの関係だ」

京の問いに男はそう答えるとデルタモンの方を見て言った。

「……ほら。相手も待ちくたびれているぞ?
さっさと行かないと、こっちに向けて必殺技を放ってくるぞ?」

そう言うと男は大輔達の後ろに回り、これから起こるであろう戦いを見るのに専念するためか、右腕にある漆黒のキーブレードを消した。

男に対して文句を言いたかった者も居たが、
デルタモンが痺れを切らし始めたのか、
プルプルと体を震わす光景を見て、
太一達はまず、デルタモンを倒す事に専念することにした。

「……行くぞ！！！」

誰かの声が引き金となり、第二戦の戦いの火ぶたが切って落とされた。

第四十八話　ゼクトＶＳダークティラノモン　一瞬の決着（後書き）

ゼクト君の戦いのシーンはいつもすぐに終わってしまいます……。

それとデジモンから血がでる事についてですが、
漫画版では出てるのが確認でき、
アニメでは未確認でしたが、
今日見たデジモンの話にデジモンから血が出る演出があったため、
血を出すことにしました。
……アニメでは血は黒色でしたが。

……後、デルタモンが攻撃して来なかった理由は、
男が危険人物と理解し、
距離が離れた場所から必殺技を撃っても男には当たらない。
むしろエネルギーのムダ使いと判断した為です。

第四十九話　選ばれし子供達ＶＳデルタモン　力不足のテイマー（前書き）

……なぜか選ばれし子どもたちの戦闘がいつも似たような感じになっている気がします……。

……考えすぎ？

早く書きたい話まで進まないかな……。

第四十九話　選ばれし子供達ＶＳデルタモン　力不足のテイマー

「うぉおおおおおお！！！！！」

初めに行動を起こしたのは大輔のパートナーデジモン、エクスブイモンだった。
彼は己の背中に存在する体のサイズに対応ではない白き翼を羽ばたかせ飛ぶ。
だが、あえて大空に羽ばたかず、
低空飛行で倒すべき相手……デルタモンへと向かって行く。

エクスブイモンの接近に少しだけ驚いたような動きを見せたデルタモンは
向かってくるエクスブイモンに対して咆哮を放つ。

その咆哮に対して負けずにと、前進してくるエスクブイモンであったが、
その速さは先程よりもわずかに減少していた。

それで十分と言わんばかりにデルタモンは腕に付いている頭のうち、軽い方である右腕でエクスブイモンを迎え撃つ。

エクスブイモンは己の発達した腕力から放たれる渾身の一撃を繰り出す。
それはデルタモンの顔に向かって行く。

だがデルタモンはそれを右腕で防ぎ、

もう片方の腕でエスクブイモンに攻撃を放つ。

「クッ！！！」

防がれるのを承知していたか、エクスブイモンは放たれた一撃を予想していたかのように後ろに飛びかわす。
だが、思った以上に早かったためか、ギリギリでかわすような動作だった。

「私達も行くわよ！！！」

そう声を上げたのはサボテンが巨大化したような姿に腕に赤いグローブを付けたデジモン……トゲモンだった。

「トゲモン！　頑張ってね！」

そう応援の声を上げるミミの声を声援にトゲモンはデルタモンの元へと走る。

それに着いて行くかのように残りの者達もデルタモンへ向かって行った。

「これは完全体との戦闘じゃないんだぞ？

……全員で行ってどうする……」

トゲモン達の行動を見てコートの男はため息を漏らす。

まずデルタモンの元へとたどり着いたのはガルルモンだった。

ガルルモンは自らのスピードを武器とし、

デルタモンに飛びかかる。

『フォックスファイアー！！』

ガルルモンが放った高熱の青い炎はデルタモンへと向かう。

「グルァアアア！！！！！」

だがデルタモンは右手でそれをいとも簡単に打ち消す。

トゲモンもデルタモンの前にたどり着いたと同時に

自身の腕を硬化させ、渾身のパンチを繰り出す。

『チクチクバンバン！！』

それに対してデルタモンは自らの左の頭で防ぎ、

カウンターで吹き飛ばした。

「クッソ！　なんて奴だ！
三体の攻撃をいとも簡単に防ぎやがる！」

「だったら空から攻撃よ！　バードラモン！！！」

ヤマトの言葉に対してソラはそう言い、バードラモンに指示を出す。

「分かったわ！　喰らいなさい！！！　『メテオウイング！！』」

バードラモンは上空から自らの羽根から吹き出す炎を
いくつもデルタモンに放つ。

デルタモンはその場を動かずに両手で頭を覆い、
防御するような体勢を取った。

デルタモンの周りに炎がいくつも舞い落ちる。
それは地面にあたると同時に爆発し、粉塵を辺りにまき散らす。

しかし、粉塵が消えたその場にいたデルタモンには
目立ったダメージは存在しなかった。

「今度は私が！　『ヘブンズナックル！！』」

次はと言わんばかりにエンジェモンがデルタモンの方へ飛んで行き、
自身の力を込めた右腕でデルタモンを殴りつける。

だがそれもエクスブイモンと同じように防がれる。

「……さて、そろそろ弱点が分かっただろうな？」

突然言い放ったのは大輔達よりも後ろにいるコートの男。

「……アイツに弱点なんて無いだろう。
パワーに防御力にあの頭。
……何処を攻撃しても致命的なダメージは与えられない……」

ヤマトは少々肩を落としたような声でそう話す。
それに対してコートの男はため息を付いて言う。

「常に弱点が最もダメージを与えれる場所と考えるなよ？
弱点っていうものはな、
どう攻めれば有効に戦えるかって言う手段の事だ」

「……なら貴方は既にデルタモンの弱点が分かったのですか？」

伊織の疑問に男は肯定する。

「……答え合わせをしてやるからよく聞けよ？
次からは自分達で発見しろ」

「お前が僕達にそんなことをするなんてどういう風の吹き回し？」

皮肉を込めたような言葉でそう言い放つタケルに対して男はまたもやため息を付く。

「……お前らにここで苦戦して貰ったら困るんでな。
忘れていないとは思うがこの後は完全体との戦闘だぞ？
……出来るだけ全力で挑んで貰いたいものでな」

そう言うとタケルは少しだけ納得したような表情をする。

「……つまり、貴方は次の完全体との戦いでは
手を貸してくれないという事ですか？」

言葉の意味を理解したのか光子郎は少しだけムスッとした表情で問う。

「当たり前だろ。
俺とお前達は仲間と言う関係では無いだろ？
それにこの先の戦いでお前達だけで完全体と戦う事もあるだろう。
……その時になって負けるようじゃ、
秋山達の戦いに足手まといにしかならないぞ」

その言葉に対する反論が無かったのか、光子郎含めた全員が声を上げなかった。

「……じゃあ、答え合わせをしていくぞ？
まず、考えてみろ。
なぜ、俺がデルタモンの弱点が分かったかを」

「……勘とかじゃねぇの？」

「……そんなものではない。まずデルタモンを見てみろ。
何かおかしい所は無いか？」

男の言葉に従って子供達はパートナーたちが戦っているデルタモンの姿を見つめる」

「……これと言った弱点は見当たらないけど……」

丈が言った言葉に対し、全員が同意するように頷く。

それに対して男はまたもやため息を付く。

「……アイツのいる場所を見てみろ。何か不可解な事があるはずだ」

子供達は疑問の表情をしながら再度デルタモンを見つめる。

……何回見てもわかんねぇよと誰かが口にしようとした瞬間、

光子郎がハッと顔を上げた。

「……やっと気が付いたのか？　知識の紋章に選ばれし子供よ」

「……はい。軽率でした。こんなことにも気が付かなかったなんて……」

「光子郎、分かったのか？」

「……はい。

……奴は現れてから一歩もその場所を動いては居ません」

「「「えぇ！？」」」

「その通りだ。奴の重すぎの両手の頭のせいでスピードが出せないんだよ」

子供達の驚愕の反応に対して男は補足するように説明する。

「……それなのにお前らはその事に気が付かなかった……。
お前らがもっと早くに気が付いていたら
エクスブイモン達ももっと楽に戦えただろうに……」

その言葉に返せる言葉は子供達には存在しなかった。

「……落ち込んでいる暇なんてないだろ？
お前らのパートナー達は戦っているんだろ？」

その言葉を聞き、全員がハッと頭を上げた。

「そうだ！
おーい！！！　デルタモンはスピー……

「おい大輔！！　そんな大声で言ったらデルタモンにまで聞かれるだろ！」

大声でエスクブイモン達にデルタモンの事を伝えようとする大輔に対して
太一が言い放った。

「でも太一さん！　大声で言わないとエクスブイモン達が聞こえないですよ？」

「うっ！　確かに……」

大輔に指摘され太一は声を上げる。

「……別に聞かれても問題はないだろう。
聞かたからってどうと出来る事でもないだろ？」

たとえデルタモンは重すぎる腕のせいでスピードが遅いて言っても、
デルタモン自身はどうにも出来ない。
そう理解した大輔達は今度こそエスクブイモン達に言った。

『デルタモンはその重すぎる腕のせいで動けねぇぞ！！！』

それを聞いたエクスブイモン達は全員で異なる方向から一斉攻撃を
放った。

動きの遅いデルタモンはそれを避けることも出来ずに直撃した。

「グァアアアアアアアアア！！！！！！！」

もとより防御力が強くなかったのか、全員の一斉攻撃を受けたデル
タモンは
その場に倒れ込み、０と１のデータに分解されていった。

第四十九話　選ばれし子供達ＶＳデルタモン　力不足のテイマー（後書き）

……最後らへんは駆け足になっているかもしれないですね……

それと最近自分の後書きとかを見なおして気が付いたのですが、ある文章を最近忘れていました……

感想または評価をお願いします！！！

……すっかり忘れていました。

第五十話　完全体出現（前書き）

……更新が遅くなり、大変申し訳ございません！

最近検定とテストが近づいて来たため、ゆっくり書いている時間がありませんでした……

それとついに評価１２０突破！！！

ＰＶ６００００突破！！！

評価して頂き、ありがとうございます！！！

……それと、今回は今までにないくらい短いです……

第五十話　完全体出現

ｓｉｄｅヒカリ

「「「……」」」

私達は目の前で消えていくデルタモンの姿を黙って見つめていた。

「どうだ？　この世界で初めてデジモンを殺した感想は？」

いつもと変わらない様子でそう言ったのは
私達の後ろで腕を組んで立っているゼクト君だった。

「どうもこうもあるか！！！　……悪いに決まってるだろ……」

大輔君は後悔しているような顔でそう返した。
……私もこんな事はしたくなかった。

「……まあ、お前達の気持ちは関係ない。
お前達はデルタモンを殺した……それが現実だろ？」

「……その通りだな」

お兄ちゃんは俯いたままそう答えた。
……どんな理由を並べても私達はデジモンを殺した。
それは変わらないわね……。

「……僕達は間違ったのでしょうか。
確かにあのデルタモンは放おっておけば
他のデジモンにも危害を与えるようなデジモンだった……。
……僕達がやったことは正しいことなんですか？」

光子郎さんはゼクト君の方を見てそう言った。
……ゼクト君はどう思ってるの？

「……お前らのやったことは正しい……とは限らない」

「どういう事よ！？」

ゼクト君の返した言葉にミミさんが困惑した表情でそう尋ねた。
周りを見てみると私も含めた全員がゼクト君に
どういう事と疑問の表情で見つめていた。
……私達がやったことは間違いだったの？

「確かにあのデルタモンは危険なデジモンだった……。
だが逆にあいつが居れば他の危険なデジモンを倒してくれていた

かも知れない。
……なぜなら奴はこの場所に来る者を
ほぼ例外なく攻撃するように命令されているんだ。
そこに他の危険なデジモンが来てもおかしくはないだろ？」

「でもそれはもしもの話だろ！？
実際はそんな事が起きる可能性なんてほぼ０だ！
それに危険なデジモンが居ればその時は俺達が戦えばいいだろう！」

大輔君がそう言うとゼクト君は鼻で笑って言い返してきた。

「どうすればこの場所に危険なデジモンが現れたかって分かるんだ？
お前達には世界で起きたことをすぐに知れるような方法があるのか？
……無いだろう。
当然だ。世界の隅々を常に知ることが出来る奴って言うのは、
居たとしても神ぐらいだろう……」

「「「……」」」

「……それにお前ら選ばれし子供は相手にしたら悪の存在だ。
自分達の目的や行動を邪魔する悪そのものだ」

「僕達が悪だって！？　違う！！！　僕達は悪なんかじゃない！
悪は向こうの方だろ！」

私達が悪だと言われたのに腹が立ったのか、
タケル君は怒りの表情でゼクト君に言い放った。

「……正義、悪って言うのはそれぞれ違う。
自分の行動が全て正義だと思えば、自分と違う方法は悪。
仇を討つために相手を殺す自分を正義だと思えば、
たとえ殺されても仕方が無い奴を殺したとしてもそいつは悪。
お前は選ばれし子供が正義だと思っているだろ？
なら逆に相手は選ばれし子供は悪と思っているんだよ」

『その通りだ！！！』

何処からともなく突然声が聞こえてきた。

『お前が言う通り、我々にとってお前ら選ばれし子供は悪だ！！』

ズドドドドっと水が流れ落ちる滝の中から緑色のような色をした
頭に二本の角を生やした、恐竜のようなデジモンが姿を表した。

トリケラモン　完全体　角竜型　データ種

草食恐竜型では一、二を争う攻撃力を持つ

トリケラトプスの姿を持つ二足歩行の角竜型デジモン。
表皮の頑丈さは生物系デジモンの中ではトップクラス。
表皮同様、額から生えた2本の角は超硬質で、モノクロモンよりもはるかに硬い。
基本的に性格は温厚。しかし、
通常時の緩慢な動作からは推測しかねる突進攻撃は、
硬質の体を持つ鉱物系デジモンでさえ破壊してしまう攻撃力を持っている。
必殺技は額の2本角と鼻先の角で敵に突進していく『トライホーンアタック』。

「……なぜ姿を表さないと思っていたが、話を聞いていたのか……」

「ああ。お前の話が中々興味深いもんでな。
……オマエのような考えを持つ奴がなぜ選ばれし子供と一緒に居るんだ？」

「……こっちにも色々あってな」

ゼクト君はそう言って会話を終わらすと、目線を私達に向けて言ってきた。

「……あいつを今まで戦ってきた完全体と一緒だと思うなよ？
奴の必殺技をまともに食らえば

お前達のパートナーは一撃で消滅するかもしれないぞ？」

「一撃って！……どうしてヤツにそれ程の力がありるんだよ！？」

「あるんだから仕方が無い」

適当にゼクト君はそう答え、大輔君は更に怒る……。

……何時もそうなってる気がするのは私の気のせい？

第五十話　完全体出現（後書き）

出現した完全体！
果たして子供達は勝つことができるのか？

……少しだけ次回予告風に書いてみました……すいません。

感想、または評価をお願いします！！！

第五十一話　完全体の力（前書き）

前回の文があまりにも少なかったので、
投稿してみました。

これ以降は少しの間、
更新が不定期になるかもしれません……
でもこのＰＣを開ける時間はあるので、
出来るだけ更新できるようにしていきたいと思います！

第五十一話　完全体の力

「……そろそろ始めるとするか」

突如トリケラモンは自らの雰囲気を戦闘のモノに変え、
選ばれし子供達に向けてきた。

「……それもそうだな。……おい！」

コートの男は目線を選ばれし子供達に向け、
言葉を続けた。

「アイツの突進攻撃だけは必ず避けろ。
その攻撃はお前らにとって、ほぼ一撃必殺となっているはずだ」

「……戦うしかないの？」

ヒカリはデルタモン達と違い、
会話が成り立っていたトリケラモンとなら
戦わずに話し合いで解決出来ると思いったのか、
コートの男に対しそう尋ねる。

「無理だ。
確かにアイツは会話ができる程の思考を持っているが、
アイツの使命はこの場所を守ること。
……この場所に来たものを全て消すことだ。
そうだろ？」

「その通りだ。
我がこの場所に存在する理由はお前の言う通り、
この場所を守り、この場所に来たモノを消すことだ。
故に、戦闘を回避する手段など存在しない」

コートの男の確信を持った問いにトリケラモンは肯定し、
戦闘は回避できないとハッキリと口にする。

「そういう事だ。
だから生きてこの場を離れたかったらヤツを倒すことだな」

コートの男の言葉に子供達は俯く。
彼ら自身も殺さなくてはならない相手が居るという事は少しながら理解している。
だが、しっかりと会話が出来る相手を殺す覚悟など、
まだ、子供達には無かった……。

……だがそれでも……

「……グレイモン」

「……分かってる。アイツを倒せば良いんだろ？」

「お兄ちゃん！？」

「……ヒカリ、この戦闘はどうしても避けることは出来ない。
……俺達はコイツを倒して、進まなければならない！
本当に倒すべき相手に会うためにもここで俺達は止まるわけには行かないんだ！」

ーーーー奪わなければならない命が有ることを理解しなければならないーーーー

「……分かった……うんん、分かってはないの。……でも……」

ヒカリはそこまで言うと目を閉じた。

「……よし！　みんな行くぜ！！！」

ヒカリはその先の言葉を言わなかったが、それでも覚悟を決めたことは
大輔達にも分かった。
そのためか、誰かが戦闘を開始する声を上げたと同時に
全員が相手に対して敵意を放っていた。

「まずは私に任せて！　『メテオウイング！！』

空のパートナーであるピヨモンが進化したデジモン…バードラモンは、
先制攻撃と言わんばかりに、己の翼を大きく羽ばたき飛翔し、
上空に上がったと同時に炎のような色をした翼から、
いくつもの火球を放った。

火球は倒すべき相手であるトリケラモンに対して飛び、
数発トリケラモンの足元に命中し、数発は直撃した。
地面に命中した衝撃でトリケラモンは粉塵に包み込まれる。

……だが、この攻撃は効かない。
それは粉塵で姿が見えなくとも全員が理解していた。

効かないとわかった上でエネルギーを消費してまで攻撃した理由。
それは……

「ヒカリ、京ちゃん、タケル、伊織！　今の内だ！」

「「「うん（はい）！！」」」

太一の声にそう返した４人はデジヴァイスを強く握り、
それぞれ名前を呼び合い、コンタクトを取った。

「京さん！」

「分かってるわヒカリちゃん！」

「タケルさん！」

「僕は準備オッケイだよ伊織くん！」

「「「ジョグレス進化だ！！」」」

４人がそう声を上げると、Ｄ３が光を放ち、お互いのジョグレスパートナーである
Ｄ３と交差するように光を放つ。

その瞬間、
それぞれのデジモン…テイルモン、アクィラモン、アンキロモン、
エンジェモンが

優しい光に包まれる。

「テイルモン！」

「アクィラモン！」

「「　ジョグレス進化！！！

シルフィーモン！！！」」

姿を表したのは人をベースに獣が合体したような姿をした、
赤と白色の姿をしたデジモンの姿があった

シルフィーモン　　完全体　　獣人型　　データ種

アクィラモンとテイルモンがジョグレス進化した獣人型デジモン。
強靭な脚力を持ち、その跳躍力は遥か上空にまで達すると言われている。
また、上空高くまで飛び上がった後、両腕を広げグライダーの様に滑空し、
飛び回ることができる。両耳の部分にあるレーダーで捕えた情報を画像処理し、
頭部に装着されているヘッドマウントディスプレイに表示されるため、
昼夜関係なく敵を正確に捉えることができる。
必殺技は両腕を前に突き出しながら、エネルギー弾を打ち出す『ト

ップガン』と、
上空から超スピードで滑空して、衝撃波を敵にぶつける『デュアルソニック』。

「エンジェモン！」

「アンキロモン！」

「「ジョグレス進化！！！

シャッコウモン！！！」」

もう一つの場所に姿を表したのは銀色の土偶のような姿をしたデジモンが
存在していた。

シャッコウモン　完全体　突然変異　不明

アンキロモンとエンジェモンがジョグレス進化した突然変異型デジモン。
銀色に輝くボディに白い翼を持っており、
一説には古代デジタルワールドに降臨した
天使型デジモンではないかと言われている。
首や胴が３６０。回転し、全方位に対して攻撃することができる。
表情が無い分、何を考えているのか皆目検討もつかず
見る人によっては怖さを感じる場合もあるが、性格はいたって温和

である。
得意技は腰部から発射される『ニギミタマ』。
必殺技は両目から照射される赤い破壊光線『アラミタマ』で
この光線の焦点温度は１０万度に達すると言われている。

バードラモンがエネルギーを消費してまで攻撃した理由、
それはテイルモン達のジョグレス進化を邪魔させないためであった。

粉塵で視界を覆い、
その間に進化、ジョグレスをする。
……コートの男の戦いを参考にして編み出した、子供達の新たな戦略だった。

これによってトリケラモン完全体一体に対して、
こちらは成熟期7体、完全体が2体となり、見た目では圧倒的に有利となった。

「……完全体が二体になったか。面白い！　かかってくるがいい！！！」

粉塵が晴れ、シルフィーモンとシャッコウモンの姿を見たトリケラモンは
そう口にした。

「言われなくても行ってあげるわよ！　シルフィーモン！！！
トリケラモンに攻撃よ！！！」

トリケラモンの言葉に対して京はそう返すと、シルフィーモンにそう指示を出した。
シルフィーモンはそれに頷き、トリケラモンの方へと地面を蹴り、空中から接近する。

シルフィーモンの姿は見る見るうちに上空まで飛び上がり、おそらく最高地点に到達したと同時に両腕をグライダーのようにしてトリケラモンの上空から、滑空した。

そのスピードはトリケラモンに近づくと同時にだんだんと速さを増していき、
トリケラモンに迫っていく。

「喰らえ！　『デュアルソニック！！』」

シルフィーモンは高速で滑空するしている状態で腕を高速で振ることで発生する
通常よりも強力な衝撃波をトリケラモンに飛ばす。
衝撃はトリケラモンを切り刻まんと、高速で飛ぶ。

「グォオオオオオオオオ！！！！！！！！」

それに対してトリケラモンは咆哮で空気を響かせる。

衝撃波はその暴音でトリケラモンに当たる前に消えさってしまった。

「「「な!?」」」

その光景を見ていた全ての者……それをしでかした張本人であるトリケラモンと
コートの男を除く全員が声を上げた。

「そんな……シルフィーモンの必殺技が聞かないなんて……」

「……まだだ！　シャッコウモン！　今度は僕達が攻撃だ!!!」

誰かが絶望の声を上げる中、タケルは必死に気持ちを入れ替えて、
シャッコウモンが攻撃するように言った。

「わ、分かった!」

シャッコウモンはそう返事をするとトリケラモンの方に目線を向けた。
その目はトリケラモンの姿を捉えたと同時に赤くなり、
目にエネルギーが集中していた。

「喰らえ！　『アラミタマ！！』」

両目から照射される赤い光線は
真っ直ぐとトリケラモンに向かっていく。

「ムダだ！！！！！」

トリケラモンは頭を突き出し、顔を覆っている皮膚でそれを真正面から受ける。
小さく爆発したが、
トリケラモンに傷は一つもなかった。

「同じ完全体なのにこの差は一体！？」

伊織は目の前の出来事が信じられないのか、
誰かに聴かせるわけでもないのにそう呟いた」

「……同じ完全体、だと！？」

以外にもその言葉に反応したのはトリケラモンだった。

「……ナメるなよ、完全体を……

完全体とは厳しい生存競争を勝ち抜いて進化を遂げた選ばれしモンスターなのだ。
お前みたいな雑魚が完全体を名乗るとは片腹痛いわ！！！」

トリケラモンはそう叫びを上げると頭を下げ、
俯くような構えを取った。

「！？　来るぞ！！！」

コートの男は珍しく声を荒らげてそう言い放た。

デジモン達はその声に反応したのか、
トリケラモンが動き出す前に飛翔するか、横に思いっきりジャンプした。

「『トライホーンアタック！！』

そうすると先ほどまでシルフィーモンがいた場所をトリケラモンはデジモン達が反応できないようなスピードで突進を来りだした。
……いや、反応出来なかった訳ではない。
ただ、このようなスピードをあの巨体な体を持つトリケラモンに出せるはずが無い、
そう考えていた。
……もし、先に避けるような動作を取っていなかったら、
トリケラモンのスピードにデジモン達は反応できずに

直撃していたであろう……

その突進は突撃場所に相手が居ないため、不発に終わり、
無残にも岩の方へとスピードを緩めずに向かっていた。
……あのスピードでの突進だ。
急に止まれるはずがなかった。

巨大な岩に向かって突進していくトリケラモンの姿を見て、
誰かがこう思った。
「もしこのまま岩に直撃したらそのまま岩に刺さったままになるんじゃ！？」

もしそうなっていたら子供達にとっては大きなチャンスになっていたであろう。
……だが、現実はそうは甘くなかった。

ドガガガガァ！！！！！！！！！！

大きな音を立てて崩れ落ちなのはトリケラモンの背丈の6倍はある大岩だった。
その岩は見るも無残に崩れ落ち、
突進の後がくっきりと残るような崩れ方をしていた。

「……何だってんだよ……この威力は！？」

「……これが完全体の力だ」

子供達の後ろでコートの男はそう呟いた。

第五十一話　完全体の力（後書き）

やっと子供達の全員が命を奪う覚悟が少しは出来ました。

……ヒカリを納得させるのは難しい……というか無理かも？

これ以降デジモンと戦うときはあまり、

嫌がったりしないと思います。

第五十二話　有効な攻撃（前書き）

更新が遅れて申し訳ございません……

第五十二話　有効な攻撃

「くそッッ！！！　どうしたら良いんだ！？」

大輔はトリケラモンのあまりのデタラメさに苦虫を噛み潰したような表情をする。

「落ち着いてください！！！
ここで僕達が冷静さを失えば、大変なことになってしまいます！」

光子郎はそんな大輔に冷静になるように言葉を告げる。
……実際は光子郎も心中冷静ではなった。
目の前の敵は完全体二体を凌駕する程の力を持っている。
しかもその相手はこちらと同じ完全体だ。
……なぜこんなに差があるのかは光子郎には分からなかった。

「光子郎の言うとおりだ。ここで俺達が冷静さを失えば
グレイモン達にも影響が出る。
……一旦落ち着け、大輔」

光子郎と同じく、太一も心底冷静ではなかったが、
冷静さを失わんと自分にそう言い聞かせながら大輔に言う。

二人の先輩の言葉で少しは冷静になった大輔は
ゆっくりと今の状況を話し始める。

「……でも実際どうするんですか？
今エスクブイモン達はトリケラモンに攻撃をしていますけど
全然効果がないっすよ！？」

大輔の言う通りだった。
エクスブイモン達は完全体であるシャッコウモンとシルフィーモン
を筆頭に
スキあらば攻撃を仕掛ける。
それに対しトリケラモンは避けるまでも無いと理解したのか、
攻撃を避けるような動作をせず、『トライホーンアタック』を仕掛
けた。
シルフィーモン達はトリケラモンのスピードを知ったため、
避けることは出来ていたが、その反応速度は着々と鈍りをみせはじ
めていた。

子供達は思考を限界まで使い、状況を打開する手段をイメージする。
だが自分達が勝利するイメージが全く思い描けない。

それだけの考えに思考を使い続けている
子供達の耳に新たな困惑を生む、呟きが耳に入る。

「――――私を倒した選ばれし子供とお前らにこれ程の差があるとはな……」

落胆したような表情をして独り言のようにそう呟いたのは
トリケラモンだった。

「どういうこと？　トリケラモンは昔、選ばれし子供と戦ったことがあるの？」

「……口ぶりを見るかぎりそう捉えることができますね。
恐らくトリケラモンを倒した選ばれし子供と言うのは
ホーリーエンジェモンが言っていた方なんでしょう。
……そうですよね？　ゼクト君」

ミミの疑問の言葉に光子郎は自らの記憶を探り、思い出して来た真実を
答えを知っているだろう男にそう尋ねた。

「その通りだ。この世界の選ばれし子供はこのトリケラモンと戦い、
勝利している。……お前らと違い、たった一人と一体のデジモンでな」

「……どうせそのデジモンは究極体だったんだろ？
なんせデーモンを一人で倒すようなデジモンだしな。
この時点で究極体になってもおかしくないしな」

男の皮肉を含めた言葉に大輔は負けずにと言葉を発する。

……大輔自身もそのデジモンが究極体だとは思ってはいない。
だがこうでも言わないと男に馬鹿にされ続けると思い、そう言ったのだ。

「究極体？　そんな訳あるはずが無いだろう」

「……当然だわ。究極体にそんなに簡単になれる筈がないもの。
その子のデジモンは完全体だったんでしょ？」

大輔が言った言葉にため息を付いた男に対して当然だと言わんばかりに
空もため息を付く。
そして大輔の言葉を修正して男に答えを返す。

大輔の言葉には空以外もため息を付いたが、
空の意見には子供達全員がそうだろうと思って聞いていた。

そんな子供達に言葉を返した男の言葉は大輔達の想像を超える言葉だった。

「完全体でも無いな。……トリケラモンを倒した時の
この世界の選ばれし子供のデジモンは成熟期だ」

誰もが耳を疑った。

「せ、成熟期ってどういう事ですか！？」

「言葉の通りだ。その選ばれし子供のデジモンは成熟期だったってことだ。

……聞き直す言葉でもないだろ？」

伊織の言葉にあっさりとそう答える男。

……誰もがそれが嘘だと反論の声を上げたかった。

だが男が嘘を付かないと言うことは誰もがよく理解していた。

だが、だからと言ってそれを信じることは子供達には出来なかった。

「……そのデジモンはどうやってトリケラモンを倒したのですか？」

光子郎はとりあえずトリケラモンを倒したデジモンが成熟期だったという

男の言葉を置いておき、

そのデジモンがどうやってトリケラモンを倒したのかを問う。

……自分達の先で戦っているパートナー達に勝利を与えるために。

「――そいつはトリケラモンの口の中に必殺技を放ち、致命傷を与えた。

……まあ、今回はトリケラモンがそのことを警戒して敵を空に投げ出し、

口の中に入れて食いちぎるという技を使ってこないから使用は出来ないがな……」

「そんな手が有りましたか！　……でも使えないなら意味がありませんね」

光子郎はそのことを聞き、感心したような声を上げたが、
今は出来ないと理解すると落ち込んだような声を漏らした。

「とにかく、早く突破口を見つけないと
お前らのパートナーが大変なことになるぞ？」

「そんなことは分かってる！　……でも何も思いつかないのよ。
この中で最高の攻撃力を持つ
シルフィーモンとシャッコウモンの攻撃が全然効かない！
……勝機なんて全然見えないわ……」

「……お前らは諦めるのか？
自分達のパートナーが必死に戦っている事を知っていて勝利を諦めるのか？」

京の呟きを聞き、男はいつもよりも威圧感を出し告げる。
……その威圧感にこの場に居る全員が飲み込まれる。

「……戦いという物は常に勝者と敗者の２つだけだ。
本当の意味の引き分けは無い。
……この場合の負けとはどういう意味かお前らは分かっているのか？
『死だ』……ここでお前らが負ければお前達は死ぬ運命にある」

「で、でも貴方は私達を死なせないためにここに居るんでしょ！？」

「……仮にお前らが死んでも、秋山達には『選ばれし子供達は戦いに負けて死んだ』
と、報告すればいいだろう。
俺はその場に居合わせて居なかったと言えば良いだけだ」

京の言葉に対し男はバッサリと言い切る。
自らに死が迫っているという事実を知った子供達の中には僅かに震えだす者も居た。

「……それにお前らにはまだ勝算が残っているだろ？
トリケラモンを倒す方法が……」

「……何が有るって言うんだよ？」

男の言葉にヤマトは問う。
全員が男の言葉に今まで以上に耳を傾けた。

「確かにお前らだけの力じゃトリケラモンを倒す事は出来ない。
……なら、自分達の力以外を使えばいいだろ？」

「私達以外の力？」

「デジモン達が使える技、今この場で何を使えば有効か、

考えるんだな……」

そう言って再び子供達から距離を取った男から視線を外しつつ、全員で状況を打開する方法を考えた。

……周りは岩で囲まれている。

……足元の近くには滝から流れた水が下流の方へと流れている場所がある。

……自分達のデジモンが使える技を思い出す。

ハッと全員が顔を上げる。

「「「大輔君！！！」」」

大輔を除く全員が大輔の方を見て声を上げる。

大輔はおう！と声を上げると先で戦っているエクスブイモンに大声で伝える。

「エクスブイモン！　進化を解いてアーマー進化だ！！！」

エクスブイモンはなぜアーマー進化をするか理解できなかったが、パートナーである大輔の言う事だ。

何かあると信じて空中で進化を解く。

大輔はエクスブイモンが進化を解いたのを確認すると、利き腕で握られているＤ３に更なる力を込め、告げる。

『アーマー進化だ！！』と。

その瞬間空中で段々と降下しているブイモンの体が光に包まれる。

ブイモン、アーマー進化！！！

轟く友情！　ライドラモン！」

姿を現したのは漆黒の鎧に包まれた竜獣の姿だった。

ライドラモン　アーマー体　獣型　ワクチン種

友情のデジメンタル”のパワーによって進化したアーマー体の獣型デジモン。

“友情のデジメンタル”は“雷”の属性を持っており、

このデジメンタルを身に付けたものは大地を貫く稲妻のような素早い動きで

敵に立ち向かい、電撃を利用した技で敵を倒す。

必殺技は稲妻を宿した頭のブレードから電撃の刃を放つ

『ライトニングブレード』と、

背中の３本の突起から強烈な電撃を放つ『ブルーサンダー』。

「全員向こうの水辺の方へ移動してください！」

光子郎はブイモンが進化中に他のデジモンに告げる。

トリケラモンはその言葉を聞き、何やら不信を抱いたが、
何をしようと無駄と思い、何も考えずにシャッコウモン達を追って
行った。

トリケラモンの足が川に浸かると同時にライドラモンを追ってきた
光子郎達が空を飛ぶあるデジモンを除く全員に伝える。

「全員で空から集中攻撃です！」

言葉通りに空中のデジモン達は一斉にトリケラモンに空から技を放
ち続ける。
トリケラモンは無駄だと分かっているのになぜ攻撃するか理解が出
来なかった。

激しい水しぶきがトリケラモンを襲う。
激しい音と水しぶきでトリケラモンの視界と耳を奪う。
トリケラモンはイラつきを見せながら、その場にたたずむ。

しばらくすると攻撃が止み、トリケラモンの視界が晴れる。
視界が晴れたトリケラモンが初めに気が付いたのは、
川には自分しか使っていないという事と、
空からこちらに向けて、稲妻を集中させているデジモン二体の姿だ
った。

「今だ！　ライドラモン！　カブテリモン！」

大輔がそう告げると同時に二体の稲妻がトリケラモンに放たれる。

「今更成熟期の攻撃など……ッッッ！？」

効かぬと告げようとしたその瞬間、
トリケラモンの体中に激しい痛みが発生する。

「グァアアアアアアアアアアアア！！！！！！
なぜだぁあああああ！！！！！！！！？
なぜ成熟期の攻撃でこれほどの威力がぁあああああああ！！！！！！！！！？」

「へへ、知ってるかトリケラモン……

水は電気を通るんだぜ？」

得意げに大輔はそう告げ、
トリケラモンは水しぶきを上げて倒れこんだ

第五十二話　有効な攻撃（後書き）

なかなか話が進まない……

今回の勝ち方に納得できない人もいらっしゃるかもしれませんね……

水が電気を通すのにも条件があった時だけだったような気がします。

……それは純粋な水じゃなかった場合でしたっけ？

感想、または評価をお願いします！

キャラクター紹介　謎の者達編（前書き）

そろそろ必要かと思い、作ってみました。

これは大輔達が分かっていることをまとめたような紹介なので、覚えていれば全く必要ない紹介です。

キャラクター紹介　謎の者達編

ＩＮＸＥＫＴ　（インゼクト）

黒コートを羽織っていて、フードで顔を隠している謎のデジモン。

秋山遼とは何らかの関係があり、お互いの目的のため手を組んでいる。

秋山遼との関係上、選ばれし子供達が死亡するのは厄介だと思い、

大輔達と行動するようになった。

右腕が機械であるため、メンテナンスが稀に必要。

嘘を付かないのを信念としており、嘘を付いたことがない。

デジモンとしての形態は『成熟期』、『サイボーグ型デジモン』

デジヴァイスを変化させる力を持っており、デジヴァイスがあれば

アーマー進化…スピリットエボリューションを使用し、

別の形態に進化することが出来るのが確認されている。

決して消えることがない絶対的な悪の感情を持つものしか操れない

『闇のキーブレード』を使用することが出来、

その戦闘力は通常時で完全体に迫る力を持っている。

秋山遼　（あきやまりょう）
　２０００年に賢とともにデジタルワールドを旅した選ばれし子供。
　その時は合計５人の選ばれし子供でミレニアモンを倒した。
　その後、姿を消した。
　彼の存在はゲンナイですら知りえず、友である賢は暗黒の種子の影響で
　遼の事を忘れていた。
　大輔達とは別のデジヴァイスを持っており、
　大輔達には開けることが出来ないゲートを開ける力を持っている。
　パートナーデジモンは不明。

謎の少年
　大輔達のピンチに現れた黒コートを羽織ってフードで顔を隠した謎の少年。
　人間でいう小学五年生の声であるため、
　ゼクトと違いを出すため謎の少年と呼ばれている。
　彼が扱う『光のキーブレード』はゼクトと違い決して歪むことが

ない、
光を持つものしか使用できない。
大輔達に異変にはかかわらない方がいいと忠告すると、
大輔達が入ることのできないゲートの中へ消えて行った。

ＮＯＤＡＴＥ
２０００年に秋山達とミレニアモンを倒した選ばれし子供。
現在は秋山達の事を覚えていないらしく、詳細は不明。

ＮＯＤＡＴＥ
２０００年に秋山達とミレニアモンを倒した選ばれし子供。
何者かによって殺されたこと以外の詳細は不明。

NODATE

２０００年に秋山達とミレニアモンを倒した選ばれし子供。

濁流に飲み込まれて死んだ以外の詳細は不明。

第五十三話　苦情（前書き）

検定には受からないわｗ　と思い始めました。

書き方を一人称にして見ましたが

やっぱりこっちの方がなんていうか小説っぽいですね。

第五十三話　苦情

トリケラモンに勝利したことに少々の間は大輔達の中で歓喜の声が上がっていたが、
すぐに本来の目的を思い出す。

「そう言えばタグは何処にあるの？
トリケラモンが持っている様子はなかったけど」

退化して小さな黄色い恐竜の姿になったアグモンは辺りを見回しながらそう言う。
アグモンの言葉に続くように「そう言えば持ってはいなかったな」、
「なら何処にあるんだ？」という声が上がっていく。

そんな中コートの男は沈黙のままある方へと向かって行く。
……巨大な滝の方だ。

「滝の方に向こうとりますけど、どないしました？」

なまったような関西弁でそう尋ねるのは
テントウムシが巨大化したような姿をしたデジモン…テントモンだ。

「――俺……俺達の目的のものはこの滝の中にある」

「目的の物って……まさかタグの事！？」

目的の物と言われ子供達は一瞬考えるとヒカリがまさと声を上げる。
それに対してコートの男は感情がこもっていない声で短く答える。

「でもだからってこの滝の中に入るのは危険だよ！
一瞬で潰されるに決まってる！」

「へぇ？　滝って修行に使う物だからそんな危険は無いんじゃ……」

「バカ！　こんなデカい滝でそんなこと出来るはずがないだろう！」

大輔の馬鹿な言葉に太一は罵声を上げる。

太一の言葉に凄い勢いで小さくなっていく大輔の姿に誰もがため息を付いた。

太一達がそんなことをしている内に男は既に滝の前まで接近していた。

「バカ！　その滝に飛び込んだら潰されるぞ！」

先程覚えたばかりの事を大輔は男に向かって言い放つ。
因みに潰されると言っても、それは只の人間の場合だ。

男が人間では無い事は全員が分かっているので
もし飛び込んでも潰されはしないが、滝に流される事になるだろ、
と言うのが光子郎の考えだった。

だが、男は期待を裏切って滝に真正面から飛び込むような動きは見
せず、
ただ流れ落ちる水の間である、滝の裏に横から入って行った。

「……その手があったか」

純粋に滝を真正面からどう突破しようと考えていた者が誰にも聞こ
えぬように
呟いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「へぇ～滝壺はこんな風になっていたのか」

男と同じように滝の裏側を横から入って来た大輔達は
普通と違う滝壺の様子に好奇心あふれる様子でそう言う。

滝壺の中は蛍のような小さな光が奥の方からキラキラと照らしてい
たため
暗さを感じることは無かった。
むしろ奥に進めば進むほどそれは大きくなっていき、最終的は

透明な光のケースのようなものに入れられた光……タグがそこに浮かんでいた。

「――これだこの世界のタグ……僕達のタグとはずいぶん形が違いますね」

大輔達の目の前で浮かんでいるタグは二等辺三角形の形をした赤色のタグだった。

……ちなみに太一達のタグは台形のような形をしており、色はそれぞれが持つ、紋章と同じ色をしていた。

「――誰かこのタグを取ってみろ」

「この中のタグをか？　よし！　俺がやろう！」

男に施される様に大輔は光のケースに触れる。

……いや、正確に言えば触れようとする。

しかし、大輔の手がケースに触れることはなく、そのままケースの中を通り過ぎた。

「うぉ！？」

それに驚いた大輔は慌ててその手を戻すが、勢いをつけ過ぎ、後ろから地面に倒れ込んだ。

「そのケースはデジモンがタグを触れることが出来ないように存在している。
故に、人間はそれを触れることは出来ない。
だからさっさとタグを取れ」

「――なるほど、そう言う訳ですか。
なぜ貴方が僕達にタグを取らせようとしたか理解できました」

光子郎は男にそう言うと先程大輔が手を入れたケースの中に自らの手を入れ、
中にあるタグに手を触れた。
その瞬間、何かが弾け飛ぶような音が滝壺内に響き渡った。
その音はケースを覆っていた透明の光が消滅した音であった。

「――これで一つ目のタグ……大地のタグを手に入れた。
一様見てみろ。タグに何か文字が出現している筈だ」

男の言葉通り光子郎……大輔達は光子郎の手の中に握られているタグを覗き込む。
そこには「ＫＯＵＳＨＩＲＯＵ　ＩＺＵＭＩ　ＮＡＴＵＲＥ　ＳＰＩＲＩＴＳ　Ｕ－ＴＡＭＥＲＳ　ＴＡＧ」という文字が刻み込まれていた。

「……名前は良いとして、ＮＡＴＵＲＥ　ＳＰＩＲＩＴＳ　Ｕ－Ｔ

ＡＭＥＲＳ　ＴＡＧですか……
……直訳すれば自然の魂、テイマーのタグですが……」

「別に深読みする必要は無い。
ただ、お前がこのタグを手に入れたという事だけ理解できればそれでいい」

「――僕が手に入れた証が刻まれているという事は
逆に言えば僕が居ないと
デーモン城の封印を解くことが出来ないという意味ですか？」

光子郎の疑問の言葉に男はああ、と小さく呟く。

大輔達はどうせ全員で行く事になるんだから関係ないと思い、
男の言葉通り意味の無い事を考える事はしなかった。

タグを手に入れたのでもうこの場所には用が無いと男がいい、
次のタグの封印場所へと歩みだしたので、
大輔達もそれにトコトコと付いて行った。

◇◆◇◆◇◆◇

タグを手に入れてから数時間。
そろそろ辺りが暗くなってきたので子供達はこの辺でテントを張ることにした。
辺りには珍しく敵の気配が無いと男が言いきったので

ヤマト達も警戒することなくテントを張ることを了承した。

そして、ヒカリ達女の子組が料理の準備を開始し始めたと頃に男は立ち上がり、一人人気……デジモン気が無い場所へと向かい始める。

その後ろ姿にヒカリは慌てて停止の声を上げる。

その言葉に男は立ち止まり何だ？とフードで隠した顔をこちらに向けて言った。

「今日はこの辺にデジモンの気配がないんだから見張りをする必要は無いでしょ？」

「気配がないと言っても安心できない性質でね……

それに俺は食事を取る必要がない。故に俺が今ここに居る必要はないだろ？」

ヒカリの言う通り男は今までヒカリ達と一緒に食事を取ったことが無かった。

今日は先に進むのはここまでとなると男は何時も見張りに行くと言い、子供達の前から離れる。

そして翌日、出発しようとすると姿を現す。

それが男の日課となっていた。

「でも食べる事は出来るんでしょ？」

「食べる必要が無いのに貴重は食料をわざわざ使ってまで食べる事

は無い。
　旅はいつ終わるか分からない。食料は出来るだけ温存した方がいい」

ヒカリにそう返すと男はこのあたりで最も高いであろう場所に跳躍して向かった。
その後ろ姿をしばらくの間ジッと見つめ、小さくため息を付くと、ヒカリは自分の持ち場へと戻って行った。

◇◆◇◆◇◆◇

真っ暗で辺りは自分のいる場所よりも低く見える
場所で男は只ジッと目を瞑りたたずんでいた。
目を瞑るのは別に寝ているからでは無い。
そうすることで自らの集中力や気配の察知能力を上げることが出来るからだ。
こうしていると見えなくても辺りを感じることが出来る。
……自分に近づいている存在に気が付くことが出来る。

「――なんだ？　こんな時間に人のデジモンを借りてまでここに来て……
　子供は寝る時間だ」
「そんな子供じゃないわ」

男にそう返したのは辺りの暗さには全く似合わない姿をした
赤い炎を纏うデジモン……バードラモンの背中に乗っている少女…
ヒカリだった。

「こんな時間にこんな場所に来て何のようだ？」

ヒカリの方を見ずにただジッと前を向く男に対してヒカリはバード
ラモンの背中から
おりて、男の近くに行くことによってその意味を無くす。

「お米が少し余ったからおにぎりにして持って来たの」

「――――俺には食事は必要ないと言った筈だが？」

「偶然お米が余っちゃったの。
置いて置きたいけど、明日になれば固くなっちゃうし、
みんなもお腹一杯で食べれないから持って来たの」

そう言って男に差し出したのはサランラップで包まれた三角形のお
にぎりだった。
男はゆっくりとそれを片手で受け取る。

「それじゃあ用が済んだから、戻るね？　お休み」

ヒカリは最後にそう告げるとバードラモンとともに大輔達の元へと戻って行った。

それを確認すると男は小さくため息を付き、
手に握られたおにぎりのラップをゆっくと剥き始める。

持つ所以外のラップが取れたおにぎりに男は小さく一口被りつく。

「――――少し付けすぎだな。俺的にはもう少し甘い方がいい」

そのおにぎりに男は一人小さく苦情を漏らすと
ゆっくりとそのおにぎりを食べ始めた。

第五十四話　ネットオーシャン（前書き）

検定は今日終わりました！！！
……多分落ちたなｗ
……でもまだテストが残っているｏｒｚ

そして描写をうまく書けるようになりたい！

それとついに７００００ＰＶ突破しました！！！
そしてもうすぐ１００００ユニークです！！！

……なにか記念の話をしたほうがいいのでしょうか？

一度この話を修正しました。

まだおかしな所はかなりありますが、
私の力ではもう何処を変えればいいかが分かりません……
おかしな所があれば指摘してくださると助かります！

第五十四話　ネットオーシャン

「――ここが次のタグが眠る場所ですか」

数日歩き続けた子供達に目の前に広がった景色は
現実世界ではなかなか見ることの出来ない透明度を誇る青い海だった。

「そうだ。２つ目のタグ……『海』のタグはこの海の中にある」

普段と変わらぬ様子でそう答えた男は再び歩みを始める。
しばらく絶景の海に気を取られていたが、
男との距離が数メートル離れた時点でそれに気が付き、
慌てて後を追った。

◇◆◇◆◇◆◇

海に接した風に存在する小さな集落のような家が幾つか建っている場所まで
来た大輔達は無言で歩み続ける男に尋ねる。

「オイラ達はどこに向かってるんだ？　タグがあるのは海の中だろ？」

「――――最近この辺に新たなデジモンが出現していないかを村で聞く。
もし、出現したとすれば……そいつはタグを守るデジモンだからな」

ゴマモンの問いにそう答えた男の言葉に納得する大輔達。
確かに近くで新たなデジモンが出現したとすれば十中八九タグを守るデジモンだ。
考えたくないが完全体の可能性だったある。
このような綺麗な海で戦闘を行いたくないと思いながらも
集落の中でも最も大きな家に無言で近づいて行く男。
少々勝手に集落の中に入ったのに大輔達は戸惑いを見せるが
結局最後は男の後を追った。

男の後を追って家に入って行った大輔達の視線に初めに入ったのは
どこかで見た事がある様な姿をした真っ白いな体毛で覆われ、
至る所に赤い何かが存在し首から何かを掛けたデジモンだった。

「このデジモンはイッカクモンじゃないか！？」

初めに声を上げたのは普段はそのように感情の変化をあまり見せない丈だった。
だが彼が声を上げたのには少々訳があった。
イッカクモンは自分のパートナーであるゴマモンの進化形であるか

ら。
……それもあった。
だが、最も声を上げた理由はそのイッカクモンが体中から人間でいう血液……血液データが本来真っ白である体毛を赤く染めていたからであった。

「あ、貴方たちは……？」

丈の声で気が付いたのかそのイッカクモンぐったりと横になったままで
顔だけを子供達の方へ向け、疑問で一杯な表情でそう尋ねる。

「僕達は別の世界の選ばれし子供です。
海の中にあると言われるタグを取りにここに来たんですが……」

「……なるほど、そうでしたか。――――道理で……」

イッカクモンは苦しそうな表情で子供達の中の一人……太一の顔を一瞬見ると、
何かを思い出したのか小さく笑うような表情を見せた。
そんなイッカクモンの怪我から男は何かを想像できたのか、答え合わせをするように問う。

「この海に新たなデジモンが現れたか聞くつもりだったが……。
その様子だと現れたみたいだな……完全体が」

「……はい。一度はタ……この世界の選ばれし子供によって倒された筈の
デジモンが再び姿を現したのです……」

「――それでお前は一人でそいつに向かって行ったと……」

「……正確にはその側近であるデジモン達を倒しに行ったんですが、
倒した後に突如そのデジモンは現れたんです。
……僕は先の戦いでもう体力が無かったので
逃げることしか出来ませんでした……」

男と話している内にイッカクモンはその時の事を思い出したのか、
悔しそうな表情でそう答える。
その様子に男はイッカクモンの悔しさの本当の理由を悟ったのか静
かに口を緩ませる。
だがその行動は男がフードを深く被っていたため誰にも気づかれる
ことはなかった。
その後、子供達はイッカクモンの話を聞いて、自分達がやるべきと
思った事があったのか、
先程よりも声に力を込めて言い放つ。

「ならそのデジモンはオイラ達に任せてよ！　オイラ達がそいつを
倒してやるよ！」

ゴマモンの言葉を筆頭に続々と子供達の中から声が上がっていく。
初めは遠慮を見せていたイッカクモンも最後には子供達の気迫に負
けたのか、
首を縦に振っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「――で、結局どうやって海の中に居る完全体を倒すんだ？
お前らのメンバーの中で海で戦えるデジモンは二体だけだろ？」

イッカクモンの話を聞いた後一直線に海岸まで来た男達だったが、結局どうやって完全体と戦うかを話し合うことはしなかった。
その事に疑問を浮かべていた男は一番張り切っている大輔にそう尋ねる。

「へぇ？　そのデジモンって海の中に居るのか？」

だが大輔から帰ってきたのは作戦なのでは無く、余りにも有り得ない言葉だった。
その言葉にここに居る全員が凍りついた。

「……ダイスケ。オレ、凄いダイスケが張り切ってるもんだがら
何か作戦があると思ってたんだけど……」

大輔のパートナーであるブイモンですら引きつった顔をしていた。
そんな事構わず、大輔はわっはっはと手を頭に上げながら告げた。

「海の中で戦う事になるなんて思ってなかったわ」

「……大輔君。ここにあるタグは『海』のタグなんですよ？
という事は少なからず海を利用した戦いになると思ってはいなかったんですか？」

光子郎ですら呆れた表情でそう尋ねるが、
大輔は少しだけ小さくなって「……考えていませんでした」と答えた。
……辺りに何とも言えない空気が場を支配する。
そんな空気を始めに砕いたのは大輔の言葉を聞いても驚きを見せなかった男だった。

「どちらにしても海中で戦闘できる戦力は限られている。
……それはコイツの作戦があったとしても変わらなかったはずだ。
なら俺達が今考えなければならないのはどうやって海中の完全体と戦うかだ」

「――――そうですね。なら海中で戦闘できる戦力を確認しましょう。
まずは……

「僕達だね？」

「オイラ達はもともとそう言う戦いを得意としてるからね」

光子郎の言葉に続けるように丈、そしてゴマモンが続く。

「そしてオイラ達だぎゃ！」

「……一様アルマジモンはデジメンタルを使えば可能ですね」

その後にアルマジモンが続き、伊織が弱弱しい声で告げる。

「やはりゴマモンとアルマジモンのみですか。
……二体で完全体と渡り合うのは不可能ですね……」

一様この事が分かっていた光子郎であっても実勢に現実にするとなんとも言えない気持ちが胸に渦巻いていた。
……前回のトリケラモンとの戦いでも自分達は完全体二体、成熟期七体で
何とか倒したのだ。
そんな完全体を今度は成熟期二体で倒せるなど、冗談でも思う事は出来なかった。
そんな中で男は何時もの行動からして有り得ないことを口にした。

「……さすがにお前ら二人じゃ完全体を倒す事なんて不可能だな。
……仕方がない。この戦いには俺も加わってやる」

男の突然の申し出にここに居る全員が驚愕の声を上げる。
無理もない。

男は初め、子供達に完全体との戦闘では手を貸さないと言ってきたのだ。
前回の戦いもピンチな状態になっても直接手を貸す事はしなかった。
……そんな男が自分から手を貸すと言ってきたのだ。

「……ゼクト君は水中で戦闘が行えるんですか？」

光子郎の疑問はまず、水中で戦えるかだった。
詳しい事は知りえないが男は機械型デジモンだという事は光子郎を始めとする子ども達全員が分かっている。

……だが機械と言うものは基本的に水に弱いのが一般だ。
複雑な構成をしている近代的な物なのだから水に弱いのは仕方がない。

……少なくとも腕が機械であるゼクトに本当に水中で戦えるのか？
そんな考えが光子郎の頭を過ぎった。
その問いに男は一瞬間を詰まらせて答える。

「……一様な。だがお世辞にも得意とは言わないな」

普通に考えたらそれも仕方がないだろ。
むしろ戦えるだけでもマシと考えるべきだ。
そう考えをまとめた光子郎は続いて疑問に思ったことを口にする。

「そうですか。ならもう一つ問います。
――貴方はどうして今回に限って手を貸す気になったのですか？
貴方としてはここで僕達が足止めを喰らった方が都合がいいはず」

光子郎の考えでは男が自分達の旅に参加する理由は自分達の安全を守るため。
それは男と一乗寺君達との関係を考えれば誰でも分かる。
そんな関係なら自分達に出来るだけ危険な行動にあっては欲しくないはず。
なら、普通は自分がが海中で戦闘出来ることを黙って居た方がいい。
それならば自分達の中で海中で戦える戦力は二体だけだ。
……さすがに二体だけじゃ無茶をすることは出来ない。
それにイッカクモンの事もあるため、この場所を後回しにすることも出来なかった。
――つまり光子郎達は詰んでいたのだ。
そんな自分達に手を貸す意味も理由も光子郎には想像できなかった。

「――さあ、どうだろうな」

そんな男が返したのは曖昧な言葉。
光子郎はその言葉からじゃ、手を貸す理由も意味も分からなかった。
……だが、これ以上尋ねても男は答えないだろうと光子郎は悟った。

男は話す事は話すが、一度話さなかった言葉を話したことなど殆どない。
……光子郎は男の考えを理解するのを諦めるしかなかった。

「……貴方を含めた3体で海中の完全体を倒す見込みはありますか？」

最後に光子郎が尋ねたのは称賛があるかどうか。
無いのなら戦闘を行う事を認めることは出来ない。
……だが、男は今の所優秀だ。
そんな者が称賛もないのに自分も戦えるなどとは言わないだろうと光子郎は確信していた。

「――戦いに何があるか、分からないからな。絶対に勝てるとは言えないな」

光子郎の問いに返した言葉はまたもやどちらか分からない答え。
……だが、光子郎は理解した。――彼は負けることなど想像してなどいないと。

第五十四話　ネットオーシャン（後書き）

感想または評価をお願いします！

第五十五話　デジヴァイス０１（前書き）

ああぁ！！！　全然話が進まない！！！

最近少しだけ描写の書き方が分かってきたような気がしますが、
それのせいで更に話が進まなくなっているような気がします。

……それと、今度はテスト一週間前のため、
更新ができないと思います。

……テスト前に後、完全体二体ほどは戦うつもりだったのに……

第五十五話　デジヴァイス０１

「……で、どうするんだ？　今から戦いに向かうのか、そうじゃないか」

男の提案に光子郎を筆頭に実際に戦闘を行う、丈、伊織が腕を組んで考える。
普通、戦闘を行う前は何かしらの準備をするのが普通だ。
それが後に生き残る確率を上げることに繋がるからだ。
だが、丈と伊織には準備する物が無かった。……いや、準備する必要が無かった。
今回の戦いの舞台となっているのは様々な物を活用できる地上では無い。
水中と言う海中なのだ。
そんな中でただの人間である丈や伊織は何を用意しようと海中で使う事など出来ないのだ。

「……僕は今から向かう方が良いと思います。
準備すると言っても僕達が何を用意しても役に立たないでしょう。
……なら、少しでも早くこの海を支配するデジモンを倒すべきだと思います」

「僕も伊織君と同意見だよ。水中じゃ僕達は何を用意したとしても何の役にも戦いからね」

伊織、丈は今すぐ向かうべきと言う意見だ。
それに対して光子郎は何かを言いたかったようだが、
実際丈と伊織の言う通り、何を用意しても無駄だと思い、口にはしなかった。
……実際に戦いに向かうのは自分ではないのだ。
自分があれこれ言いすぎるのは逆にいらぬ気を張ってしまうかも知れない。
そう思い、光子郎は一人納得した。

「……丈がそう言うなら俺達は何も言わないぜ」

「丈先輩と伊織君がそう思ったのならそうした方がいいわ」

太一と空も二人の考えを尊重するように口にする。
彼らも光子郎と同じ事を考えていたのだ。
……自分の考えよりも、実際に戦う二人の気持ちを尊重するべきだと。

光子郎、太一、空の言葉を聞き、他のメンバーも止めるような事はせず、
それぞれ応援の言葉を二人にかけた。
それに照れるような、余計に気を引き締めるような表情をした二人は足元にいるパートナーに告げる。

「ゴマモン……

「口にしなくても分かってるよ！　だってオイラは丈のパートナーだから！」

「アルマジモン……

「オラも伊織の気持ち、わかってるだぎゃ！」

パートナーは自分が告げずとも自分の気持ちを理解している。
……ならそれに言葉は必要なかった。

「分かったよゴマモン」

「分かりました。アルマジモン」

「「なら……（アーマー）進化だ（です）！！！」」

二人の言葉に共鳴するようにデジヴァイスが、Ｄ３が光を上げる。
その光はパートナーの体を包み込み、更なる光を上げる。

「ゴマモン進化ぁ～～～！！

イッカクモン！！」

「アルマジモン、アーマー進化ぁ～～～！！

渦巻く誠実、サブマリモン！！」

丈と伊織の足元……いや、隣には水中で戦う事に適した二体の巨大なデジモンの姿があった。

イッカクモン　成熟期　海獣型　ワクチン種

北極たんさく基地内のコンピュータで発見された、海獣型のデジモン。
分厚い毛皮と頑丈な身体が自まんで、寒いところでも平気な構造になっている。
最も大きな特ちょうといえるそのするどい角は、
レアメタルのひとつである「ミスリル」でできており、
毛皮の下の体皮も同様の高度を持っているようだ。
また、足先のつめにあたる部分は自分の意志で高温を
発することのできるヒートトップとなっている。
このため、氷上でも滑ることなく足場を確保することができるが、
あまり素早く動くことはできないようだ。
戦とう時には、まるでライオンのような吠え声で相手をいかくし、
角を発射する必殺技『ハープーンバルカン』で勇ましく攻撃してくる。

サブマリモン　アーマー体　水棲型　ワクチン種

“誠実のデジメンタル”のパワーによって進化した、アーマー体の水棲型デジモン。
“誠実のデジメンタル”は“水”の属性を持っており、このデジメンタルを身に付けたものは水中でその真の力を発揮する。大海を自由に泳ぎまわり、バトル時に水中で繰り出されるその技は、よほどの水棲型デジモンでもない限り、太刀打ちできない。必殺技は、超高圧度の酸素を発射する「オキシジェンホーミング」と、水中で距離をとった後、鼻先のドリルを回転させながら一気に加速して体当たりをする「サブマリンアタック」。

イッカクモンの姿は先程居たイッカクモンと同じで全身を白い体毛で覆われているデジモン。
サブマリモンの姿は背中に人間が乗る事が出来るコックピットが付いたデジモン。
男はアーマー進化したサブマリモンのコックピットの部分を何かを観察するように凝視していた。数秒後、男は疑問を持ったのか、珍しく尋ねる。

「この背中のコックピットには本当に乗れるのか？」

「え、ええ。人間二人ぐらいまでなら窮屈に感じない程度に乗ることは出来ます。

珍しく男に尋ねられた伊織は一瞬慌てるがすぐにいつも通りに接する。

伊織の言葉を聞いた男は再びサブマリモンのコックピットの部分を凝視し始める。
それからしばらく、男は納得したのかサブマリモンから視線をずらし、
丈達の方に向けて問う。

「で、お前達はどうするんだ？　一様パートナーを進化させた訳だから、
少しぐらい距離を置いても問題は無いはず。
こいつらと一緒にここで待っているか？」

男の真剣な問いに丈と伊織はお互いを見つめ合う。
そして互いに頷いて、真剣な表情で答えを返す。

「――僕と伊織君はサブマリモンのコックピットに乗って一緒に海中に向かうよ」

「――パートナーとして、
サブマリモン達だけを戦わせる訳にはいきませんからね」

二人の眼には怯えも躊躇いも無い事を男はすぐ理解できた。

「――そうか。ならコックピットに乗る前にデジヴァイスを貸してみろ」

男の突然の提案に丈と伊織の二人だけは無く、
ここに居る全員が驚愕の表情を浮かべた。

「デジヴァイスを貸せって、それはつまり……

「……別にいいんだぞ？　貸さなくても。
今回はそれを俺が使う訳じゃないんだからな」

タケルが言葉を続けようとするが、それを急かす様に男は言葉を被せる。
その言葉に丈と伊織は慌ててデジヴァイスを男に渡す。

「……」

そのデジヴァイスを男は腕を後ろに回し、一瞬大輔達の目線から外す。
そして腕を戻し、手に握られていたのは手に持って使うようなものでは無く、
腕に付けて使うような形状をした
デジヴァイス……『デジヴァイス０１』が握られていた。
それを男はまるで消しゴムを貸すかのようにポイと丈と伊織に投げつける。

「「うわぁ！？」」

それを二人は何とか両手で受け止める。
そして自分の手の中にある見た事もない形状をしたデジヴァイスを凝視する。
残りの者達はそれを我先にと前にでて覗き込む。

「それは『デジヴァイス０１』と言ってな……データの送受信を筆頭に
データスキャン。データ圧縮と言った事が可能な携帯コンピューターだ」

「で、データの送受信？　スキャン？」

乾いたような声でパルモンは尋ねる。
他の者も次々に湧き出る疑問の答えを問うように質問を繰り返す。
その中でタケルは男に対し、増悪を感じていたため、
大輔達のように自分からいろいろ質問はしなかった。
……それはタケル自身が闇に対して大きな悪気を持っているからであった。

「試しに自分のデジモンに向けてスキャンしてみろ。
やり方は……見れば分かるな？」

「……ええっと……これかな？」

丈はデジヴァイスのそれらしいボタンを遅る遅る、イッカクモンに向けて押す。
その瞬間、赤い紫外線のような光がイッカクモンを指した。
ピピッと音を立てるデジヴァイスの画面を覗き込むと、
イッカクモンの体力、スピードと言ったパラメータが表示されていた。

「こ、これは凄い！　イッカクモンのデータが凄く細かく表示されている！」

丈の言葉を聞いた他の者は一斉に丈のデジヴァイスの画面をのぞきに向かった。
そして画面を見た者は丈と同じように歓喜と驚愕の声が上げられた。

「デジヴァイス０１の機能はそれ以外もあるが、今は関係ない。
――ほら、さっさと乗り込め」

一瞬、本来の目的を忘れそうになっていた丈と伊織は
慌ててサブマリモンのコックピットに乗り込んだ。
もう少しデジヴァイス０１を見たり、調べたかった光子郎は少々残念そうな顔をして
それを見ていた。

二人がコックピットに乗り込んだのを確認した男は
先頭を切るように黒いコートで身を包んだまま、先に海の中へと潜って行った。

その後をイッカクモンとサブマリモンは追っていった。

第五十五話　デジヴァイス０１（後書き）

デジヴァイス０１を出すだけで話が終わってしまったｏｒｚ

……話が進まないのはただ単に一度に投稿する分数が少ないだけ？

でしょうか？

感想、または評価をお願いします。

ユニーク100000超えアンケート（前書き）

テストで更新できなくてすいません。
テストは水曜日で終わりなので、そこから更新して行きたいと思います。

ユニーク１００００超えアンケート

気づいたら総合ユニーク数が１万を超えていたのでアンケートを取ってみたいと思います！

内容はユニーク１万突破記念に何かをするべきかどうかと、やるならどんなことをして欲しいかです！

ユニーク１万位で何を……と、思う方もいらしゃるかもしれませんが、
嬉しくてつい書いてしまいました。
ちなみにＰＶは今の時点で８２，３３３。……１０万突破も夢じゃないかもしれない位置まで来ました！
なので、今回は記念をせずに、ＰＶ１０万記念でやろう！　どっちも記念なんていらないという方も
答えてもらえると光栄です！

記念の話の内容はこの小説の外伝と扱えるものは扱い、
扱えないものは完全なるもしもの話と扱います。

……最後にもう一度尋ねたいことを事を確認します。

１，　ユニーク１万突破記念をするかどうか。
　Ａやって欲しい！
　Ｂそんなものはいらない！
　Ｃ今回はやめて、次のＰＶ１０万記念で何かをするべき！
　Ｄ記念なんてものは必要ない！

上の問いでＡ　ｏｒ　ｃと答えていただいた方はこの質問にも答えて貰えると嬉しいです！

2，　もし記念をするならどんな内容がいいかご自由にお書きください。

皆さんの意見をお待ちしております！！！

第五十六話　海の支配者（前書き）

評価が１３０突破！！！

評価をくださった方たち、有難うございます！！！

小説のアップは明日の予定でしたが書き終わったのでとりあえずＵＰすることにしました。

……それと前回のアンケートの期間を書いていなかったため、連絡します。

……１６日までにします！

出来れば答えて頂けたら光栄です。

第五十六話　海の支配者

透き通るような色合いをした海中の中を進んでいく
人型の影一つと潜水艦のような影。
人型の影が先導していく海の道を潜水艦は只追っていく。

――進むこと数十分もしない内に影は動きを停止した。

人型の影…コートの男がなぜ停止したのか潜水艦…サブマリモンのコックピットで疑問を浮かべていた丈と伊織であったがここで重要な問題に気が付く。

「しまった！　海の中じゃゼクト君と連絡を取ることが出来ないじゃないか！？」

両手で頭部を押さえながらブンブンと頭を振り過去の自分を悔やむ丈。
――もし、海中に入る前にこの事に気が付いていたら
何らかの手段を使ってこの事態を防ぐことは出来たのかも知れない。
だがそれを今思ってももう遅い。
その事が分かっているからこそ丈は浅はかな過去の自分に後悔していた。

そんな丈を伊織は必死になだめる。
伊織自身、この重要な事を丈に言われるまで気が付きもしなかった。
そんな自分に苛立ちを覚えながらも伊織は丈をなだめる。

そんな甲斐あってか、丈は直ぐに普段通りの何処か頼りない先輩の顔に戻った。
悩んだといえすぐに普段通りの自分に戻る丈はさすがと言えるだろう。

――さすがは、今回のようなことを今まで繰り返しただけはある。

取りあえず今出来るであろう手段を使って何とかこの事をコートの男に
伝えることは出来ないかと丈は思考を酷使する。
すると、数秒もしない内に案が脳裏に浮かぶ。

「そうだ！　これを使えば……」

そう言って視線を落とした先には自身の利き腕とは反対の方に付けられた
腕時計のようなもの…『デジヴァイス０１（ゼロワン）』があった。

現在『デジヴァイス０１』を使って出来ると判明しているのは、
デジモンのデータをスキャン機能のみだ。
その他にも何らかの機能が存在するらしいが少なくとも丈と伊織が
知っている機能は
それのみだ。
他の者にメールのようにメッセージを伝える機能が存在するかも分からない。

――だが、丈はそれがあると確信していた。

コートの男…ゼクトは完璧なデジモンだ。それは丈も分かっている。
なら、そんな彼が海中での連絡手段を忘れると言った事を仕出かすだろうか？

――――否、それはあり得ない。

少なくとも丈はそれを疑わなかった。

とにかく、腕に付けられた『デジヴァイス０１』を丈は弄り始めた。
画面のボタンをすべて押してみる、画面をタッチしてみるなど思いつく限り試した。

すると意外な事に丈はすぐに『デジヴァイス０１』の使用法を理解することが出来た。
理解したことがあっているのかを含めて丈は『デジヴァイス０１』に『水中ではどうやって連絡を取るんだい？』と打ち込み、コートの男に向かって送信（アップリンク）する。

『デジヴァイス０１』のアンテナのような部分から赤い紫外線のような細い光がコートの男に向かって真っ直ぐ直進する。
その光はコートの男にあたったと同時に初めから存在しなかったかのように姿を消す。

「……どうでした？」

「う～ん。伝わったとしても向こうからこっちに連絡する手段が無いと判断出来ない……」

説明をせずとも自分がやっていた事をジッと見て、何をしていたのか理解した伊織に
感心にながらも、丈は結局解決していない現状にため息を付いた。

『――――よくそれの使い方に気が付いたな』

突然辺りに…いや、丈と伊織の頭に声が響き渡った。

「その声は…ゼｋｕ

『おっと、
そっちの声は俺に伝わらないから言いたい事があるならデジヴァイスを使え。』

言葉を続けようとした矢先にそう頭に伝わってきたので丈と伊織は見つめ合い、
取りあえず丈がデジヴァイスを使って返事を返す。

『君が無策で連携を取れないまま海中に出るとは思えなくてね。
……それより君はどうやって僕達と会話しているんだい？』

『テレパシー的な物だと思ってくれていい。一時的にお前ら二人とリンクを繋いだ。
サブマリモン達とは繋がっていないからそこを勘違いするなよ？』

『どうしてサブマリモン達と繋がなかったんだい？
もし、テレパシーを送れる数が2人までとしたら僕達じゃなく、
イッカクモンとサブマリモンに繋げた方がよかったんじゃないかい？』

『それだと為にならないだろ？
前も言ったがこれからお前らは完全体と何度か戦う事になる……。
俺も理由が無い限りお前らを見捨てたりはしないがそれでも
自分達だけで完全体一体ぐらい倒せるようになってもらわないと
困るんだよ。』

その言葉に対して二人は納得は出来ないが理解はした表情を浮かべ、
返事の言葉を打ち出そうとすると頭に『来たぞ』という言葉が響き渡った。

その言葉に何が来たかと返事を返そうとしたその瞬間にコックピット内に
サブマリモンの声が響く。

「前方にデジモンの影らしきものが接近しているだぎゃ！」

その言葉に反応した二人は前方を深く観察する。
……確かにデジモンの影らしきものがこちらに向かって来る。

「……どんなデジモンかは知らないけどこれ以上村に被害が起きな

いように
ここで倒さないとね」

「……そうですね。このままじゃ村のデジモン達は
いつまでも安心して過ごせませんし……」

前回の戦いの経験と村のデジモンの被害の様子から、
これから戦うであろう完全体のデジモンは間違いなく倒さなければ
ならない敵と
判断した二人は、ゆっくりと距離を詰めてくる影を凝視していた。
ある程度影が近づき、シルエットが分かる程度まで接近されると
突然伊織が声を上げる。

「どうしたんだい伊織君!?」

「あのデジモンは……マリンデビモン!?」

そう声を上げた伊織の様子は先程と何か違っているのに丈は気が付
いた。

「……伊織君。なにかあのデジモンに嫌な思い出でもあるのかい?」

「……マリンデビモンは僕が初めて殺したデジモンなんですよ」

俯いたまま静かにそう答えた伊織の様子から、
丈は伊織が望まない形でマリンデビモン殺してしまったと理解した。

「伊織くu……「でも!!!」!?」

慰めの言葉を掛けようとした丈の言葉に被さるように伊織は頭を上げて声を出す。

「でも……後悔はしていません。
あそこでマリンデジモンを倒していなかったら、
関係ない人達の命が奪われていたかもしれませんから」

迷いない瞳で真っ直ぐマリンデビモンを見つめて言ったその言葉に丈は自分が何かを言う必要は無いと悟り、
自身もこれから戦うであろう敵…マリンデビモンを見つめた。

マリンデビモン　完全体　水機獣人型　ウイルス

凶悪さ故に名の知られたデビモンでさえも、
対戦を嫌がるという海のダーティーファイター。
その名の通りデビモンの亜種ではあるのだが、深海の奥深くでのこどくな生活から、
憎悪以外の感情を一切なくしてしまっている。
そのため、勝利こそがすべてで勝つためには手段を選ばず、
途中で相手が戦意をそう失しても攻げきの手を休めることはない。

背中から生えた2本の大きな触手が外見上の大きな特ちょうだが、
これらはそれぞれに意志を持っており、
えものを取り合っていつも勝手に行動している。
必殺技は口からもうどくのすみをふんしゃする『ギルティブラック』
で、
この攻げきがヒットした相手はしばらく立ち上がることもできない
といわれている。

「シャーシャッシャッシャ！！！
こんな所に人間の子供が居るとはな！　偶然ではないな！」

「お前が村のデジモン達を襲った完全体か！？」

睨みつけたままそう問うのは丈のパートナーデジモンであるゴマモ
ンが進化した
デジモン…イッカクモンだ。

「シャーシャッシャッシャ！！！
そうだ！　ちょうどお前と同じ姿をしたデジモンをなぁ！」

どうやらコイツで間違いなさそうだ。
そう感じ取った丈達は取りあえず自分が持っているデジヴァイスを
使って
マリンデビモンのデータをスキャンする。

「……さすが完全体ですね」

「……イッカクモン達よりも遥かに数値が高い」

デジヴァイスの表示されたデータはどれもイッカクモン達を上回る数値だった。

「……でも、
あのマリンデビモンは人間界で戦ったマリンデビモンより遥かに小さいです。
……恐らくマリンデビモンの中でも弱小の部類に入るはずです」

「この数字で弱小かい！？　やっぱり成熟期と完全体には大きな壁があるんだね」

『そんな事言ってる場合か？　攻撃来るぞ！』

男の言葉が合図かのようにマリンデビモンは背中辺りから生えている二本の腕を
イッカクモンとサブマリモンに向けてつきのばす。
二体は体を巧みに動かすことでそれをかわす。

『俺は基本的に自分からは避ける以外行動しない。
俺を動かしたかったらデジヴァイスを使って命令を出せ！』

なぜかマリンデビモンの標的にされていないコートの男は腕を組んだままマリンデビモンを眺めていた。

「どうして奴は彼を攻撃しないんでしょう？」

「……恐らくゼクト君が戦えない非戦闘メンバーだと思っているんだろうね。

ゼクト君の姿はパッと見て人間に見えてもおかしくないからね」

丈の言葉になるほどと言葉を漏らした伊織であったがすぐさま気持ちを入れ替えて、

サブマリモンに直接命令を出す。

「わかっただぎゃ！！！　『オキシジェンホーミング！！』」

サブマリモンの人間でいう鼻の部分の穴から超高圧度に圧縮された酸素をマリンデビモンに放つ。

しかし、それをマリンデビモンは圧倒的なスピードでいとも簡単にかわす。

「なんてスピードだ！？　体感スピードだけならデーモンクラスじゃないか！？」

「……普通より小さい分、速さがあるってわけですか……」

『驚いている時間は無い。反撃が来るぞ！』

丈と伊織が気を入れなおすより早くにマリンデビモンはイッカクモンの後ろに回った。
すぐさま振り返ろうとしたイッカクモンであったがそれを行う前に背中から生えている2本の腕を使って体が縛られ、動きを封じられてしまった。

「シャーシャッシャッシャ！！！　どうした？　前来た奴の方が手ごたえがあったぞ？」

強力な拘束で痛みの声を上げるイッカクモンの姿を見ながらマリンデビモンは退屈そうに告げる。

「イッカクモン！？　クソ！！！『オキシジェンホーミング！！』」

苦痛の表情を浮かべるイッカクモンの姿を見たサブマリモンはマリンデビモンの拘束を解くべくイッカクモンに当たらないよう狙って、
マリンデビモンに攻撃を仕掛ける。
その攻撃にニヤリと口を緩ませたマリンデビモンであったが、

その思惑道理には話は進まなかった。
だからと言って、サブマリモンの攻撃がマリンデビモンの元まで行く事もなかった。
――なぜならその攻撃はコートの男の攻撃により途中で消滅したからである。

『お前のパートナーは馬鹿か!?
あのまま行っていたら奴はイッカクモンを盾にしていたぞ!』

「……でも今のは当たらない様に調整しましたよ?」

「……多分イッカクモンに攻撃が当たるようにワザとそうなるように避けたはずだよ。
サブマリモンの攻撃を見た瞬間、マリンデビモンがニヤ付いていたからね……」

丈の言葉を聞いて自分がやったことに気が付いたサブマリモンはあのままマリンデビモンに向かって技が向かっていたらどうなってたか想像し、
ううっと小さく声を上げる。

マリンデビモンは自分の思惑通りに話が進まなかった事よりも、コートの男が何もなく空間から漆黒の鍵の剣を取り出し、
サブマリモンの攻撃を一撃で無効かしたことに驚いていた。

「……貴様…人間では無かったのか?

――なるほど……通りで酸素の泡がフードの中から出ないわけだ」

一人そう納得したマリンデビモンはコートの男も戦闘の視野にいれ、行動するようになった。

『さて、どうするんだ？　向こうにイッカクモンが居る限り、むやみに攻撃できないが、
このままじゃ、決着がつかない。……指示を出すのはお前ら二人だ』

「どうすればいいんでしょか？　……少なくとも僕には思いつきません」

『とりあえずイッカクモンをマリンデビモンから解放するのが第一だね。
……でもそのためにはマリンデビモンが腕を離すほどのダメージを気が付かれない様に与えないと……』

『……そこまで分かっているなら上出来……か？
さすが誠実の紋章に選ばれた事はあるな。状況に流されず、本当にやるべきことが理解できている。
――そんなお前に一つ良い事を教えてやろう。
マリンデビモンは防御力が殆どない。
成長期の攻撃でかなりのダメージを負う程にな』

「……なるほど。だからその分、スピードが速いわけですか。
それならあのスピードも納得できます」

「そうだとしても今の状況じゃどうにも出来ませんよ。
動けるのはサブマリモンと彼だけですよ？」

伊織の言う通り、今戦えるのはサブマリモンとコートの男だけ。
さらにサブマリモンは伊織と丈を乗せて戦っているため余り無理は出来ない……

――なら手段は一つだけだ。

『……ゼクト君。少しの間マリンデビモンを一人で抑えてくれないかい？』

丈が取ろうとしている作戦はマリンデビモンをコートの男一人で抑えてもらっている間に隙を見て攻撃を仕掛ける。と、聞くだけなら単純な作戦だ。

だが相手は自分達よりも格上の完全体。
さらにこの海というフィールドは彼の独擅場（どくせんじょう）。
……普通なら数人でやるべき作戦なのだ。

だがそれは出来ない。……なら一人でやって貰うしか方法は無かった。

『……なるほど。俺におとりを引き受けろという事だな？
――いいだろう。俺に奴を倒させるのではなく、
自分達で倒そうという心意気を認めて引き受けてやるよ』

テレパシーでそう告げると、男は返事を待たず、漆黒の鍵を持ったまま
マリンデビモンに一人で向かっていく。

「ほおぁ。今度はお前の番か？　精々俺を楽しませろよ！！！」

イッカクモンを拘束したまま言い放ったマリンデビモンはコートの男に向かって
残り二本の腕を振り下ろす。
二本の腕は左右からコートの男の逃げ道を遮るように接近する。

「……」

無言のままさらに海中に潜ることでそれを回避する男であったが
避けた二本の腕がお互いを握り合い、追撃のようにそのまま振り下ろされる。
既に回避行動を行った男はそれを避ける事は出来ない。

――そう、避ける事は出来ない。

「なぁ！？」

そう声を上げたのは腕を振り下ろした張本人であるマリンデビモンだった。

一度目の攻撃はかわされたが、二度目の攻撃は直撃だ！

……そうなるはずだった。

回避が間に合わないタイミングを狙ったのだ。そうなるのが当たり前だ。

だが、男は直撃する瞬間に自らの手をマリンデビモンの腕に触れ、そのまま衝撃を逃がす様にマリンデビモンの腕の軌道をずらしたのだ。

「小癪（こしゃく）な真似を！！！」

その行動に腹を立てたマリンデジモンは先程より鋭く、素早く二本の腕を振るう。

――だが当たらない。

男は殆どの攻撃を回避し、回避しきれない攻撃だけ攻撃の軌道をずらす。

ただ、それを繰り返しているだけだった。

それが余計にマリンデビモンに怒りを覚えさせているのは一目瞭然だ。

そこに更なる屈辱がマリンデビモンに与えられる。

「貴様……どういうつもりだぁ！！！！！？」

男が手に持っていた漆黒の鍵を消し去ったのだ。
……つまり男は丸腰になった。

敵前で自ら丸腰になるなど明らかに正気ではない。

――――正気だとしたら、それは降伏を意味するか、相手を馬鹿にしている。
この二つだけだ。そして男は確実に後者であろう。

それを理解しているからこそマリンデビモンは激怒する。

常時よりも明らかに怒りで赤く染まった顔面のままマリンデビモンは全力で男に振り下ろし攻撃を開始する。

「しねぇえええええええ！！！！！！！！！」

マリンデビモンの全力の振り下ろしが近づいて来ても男は回避の行動を取らなかった。
ただ腕を組んだままジッとマリンデビモンを見据えていた。
そんな男の行動に疑問を浮かべる思考も残っていないマリンデビモンは
そんなことお構いないなしに攻撃を続行する。

水を切る音が一瞬聞こえたような気がした。

それを感じた頃にはもう遅く、マリンデビモンの背中にいくつもの小さな穴が開いていた。

「隙だらけだぎゃ……」

攻撃を行ったのは男では無く、マリンデビモンの後方で隙を伺っていたサブマリモンであった。
自身の我慢の限界を優雅に超える攻撃を受けたマリンデビモンの腕から、
イッカクモンが崩れ落ちる。

「キ、貴様！！！！　よくもやってくれたな……喰らえ！『ギルティ……

後方のサブマリモンの方を向き、自身の必殺技を放とうとしたマリンデビモンだったが、
それは結果的にあるものに背を向ける行動だった。

『……お前達にしちゃ、今回はよくやった。
褒美といっちゃなんだが、虫の息のコイツの止めくらい刺してやるよ。』

テレパシーで丈と伊織にそう伝えた男は自身の目の前にあるマリンデビモンの背中に

いつの間にか出現させた漆黒の鍵を振りかぶる。

マリンデビモンがその事に気が付いたのは自身の体が真っ二つになってからだった。

その事に満足したのか、男はそのまま黙ってこちらに寄ってきているサブマリモンの方に去ろうとしたが、最後にマリンデビモンが発した言葉に驚愕を覚える。

「シャッシャシャ……選ばれし子供を襲いにきた完全体が俺一体だと思っていたのか？

……実は選ばれし子供がこっちに来ているとある者に聞いてな……。

陸と海の二つに分断させて襲う事になったんだが……。

――――今頃陸の子供達はどうなっているかな？」

サブマリモンとコックピットの伊織と丈が驚愕の表情を浮かべたのを見て満足したマリンデビモンは最後に高笑いを上げながら消滅していった。

「早く太一達の元に戻らないと！！！

ゼクト君がこっちにいるんじゃ、向こうはまともに交戦できないはずだよ！！！」

『アイツの表情から見て、これが嘘だとは考えずらい。――――とにかく戻るぞ！』

その言葉に強く頷いた丈と伊織は回復したイッカクモン達と共に急いできた道を戻って行った。

第五十六話　海の支配者（後書き）

感想、または評価をお願いします！！！

アンケート結果（前書き）

今回は報告のような物です。
なのでこの回は見ていただなくても大丈夫です！

本編は今日の１２時にアップします！

アンケート結果

前回取られて頂いたアンケートの結果が決まりました！
結果はやらなくていいです。
……個人的には気分転換に雑談を書きたかったですが、ネタも無く、話を進めて欲しいという意見が出たので進めていくことにします！
（べ、別に雑談で更新回数を増やしたかった訳じゃないんだからね／／／）
……すいません。

さて、本編はアーマゲモンの戦いから数カ月後に始まり、今に至るのですが、第一章、デジタルワールドの異変、第二章、第三章　別世界のデジタルワールドとなっていますが、最終的にどのくらいになるかは分かっていません。

……と言うか、最近、この小説の設定を時期別にまとめたのですが、ワンダースワンのデジモンの話が極限まで原作崩壊してしまいました。
……なので純粋にワンダースワンの話を見たかった方はすいません……。

一様そうなってしまった理由は、
ゲーム版のデジモン、漫画版のデジモン、アニメ版のデジモンの設定が繋がっているのですが、
所々で設定が違う所があります。
……出来るだけリンクさせようと思ったら、ゲームの原作崩壊とい

う事になってしまいました。

そしてワンダースワン版のデジモンの話などは本編終了後に書いていきます！

第五十七話　嵌められた子供達（前書き）

更新が遅れてすいません！

第五十七話　嵌められた子供達

丈と伊織がサブマリモンのコックピットに乗り込んで海中に入って行き、
姿が見えなくなるのを見届けた子供達と
デジモンは先程起こった事に付いて話し合っていた。

「……まさか、他の形態にもデジヴァイスを変化させる事が出来るとは……」

「ゼクトハンはえらい凄い事を仕出かしますな～」

光子郎の呟きにパートナーのテントモンが遠くを
見るような目で明日の方向を見ながらそう返す。

「……未だに奴の謎は底が見えない。一体奴は何者なんだ？」

「ただのデジモンでは絶対ないよね？」

続けてヤマトが眉間にしわを寄せながら頭を抱えるようにして呟く。
それに対してガブモンは考え込むように腕を組んでそう返す。

光子郎達の脳裏に男に対しての疑問が次から次へと湧き上がる。
――――もやはそれを脳裏に留めることは不可能だった。

コートの男は何者？　どうしてデジヴァイスを変化させることが出来る？
どうして関係ないデジモンを殺す？　目的は何？
そんな考えが子供達の脳裏に浮かぶ。
普通に考えてみれば協力関係である男の事を余り知らないのは仕方が無い事だ。
……だがそれにしても知らな過ぎる。
それなのに男は選ばれし子供達の事をよく知っているような口ぶりだ。
その不平等さに納得できるものはここには居なかった。

「とにかくアイツが帰ってきたら話し合おう。
……俺達だけで考えても時間の無駄だ」

「……アイツがそう簡単に話すとは思えませんが」

太一の言葉にそう返したのは先程から眉間にしわを寄せて海を見ていたタケルであった。

タケルの心中は怒り、疑問で占めていた。
なぜ、自分達よりデジヴァイスを使える？
なぜ、闇の存在である男が進んで自分から手を貸す？
そのような感情が頭を回り、解決できずにいた。

「……確かにそうだな。
だが奴は馬鹿じゃない。むしろ賢い部類にはいるだろう。
――だからこそ理由無しに黙ることはしないだろう。
話せない理由だけでも聞く事が出来れば、
少なくとも今よりは奴を知る事は出来る」

太一本人も男が簡単に自分の秘密を話す事はしないというのは百も承知だ。
だが、今の状況のままでは確実に奴が居るだけで心が乱れて戦闘に支障を起こす。
――そんな事を奴が気が付かないはずがない。
だからこそ、奴も無暗やたらに黙ったりはせず、何らかの解決策を取るだろう。
……本当に知りたい事を知ることは出来ないが、それでも奴の事を知る事が出来る。
太一は少しでも男の情報を聞き出そうと考えていた。

その考えに少なからず気が付いたタケルは確かにと答えて何時もと変わらない
表情に戻った。
それに全員がほっと胸をなで下ろした。
空気が緩まった事で余裕が出来たのか、ヒカリは海を見つめて小さくため息を付いた。
それに真っ先に疑問を覚えた大輔はヒカリに尋ねる。

「どうしたの。ヒカリちゃん？」

「うんん。ただ私達はどれくらいここで待っていたらいいのかと思

って……」

「それなりに時間が掛かると思います。なんせ完全体に対して、成熟期二体とアーマー体1体ですから……簡単にはいかないでしょう」

「でもゼクト君は強いですよ？」

「はい。それは全員が分かっています。

……でも彼は自分から進んでは戦わないでしょう。

一様今は僕達と彼は一緒に居ますが、目的はお互い違います。

……場合によっては敵になるかも知れない僕達にあまり自分の手を見せようとはしないでしょう……」

「……今の時点で私達と彼は敵対していると思うわ」

ヒカリの疑問に自分の考えを話した光子郎。

その考えは出来ればそうなってほしくないという願いが込められていた。

だが実際はテイルモンの言う通り光子郎達とゼクトは敵対関係にあった。

「取りあえず今は丈先輩達が帰ってくるのをここで待ちましょ。

今私達に出来るのはそれぐらいでしょ？」

空の提案に全員が納得し、返事を返した。

その瞬間、

『なら――――私とゲームをしようじゃないか』

心臓が握られる様な感覚。体中に突き刺さるような寒気と共に狂気が含まれたような冷え切った声が辺りに響きわたった。

全員が声が聞こえた方を全力で振り返る。それは反射の行動に近かった。

例えるのなら、転んだ拍子に手を付くような反応だった。

振り返った先には造作もない海に面した砂浜が広がっているだけだった。

「誰だ!?　隠れてないで出てきやがれ!!!」

姿が見えたい相手に対して大輔は挑発するように叫ぶ。

……しかし、これは挑発の為に出したのではなかった。

ただ、想像を超える何かを放つ何かに対して強がるという意味合いが強かった。

『クックック……慌てなくても出てやるよ。

――――そうしないとゲームが出来ないからな』

言い終わると同時に大輔達の目線の先の砂浜の上の空間が歪む。
歪みから姿を現したのは巨大な花の姿をして、
体からいくつもの触手を生やしたデジモンだった。

「……ブロッ…サモン？」

誰が呟いたのかは分からない。だが、その言葉は確信を持った言葉では無く、
疑問に近い言葉だった。

「……違うわ。ブロッサモンはこんな色をしていないわ！」

声を荒げて返したのはミミだった。
しかし、ミミの言葉が無くとも殆どの者がそれが分かっていた。
なぜならブロッサモンは太一達、大輔達とも戦ったことがあるデジモンだからである。だが、全員が知っているブロッサモンの色は黄色、
紫、緑といった色をしたデジモンだ。

――――だが、目の前のブロッサモンは違う。

全身全てが紫色に変色しており、通常のブロッサモンに見られる大人しさと言った、

控えめな性格を微塵も感じさせず、１つ１つの言葉に隠された凶暴さを
隠すつもりが無いかのように放っている。

ミミの悲鳴にも近い声を聴き、ブロッサモンのようなデジモンは満足げな表情を浮かべる。

「半分正解だ。私はブロッサモンであってブロッサモンでは無いデジモン……
　ダークブロッサモンだ」

ダークブロッサモン　　完全体　　植物型　　ウイルス

巨大な花の姿をして、身体からは何本もの触手を生やした植物型デジモン、
ブロッサモンがコンピューターウイルスによって冒された事によって全身が紫色に
変色した完全体デジモン。
その結果に得た賜物（たまもの）によってその力は通常の完全体を上回る。
ダーク化した事によって本来の乾燥した場所を嫌うという自身の弱点を克服した。
必殺技は触手の先に付いている小型の花を手裏剣のように飛ばす
スパイラルフラワーの強化系『スパイラルフラワー?』。
また自身の体から生み出した猛毒の息を相手に吐きつける『ポイズンブレス』も
得意としている。

「そんな!?　全員がそろっていない時に完全体と戦う事になるなんて!」

相手が完全体と理解した空は絶望を含んだような声を上げる。
それを見たダークブロッサモンは更に自身の表情に笑みを浮かべる。

「フッ!　やはりいいものだな。絶望を浮かべる表情は……。
いろいろ準備したかいがあった」

「準備だと!?」

「ああ。マリンデビモン……この海に現れた完全体のデジモンと手を組み、陸と海で戦力を分散させ、選ばれし子供を襲う。
……お前らが全員そろっていたらそんな表情はしなかっただろうからな」

相手の正体が分かった途端から表情を怒りに歪ませたタケルは、ダークブロッサモンの言葉に聞き逃せない言葉があったため、その表情のまま問う。
その問いにダークブロッサモンはニヤ付いた表情のまま淡々と答えた。

それを聞き、今回の戦いは仕組まれたいて、自分達はまんまとハメられたという事に
気が付いた子供達は悔しそうに顔を歪ませる。

「もう話は良いか？　ならゲームのルール説明をする。
これから私とお前達で戦う。
勝敗はどちらかが死ぬまでだ。降参も逃げることも認めない」

余裕の表情のまま戦いのルールを説明するダークブロッサモンに
子供達は口を挟めず、淡々と話を聞く。

「ルールは以上だ。問題は無いな？　なら開幕だ！
早くデジモンを進化させるがいい。その間ぐらいは待ってやる」

「……随分と余裕ですね。
全員そろってはいないと言っても数は圧倒的に此方が有利ですよ？」

「問題ない。仮にお前達全員がそろっていても私が負けることなどないだろう。
……それで進化はさせないのか？　私の我慢も限界がある。
――来ないなら攻撃を始めるぞ！！！」

最後の言葉に込められた圧倒的な狂気に子供達は自身のデジモンを進化させる以外の
選択肢は残されていなかった。

第五十七話　嵌められた子供達（後書き）

今回登場したダークブロッサモンはディゴッドさんが考えてくださったオリジナルデジモンです！
ディゴッドさん！　本当にありがとうございます！！！

なお、ダークブロッサモンの話し方などは私が付けました。
……私的には男のような女性？　のような話し方にしたかったのですが（デジモンゼボリューション？　の影響）文才がないため、できませんでしたｏｒｚ

ちなみに更新が遅れた理由は、小説の設定をまとめていた事と、この一話で戦闘を終わらせる手前まで書こうと思って、ずっと書けなかったからです。

……ゼクト君が居ないと話を進めるのが難しい。

第五十八話　圧倒的な力差（前書き）

……更新が遅れてすいません！！

最近忙しくて中々書けません。
……半分嘘です！！　忙しいのものありますが、
書いている内に感性が成長したのか、
自分の表現に全然納得できなくなって来ました。

次の投稿は2，3日以内？
バイトが5日連続で有るため本編を書く場合それぐらいかかります。
……時間をかけてもクオリティーが上がらないですけどｏｒｚ

第五十八話　圧倒的な力差

選ばれし子供達の掌のデジヴァイスから光が飛び出す。
光は天からデジモン達を指す輝きのカーテンとなり、各デジモン達を包み込む。
暫くして、輝きが消えたその場には
現在変化できるであろう最強の姿のデジモン達が存在していた。
成熟期のグレイモン、ガルルモン、カブテリモン、バードラモン、トゲモン、
エクスブイモン、エンジェモン、そして完全体のシルフィーモン。

その全てが強い敵意を視線で表すかのような目付きで
ダークブロッサモンを見据えていた。

傍から見ればグレイモン達8体に対して敵一体と圧倒的な差があった。
……本来戦いと言うものは一対一で戦うような物では無い。
なぜなら戦いとは何かを奪う事。もしくは何かを守る事。
その上に一対一などとそんな甘い事は言ってられない。
もし人間1人対人間8人でお互い武器を持ったとしたら
ほぼ間違いなく8人の方が勝つであろう。
それはお互いの力がそこまで違わない人間同志だからである。

――だが、デジモンは違う。
デジモンは人間と違い、同じデジモン同士でも力が全く違う。
……それは圧倒的な人数差を覆すほどの事が起きるほどの……

「全員進化したようだな？　なら今から戦闘を開始する。

……まあ戦闘と言っても戦闘にもならないだろうな。
――――まあ、精々一方的にやられてくれやァ！」

今まで何処か丁寧さが残っていた口調をダークブロッサモンが顔をニヤ付かせると同時に凶暴なモノへと変化された。

それと同時に激増した殺意に一瞬グレイモン達の動きが停止した。
その一瞬の隙に自らの触手の先に付いている小型の花を手裏剣のように飛ばす。
小型の花は風を切る様な事を出しながらグレイモン達の方へと向かっていく。
その音で意識を取り戻したグレイモン達は目の前に接近している花に気が付き、
慌てて回避行動に出る。

対象が居なくなってもただ小型の花は真っ直ぐと飛び、
海面に吸い込まれる様に飛ぶ。

それが海面に当たったと同時に海の水が大きな音を立て、水しぶきを上げた。
……それは小型の花の威力を証明していた。

「何よあれ！？　なんであんな小さい花にあんなに威力があるのよ！？」

ミミの声だけが空しく辺りに響き渡る。
たった一度の攻撃で場の空気がダークブロッサモンの支配された。

「はっはっは！！！　どうした？　まだ戦いは始まったばかりだ！
止まっている暇なんてないぞ！」

再び動きを停止したグレイモン達にダークブロッサモンは憐れむことなく
先程の倍の小型の花の手裏剣を飛ばす。

その攻撃をそれに飛べる者は飛翔してそれをかわし、
空を飛ぶことが出来ない者達は地面に転がるようにして必死に攻撃をかわす。

『メテオウィング！！』

空に出たと同時にバードラモンは自らの翼から発生した炎を弾丸とし、
いくつも飛ばす。
それをダークブロッサモンは避ける事もせず、数本の触手でそれを防ぐ。

「まだだ！　『トップガン！！』」

バードラモンの火炎弾で攻撃の手を辞めたダークブロッサモンの隙を見て

シルフィーモンは手を重ね、銃のような形にしてそこからエネルギーの球を
数弾飛ばす。
――この攻撃は大輔達選ばれし子供達にとっても現在出せる
最高の攻撃力を持った攻撃だった。

それをダークブロッサモンは先程バードラモンの攻撃を防いだ時と
変わらずに
数本の触手でそれを防いだ。
……それが意味するのはダークブロッサモンにとって、
バードラモンとシルフィーモンの攻撃に差などないと思われたという事。

「……どうした？　まさかこの程度とは言わんよな？
選ばれし子供達がこれほど集まってこの程度とは言わんよなァァァァ！！！！」

いきなり冷静な口調に戻ったと思われたダークブロッサモンであったが、
言葉を続ける内に段々と言葉に力がこもり、
最後には狂気を限界まで敷き詰めたと言わんばかりの轟音で言葉を
告げる。

圧倒的な轟音は全て大輔達に向けられた。
息をするのも意識から離れ去った大輔達はここが戦場だという事も
忘れたかと言うように
戦いに必要な動きを全て停止してしまった。

「興が覚めた。今すぐ死ね。　――せめて散り様で私を興じさせろ」

完全に表情が冷め切った顔でダークブロッサモンは先程よりも少し強力に……

大輔達にとっては死を呼ぶ以外の何物でもない威力を持った小さな花……

自らのデータを凝縮することによって巨大化した花を無表情のままほおった。

巨大な手裏剣となって飛ばされたそれは立ち尽くしている大輔達に向かって真っすぐ飛ぶ。

大輔達が気が付いた時にはすでに回避が間に合う位置では無かった。

声を上げる暇も無い。なぜならそれほどまで花は接近していたのだから。

――だが、確かに悲鳴が聞こえた。

なぜ？　ダークブロッサモンが初めに抱いた感想はそれだった。

あの位置では声も上げることは出来ない。それはダークブロッサモン自身も分かっている。

――なぜ、砂が巻き上がっている？

その次に疑問を覚えたのは大輔達の周りに上がるはずがない砂が視界を覆い隠すほどの

粉塵となって大輔達を覆い尽くしているからだ。

ダークブロッサモンが放った強大な花は確かに砂を巻き上げるかも知れない。
少々砂が上がって、そのまま大輔達の体をスパンッと真っ二つに…
…そうなるはずだった。

――それなのにどうしてこれ程の砂が巻き上がっている？

ダークブロッサモンの考えがまとまらないまま砂は晴れていく……。
砂が晴れ、初めにダークブロッサモンの視界に入ったのは自身の放った
巨大な花の手裏剣と……『もう一つの巨大な手裏剣だった』。

『――危機一髪でござった』

ダークブロッサモンの耳に聞き覚えの無い声が耳に入る。
その声は言葉の割に冷静な口調であった。

『そう思うならもっと慌てたような感じを出せよ！！』

その次に入ってきた声は言葉の割に勇ましい声であった。

「……何者だ？」

大輔達の安否を気にすることもなく、ダークブロッサモンはただ目の前に現れた謎の者。

……自分が全力を出すの意味がある程と純粋な勘でそう感じたダークブロッサモンは

止めを邪魔されたのにもかかわらず、歓喜が感じられる声で尋ねる。

『オイラ達は……

『拙者達は……

二体の影はそれどれそう言うと、一度溜めて、口を開く。

「「イガガンーボウでだ!!!ござる!!!」」

……全く揃っていない掛け声がダークブロッサモンの耳に入った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6778v/

デジモンアドベンチャー０２　闇と光

2011年12月24日00時53分発行